

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡 2

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書 IV

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡 2

財団法人

茨城県教育財団

平成 18 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

おお 　 ど 　 しも 　 ごう 大戸下郷遺跡 2

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成 18 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団



第159号住居跡出土遺物



第86号住居跡出土遺物

序

茨城県は、保険・医療・福祉サービスや世代間交流などの機能を備えたまちづくりのモデルとして、茨城県において、やさしさのまち「桜の郷」整備事業を推進しています。その一環として、一般国道6号から桜の郷へのアクセス道路建設として主要地方道内原塩崎線道路改良事業が計画されました。

その事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である大戸下郷遺跡をはじめ多くの遺跡が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財の発掘調査事業についての委託を受け、平成16年6月から同年11月まで発掘調査を実施しました。

本書は、大戸下郷遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城県教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 稲葉 節生

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成16年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸1284番地ほかに所在する大戸下郷遺跡（大戸下郷遺跡）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成16年6月1日～平成16年11月30日
整 理 平成17年6月1日～平成18年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 荒井 保雄
主任調査員 綿引 英樹
同 杉澤 季展
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。
主任調査員 綿引 英樹 第1章～第3章2節、第3節2～4・6、第4節、写真図版
主任調査員 松本 直人 第3章3節1・5

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、 $X=+34,760\text{m}$ 、 $Y=+52,800\text{m}$ の交点を基準点(A1a)とした。なお、この原点は日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付けて併記した。
3 本文及び実測図、遺物観察表で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SB-掘立柱建物跡 SK-土坑 SE-井戸跡 SD-溝跡

PG-ピット群 P-柱穴

遺物 P-土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品 T-瓦 TP-拓本土器

土層 K-攪乱

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。
5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。
6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は500分の1、遺構実測図は60分の1・80分の1、陥し穴配置図は150分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺を表示した。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

 焼土・火床面・赤彩・施軸

 炉

 竈部材・粘土・黒色処理

 柱痕・煤

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - - 硬化面

- 7 遺物観察表及び遺構一覧表の作成方法については、次の通りである。

(1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の単位はcm及びgで示したが、大きさにより異なる場合もありそれらについては個々に単位を表示した。

(3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「筥書」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

(4) 遺物観察表及び遺構一覧表とも()は現存値、[]は推定値であることを示している。

(5) 備考欄には、土器の現存率及び写真図版番号の他に、必要と思われる事項を記した。

- 8 「主軸」は、竈(炉)を持つ堅穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

抄 録

ふりがな	おおどしもごういせきに							
書名	大戸下郷遺跡2							
副書名	主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	IV							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第257集							
著者名	綿引 英樹 松本 直人							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 Tel. 029-225-6587							
発行日	2006(平成18)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
大戸下郷遺跡	茨城県東茨城郡茨城 町大字大戸1284番地 ほか	08302 — 077	36度 18分 34秒 (36度 18分 50秒)	140度 25分 35秒 (140度 25分 23秒)	10 ~ 24m	20040601 ~ 20041130	6,208㎡	主要地方道内 原塩崎線道路 改良工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
大戸下郷遺跡	甕場	縄文	陥し穴	8基				
	集落跡	弥生	竪穴住居跡 土坑	21軒 1基	弥生土器(高坏・広口壺・片口壺)、 土製品(紡錘車・球状土鐘・管状土 鐘)、石製品(磨製石斧・磨石)			
		古墳時代	竪穴住居跡	37軒	土師器(坏・碗・高坏・甕・瓶)、須恵 器(坏・提瓶・短頸壺)、手捏土器、 ミニチュア土器、土製品(紡錘車・ 球状土鐘・支脚)、鉄製品(鎌・鉄鍬・ 不明鉄製品)、石製品(紡錘車)			
		奈良時代	竪穴住居跡	4軒	土師器(甕)、須恵器(坏・高台付坏・甕・ 高盤・蓋・短頸壺・円面碗)、鉄製品(鉄斧)			
		平安時代	竪穴住居跡	7軒	土師器(坏・高台付坏)、石製品(紙 石)、鉄製品(鎌・不明鉄製品)、銅 製品(帯金具)			
		奈良時代 平安時代	掘立柱建物跡	3棟	弥生土器、土師器、須恵器、土製品			
	墓地	近世	墓坑 井戸跡	2基 4基	土師質土器(内耳鍋・小皿)、瓦質土 器(火舎)、陶・磁器(碗類)、銅製 品(小柄・分銅)			
	その他	時期不明	方形竪穴遺構 土坑 溝跡 ピット群	2基 25基 5条 2か所	縄文土器(深鉢類)、弥生土器(壺類)、 須恵器(坏類・甕類)、陶・磁器(小 皿・碗)、土製品(球状土鐘)、石器(磨 石・巖石)			
要約	古墳時代後期を中心とする縄文時代から近世の複合遺跡である。弥生時代後期後半の住居跡21軒が確認され、十王台式土器の他に、二軒屋式土器やヤヶ谷式土器も出土している。古墳時代後期の住居跡からは紅殻を入れていたミニチュア土器が出土している。また、奈良時代の住居跡からは円面碗が出土している。							

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構	9
陥し穴	9
2 弥生時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴住居跡	13
(2) 土坑	72
3 古墳時代の遺構と遺物	73
竪穴住居跡	73
4 奈良時代・平安時代の遺構と遺物	163
(1) 竪穴住居跡	164
(2) 掘立柱建物跡	200
5 近世の遺構と遺物	205
(1) 墓坑	205
(2) 井戸跡	207
6 その他の遺構と遺物	210
(1) 方形竪穴遺構	210
(2) 土坑	211
(3) 溝跡	215
(4) ビット群	218
(5) 遺構外出土遺物	220
第4節 まとめ	226
付章	249
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、東茨城郡茨城町大戸地区において、一般国道6号から「桜の郷」へのアクセス道路として、主要地方道内原塩崎線の道路改良事業を進めている。

平成8年9月17日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年10月10日に現地踏査、同年11月27～29日に大戸地区の試掘調査を実施し、大戸下郷遺跡の所在を確認した。平成13年1月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長に対して、事業地内に大戸下郷遺跡が所在する旨を回答した。

平成13年2月9日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、同年2月26日、茨城県水戸土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成16年2月6日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。同年2月13日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長に対して、大戸下郷遺跡についての範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年6月1日から11月30日まで大戸下郷遺跡の第2次発掘調査を実施することになった。

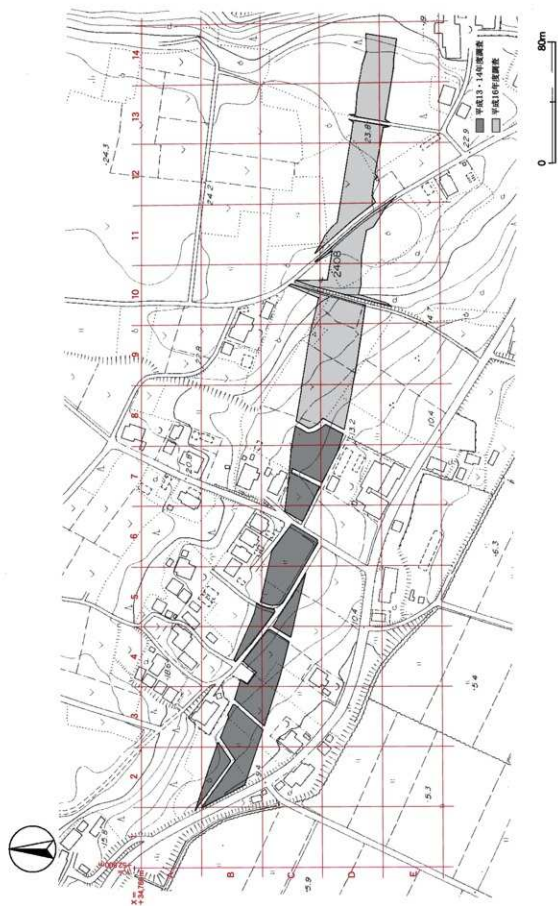
第1次調査は、平成14年1月1日から3月31日、同年5月1日から10月31日まで行われている。

第2節 調査経過

大戸下郷遺跡の調査は、平成16年6月1日から11月30日まで実施した。

以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	6月	7月	8月	9月	10月	11月
調査表遺	準備 土除 構確 去認	■					
遺構調査		■	■	■	■	■	■
遺物 注写	洗作 記真 作整	■	■	■	■	■	■
補足 撤収	調査						■



第1図 大戸下部遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大戸下郷遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸1284番地ほかに所在している。

茨城町は、町のほぼ中央部を東流する潤沼川の氾濫原と、その東に展開する潤沼の低湿地によって台地が南北に二分されている。台地の北部は、標高25～30mの東茨城北部台地の先端部にあたり、南東に流れる潤沼前川を含む多くの支谷が潤沼を中心に南方向に開口している。南部に発達している台地は、大谷川、寛政川が潤沼に流入し、その間に大小の支谷が台地深くまで樹枝状に侵入しており、起伏に富み、一層複雑な地勢を形成している。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で、岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。さらに、粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常総粘土層、関東ローム層の順にほぼ水平に堆積している。

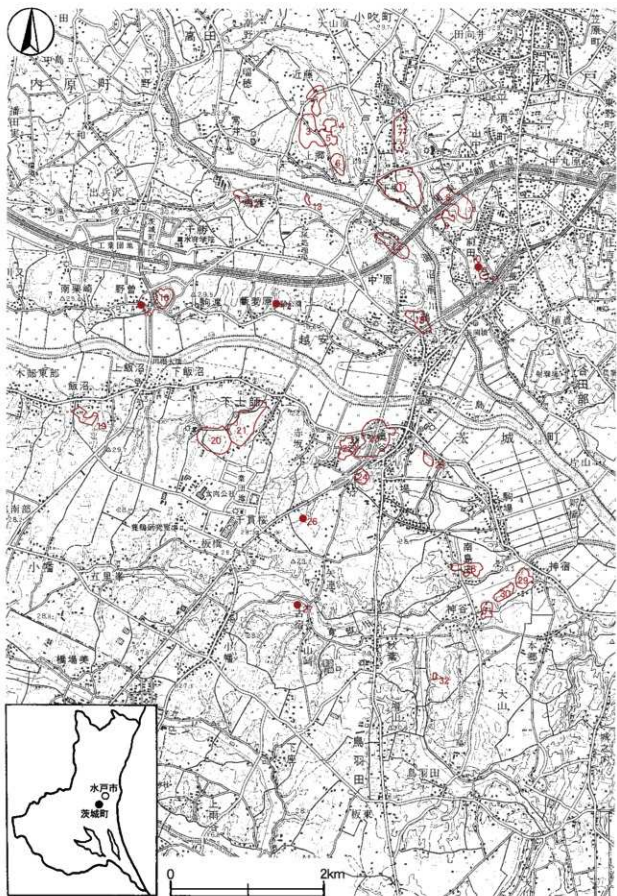
当遺跡は、茨城町北西部の大戸地区にあり、潤沼川の支流、潤沼前川左岸に位置し、標高約10mほどの低位段丘から標高24mほどの台地上に立地している。調査区の西端は潤沼前川とその支流である小橋川の合流地の沖積低地へとつながり、東端は赤穂川によって開削された支谷に面している。段丘及び台地上は、主に畑地・宅地として利用され、潤沼前川流域の沖積低地は水田として利用されている。遺跡の現況は、畑地であった。

第2節 歴史的環境

当町周辺は、潤沼を中心として、潤沼川、潤沼前川など水運に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台であり、縄文時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在している（第2図）。ここでは、大戸下郷遺跡に関連する主な遺跡について時代を追って述べる。

縄文時代早期の遺跡は、潤沼南岸の台地上に中落遺跡がある。前期では、潤沼川及び潤沼前川流域に宮後遺跡²⁷（2）、シッペイ沢遺跡（12）、東山遺跡（13）、奥谷遺跡³¹（23）などがあり、越安貝塚（17）、権見峯遺跡、南小割遺跡⁹（16）などでは小規模な貝塚が形成されている。中期の遺跡は、塚越遺跡、赤坂南坪遺跡（22）、天古崎遺跡（28）など、町内全域にみられる。後期になると、小堤貝塚²⁵が形成され、晩期では、下土師遺跡（21）、小堤貝塚、神谷遺跡（31）などがある。

弥生時代では、中期後半の土器片が神谷東遺跡（30）、西台遺跡（29）などで土器片が採集されている。また、後期前半の遺物としては、東中根式並行の土器片が大畑遺跡²³（14）から採集され、長岡遺跡（11）や奥谷遺跡、小鶴遺跡（18）などから出土した長岡式土器は標式土器となっている。後期後半（十王台式期）の遺跡としては、当財田によって調査された矢倉遺跡⁴³（8）、大畑遺跡、石原遺跡⁷（5）、嶺山遺跡⁴（4）、大塚遺跡⁴³（3）、宮後遺跡⁴⁰の他、稲荷宮遺跡（6）、台畑遺跡（19）などがあり、当遺跡でも集落跡が確認され、この時期に潤沼川流域を中心とした小文化圏の存在が想定されている。また、当遺跡と矢倉遺跡からは、群馬県を中心に分布が認められる樽式土器が出土している。その他にも、十王台式土器と異なる文様を有する二軒屋式土器や上稲吉式土器が出土しており、他地域との交流が想定される。



第2図 大戸下郷遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院5万分の1「石岡」)

表1 大戸下郷遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平			中・近	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
①	大戸下郷遺跡		○	○	○	○	○	17	越安貝塚		○				
2	宮後遺跡	○	○	○	○	○	○	18	小鶴遺跡	○	○				
3	大塚遺跡		○	○	○	○	○	19	台畑遺跡			○			
4	綱山遺跡		○	○	○	○	○	20	面山遺跡	○			○	○	
5	石原遺跡		○	○	○	○		21	下土師遺跡	○			○	○	
6	稲荷宮遺跡			○	○	○		22	赤坂南坪遺跡	○	○		○	○	
7	大戸神宮寺遺跡		○		○	○		23	奥谷遺跡	○	○		○	○	
8	矢倉遺跡		○	○	○	○		24	富士山遺跡				○	○	
9	坪戸遺跡		○	○	○		○	25	小堤貝塚	○	○	○			○
10	上ノ山古墳					○		26	小幡北山埴輪製作遺跡				○		
11	長岡遺跡			○	○			27	小幡城跡						○
12	シッペイ沢遺跡		○					28	天古崎遺跡	○			○	○	
13	東山遺跡		○	○	○	○		29	西台遺跡	○	○		○	○	
14	大畑遺跡	○	○	○	○	○	○	30	神谷東遺跡	○	○		○	○	
15	宝塚古墳					○		31	神谷遺跡	○	○		○		
16	南小割遺跡	○	○			○	○	32	大峯遺跡						○

古墳時代では、弥生土器と土師器が共存する住居跡が確認されている石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡などがあり、当遺跡で確認された同様の共存関係とあわせ、弥生時代から古墳時代への移行期におけるこの地域の様相を知る手がかりになると思われる。また、奥谷遺跡からは、前期の豪族居館跡や住居跡群が、南小割遺跡からも前期の小波状口縁をもつ土器や住居跡群が確認されている。古墳では、茨城町域で最も古い時期（4世紀末～5世紀初頭）に位置づけられる前方後方墳の宝塚古墳(15)をはじめ、中期から後期にかけての古墳が61基ほど確認されている。また、前方後円墳の上ノ山古墳⁽¹⁰⁾からは、南へ4kmほどの小幡北山埴輪製作遺跡⁽²⁶⁾で生産された埴輪（6世紀後半頃）が出土している。

奈良・平安時代の当地方は、那賀郡八部郷、茨城郡嶋田郷・白川郷・安俣郷、鹿島郡宮前郷に属していた。この時期の遺跡は、町内全域で確認されており、石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、宮後遺跡、大戸神宮寺遺跡(7)、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡、奥谷遺跡など、100遺跡を数える。奥谷遺跡では、百数十点の墨書土器の他に、円面硯や刀子が出土している。特に、墨書の「曹カ司」は、官衙の庁舎などの意味があり、奥谷遺跡が官衙的な公共施設を含む集落であったことを示している。また、面山遺跡(20)からは「土師神主」と書かれた墨書土器が、大峯遺跡(32)でも墨書土器や円面硯が出土している。大塚遺跡からも墨書土器や円面硯・灰釉陶器なども出土しており、「コ」の字状に並ぶ掘立柱建物跡群も確認され、官衙的な様相を示すものとして注目される。さらに、綱山遺跡でも掘立柱建物跡が確認され、円面硯・灰釉陶器、墨書土器などが出土しており、隣接する宮後遺跡でも円面硯や墨書土器が出土していることから三遺跡の関連も注目されている。

中世の遺跡は、主に城館跡であり、小幡城跡(27)、宮ヶ崎城跡、海老沢館跡、奥谷館跡、飯沼城跡などが所

在している。小幡城跡は現存する町内の城跡跡の中では最大規模で、初期の城主については小田一族や大塚一族などの説があるが、詳細については不明である。奥谷遺跡からは堀、地下式竈、方形竈穴状遺構、井戸跡などが確認され、土師質土器や陶器が出土している。また、常陸大塚氏系の大戸氏一族の所領であった大字前田の万東山地区からは、13世紀前半と考えられる「青白磁蓮牡丹文梅瓶」が出土しており、中世においても瀧沼川・瀧沼前川沿岸に有力な氏族が存在していたことがうかがえる。

近世になると、町の中心部を南北に通ずる水戸街道沿いの長岡・小幡は宿駅として発展し、徳川期には水戸藩主の休憩・宿泊のために御殿が造られていた。近世中期以降になると、水戸街道は五街道に次ぐ脇往還として栄え、最盛期には23藩の大名が参勤交代のつどこの道を通じた。また、海老沢・網掛は水上交通の要衝として河岸を中心に栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩や奥州諸藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継基地として重要な役割を果たすようになった。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第2図及び表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 近藤恒重「大戸下郡遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 茨城県教育財団 2004年3月
- 2) 川又清明・野田良直・吹野富美夫・浅野和久「宮後遺跡Ⅰ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 茨城県教育財団 2002年3月
- 3) 鯉淵和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡・小幡遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集 茨城県教育財団 1989年3月
- 4) 中村敬治・江幡良夫「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 南小淵遺跡・権現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 茨城県教育財団 1998年3月
- 5) 長谷川聡「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 茨城県教育財団 1998年3月
- 6) 飯島一生「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 茨城県教育財団 1998年3月
- 7) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 茨城県教育財団 2000年3月
- 8) 荒崎克一郎・田中幸夫「綱山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 茨城県教育財団 2005年3月
- 9) 長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡Ⅰ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 茨城県教育財団 2005年3月
- 10) 川又清明・浅野和久「宮後遺跡Ⅲ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 茨城県教育財団 2005年3月
- 11) 茨城町史編さん委員会『茨城町上ノ山古墳』茨城町 1994年3月
- 12) 茨城町教育委員会『小幡北山墳輪製作遺跡』茨城町 1989年2月

参考文献

- ・ 茨城町史編さん委員会『茨城町史 地誌編』茨城町 1995年2月

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

大戸下郷遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸1284番地ほかに所在し、溜沼前川左岸の標高約10mほどの低位段丘から標高約24mほどの台地上に位置している。平成13・14年度には6,418㎡が調査され、竪穴住居跡62軒（縄文5、弥生8、古墳39、奈良6、平安4）、墓坑20基（古墳1、近世19）、土坑106基（弥生2、平安1、中世1、近世7、時期不明95）、近世の井戸跡6基、時期不明の溝跡3条、ピット群4か所が検出され、古墳時代後期の集落跡を主体とした縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶・磁器、土師質土器の他、土製品（球状土錘・支脚）、石器・石製品（砥石・磨石・敲石）、古銭などが出土している。また、弥生時代後期後半の十王台式土器と古墳時代前期の土師器が共存した住居内の墓坑からは、ガラス製の小玉31点が出土して注目された。

今回の調査は6,208㎡で、平成13・14年度調査部分の東側に位置し、調査前の現況は山林及び畑地である。調査の結果、縄文時代の陥し穴8基、弥生時代の竪穴住居跡21軒、土坑1基、古墳時代の竪穴住居跡37軒、奈良時代・平安時代の竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡3棟、近世の墓坑2基、井戸跡4基の他に、方形竪穴遺構2基、土坑25基、溝跡5条、ピット群2か所が確認された。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、手捏土器、ミニチュア土器、土師質土器の他、土製品（紡錘車・球状土錘・管状土錘・支脚）、鉄製品（鎌・鉄鎌・不明鉄製品）、石器・石製品（磨製石斧・石鏃・炉石・敲石・磨石・砥石・紡錘車）、金属製品（鎌・不明鉄製品・帯金具・小柄・分銅）などが、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に120箱分が出土している。

第2節 基本層序

平成13・14年度の調査では、調査区中央部、中位段丘上のC6c2区にテストピット1を設定し、基本土層の堆積状況の観察を行っている。テストピット1の地表面の標高は15.3mで、地表から約3.5mほど掘り下げて第3図（左）のような堆積状況を確認している。

今回の調査区は、中位段丘から台地上にかけて位置しており、比高差があるため台地上のD12j5区に新たにテストピット2を設定し、基本土層の堆積状況を観察した。テストピット2の地表面の標高は24.0mで、地表から約3.3mほど掘り下げ、第3図（右）のような堆積状況を確認した。

以下、テストピット2の観察から層序を説明する。

第Ⅰ層は、黒褐色の耕作土で、層厚は58cm前後である。

第Ⅱ層は、明褐色のソフトローム層で、赤色粒子を少量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は8～24cmである。

第Ⅲ層は、褐色のソフトローム層で、赤色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は最大で17cmほどである。

第Ⅳ層は、明褐色のハードローム層で、赤色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は4～20cmである。

第Ⅴ層は、褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は

35~46cmで、第1黒色帯と考えられる。

第VI層は、褐色のハードローム層で、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は18~34cmである。

第VII層は、黄褐色のローム層で、鹿沼パミス中量含むことから鹿沼層への漸移層と考えられる。粘性・締まりは共に強く、層厚は最大で11cmほどである。

第VIII層は、橙色の鹿沼層で、粘性は弱く、締まりは強い。層厚は18~33cmである。

第IX層は、褐色のハードローム層で、赤色スコリア・鹿沼パミス微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は11~22cmである。

第X層は、褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は25~33cmである。

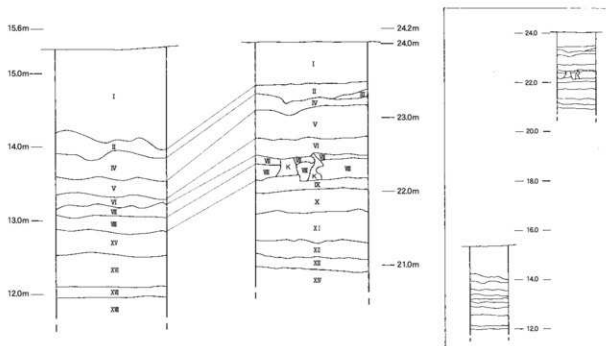
第XI層は、褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は35~44cmで、第10層と共に第2黒色帯と考えられる。

第XII層は、褐色のハードローム層で、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は18~26cmである。

第XIII層は、淡い褐色のハードローム層で、粘土粒子を少量、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は15~21cmで、常総粘土層の漸移層と考えられる。

第XIV層は、にぶい黄褐色の粘土層で、鉄分を微量含んでおり、粘性・締まりは共に強い。層厚は未掘のため確認できなかったが、第13層よりも粘土の含有量が多いことから常総粘土層と考えられる。

中位段丘上では第2層から、台地上では第2層及び第3層で遺構が確認された。



第3図 基本土層図・高低差模式図

テストピット土層解説

XV 灰褐色の粘土層

XIV 灰黄褐色の粘土とシルトの層

XII にぶい黄褐色のシルトと鐵の層

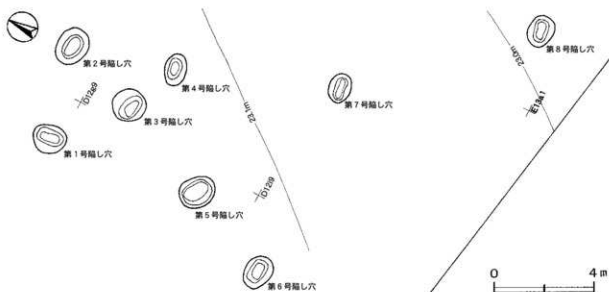
XIII 明黄褐色の礫層

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構

調査区東部の台地平坦部に、8基の陥し穴が集中して確認された。第8号陥し穴が南東側にやや離れて位置しているが、その他の7基は10mほどの範囲内に分布している（第4図）。第2・3・5・6号陥し穴は、標高23.1mラインにほぼ等間隔で直行して並んでいる。以下、遺構について記載する。

陥し穴



第4図 陥し穴配置図

第1号陥し穴（第5図）

位置 調査区東部北寄りのD12f8区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

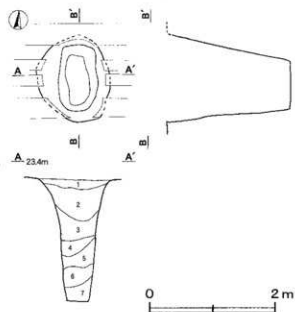
規模と形状 長径1.38m、短径1.16mの楕円形状を呈している。深さは1.97mで、長径方向はN-4°-Wである。壁はいずれも直列ぎみに立ち上がり、東西の壁は上部で外傾して立ち上がっている。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 7層に分層される。ロームブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 ロームブロック中量、糞沼パミス微量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量、糞沼パミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第5図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴 (第6図)

位置 調査区東部北寄りのD12f9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

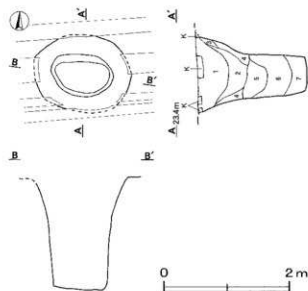
規模と形状 長径1.57m、短径1.23mの楕円形である。深さは1.78mで、長径方向はN-81°-Wである。壁はいずれも直立ぎみに立ち上がっており、上部はやや外傾している。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量、鹿沼バミス微量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・鹿沼バミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第6図 第2号陥し穴実測図

第3号陥し穴 (第7図)

位置 調査区東部北寄りのD12g9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、ほぼ同じ標高ラインに第2・5・6号陥し穴が並び、第2号陥し穴の南2mほどに構築されている。

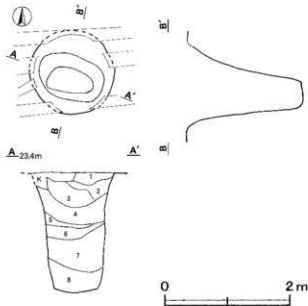
規模と形状 長径1.36m、短径1.33mの円形状を呈しているが、下部は楕円形を呈している。深さは1.89mで、長径方向はN-75°-Wである。壁はいずれも直立ぎみに立ち上がり、上部は外傾している。横断面はほぼU字状で、底面はほぼ平坦である。

覆土 8層に分層される。中層まではレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられ、上層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミス微量
- 8 褐色 ロームブロック少量、鹿沼バミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第7図 第3号陥し穴実測図

第4号陥し穴 (第8図)

位置 調査区東部北寄りのD12g9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第3号陥し穴の東1mほどに

構築されている。

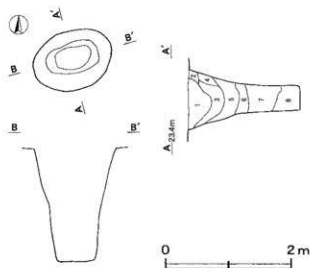
規模と形状 長径1.28m, 短径0.94mの楕円形である。深さは1.79mで、長径方向はN-76°-Eである。壁は直立ぎみに立ち上がり、上部は外傾する。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 極暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック微量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 8 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・鹿沼パミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第8図 第4号陥し穴実測図

第5号陥し穴 (第9図)

位置 調査区東部北寄りのD12h8区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第3号陥し穴の南3mほどに構築されている。

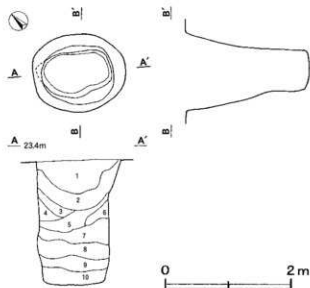
規模と形状 長径1.46m, 短径1.24mの楕円形である。深さは1.98mで、長径方向はN-62°-Wである。壁は一部内傾しているが、他は直立ぎみに立ち上がっている。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 10層に分層される。下層と上層はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられ、中層は不規則な堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 ローム粒子少量
- 7 褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
- 9 褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
- 10 黒褐色 ローム粒子少量、鹿沼パミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



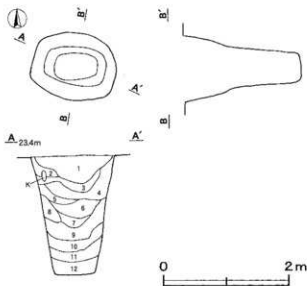
第9図 第5号陥し穴実測図

第6号陥し穴 (第10図)

位置 調査区東部北寄りのD12i8区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第5号陥し穴の南3mほどに構築されている。

規模と形状 長径1.33m, 短径1.08mの楕円形である。深さは1.90mで、長径方向はN-89°-Wである。壁は

直立ぎみに外傾して立ち上がり、上部でやや外傾する。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。



第10図 第6号陥し穴実測図

覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を
示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

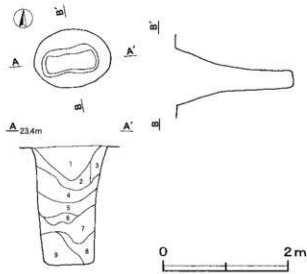
- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒色 ロームブロック微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 極暗褐色 ロームブロック少量
- 7 褐色 ロームブロック多量
- 8 褐色 ロームブロック中量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量
- 10 褐色 ロームブロック多量、鹿沼パミス微量
- 11 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 12 暗褐色 ローム粒子中量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確で
ないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考
えられる。

第7号陥し穴 (第11図)

位置 調査区東部北寄りのD12i0区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第5号陥し穴の南東6mほどに構築されている。

規模と形状 長径1.23m、短径0.94mの楕円形である。深さは1.88mで、長径方向はN-83°-Eである。壁は



第11図 第7号陥し穴実測図

直立ぎみに立ち上がっており、横断面はほぼU字
状で、底面は平坦である。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を
示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 褐色 鹿沼パミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量
- 9 褐色 ローム粒子中量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確で
ないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考
えられる。

第8号陥し穴 (第12図)

位置 調査区東部南寄りのD13j1区で、標高23.0mほどの台地平坦部に位置し、陥し穴群の南東に構築されて
いる。

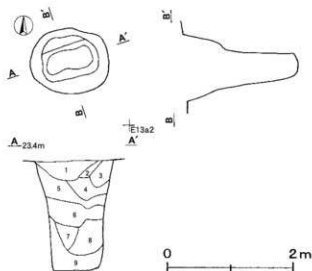
規模と形状 長径1.25m、短径1.06mの楕円形である。深さは1.76mで、長径方向はN-74°-Eである。壁は
直立ぎみに立ち上がり、横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 極暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 極暗褐色 ローム粒子少量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第12図 第8号陥し穴実測図

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
1	D1278	N-4°-W	楕円形	1.38×1.16	197	直立-外傾	平坦	自然	—	
2	D1279	N-81°-W	楕円形	1.57×1.23	178	直立-外傾	平坦	自然	—	
3	D1269	N-75°-W	円形	1.36×1.33	189	直立-外傾	平坦	自然・人為	—	
4	D1269	N-76°-E	楕円形	1.28×0.94	179	直立-外傾	平坦	自然	—	
5	D1268	N-62°-W	楕円形	1.46×1.24	198	直立	平坦	自然・人為	—	
6	D1218	N-89°-W	楕円形	1.33×1.08	190	外傾	平坦	自然	—	
7	D1210	N-85°-E	楕円形	1.23×0.94	188	直立	平坦	自然	—	
8	D1311	N-74°-E	楕円形	1.25×1.06	176	直立	平坦	人為	—	

2 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、中位段丘から台地上にかけて弥生時代後期後半の住居跡21軒と土坑1基が確認された。以下、遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第88号住居跡 (第13～15区)

位置 調査区西部のD 9 a5区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第167号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.53m、短軸4.12mの隅丸長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は14～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径82cm、短径57cmの楕円形で、床面を9cmほど掘りこぼめた地床炉であるが、熱による赤変や硬化は確認できなかった。炉石の代わりとして使われていた粘土塊が、炉の長軸に直交して炉床中央部に据えられていた。

伊土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

- 3 黒褐色 炭化粒子微量

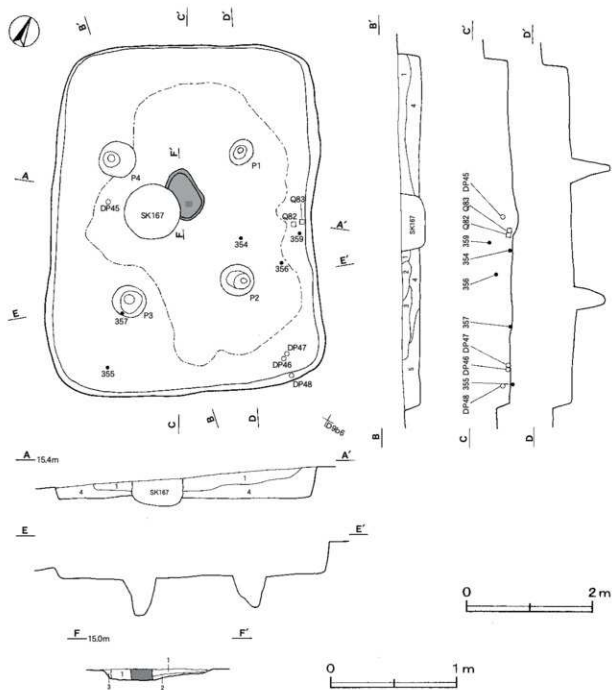
ピット 4か所。深さは48～63cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層される。第2・3層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積であるが、その他は自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
 2 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
 3 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

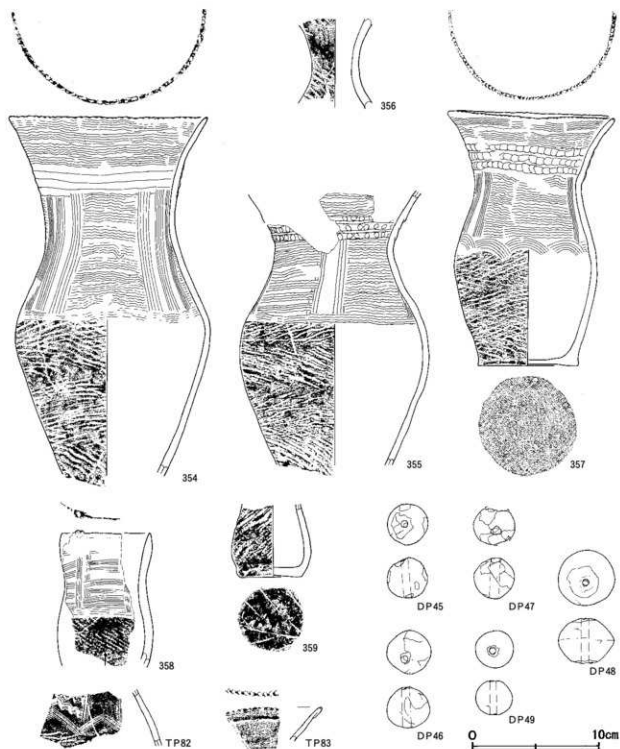
- 4 黒褐色 ローム粒子微量
 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量



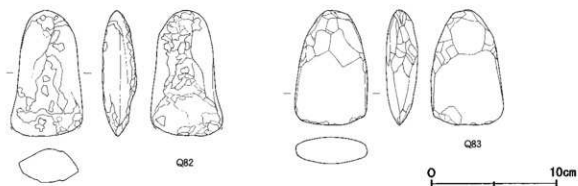
第13図 第88号住居跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片298点（広口壺，土師器片301点（坏2，高坏7，器台2，甕類290），土製品5点（紡錘車1・球状土錘4），石器2点（磨製石斧），粘土塊の他に，混入した縄文土器片11点も出土している。354は中央部やや東寄り，355は南寄りの床面からそれぞれ出土している。土師器片は，第1層から散在した状態で出土しており，住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第14図 第88号住居跡出土遺物実測図(1)



第15図 第88号住居跡出土遺物実測図(2)

第88号住居跡出土遺物観察表(第14・15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
354	赤生土器	広口壺	15.5	(28.1)	—	長石・石英・雲母・赤色脱皮	に灰・黄	普通	口唇部に細線押圧 口唇部に櫛歯状工具(5本)による波状文 胴部上位に斜め押圧の小突起4本 櫛歯状工具による縦区画 一帯化とする縦区画(4分刻) 内・波状文充填 胴部に附加条一種(附加1条)の羽状構成	床面	70% 胴部外面残付着 PL17
355	赤生土器	広口壺	—	(21.6)	—	長石・石英・雲母	暗赤褐色	良好	口唇部に櫛歯状工具(4本)による波状文 胴部上位に押圧のある隆帯3本 櫛歯状工具による縦区画(4分刻) 内・波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	床面	90%
356	赤生土器	片口壺	—	(7.0)	—	長石・石英・雲母	に灰・黄褐色	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文	覆土中層	10%
357	赤生土器	広口壺	12.7	20.1	7.9	長石・石英・雲母	に灰・黄褐色	普通	口唇部に細い押圧による波状文(5本)による波状文 胴部上位に斜め押圧のある隆帯3本 櫛歯状工具による縦区画(5分刻) 内・波状文充填 胴部下位に下向きの高麗文 胴部に附加条一種(附加1条)の羽状構成 底面凹状	床面	100% PL22
358	赤生土器	小形壺	[6.0]	(10.8)	—	長石・石英・雲母	に灰・黄褐色	普通	口唇部外面十字 小突起 櫛歯状工具(4本)による縦区画内・横糸文充填 胴部に附加条一種(附加1条)の羽状構成	覆土中層	20%
359	赤生土器	小形壺	—	(5.7)	4.9	長石・石英・雲母・赤色脱皮	浅黄褐色	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底面木葉痕	覆土上層	20% 胴部内面残付着
1982	赤生土器	広口壺	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母	に灰・赤褐色	良好	櫛歯状工具(5本)による縦区画内・波状文充填 胴部下位に山形文 胴部に附加条一種(附加1条)の縄文	覆土中層	5% PL39
1983	赤生土器	高杯	—	(2.2)	—	長石・石英・雲母	に灰・黄褐色	普通	口唇部に細い押圧による波状文(5本)による波状文	覆土中層	5%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1945	球状土罐	3.2	0.6	(3.1)	(27.9)	土(長石・石英・雲母)	ナズ 一方向からの穿孔	覆土中層	
1946	球状土罐	3.5	0.6	3.2	32.7	土(長石・石英・雲母・赤色脱皮)	ナズ 一方向からの穿孔	覆土下層	
1947	球状土罐	3.3	0.8	3.2	(23.2)	土(長石・石英・雲母・赤色脱皮)	ナズ 一方向からの穿孔	覆土下層	
1948	結核壺	4.5	0.6	3.5	61.1	土(長石・石英・雲母)	ナズ 一方向からの穿孔	覆土中層	PL40
1949	球状土罐	3.0	0.6	2.7	18.7	土(長石・石英・雲母)	ナズ 一方向からの穿孔	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q82	磨製石斧	(10.1)	5.7	2.6	(178.5)	ホルンフェルス	定角式 両刃 器面跡多い	覆土下層	PL42
Q83	磨製石斧	9.2	5.8	2.6	(193.4)	ホルンフェルス	定角式 両刃 丁寧な磨製	覆土下層	PL42

第90号住居跡(第16～19図)

位置 調査区西部のD 9 a9区で、標高15.5mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第79・80号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-2°-Wとする一辺が5.00mほどの隅丸方形と推定される。壁高は6～66cmで、外傾して立ち上がっている。

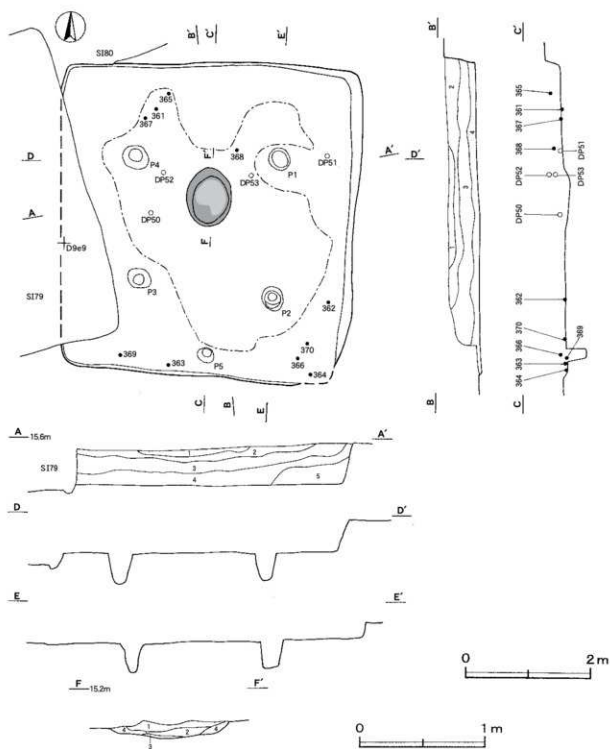
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。長径93cm、短径71cmの楕円形で、床面を13cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | |
|------------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 炭化物・焼土粒子少量, ローム粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 極暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ42～50cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第16図 第90号住居跡実測図

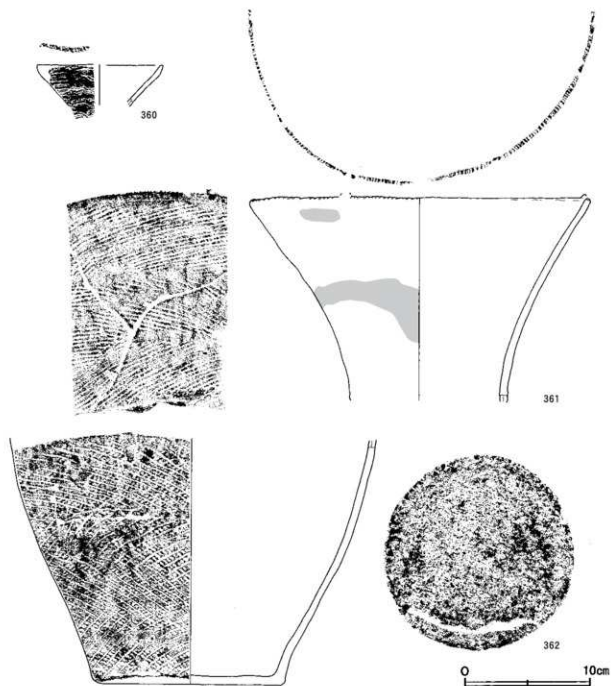
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

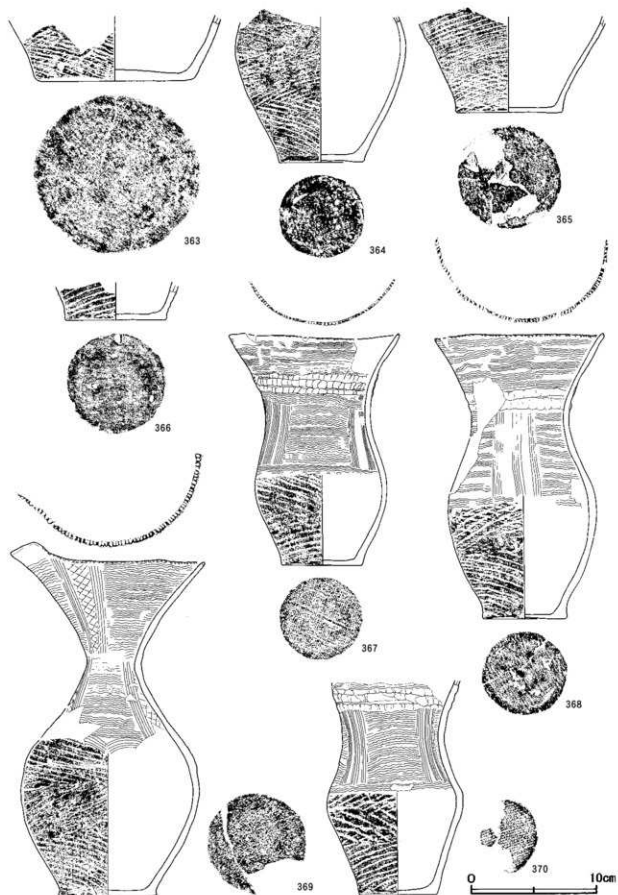
- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 黒色 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 4 種暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片496点（広口壺）、土製品5点（紡錘車1、球状土鍾2、不明土製品2）の他に、土師器片32点も出土している。361・367は北西寄り、369は南西寄りの壁際、362・370は南東寄りの床面からそれぞれ出土している。土師器片は、第2層より上から出土しており、住居廃絶後の窪地に流れ込んだものである。

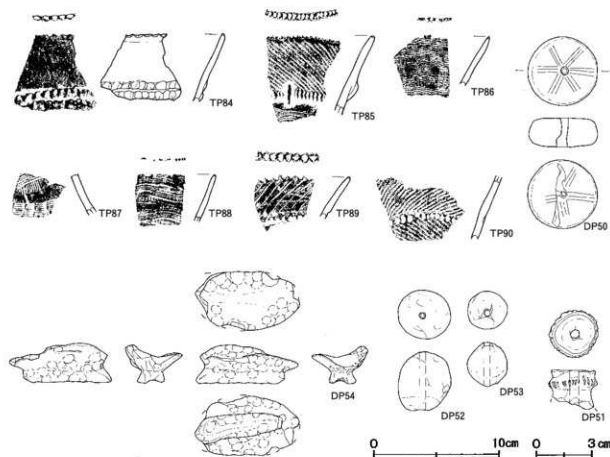
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第17図 第90号住居跡出土遺物実測図(1)



第18图 第90号住居跡出土遺物実測図(2)



第19図 第90号住居跡出土遺物実測図(3)

第90号住居跡出土遺物観察表(第17~19図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び形状の特徴	出土位置	備考
300	赤生土器	高坏	[10.0]	(3.2)	-	長石・石英・雲母	にんい・黄緑	普通	口唇部に細い 口縁部に磨製状工具(4本)による波状文	覆土中	5%
301	赤生土器	広口壺	26.6	(16.6)	-	長石・石英・雲母	にんい・黄	普通	口唇部に細い 才突起3単位以上 口辺部から頸部へ附加条二種(附加1条)の羽状構成	床面	20% 一部赤彩 PL11
302	赤生土器	広口壺	-	(19.5)	15.2	長石・石英・雲母・赤色砂子	灰白	普通	頸部へ附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部有目痕	床面	20% PL21
303	赤生土器	広口壺	-	(5.2)	12.4	長石・石英・雲母	にんい・黄	普通	頸部へ附加条一種(附加1条)の織文 底部有目痕	覆土下層	5%
304	赤生土器	広口壺	-	(11.6)	6.8	長石・石英・雲母・赤色砂子	浅黄緑	普通	頸部へ附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部有目痕	床面	20% 外面採行着 内面炭化物付着
305	赤生土器	広口壺	-	(7.7)	8.3	長石・石英・雲母	浅黄緑	普通	頸部へ附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部有目痕	覆土中層	20% 内面炭化物付着
306	赤生土器	広口壺	-	(3.0)	8.0	長石・石英・雲母・赤色砂子	浅黄緑	普通	頸部へ附加条二種(附加1条)の織文 底部有目痕 物痕	覆土下層	5% 内面炭化物付着
307	赤生土器	広口壺	[13.1]	18.5	6.3	長石・石英・雲母	にんい・黄	良好	口唇部に細い 口辺部に磨製状工具(6本)による波状文 頸部上段に横い 甲印のある隆帯3条 磨製状工具による3条を1単位とする縦区画(3分制)内へ波状文充滿 頸部へ附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部有目痕	床面	90% 頸部から胴部 内面に採行着 内面炭化物付着 PL12
308	赤生土器	広口壺	13.6	22.7	6.8	長石・石英・雲母	明閑沢	普通	口唇部に細い 口辺部に磨製状工具(5本)による波状文 頸部上段に横い 甲印のある隆帯2条 磨製状工具による3条を1単位とする縦区画内へ波状文充滿 頸部へ附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部有目痕	覆土下層	50% 頸部外面採行着 内面炭化物付着
309	赤生土器	片口壺	15.4	28.4	7.9	長石・石英・雲母	にんい・黄緑	良好	口唇部に細い 口辺部に磨製状工具(5本)により縦区画(3分制)され格子状文 区画内へ波状文充滿 頸部下段に下向きの連続文 胴部中位から下段へ附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部有目痕	床面	80% PL17
310	赤生土器	広口壺	-	(17.1)	(6.2)	長石・石英・雲母	黒緑	普通	口唇部に磨製状工具(本数不明)による波状文 頸部上段に横い 甲印のある隆帯3条 磨製状工具(4本)により3条を1単位とする縦区画(4分制)内へ波状文充滿 頸部へ附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部有目痕	床面	90% 頸部外面採行着 内面炭化物付着 PL13
TP84	赤生土器	広口壺	-	(5.3)	-	長石・石英・雲母	にんい・黄緑	普通	口唇部に磨製状工具 口辺部無文 頸部上段に横いのある隆帯	覆土中	5%
TP85	赤生土器	広口壺	-	(6.3)	-	長石・石英・雲母	黒緑	普通	口唇部に磨製状工具 複合口縁 口辺部へ附加条一種(附加1条)の織文 腹筋付 口辺部下段に磨製状工具(本数不明)による下向きの連続文	覆土中	5% PL18

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び平面的特徴	出土位置	備考
T96	弥生土器	広口壺	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部に刻み・小突起 口辺部に纏繞状工具(4本)による直紋文	覆土中	5%
T97	弥生土器	広口壺	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部・纏繞状工具(3本)による下向き直紋文 胴部下部に直紋文	覆土中	5% PL39
T98	弥生土器	広口壺	—	(3.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	に似・黄	普通	口縁部に刻み・口縁部に纏繞状工具(5本)による直紋文	覆土中	5%
T99	弥生土器	広口壺	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口縁部に直紋工具による刻み 口辺部に附加条一種(附加2条)直紋文 口辺部に下部直紋文による刻み	覆土中	5%
T99	弥生土器	広口壺	—	(5.1)	—	長石・石英・雲母	に似・赤褐	普通	口縁部に附加条一種(附加2条)の直紋横紋 胴体結節部に直紋による刻み	覆土中	5%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DF9	粘着率	3.5	0.6	2.3	(83.1)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	表面に纏繞状工具(3本)による放射状直紋文 側面ナデ	覆土下層	凡例
DF5	不明土製品	2.7	0.5	(2.1)	(10.2)	土(長石・石英・雲母)	側面へつ状工具による刺突	床面	粘着率② PL40
DF2	球状土鍾	4.2	0.5	4.7	75.7	土(長石・石英・雲母・針状鉱物)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DF3	球状土鍾	3.2	0.5	3.5	38.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DF4	不明土製品	8.3	4.7	3.0	(41.7)	土(長石・石英・雲母)	全面ナデ 指頭痕	覆土中	粘着率③ PL40

第92号住居跡(第20～22区)

位置 調査区西部のD9c7区で、標高15.5mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第80・93・96号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-43°-Wとする長径8.30m、短径7.90mほどの円形と推定される。壁高は20～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径79cm、短径56cmほどの楕円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 黒褐色 rome 粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 rome 粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ70～81cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ31cm、P6は深さ42cmで、配置からいずれも出入り口施設に伴うピットと考えられるが、土層断面からP6が新しいことが確認された。

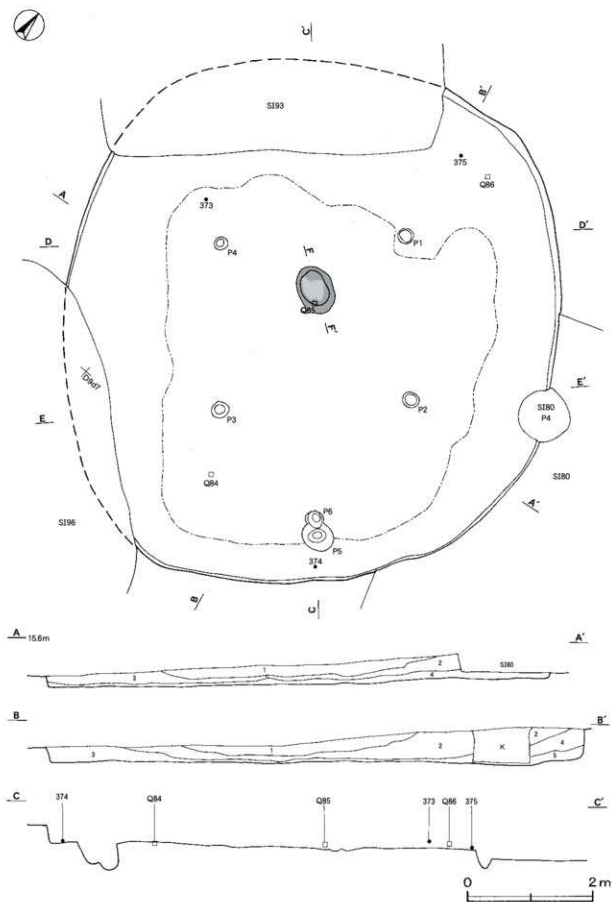
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

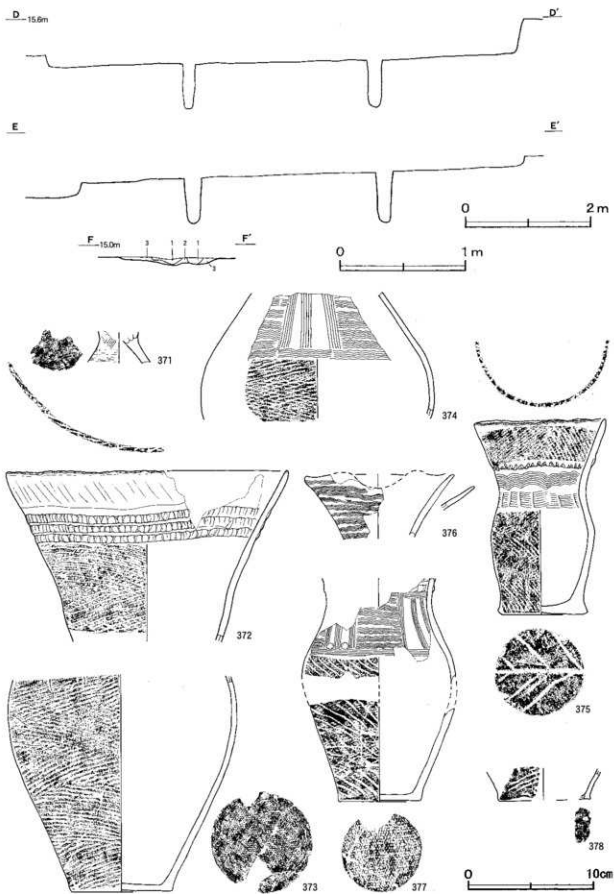
- 1 黒褐色 rome 粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 rome 粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 rome 粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 rome 粒子少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 rome 粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片1143点(高坏1, 広口壺1141, 片口壺1), 土製品5点(球状土鍾4, 管状土鍾1), 石器3点(敲石, 砥石, 炉石), 礫5点の他に、混入した縄文土器片12点, 土師器片60点も出土している。375は、北側コーナー付近の床面から逆位で出土している。377は、東寄りの覆土中から出土しており、第96号住居跡の北東寄りの覆土層から出土した破片と接合関係にある。遺物はほとんどが細片であり、復元できるものが少ない。また、弥生土器片や土師器片は、ほとんどが第2層より上で出土しており住居廃絶後の座地に投棄されたものと考えられる。

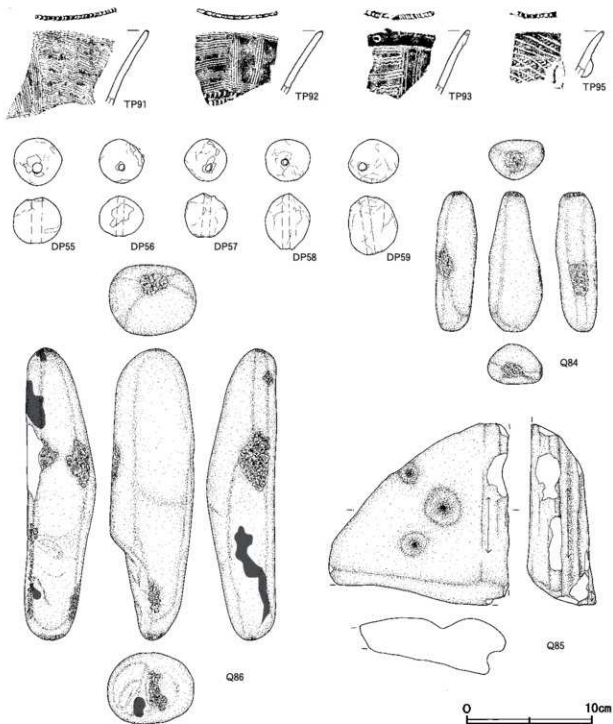
所見 当遺跡で調査された弥生時代の住居跡の中では最大規模であり、形状も他の住居跡とは異なり円形状を呈している。時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第20图 第92号住居跡実測図



第21图 第92号住居跡・出土遺物実測図



第22図 第92号住居跡出土遺物実測図

第92号住居跡出土遺物観察表(第21・22図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
371	赤生土器	高杯	-	(2.5)	-	長石・石英・雲母	紅・灰	普通	胴部から胴部に磨崖状工具(6本)による筋文	覆土中	5%
372	赤生土器	広口壺	22.4	(13.5)	-	長石・石英・雲母	紅・灰	普通	口縁部に磨崖状押し 口辺部へ十字字 胴部上部に押しのある 珠文3条 胴部に磨崖状二條(附加1条)の筋文構成	覆土中	15%
373	赤生土器	広口壺	-	(17.1)	8.1	長石・石英・雲母	橙	普通	文様等不明に磨崖状工具(本数不明)による筋文 胴部に 附加条二條(附加1条)の筋文構成 底面直削	覆土下層	30%
374	赤生土器	広口壺	-	(後別)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	磨崖状工具(5本)による筋文一単位上平素線(内面)に筋状 文3条 胴部に附加条二條(附加1条)の筋文構成	覆土下層	5% 胴部外面僅け付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
375	弥生土器	広口壺	13.0	15.5	7.1	長石・石英・雲母	にび〜焼	普通	口縁部に器体押圧 複合口縁 口内面下部に縄文瓦体による押圧 胴部に磨崖状工具(5本)による波状文 取部下部に磨崖状工具による波状文 胴部に附加条二種(附加1条)の波状構成 底部本葉痕	床面	100% PL23
376	弥生土器	広口壺	[13.5]	(5.0)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	口内面に磨崖状工具(5本)による波状文	覆土中	5%
377	弥生土器	広口壺	-	[18.4]	6.6	長石・石英・雲母	黒焼	普通	胴部上部に押し印のある磁器2条以上 磨崖状工具(5本)による3条を一単位とする縦区画内に波状文を施す 灰白面に対してボタン状突起付 胴部に附加条二種(附加1条)の波状構成 底部本葉痕	覆土中	30%
378	弥生土器	広口壺	-	(2.5)	[7.4]	長石・石英・雲母	にび〜焼	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部押し痕 積痕	覆土中	5%
379	弥生土器	広口壺	-	(5.5)	-	長石・石英・雲母	焼	良好	口内面に筋目 口内面に磨崖状工具(4本)による縦区画内に波状文を施す	覆土中	5%
3792	弥生土器	広口壺	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母	にび〜焼	普通	口内面にツボ状工具による波状文 口内面に磨崖状工具(5本)による縦区画内に波状文を施す 胴部上部にツボ状工具による波状文を施す	覆土中	5% PL38
3793	弥生土器	広口壺	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母	にび〜焼	普通	口内面に筋目 小突起 複合口縁 口内面に磨崖状工具(3本)による縦区画内に波状文を施す	覆土中	5% PL38
3795	弥生土器	広口壺	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	灰焼	普通	口内面に筋目 口内面に附加条一種(附加2条)施文 突起付	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3795	球状土鐘	3.9	0.8	3.6	(65.3)	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中	
3796	球状土鐘	3.6	0.5	3.2	(33.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中	
3797	球状土鐘	3.4	0.5~0.7	3.5	(38.0)	土(長石・石英・雲母・黒色粒子)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中	
3798	球状土鐘	3.6	0.6	4.4	(33.5)	土(長石・石英・雲母・黒色粒子)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中	
3799	管状土鐘	4.0	0.6~0.7	4.7	(36.4)	土(長石・石英・雲母・針状鉱物)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q84	礫石	11.0	4.3	3.2	204.8	砂岩	磨打痕4ヶ所	床面	
Q85	礫石	04.5	(14.0)	(5.6)	(942.3)	砂岩	胴面・前面2ヶ所 器石4枚石に転用 くぼみ3孔	覆土下層	PL42
Q86	礫石	23.2	6.8	5.6	1136.4	砂岩	磨打痕6ヶ所 器石5枚石に転用 火を受けて赤変	覆土下層	

第96号住居跡(第23~26図)

位置 調査区西部のD9d6区で、標高15.1mほどの中段段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第92号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.08m、短軸4.89mの隅丸長方形で、主軸方向はN-53°-Wである。壁高は30~44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径83cm、短径61cmの楕円形で、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。凝灰岩の炉石が、炉の長軸に直交して炉床中央部に据えられていた。

炉土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 暗赤灰色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P1~P4は深さ34~56cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

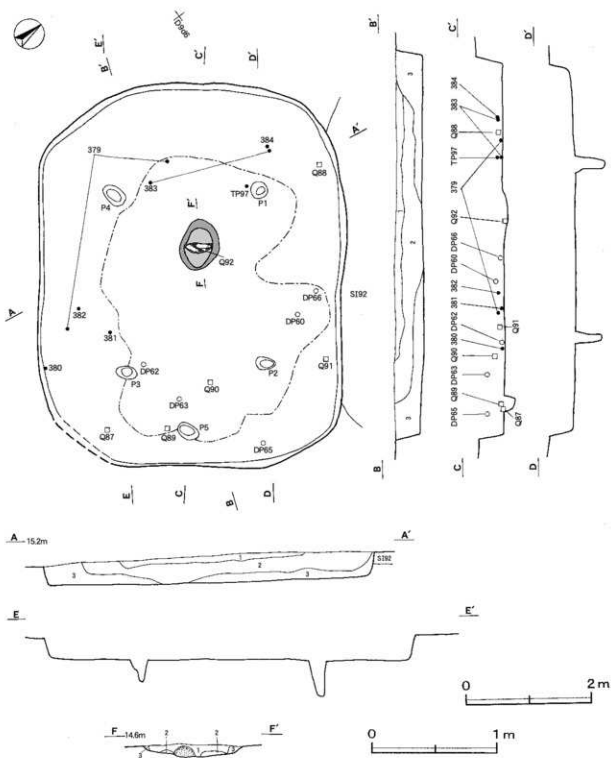
土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

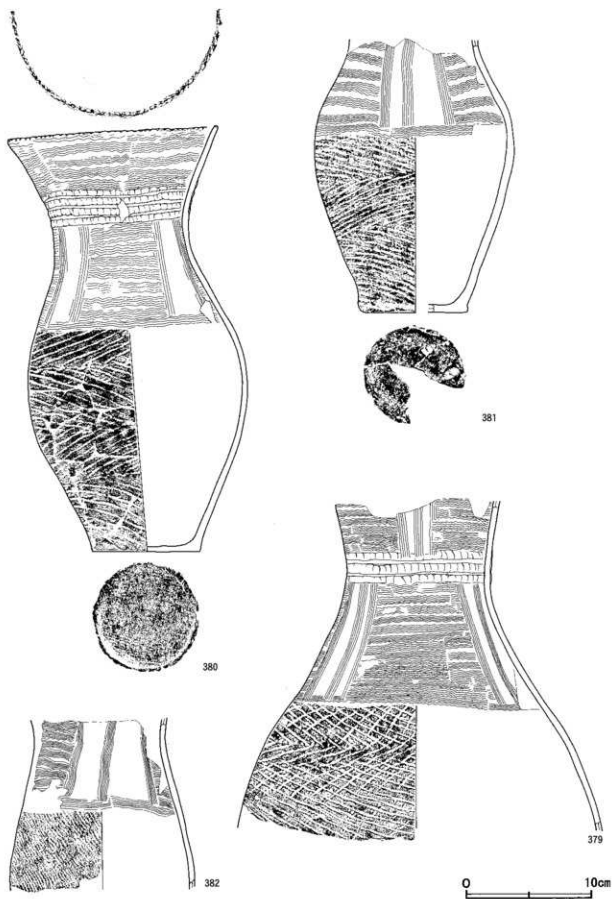
遺物出土状況 弥生土器片324点(広口壺)、土製品7点(紡績車1、球状土鐘2、管状土鐘4)、石器6点(磨石2、炉石4)の他に、混入した縄文土器片1点、土師器片31点も出土している。380は南西壁に倒れかか

ようにして出土し、381はP3付近の床面から出土している。第92号住居跡の377と接合した破片は、北東寄りの覆土上層から出土しており、第92号住居跡との重複部分にあった弥生土器片が本住居構築の際に掘り起こされ、周堤帯などに紛れ込んでいたものが住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。土師器片は第2層上面から上で出土しており、住居廃絶後の窪地に投棄されたものと考えられる。

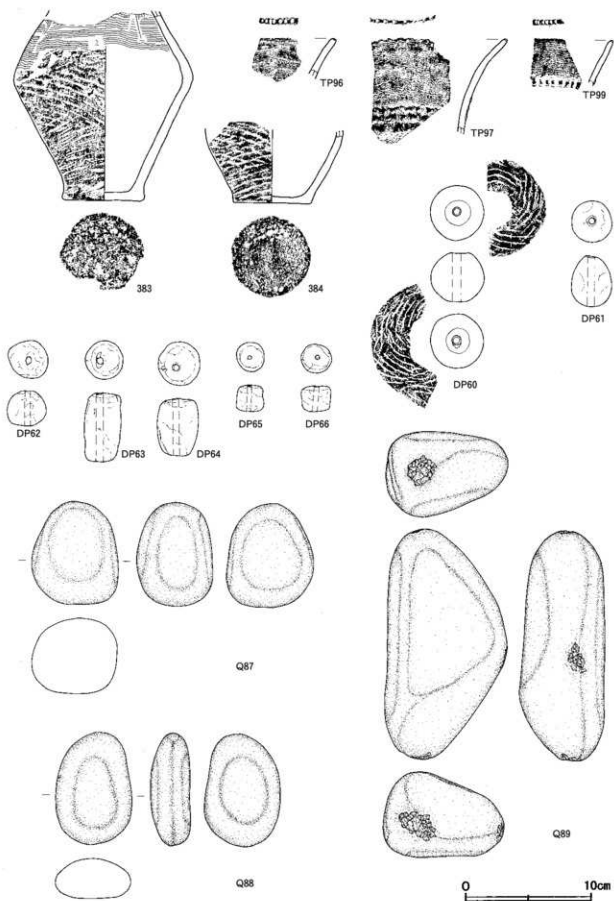
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



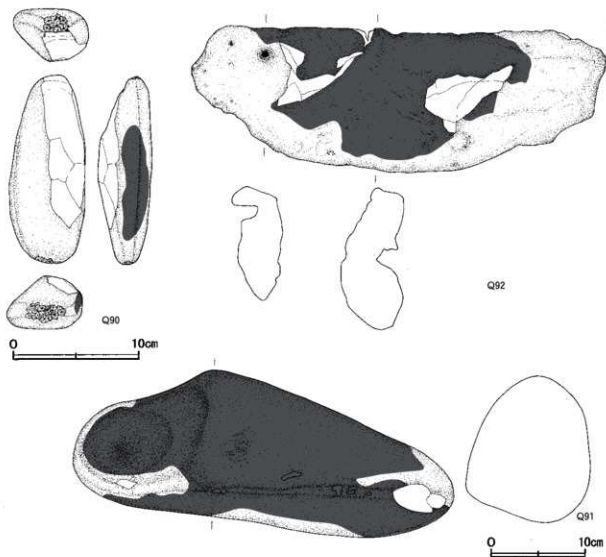
第23図 第96号住居跡実測図



第24图 第96号住居跡出土遺物実測図(1)



第25图 第96号住居跡出土遺物実測図(2)



第26図 第96号住居跡出土遺物実測図(3)

第96号住居跡出土遺物観察表(第24~26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
279	弥生土器	広口壺	-	(36.2)	-	長石・石英母・赤色胎子	灰褐色	普通	胴部に繩襷状工具(5本)による3条を1単位とする縦区画(4分幅)内に波状文を充填し、胴部中心に横・斜仕のある隆帯3条で文様帯を分割 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土下層~床面	25% Pl.21
300	弥生土器	広口壺	16.8	31.7	8.6	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口唇部に筋溝押仕 口唇部に繩襷状工具(5本)による波状文 胴部上位に横・斜仕のある隆帯4条 繩襷状工具による縦区画(4分幅)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	95% 口唇部・胴部外面残存着 内面炭化物付着 瓦片
301	弥生土器	広口壺	-	(22.5)	8.0	長石・石英・雲母	にじみ褐色	普通	胴部に繩襷状工具(5本)による2.5条を1単位とする縦区画(3分幅以上)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	90%
302	弥生土器	広口壺	-	(13.5)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	胴部に繩襷状工具(8本)による3条を1単位とする縦区画内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の波状文	覆土下層	10%
303	弥生土器	壺	-	(15.1)	6.6	長石・石英・雲母	にじみ褐色	普通	胴部に繩襷状工具(5本)による2.5条を1単位とする縦区画(高径)波状文充填 直訳文で胴部文様帯と区画 胴部に附加条二種(附加1条)の縦文	覆土下層~床面	65% Pl.23
304	弥生土器	広口壺	-	(5.8)	6.2	長石・石英・雲母・赤色胎子	靑	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	覆土下層	5%
1796	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	にじみ褐色	普通	口唇部繩襷状工具による押仕 口唇部繩襷状工具(6本)による波状文	覆土中	5% Pl.39
1797	弥生土器	広口壺	-	(7.7)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口唇部に筋溝 口唇部繩襷状工具(5本)による波状文 胴部土壌付・押仕のある隆帯3条 胴部繩襷状工具(本数不明)による波状文	覆土下層	5%
1799	弥生土器	広口壺	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	靑	普通	口唇部に筋溝 口唇部繩襷状工具(5本)による波状文 胴部土壌へ7枚状工具による斜刺のある隆帯	覆土中	5%

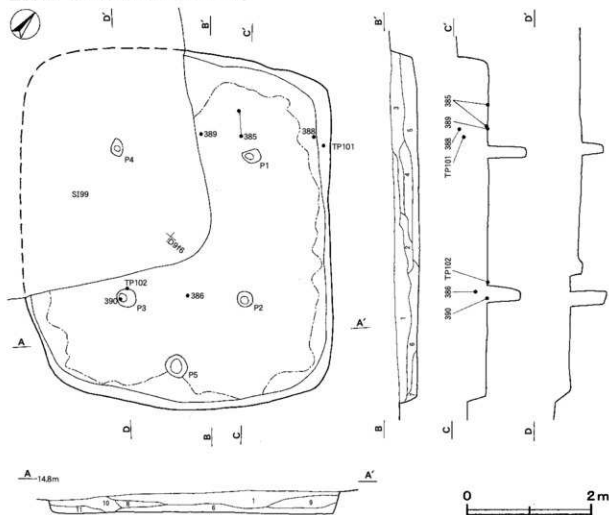
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
D90	球鉢	4.3	0.6~0.7	3.8	71.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔 附加条二種 (附加1条)の横文筋文	覆土下層	P140
D91	球状土埴	3.2	0.6	4.0	39.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
D92	球状土埴	3.1	0.4~0.5	2.8	25.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
D93	管状土埴	3.1	0.6	5.5	(58.3)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
D94	管状土埴	3.4	0.5	4.6	52.7	土(長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
D95	管状土埴	2.3	0.3	2.0	10.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
D96	管状土埴	2.4	0.4	2.0	11.6	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q97	磨石	8.2	7.0	6.1	53.5	平形硬岩	全面に磨痕 両端部に磨跡を有す	床面	
Q98	磨石	8.9	5.6	3.3	27.5	砂岩	全面に磨痕	覆土下層	
Q99	磨石	18.1	9.8	6.8	140.8	砂岩	縦打痕3か所 伊石を磨石に転用 火を受けて赤変	覆土下層	
Q90	磨石	15.0	6.1	4.3	(99.9)	砂岩	縦面に縦打痕 伊石を磨石に転用 火を受けて赤変 保存痕	覆土下層	
Q91	伊石	41.7	17.4	13.2	(1020.0)	砂岩	底面以外の3面に備付着	覆土下層	
Q92	伊石	44.5	15.5	6.7	(188.8)	凝灰質泥岩	上面、火を受けて赤変	伊床面	

第100号住居跡 (第27~29図)

位置 調査区西部のD9e6区で、標高14.6mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第99号住居に掘り込まれている。



第27図 第100号住居跡実測図

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-38°-Wとする長軸5.76m、短軸4.92mの隅丸長方形と推定される。壁高は20~36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 5か所。P1~P4は深さ34~60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

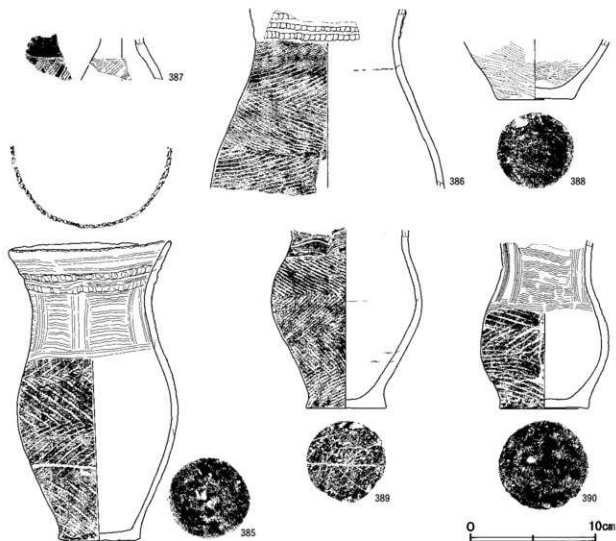
覆土 11層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられるが、第1層は自然に堆積したと考えられる。

土層解説

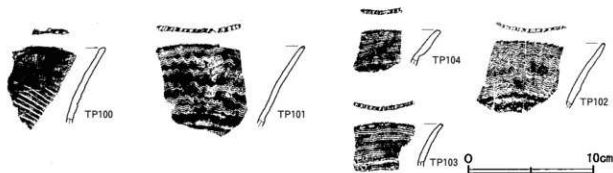
- | | | | |
|--------|---------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 9 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片216点（広口壺）、礫3点の他に、混入した土師器片8点も出土している。385・389は、北側コーナー付近の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第28図 第100号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 第100号住居跡出土遺物実測図(2)

第100号住居跡出土遺物観察表(第28・29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色 調	地味	文様及び手法の特徴	出土位置	備 考
365	赤生土器	広口壺	12.6	23.8	6.5	長石・石英雲母	にじみ黄緑	普通	口唇部に部体押注・口辺部に線装文(黒3本)による波状文。胴部上位に押注のある隆帯2条。隆帯間に線装文工具による隆文。線装文工具による隆帯区画(5分型)内の波状文も線装文に附加した種別追加1条の波状構成。輪切痕。底部赤目肌。	床面	100% 胴部外面僅付着 内面灰化物付着 P.22
366	赤生土器	広口壺	-	(14.1)	-	長石・石英雲母	にじみ黄	普通	胴部上位に押し押注のある隆帯3条。胴部から胴部に附加した種別追加1条の波状構成。	覆土中層	10% 外面僅付着
367	赤生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英雲母	にじみ黄	普通	胴部無文様。胴部下位に線装文工具(5本)による波状文。科位の隆文。	覆土中	5%
388	赤生土器	広口壺	-	(4.8)	6.2	長石・石英雲母	にじみ黄	普通	体部中・外面下端へウ巻き。底部へウ巻き。	覆土上層	10%
389	赤生土器	広口壺	-	(14.1)	8.3	長石・石英雲母・赤鉄粉	にじみ赤黒	普通	胴部下位に下向き波状文。胴部追加種別追加2条の波状構成。輪切痕。底部土黄。	床面	70% 胴部外面僅付着
390	赤生土器	広口壺	-	(13.3)	7.1	長石・石英雲母	灰黒	普通	胴部追加種別追加1条の波状文。胴部追加1条の波状構成。底部赤目肌。	床面	60% 胴部外面僅付着 内面灰化物付着
TP00	赤生土器	広口壺	-	(5.7)	-	長石・石英雲母	灰白	普通	口唇部に部体押注・口唇部無文 胴部上位に附加種別追加2条の隆文。輪切痕なし。	覆土中	5% P.28
TP01	赤生土器	広口壺	-	(6.4)	-	長石・石英雲母	にじみ赤黒	普通	口唇部に部体・手突形・口辺部に線装文工具(4本)による波状文。胴部上位に押し押注のある隆帯。	覆土上層	5%
TP02	赤生土器	広口壺	-	(5.1)	-	長石・石英雲母	にじみ黄	普通	口唇部に部体・手突形・口辺部に線装文工具(5本)による波状文。胴部上位に押し押注のある隆帯。	床面	5%
TP03	赤生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英雲母	黒緑	普通	口唇部に部体・口辺部に線装文工具(4本)による波状文。隆帯。	覆土中	5%
TP04	赤生土器	壺形土器	-	(2.8)	-	長石・石英雲母	灰黄	普通	口唇部に部体・口辺部に線装文工具(4本)による波状文。	覆土中	5%

第105号住居跡(第30・31図)

位置 調査区西部のD 9 a2区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第106号住居、第1・2号掘立柱建物、第166号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.93m、短軸4.70mの隅丸長方形で、主軸方向はN-54°-Wである。壁高は30~44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 炉は中央部に2か所検出された。炉1は、長径74cm、短径52cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉2は、長径33cm、短径49cmほど確認され、検出状況から炉1より古いものと考えられる。

炉1土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・灰微量
2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物・灰微量

炉2土層解説

- 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・灰微量
4 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物・灰微量

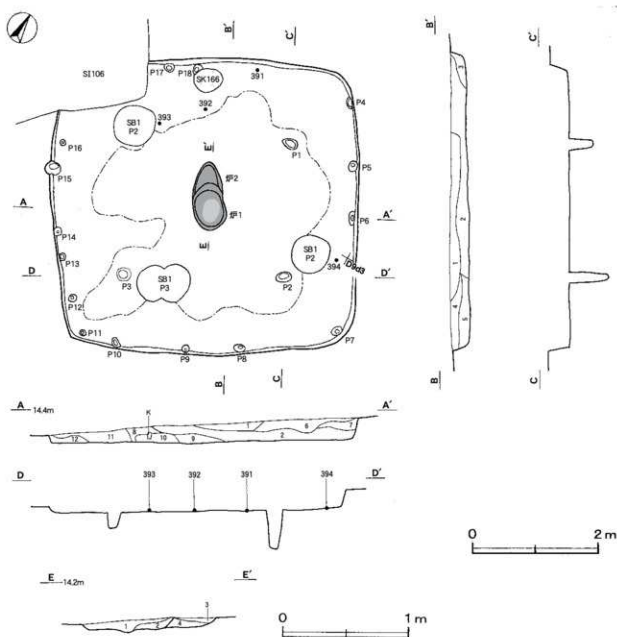
ピット 18か所。P1~P3は深さ24~61cmで、配置から主柱穴と考えられる。また、P4~P18は配置から壁柱穴と考えられる。

覆土 12層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

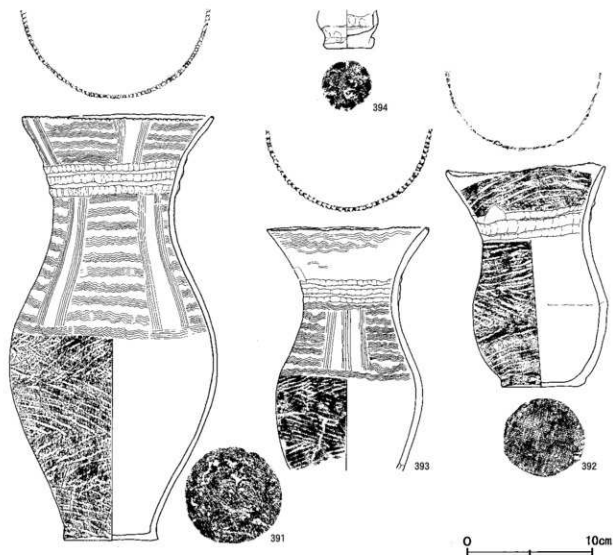
土層解説					
1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7	極暗褐色	ローム粒子微量
2	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子中量。炭化粒子微量	9	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
4	褐色	ローム粒子中量。焼土粒子・炭化粒子微量	10	黒褐色	ローム粒子微量
5	極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	11	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
6	黒褐色	ローム粒子少量。炭化粒子微量	12	暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片82点（広口壺），手握土器1点（壺類），礫1点の他に，混入した土師器片30点も出土している。391は北西壁に倒れかかっているようにして出土し，392・393は中央部北西寄り，394は北東壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第30図 第105号住居跡実測図



第31図 第105号住居跡出土遺物実測図

第105号住居跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴		出土位置	備考
									口部	胴部		
391	弥生土器	広口壺	15.1	33.8	7.7	長石・石英雲母	灰黄褐色	良好	口部部にのみ	口部部・胴部に磨製次工具(5本)による縦区画(5分割)内に波状文を充填。胴部上位の帯(押圧)のある陸巻3条で文飾帯を分割。胴部は二附加条二種(附加1条)の引状構成。近部砂目肌。	床面	87% 胴部外面僅付着 内面灰化物付着 PL17
392	弥生土器	広口壺	12.6	17.8	6.4	長石・石英雲母	に灰・赤褐色	普通	口部部に全体押し	口部部に附加条二種(附加1条)の縦文飾文。胴部上位に帯(押圧)のある陸巻3条。胴部は二附加条二種(附加1条)の引状構成。輪縁部 近部有目肌。	床面	95% 胴部外面僅付着 PL22
393	弥生土器	広口壺	12.8	(18.3)	—	長石・石英雲母	に灰・赤褐色	普通	口部部にのみ	口部部に磨製次工具(5本)による波状文。口部部の一割割線。胴部上位に帯(押圧)のある陸巻3条。磨製次工具による縦区画(3分割)内に波状文充填。胴部は二附加条二種(附加1条)の引状構成。	床面	60% 胴部外面僅付着 PL22
394	手捏土器	壺形片	—	(3.0)	3.9	長石・石英雲母	灰褐色	普通	胴部外面ナデ	胴部下部に指形肌。輪縁部 近部砂目肌。	床面	20%

第112号住居跡(第32・33図)

位置 調査区西部のC9j1区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第110・111号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-34°-Wとする長軸5.23m、短軸3.94mの隅丸長方形と推定される。壁高は12~37cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径83cm、短径66cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

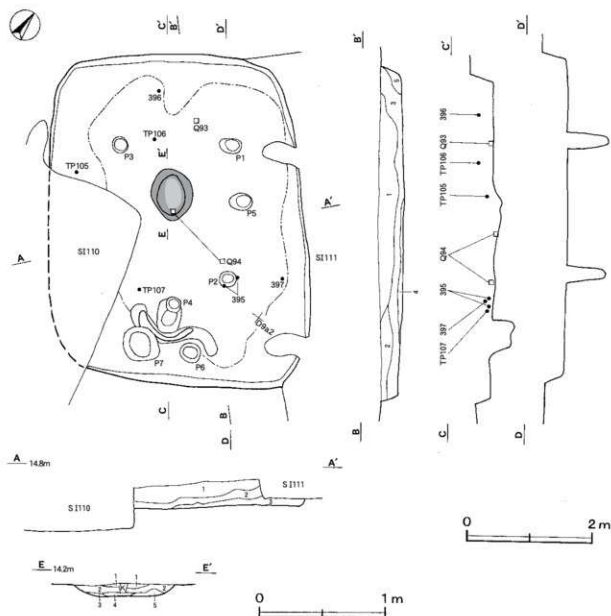
- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量 | |

ピット 7か所。P1～P3は深さ54～66cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5～P7の性格は不明である。

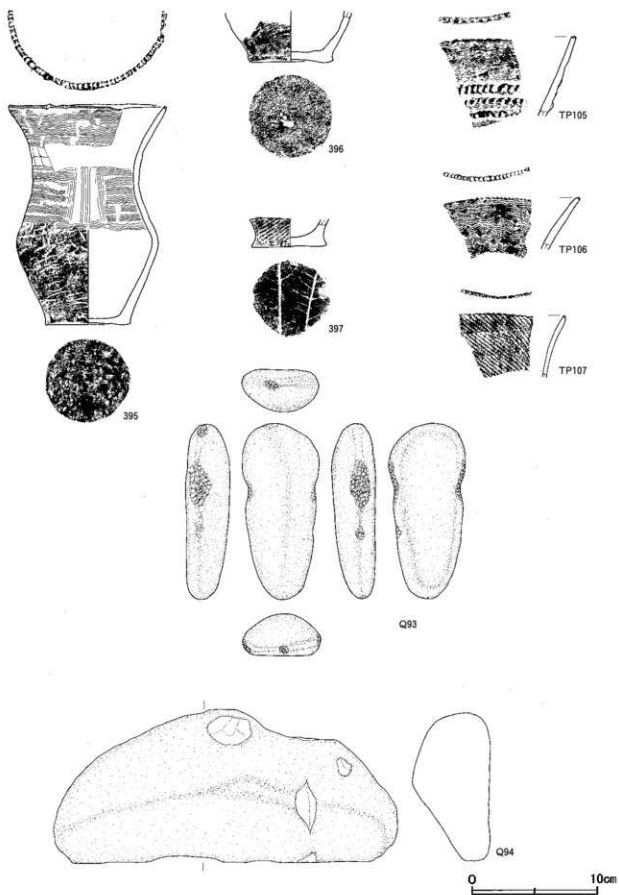
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量 | |



第32図 第112号住居跡実測図



第33图 第112号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片307点（広口壺），土製品3点（不明），石器2点（磨石、炉石），礫7点の他に、混入した土師器片29点も出土している。395はP2付近の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。

第112号住居跡出土遺物観察表(第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	文様及び平法の特徴	出土位置	備考
305	弥生土器	広口壺	12.1	17.5	6.9	長石-石英-雲母	にがい焼	普通	口唇部に馬蹄、小突起2単位以上、口辺部に磨崖状工具(5本)による段状文、胴部上位に斜め押圧のある隆帯2条、磨崖状工具による3条一単位の間隔(向45度斜)に段状文充て、胴部(附加条一種(附加条))の縄文施文、底部赤目肌	覆土下層	10% 胴部外面に付着 P1.22
306	弥生土器	広口壺	-	(4.0)	6.4	長石-石英-雲母	にがい焼	普通	胴部(附加条一種(附加条))の縄文、胴部下縁隅7字、胴部下端に粒粒筋、底部砂目肌	覆土中層	10%
307	弥生土器	広口壺	-	(2.1)	6.1	長石-石英-雲母	にがい焼	普通	胴部(附加条一種(附加条))の縄文、底部木炭痕	覆土下層	5%
308	弥生土器	広口壺	-	(6.2)	-	長石-石英-雲母	にがい焼	普通	口唇部に磨崖状文、口辺部に磨崖状工具(5本)による段状文、胴部上位に押圧のある隆帯、隆帯間に磨崖状工具による施文	覆土下層	5% P1.38
309	弥生土器	広口壺	-	(4.1)	-	長石-石英-雲母	黒焼	普通	口唇部に馬蹄、口辺部に磨崖状工具(5本)による段状文	覆土上層	5%
310	弥生土器	広口壺	-	(5.1)	-	長石-石英-雲母・赤鉄鉱子	明赤焼	普通	口唇部に磨崖状文、口辺部に丸の磨崖縄文施文	覆土下層	5% P1.38

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q95	磨石	14.0	6.0	3.4	461.4	凝灰岩	縦打痕4本	覆土下層	P1.42
Q14	炉石	27.3	12.3	6.2	1524.9	砂岩	穴を受けて変色	覆土下層～床面	

第114号住居跡(第34～36図)

位置 調査区西部のD9b3区で、標高14.6mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.00m、短軸5.92mの隅丸方形で、主軸方向はN-26°-Wである。壁高は23～41cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。長径107cm、短径80cmの楕円形で、床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ60～68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ26cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

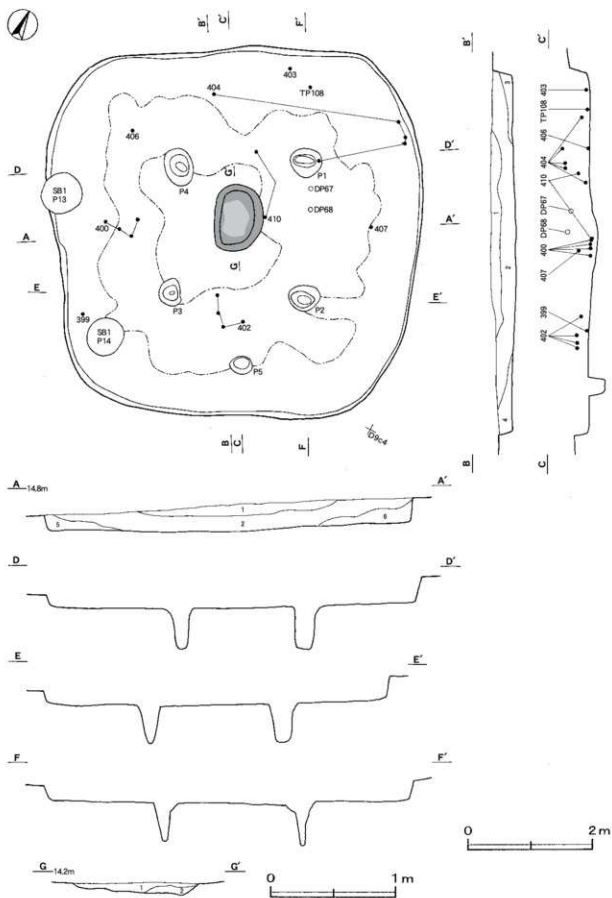
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

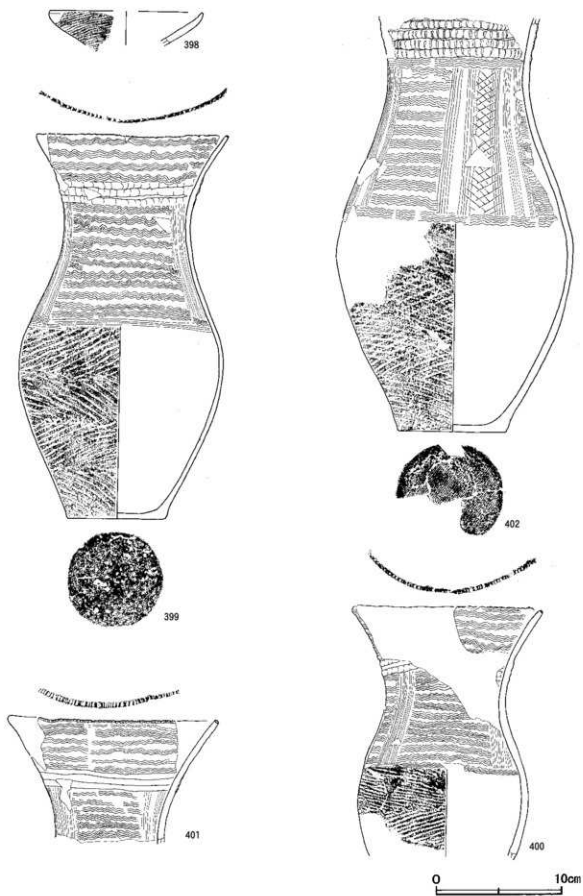
- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック微量
3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色 ロームブロック少量
6 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片652点（高坏1，広口壺651），土製品2点（球状土錘），石器2点（磨石、敲石），礫3点の他に、混入した縄文土器片7点，土師器片66点も出土している。399は南コーナー付近の壁に倒れかかるようにして出土している。土師器片は、いずれも第2層より上から出土している。409・410は、全体を復元できない接合資料であり、住居廃絶後の早い時期に投棄されたと考えられる。

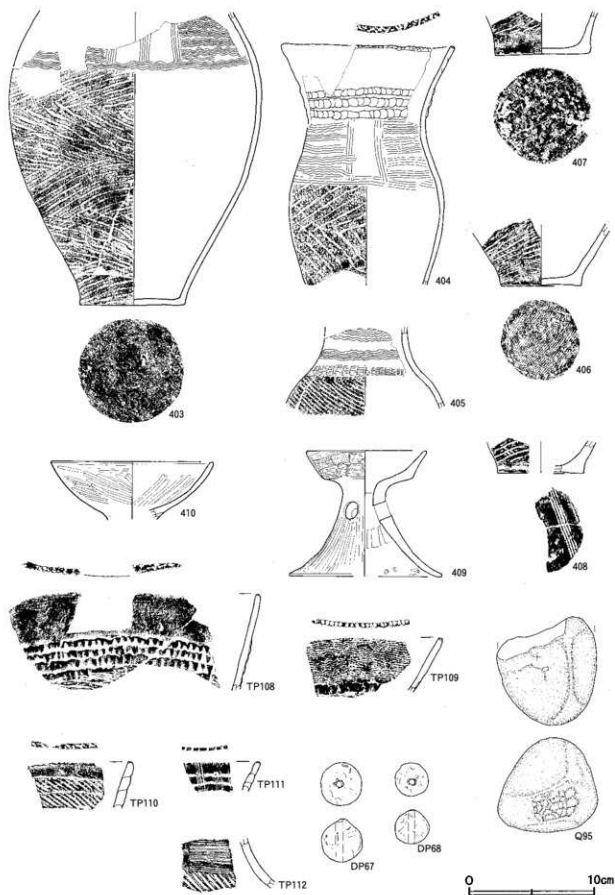
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第34图 第114号住居跡実測図



第35图 第114号住居跡出土遺物実測図(1)



第36图 第114号住居跡出土遺物実測図(2)

第114号住居跡出土遺物観察表(第35~36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色 調	地 成	文様及び手法の特徴	出土位置	備 考
38	弥生土器	高坏	[12.2]	12.7	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄緑	普通	口縁部に附加条一種(附加1条)	覆土中	5%
39	弥生土器	広口壺	[15.4]	31.0	7.9	長石・石英・雲母	灰黄緑	良好	口縁部に刺し押印のある陸帯3条。壺胴上工具による4条単位(一部3条)の縦区画(3分帯)内に波状文を施す。壺胴下に波状文と直線文。胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成。底面直削	床面	90% 側面外面に横穴付着 内面炭化物付着 P1.8
40	弥生土器	広口壺	15.4	(20.1)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口縁部に刺し押印のある陸帯3条。壺胴上工具による3条単位(一部3条)の縦区画(4分帯)内に波状文を施す。胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土下層	90% 側面外面横穴付着
41	弥生土器	広口壺	[16.4]	(10.6)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄緑	普通	口縁部に刺し押印のある陸帯3条を露出。壺胴上工具による3条単位(一部3条)の縦区画(3分帯以下)内に波状文を施す	覆土中	10%
42	弥生土器	広口壺	-	(33.3)	8.8	長石・石英・雲母	灰黄緑	普通	壺胴上位に半環状付着による刺突のある陸帯4条。壺胴上工具(5.8cm)による縦区画(2分帯以上)を施す。壺胴下位に波状文と直線文。胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成。底面直削	覆土中層	40% 側面外面横穴付着 内面炭化物付着 P1.8
43	弥生土器	広口壺	-	(23.4)	8.3	長石・石英・雲母・ 赤色粘土	にじみ・黄	普通	壺胴上工具(5.4cm)による3条単位とする縦区画(2分帯以上)内に波状文を施す。壺胴下位に波状文と直線文。胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成。底面直削	覆土下層	40% 側面外面横穴付着 内面炭化物付着 P1.8
44	弥生土器	広口壺	[13.3]	(19.1)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄	普通	口縁部に刺し押印のある陸帯3条。壺胴上工具による3条単位(一部3条)の縦区画(4分帯)内に波状文を施す。胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土上層 ~下層	80% 口径外面横穴付着 P1.50
45	弥生土器	広口壺	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄	普通	壺胴に壺胴上工具(6.4cm)による直線文。壺胴下に波状文と直線文。胴部に附加条一種(附加1条)の縦文	覆土中	5%
46	弥生土器	広口壺	-	(4.9)	6.2	長石・石英・雲母	にじみ・黄	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縦文。底面直削	床面	5%
47	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	7.5	長石・石英・雲母	にじみ・黄	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縦文。胴部下層横穴付着	覆土中層	5%
48	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	[7.6]	長石・石英・雲母	にじみ・黄	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縦文。底面直削。底面に上り足	覆土中	5%
49	土師器	器台	9.5	10.0	[12.2]	長石・石英・雲母	橙	普通	側面外面ハブ直削。内面十字。側面外面へ陸帯3条。側面外面ハブ直削後へナガサ、ナガサ、3条	覆土中 ~上層	60%
50	土師器	高坏	12.8	(4.6)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄	普通	器台内、外面へ陸帯3条	覆土中層 ~上層	90%
50A	弥生土器	広口壺	-	(7.6)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄緑	普通	口縁部に刺し押印のある陸帯3条。壺胴下に波状文と直線文。胴部に附加条一種(附加1条)の縦文	覆土下層	5%
50B	弥生土器	広口壺	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄緑	普通	口縁部に壺胴上工具による押印のある陸帯3条。壺胴下に波状文と直線文。胴部に附加条一種(附加1条)の縦文	覆土中層	5%
51A	弥生土器	広口壺	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	明焼	普通	口縁部に刺し押印のある陸帯3条。壺胴下に波状文と直線文。胴部に附加条一種(附加1条)の縦文	覆土中	5% P1.39
51B	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	-	長石・石英・雲母	明焼	普通	口縁部に刺し押印のある陸帯3条。壺胴下に波状文と直線文。胴部に附加条一種(附加1条)の縦文	覆土中	5%
51C	弥生土器	広口壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄緑	普通	壺胴下に波状文と直線文。胴部に附加条一種(附加1条)の縦文	覆土中	5% P1.39

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材 質	特 徴	備 考	出土位置	備 考
1987	埴土埴	3.4	6.6	3.4	32.4	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方向からの穿孔		覆土上層	
1988	埴土埴	2.7	0.5~0.6	2.7	20.1	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方向からの穿孔		覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	備 考	出土位置	備 考
Q95	巖石	(8.6)	7.8	7.5	(344.9)	石英岩	縦切面は石 火受け弁		覆土中	

第134号住居跡(第37~39図)

位置 調査区西部のD 8 d0区で、標高14mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第133号住居、第1・2号掘立柱建物、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平を受けているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸6.62m、短軸2.32mほどが確認され、炉や柱穴の位置などから判断して、N-29°-Wを主軸方向とする隅丸方形または隅丸長方形と推定される。確認された壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と推定され、北側コーナー付近の一部が踏み固められている。

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北東寄りに位置していると考えられ、長径82cm、短径は38cmほどが確認された。形状は楕円形と推定され、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面に赤変硬化は確認できなかった。

伊土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。P1・P2は深さ32～49cmで、配置から主柱穴と考えられる。P3の性格は不明である。

覆土 3層に分層される。覆土はわずかではあるが、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

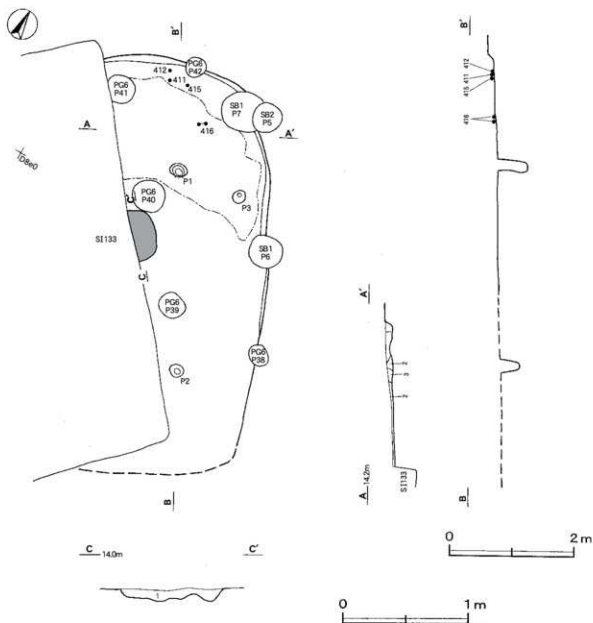
1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

3 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量

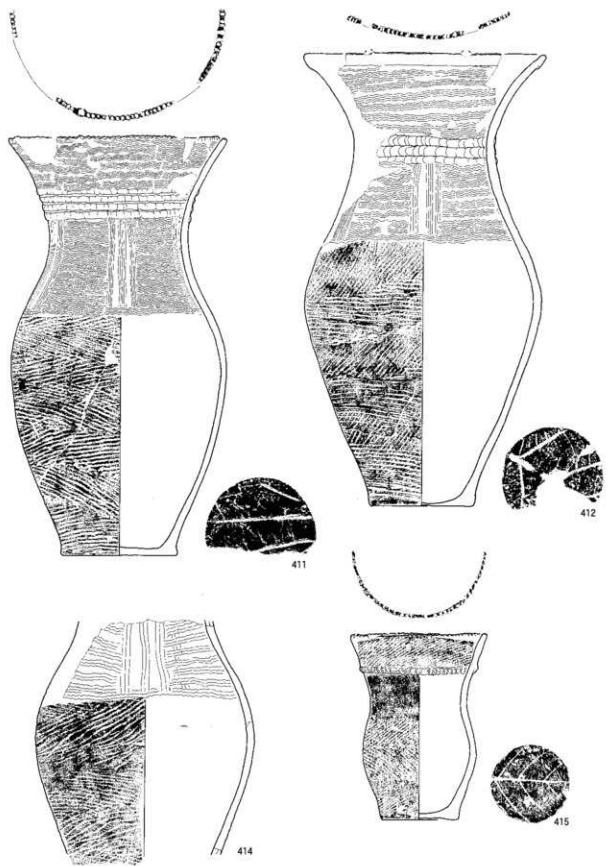
2 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片51点（広口壺）、礫1点が出土している。411・412・415・416は北側コーナー寄りの床面からそれぞれ出土している。

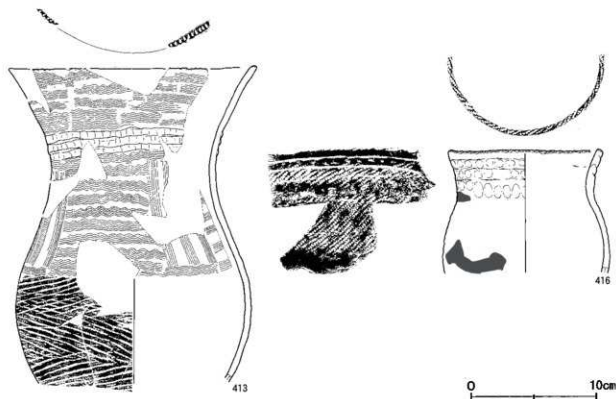
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第37図 第134号住居跡実測図



第38图 第134号住居跡出土遺物実測図(1)



第39図 第134号住居跡出土遺物実測図(2)

第134号住居跡出土遺物観察表(第38・39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
411	赤生土器	広口壺	17.2	33.4	9.0	長石・石英雲母	灰褐色	普通	口唇部にのみ、口辺部に纏書状工具(5本)による波状文、胴部上位に斜い押圧のある隆帯4条、纏書状工具による3条一単位の縦区画(5分刻)内ニ波状文充填、胴部ニ附加条一種(附加2条)の羽状構成、表面木葉肌	床面	60% 胴部・胴部外面僅付着 内面沢化物付着 P1.18
412	赤生土器	広口壺	36.0	[19.0]	8.0	長石・石英雲母	にんげん黄褐色	普通	口唇部にのみ、小波状(2単位以上)複合口縁、口辺部に纏書状工具(4本)による波状文、胴部上位に斜い押圧のある隆帯3条、纏書状工具により3条一単位の縦区画(3分刻以上)内ニ波状文充填、胴部ニ附加条一種(附加2条)の羽状構成、表面木葉肌	床面	50% 胴部・胴部外面僅付着 内面沢化物付着 P1.18
413	赤生土器	広口壺	[19.0]	[25.2]	-	長石・石英雲母	にんげん黄褐色	普通	口唇部にのみ、口辺部に纏書状工具(6本)による波状文、胴部上位に斜い押圧のある隆帯3条、纏書状工具による3条一単位の縦区画(3分刻以上)内ニ波状文充填、胴部ニ附加条二種(附加2条)の縞文	覆土中	32% 胴部外面僅付着 P1.18
414	赤生土器	広口壺	-	[18.0]	-	長石・石英雲母	にんげん黄褐色	普通	纏書状工具(3本)による3条一単位の縦区画内ニ波状文充填、胴部ニ附加条一種(附加1条)の縞文、羽状構成、表面木葉肌	覆土中	10% 胴部・胴部外面僅付着 内面沢化物付着 P1.18
415	赤生土器	広口壺	10.8	14.8	6.1	長石・石英雲母	にんげん黄褐色	普通	口唇部に全体押し、複合口縁、口辺部に附加条一種(附加2条)の縞文、下部ニ縞文帯体による縞文、胴部ニ附加条一種(附加2条)の縞文、羽状構成、表面木葉肌	床面	100% 口辺部・胴部外面僅付着 P1.23
416	赤生土器	広口壺	11.7	[9.8]	-	長石・石英雲母	にんげん黄褐色	普通	口唇部に全体押し、口辺部内・外面傾ナリ、輪縁のみ、口辺部ニ下部から胴部上位にかけてN7Eの半部縞文、内面丁寧ナリ、輪縁肌	床面	10% 胴部・胴部外面僅付着 P1.21

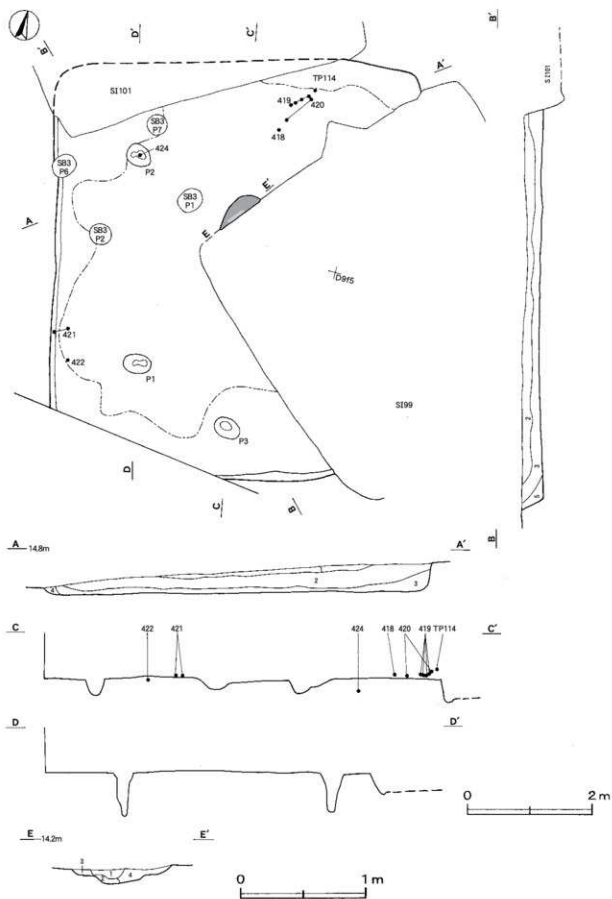
第137号住居跡(第40～42図)

位置 調査区西部のD9e4区で、標高14.4mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第99・101号住居、第3号掘立建物、第21号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸6.50m、短軸5.86mほどが確認され、検出された炉や柱穴の位置などから判断して、N-8°-Wを主軸方向とする兩長方形と推定される。確認された壁高は12～46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。



第40图 第137号住居跡実測图

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北寄りに位置していると考えられ、一部が確認されたのみである。形状は楕円形と推定され、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 赤褐色 焼土ブロック中量 | 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |

ピット 3か所。P1・P2は深さ62～66cmで、配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ24cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

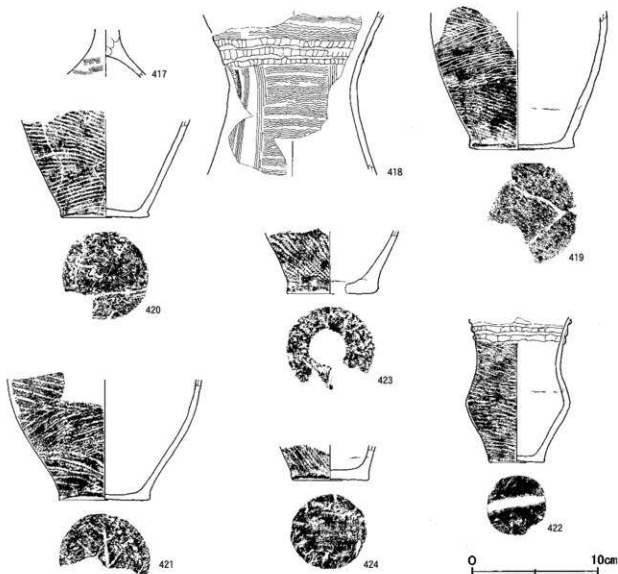
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

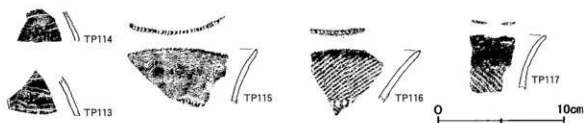
- | | |
|-------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片269点（広口壺）、礫1点の他に、混入した土師器片23点も出土している。421・422は、西側壁付近の床面から出土し、424はP1の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第41図 第137号住居跡出土遺物実測図(1)



第42図 第137号住居跡出土遺物実測図(2)

第137号住居跡出土遺物観察表(第41・42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他成	文様及び平法の特徴	出土位置	備考
417	弥生土器	高坪	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄斑	普通	胴部外面磨製状工具(5本)による波状文 内面ナデ	覆土中	5%
418	弥生土器	広口壺	-	(12.9)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口辺部に磨製状工具(5本)による波状文 胴部上に軽い押印のある浅帯3条 磨製状工具による3条一単位が縦区画に波状文を施	覆土下層	5% 胴部外面磨製状
419	弥生土器	広口壺	-	(10.9)	(8.4)	長石・石英・雲母	にじみ・黄斑	普通	胴部二附加条二種(附加1条)の羽状構成 編織肌 底面砂目肌	覆土下層	30%
420	弥生土器	広口壺	-	(7.7)	7.0	長石・石英・雲母	にじみ・黄斑	普通	胴部二附加条二種(附加1条)の羽状構成 底面布目肌を施 底本葉短・調整	覆土下層	20% 内面炭化物付着
421	弥生土器	広口壺	-	(9.5)	7.2	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	胴部二附加条二種(附加1条)の羽状構成 底面本葉短	床面	15% 内面炭化物付着
422	弥生土器	広口壺	-	(11.6)	4.4	長石・石英・雲母	にじみ・黄斑	普通	胴部上用の軽い押印のある浅帯3条以上 胴部5分の胴部に附加条二種(附加1条)の波状文 編織肌(底面砂目肌)	床面	90% 胴部外面磨製状文 内2%
423	弥生土器	広口壺	-	(4.9)	6.8	長石・石英・雲母	にじみ・黄斑	普通	胴部二附加条二種(附加1条)の波状文 編織肌 底面砂目肌 底面磨製状波状文	覆土中	10% 内面炭化物付着
424	弥生土器	広口壺	-	(2.8)	6.0	長石・石英・雲母	にじみ・黄斑	普通	胴部二附加条二種(附加1条)の波状文 編織肌 底面本葉短 化ナデ調整	P1中層	10%
TP110	弥生土器	高坪	-	(3.1)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄斑	普通	胴部下縁磨製状工具(3本)による波状文	覆土中	5%
TP111	弥生土器	高坪	-	(2.2)	-	長石・石英・雲母 金砂粒子	にじみ・黄斑	普通	胴部下縁磨製状工具(3本)による波状文	覆土下層	5%
TP115	弥生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	黄	普通	口唇部に軽い押印部二磨製状工具(6本)による波状文 胴部上にへう状工具による押印のある浅帯	覆土中	5%
TP116	弥生土器	広口壺	-	(4.2)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口唇部に磨製押印 口辺部に附加条二種(附加2条)編織肌 波状構成 胴部上に波状文に施す	覆土中	5%
TP117	弥生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	口唇部に磨製押印 胴部上用の附加条二種(附加2条)編織肌	覆土中	5%

第141号住居跡(第43図)

位置 調査区中央部のD10e0区で、標高23.4mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第142号住居、第186・187号土坑、第7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平が激しく、遺構全体の確認はできなかったが、検出された炉や柱穴の位置などからN-8°-Wを主軸方向とする、一边が5.00mほどの隅丸方形と推定される。確認された壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦であったと考えられ、炉跡南東部が踏み固められているのが確認された。

炉 柱穴との位置関係から、中央部に位置していると考えられる。形状は楕円形と推定され、長径68cm、短径50cmが確認され、床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

土層解説

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |

ピット 4か所。深さは48~64cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

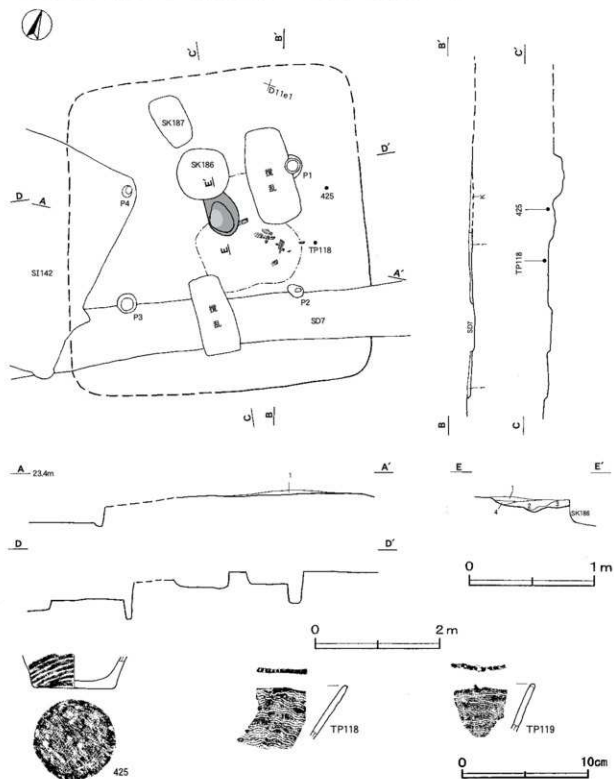
土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 弥生土器片13点(広口壺)が出土している。425は床面から出土している。また、床面から焼土とともに炭化材が出土していることから、焼土住居と考えられるが、火を受けて赤変した床面や焼土を確認

することはできなかった。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。また、炭化材の科学分析の結果、樹種はケヤキ、カヤ、コハダの3種類が認められ、丸材であることが判明している。これらは住居構築材であると考えられるが、同様に炭化材樹種同定を行った第143・156号住居跡と樹種が異なっており、住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



第43図 第141号住居跡・出土遺物実測図

第141号住居跡出土遺物観察表(第43図)

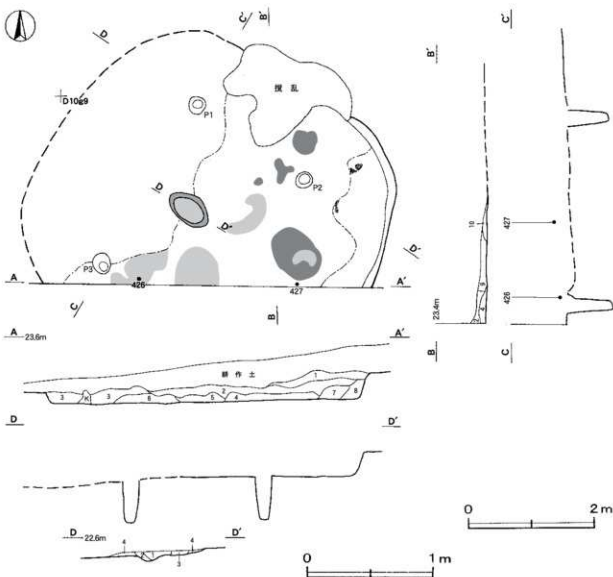
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手法の特長	出土位置	備考
425	弥生土器	広口壺	-	12.6	6.6	長石-石灰-雲母	こげ・黄緑	普通	胴部・附加二種(附加1条)の縄文 底部布目煎	床面	10%
418	弥生土器	広口壺	(11.2)	-	-	長石-石灰-雲母	粉	普通	口縁部に刻み 口部彫刻畫文工具(4本)による波状文	覆土下層	5%
419	弥生土器	広口壺	(13.7)	-	-	長石-石灰-雲母	にじみ緑	普通	口縁部に刻み 小突起 口部彫刻畫文工具(6本)による波状文	覆土中	5%

第143号住居跡(第44・45図)

位置 調査区中央部のD10g9区で、標高23mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 南側は調査区域外へ延び、さらに耕作による削平を受けているため長軸5.60m、短軸4.70mほどが確認された。検出された床面の広がりや戸の配置、柱穴の位置関係などから判断して、N-50°-Wを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。確認された壁高は20~45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と推定され、南東側が踏み固められている。



第44図 第143号住居跡実測図

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北西寄りに位置していると考えられ、長径73cm、短径45cmの楕円形で、床面を14cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量 | 3 極暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 オリーブ緑 粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量 |

ピット 3か所。深さ67～72cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 | 7 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・鹿沼パミス微量 | 8 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子・鹿沼パミス微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック・鹿沼パミス微量 | 9 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・鹿沼パミス微量 |
| 4 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土ブロック微量 | 10 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・鹿沼パミス微量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | |
| 6 極暗褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子・鹿沼パミス微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片92点（広口壺）が出土している。426・427は覆土下層からそれぞれ出土している。また、床面から焼土とともに炭化材が出土しており、床面には火を受けて赤変した部分が確認され、焼失住居である可能性が高い。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。また、炭化材の科学分析の結果、樹種はカヤで、丸材であることが判明している。これらは住居構築材であると考えられるが、同様に炭化材樹種同定を行った第141・156号住居跡と樹種が異なっており、住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



第45図 第143号住居跡出土遺物実測図

第143号住居跡出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
426	弥生土器	広口壺	-	(4.3)	7.6	長石・石英質母	にがね	普通	胴部・附加条二種(附加1条)の肌状構成 底部調整 内縁判別	覆土下層	10%
427	弥生土器	広口壺	-	(1.3)	(8.0)	長石・雲母	灰黄褐色	普通	胴部・附加条二種(附加1条)の肌文 底部布目肌	覆土下層	5% 内面炭化物付着

第148号住居跡(第46図)

位置 調査区中央部のD11J9区で、標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第146号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、東西長3.40m、南北長3.70mほどが確認された。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定され、検出された壁から想定して、主軸方向はN-44°-Wと考えられる。壁高は14cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南東壁から中央部にかけてが踏み固められているのが確認できた。

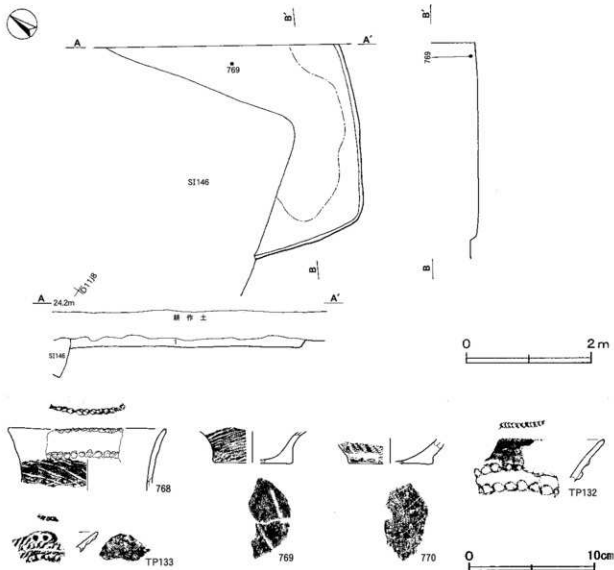
覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック・粘土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片58点(広口壺, 甕1点)が出土している。769は南東側の覆土下層から出土している。

所見 遺構の大部分を第146号住居に掘り込まれているため、炬跡や柱穴を確認することができなかった。時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第46図 第148号住居跡・出土遺物実測図

第148号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
768	弥生土器	広口壺	[12.4]	(4.9)	-	長石-石英-雲母	灰黄緑	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 胴部上部に縄文原体による絞文のある浅溝1条 胴部二対加糸二種(別加1条)の縄文	覆土中	5%
769	弥生土器	広口壺	-	(2.5)	[6.4]	長石-石英-雲母	浅黄緑	普通	胴部二対加糸二種(別加1条)の縄文 底部本発根を調整	覆土下層	5%
770	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	[6.6]	長石-石英-雲母	濃い青	普通	胴部二対加糸二種(別加1条)の縄文 底部本発根	覆土中	5%
TP12	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	長石-石英-雲母	灰黄緑	普通	口唇部に原体押圧 胴部上部に指節による押圧のある浅溝2条以上	覆土中	5%
TP13	弥生土器	広口壺	-	(1.5)	-	長石-石英-雲母	濃い青	普通	口唇部二対加糸 2条の浅溝1条 口辺部に1本の縄文縄文線、絞のボタン状発根が付く 手載り部による絞文 口辺部内縁部装文(5本)による絞文	覆土中	5% PL38

第149号住居跡（第47図）

位置 調査区中央部のD11J7区で、標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第146号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、東西長1.30m、南北長5.90mほどが確認された。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定され、検出された壁から想定して、主軸方向はN-53°-Wと考えられる。壁高は16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、北東壁際が踏み固められているのが確認できた。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

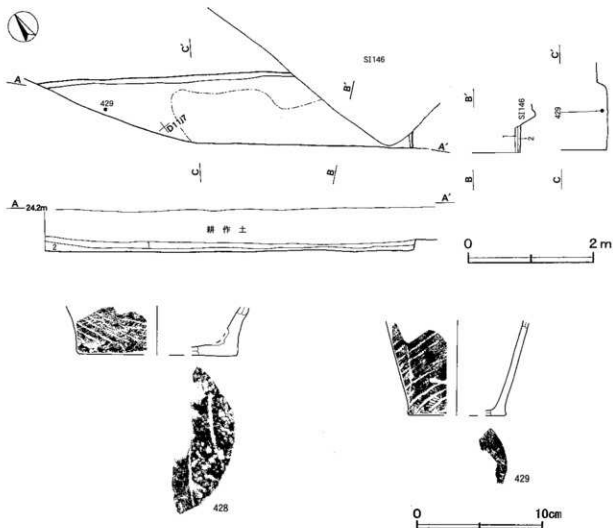
土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片33点（広口甕）、礫1点が出土している。429は北東側壁付近から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第47図 第149号住居跡・出土遺物実測図

第149号住居跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	文様及び手法の特長	出土位置	備考
CS	弥生土器	広口壺	-	(3.9)	(12.6)	長石質母・赤色 粘土	にじり橙	普通	胴部・増加北二種(増加1条)の縄文 底部木炭痕	覆土中	5%
CS	弥生土器	広口壺	-	(7.6)	(7.8)	長石質母・赤色 粘土	灰黄褐色	普通	胴部・増加北二種(増加1条)の縄文 底部布目痕	覆土下層	5% 内面炭化跡付着

第152号住居跡 (第48・49図)

位置 調査区中央部のD110区で、標高23.4mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西側は調査区外へ延びるため遺構全体を確認することができなかった。また、耕作による攪乱のため床面が露出した状態で、長軸5.30m、短軸3.60mほどが確認された。検出された炉や柱穴の位置などから判断して、N-15°-Wを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。

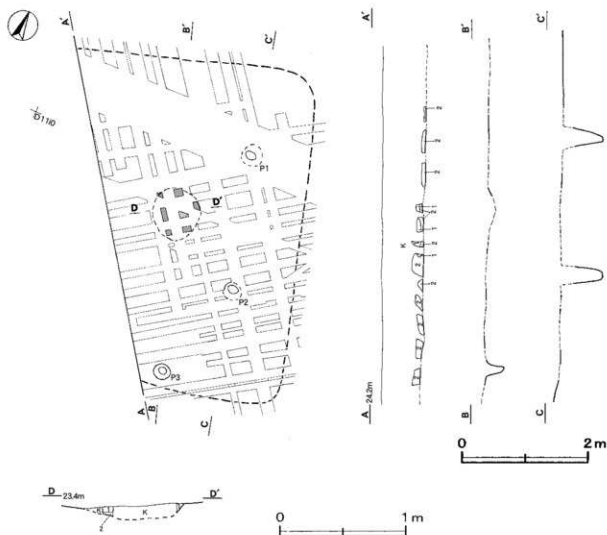
床 平坦であったと考えられる。

炉 柱穴との位置関係から、中央部に位置していたと考えられる。長径84cm、短径78cmの楕円形と推定され、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量



第48図 第152号住居跡実測図

ピット 3か所。P1～P2は深さ65～67cmで、配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

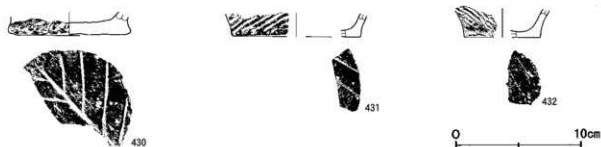
覆土 2層に分層されるが、耕作による攪乱が激しいため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片71点(広口壺)が出土している。耕作による攪乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて攪乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第49図 第152号住居跡出土遺物実測図

第152号住居跡出土遺物観察表(第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手造りの特徴	出土位置	備考
430	弥生土器	広口壺	-	(1.8)	(9.8)	長石・石英質母 におい実粒	普通	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
431	弥生土器	広口壺	-	(1.9)	(10.2)	長石・石英質母 灰黄粒	普通	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
432	弥生土器	広口壺	-	(2.2)	(6.6)	長石・石英・赤色 粘土	におい粒	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%

第153号住居跡(第50図)

位置 調査区中央部のD12h2区で、標高23.4mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱のため、床面が露出した状態で、長軸5.10m、短軸4.70mほどが確認された。検出された炉の位置や床面の広がりなどから判断して、N-79°-Wを主軸方向とする隅丸方形と推定される。

床 平坦であったと考えられ、硬化面の一部が確認された。

炉 確認された床面の広がりから、中央部に位置していたと考えられる。確認された径は40cmほどで、楕円形と推定され、床面を16cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

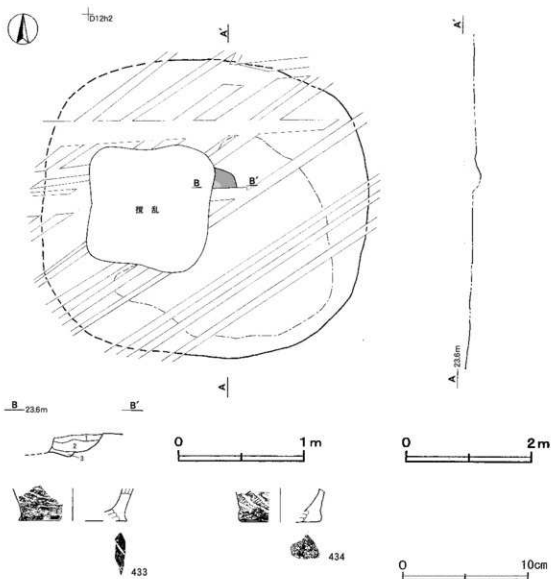
炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量
2 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

覆土 不明である。

遺物出土状況 弥生土器片43点(広口壺)が出土している。耕作による攪乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて攪乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第50図 第153号住居跡・出土遺物実測図

第153号住居跡出土遺物観察表(第50図)

番号	類別	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
03	弥生土器	広口甕	-	(2.6)	(8.4)	長石-6英-雲母 炭粉胎子	にじみ-橙	普通	胴部二附加糸二種 (附加1条) の織文 底部本葉張	覆土中	5%
04	弥生土器	広口甕	-	(2.7)	(6.4)	長石-6英-雲母	にじみ-黄	普通	胴部二附加糸二種 (附加1条) の織文 底部布目張	覆土中	5%

第154号住居跡 (第51図)

位置 調査区東部のD12g1区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 耕作による擾乱のため、床面が露出した状態で、長軸4.30m、短軸3.90mほどが確認された。検出された床面の広がりや炉の位置などから判断して、N-31°-Eを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。

床 平坦であったと考えられ、硬化面の一部が確認された。

炉 確認された床面の広がりから、北西部に位置していると考えられる。長径76cm、短径56cmが確認され、楕円形と推定される。床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。砂岩の炉石が炉床のやや東寄りから出土している。

伊土層解説

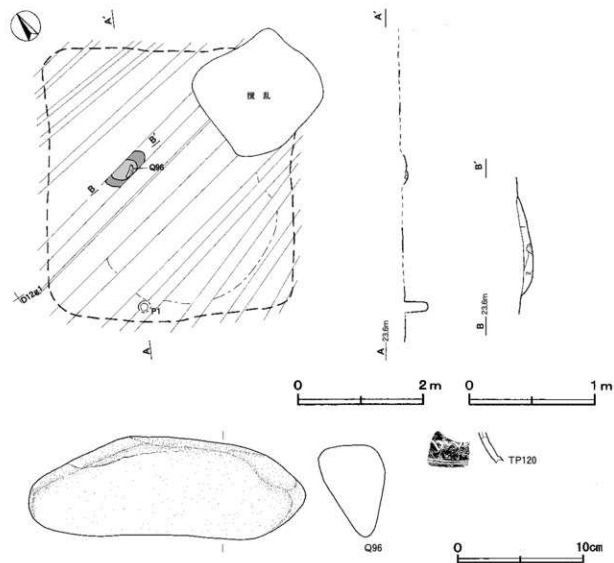
1 珉 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 2 暗 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。P1は深さ38cmで、性格は不明である。

覆土 不明である。

遺物出土状況 弥生土器片22点（広口壺）、石製品1点（炉石）の他に、攪乱によって混入したと考えられる瓦質土器1点、不明鉄製品1点も出土している。耕作による攪乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて攪乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第51図 第154号住居跡・出土遺物実測図

第154号住居跡出土遺物観察表(第51図)

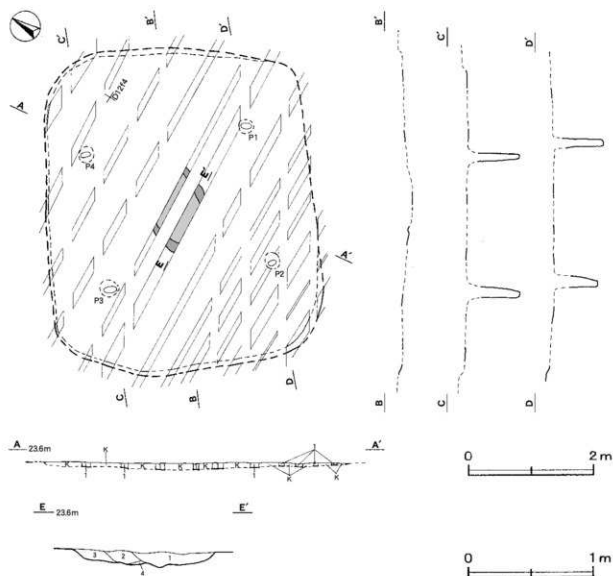
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	文様及び手法の特長	出土位置	備考
Q10	弥生土器	広口壺	-	12.81	-	長石-6英-黄径	褐色	普通	胴部:横溝状工具(6本)による波状文 胴部下位:点状文	掘土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q96	伊石	22.0	8.2	5.2	1059.1	砂岩	火を受けて赤変	伊保岡	

第155号住居跡 (第52・53図)

位置 調査区東部のD12f3区で、標高23.5mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.26m、短軸4.30mの隅丸長方形で、主軸方向はN-55°-Eである。耕作による擾乱のため、南東側の床面が露出した状態で検出されたが、遺存している壁高は7cmほどで、外傾して立ち上がっている。床 ほぼ平坦である。



第52図 第155号住居跡実測図

炉 中央部に位置している。長径140cm、短径80cmほどの楕円形と推定され、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 黒 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
 3 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
 4 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

ピット 4か所。深さは75～86cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片90点（広口壺）が出土している。耕作による攪乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて攪乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第53図 第155号住居跡出土遺物実測図

第155号住居跡出土遺物観察表(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
435	弥生土器	広口壺	-	(0.8)	(18.4)	長石・石英雲母	にじみ黄褐色	普通	胴部(附加物二種(附加1条)の縄文 底部本葉痕	覆土中	5%
436	弥生土器	広口壺	-	(0.8)	-	長石・石英雲母	にじみ黄褐色	普通	胴部(繩文) 次工具(3科)による版状文 胴部下位に下向きの溝状文と点状文	覆土中	5%

第156号住居跡 (第54～56図)

位置 調査区東部のD12g5区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.26mの隅丸長方形で、主軸方向はN-50°-Wである。壁高は20～32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。長径76cm、短径58cmの楕円形で、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 黒 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
 2 黒 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ79～84cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

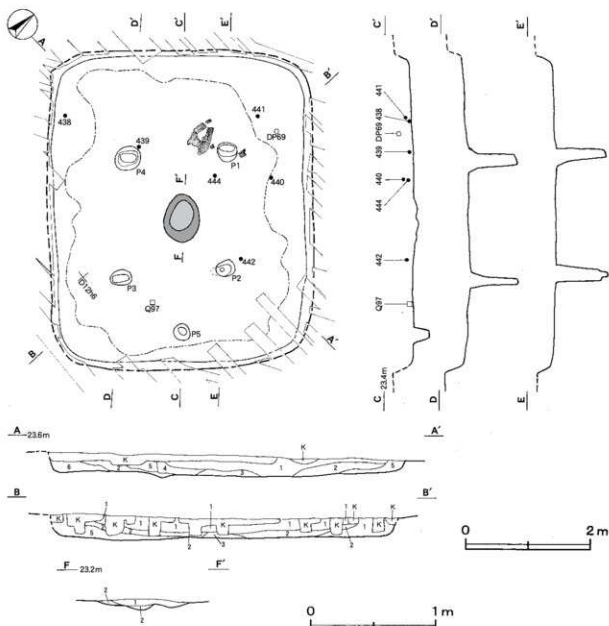
覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

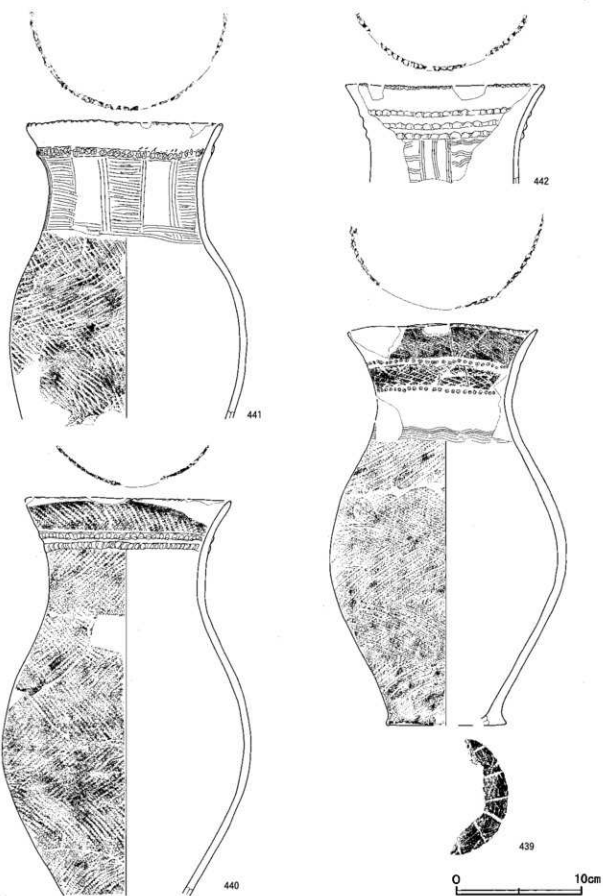
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片384点（広口壺），土製品1点（紡錘車），石製品1点（不明石製品），礫4点も出土している。また、覆土下層の床面近くから炭化材が検出されていることから、焼失住居と考えられるが、火を受けて赤変した床面や焼土を確認することはできなかった。439はP4付近、440は北東壁寄り、441は北東コーナー寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

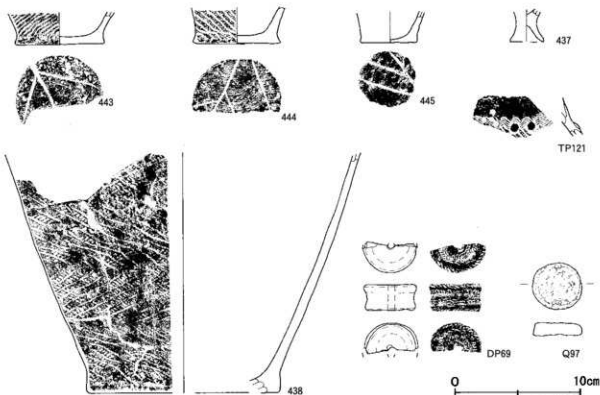
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。また、炭化材の科学分析の結果、樹種はケヤキで、板材であることが判明している。これらは住居構築材であると考えられるが、同様に炭化材樹種同定を行った第141・143号住居跡と樹種が異なっており、住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



第54図 第156号住居跡実測図



第55图 第156号住居跡出土遺物実測図(1)



第56図 第156号住居跡出土遺物実測図(2)

第156号住居跡出土遺物観察表(第55・56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手法の特徴		出土位置	備考
									文様及び手法の特徴	備考		
437	弥生土器	高杯	-	(2.6)	[2.8]	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	輪切面	覆土中	30% ミニチュア系
438	弥生土器	広口壺	-	(19.5)	[15.4]	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	輪切面	床面	20%
439	弥生土器	広口壺	14.9	32.0	[9.6]	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口唇部に唇体押圧 口辺部から胴部上位に附加条二種(附加1条)の縄文後縄文器体による刺突列2条 胴部無文帯 胴部下部に磨崖状工具(7本)による波状文並文 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部木炭灰	胴部外面残存	瓦19	80%
440	弥生土器	広口壺	[16.2]	[31.5]	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口唇部に付加条一種(附加2条)を軸文後口唇部を横ナゲ 口唇部に唇体押圧 胴部上位に半截竹管による刺突のある陸帯2条 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成	胴部外面残存	瓦19	70% 胴部・胴部外面残存者
441	弥生土器	広口壺	15.4	(23.8)	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口唇部に唇体押圧 口辺部無文 胴部上位に縄文器体による刺突のある陸帯1条 磨崖状工具(3本)による縦区画(7分割)内に波状文並文 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	胴部外面残存	瓦19	65% 胴部・胴部外面残存者
442	弥生土器	広口壺	[15.6]	(7.8)	-	長石-石英-雲母・小色砂子	にじみ焼	普通	口唇部に輪切状工具による押圧 口辺部無文 胴部上位に指割による押圧のある陸帯3条 磨崖状工具(3本)による縦区画(2分割以上)内に波状文並文	胴部外面残存	瓦19	5% 口辺部から胴部外面残存者
443	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	7.2	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部木炭灰	輪切面	覆土中	5%
444	弥生土器	広口壺	-	(3.0)	7.2	長石-石英-雲母	灰褐色	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部木炭灰	輪切面	覆土中	5%
445	弥生土器	コップ	-	(2.5)	4.5	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	胴部ナゲ 底部木炭灰	輪切面	覆土中	10%
438	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	胴部下部に磨崖状工具(5本)による波状文 対のボタシ状磨崖付 胴部に附加条一種(附加2条)の縄文	輪切面	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP9	削片	4.4	0.6	2.1	(23.5)	土長石-石英-雲母	胴面及び胴部に半截竹管による刺突	覆土中	瓦40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
QP7	不明石製品	4.1	3.7	1.2	4.5	軽石	全面にナゲからの研削痕	床面	

第158号住居跡 (第57～60図)

位置 調査区東部のD13b3区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

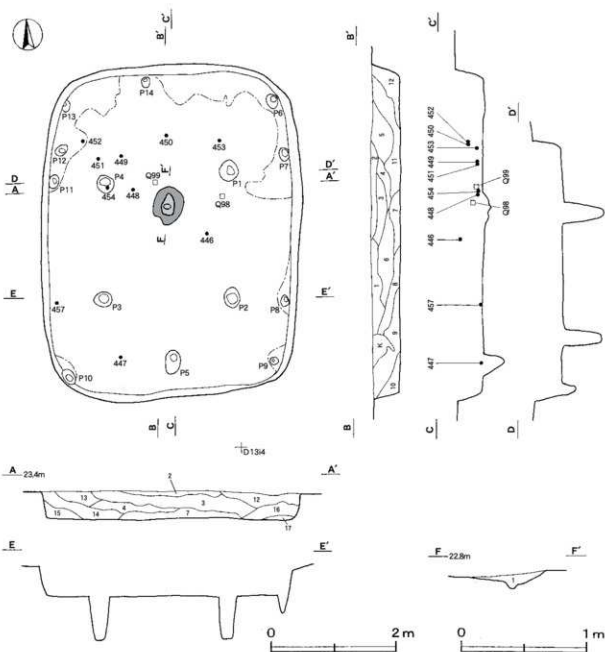
規模と形状 長軸5.35m、短軸4.18mの隅丸長方形で、主軸方向は $N-2^{\circ}-E$ である。壁高は40～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部から壁際までが広く踏み固められている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径62cm、短径47cmの楕円形で、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。また、炉石を据えていたと思われる5cmほどの窪みを確認することができた。

伊土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物微量



第57図 第158号住居跡実測図

ピット 14か所。P 1～P 4は深さ61～68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ34cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6～P 14は15～37cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから、壁柱穴と考えられる。

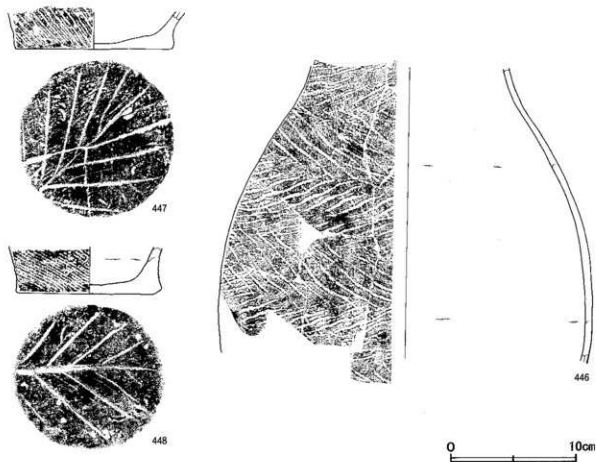
覆土 17層に分層される。第1～6層、第12・13層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積であり、それ以外は自然堆積と考えられる。

土層解説

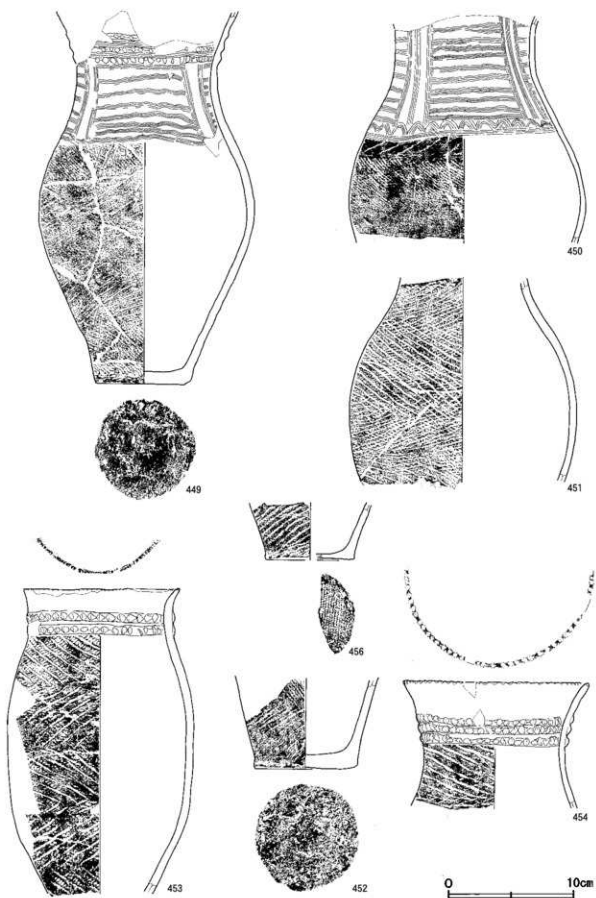
1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	10 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子少量
3 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	13 暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
5 黒褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	14 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
6 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	15 黒褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	16 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック少量	17 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
9 暗褐色	ロームブロック中量		

遺物出土状況 弥生土器片729点（広口壺26，片口壺3），石製品4点（磨石1，敲石2，砥石1）が出土している。449はP 4付近の覆土下層，450は中央部北寄りの覆土中層から斜位の状態でそれぞれ出土している。また，457は西側壁際の床面から出土している。これらは，ほとんど北寄りの覆土中・下層から破片で出土しており，住居廃絶後の早い時期に投棄されたと考えられる。

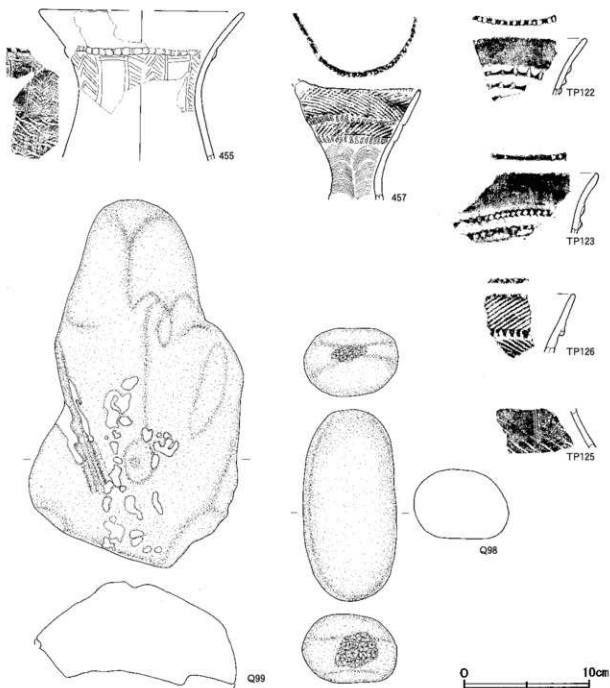
所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第58図 第158号住居跡出土遺物実測図(1)



第59图 第158号住居跡出土遺物実測図(2)



第60図 第158号住居跡出土遺物実測図(3)

第158号住居跡出土遺物観察表(第58~60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手法の特徴		出土位置	備考		
									文様	手法				
456	弥生土器	広口壺	-	(20.9)	-	長石・石英・雲母	にじみ・黄砂	普通	胴部から胴口に附加条二種(附加1条)の縄文	羽状構成	覆土上層	15%		
457	弥生土器	広口壺	-	(3.0)	12.5	長石・石英・雲母・赤色砂子	粗	普通	胴部2附加条一種(附加2条)の縄文	編織状	底部木炭灰	床面	10%	
458	弥生土器	広口壺	-	(3.9)	11.7	長石・石英・雲母	にじみ・黄砂	普通	胴部2附加条一種(附加2条)の縄文	編織状	底部木炭灰	覆土下層	10%	
459	弥生土器	広口壺	-	(29.7)	7.7	長石・石英・雲母	にじみ・粗	普通	口内面縄文	胴面上部に棒状工具による押入のある縦条3条(4分型)内2段状木炭灰	胴口2附加条一種(附加2条)の羽状構成	胴部外面横付着	約10%	
60	弥生土器	広口壺	-	(13.0)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	明黄砂	普通	棒状工具(4本)による3条一単位の間隔(4分型)内に段状文2条	胴部下位に段状文と横状文	胴部2附加条二種(附加1条)・附加条一種(附加2条)の羽状構成	覆土中間	胴部外面横付着	約10%

番号	種類	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	文様及び手造の特徴	出土位置	備考
451	弥生土器	広口壺	-	(16.1)	-	長石・石英質・赤色粘土	灰色	普通	頸部及び胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	覆土下層	10% 胴部外面に覆付着
452	弥生土器	広口壺	-	(7.2)	8.3	長石・石英質・赤色粘土	褐色	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部調整痕	覆土中層	10%
453	弥生土器	広口壺	12.9	(24.2)	-	長石・石英質・赤色粘土	灰褐色	普通	口部部に加み 口辺部無文 胴部上位に押入のある陸帯2条 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	覆土下層	30% 口辺部・胴部外面に覆付着
454	弥生土器	広口壺	14.8	(10.0)	-	長石・石英質・赤色粘土	灰褐色	普通	口部部に加み 口辺部無文 胴部上位に押入のある陸帯3条 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	覆土下層	20% 口辺部から胴部外面に覆付着
455	弥生土器	広口壺	[16.2]	(4.8)	-	長石・石英質	灰褐色	普通	口辺部無文 胴部上位に高部に押入のある陸帯1条 磨製工具(2本)による縦刻痕(2分刻痕)内側に凹文充填	覆土中	5% 胴部外面に覆付着
456	弥生土器	広口壺	-	(4.6)	[7.2]	長石・石英質	灰褐色	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部有痕	覆土中	5%
457	弥生土器	片口壺	-	(9.4)	-	長石・石英質	明褐色	普通	口部部に凹線押入 2段の複合口縁 口辺部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 下部に縄文層による刻痕 胴部に磨製工具(10-14)による下向きの遺痕	床面	10%
DP12	弥生土器	広口壺	-	(4.5)	-	長石・石英質	灰色黄褐色	普通	口部部降文層による押入 押入工具による刻痕	覆土中	5% PL26
DP13	弥生土器	広口壺	-	(4.9)	-	長石・石英質	灰色黄褐色	普通	口部部降文層による押入 ヘラ工具による刻痕のある陸帯	覆土中	5% PL28
DP15	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	-	長石・石英質	明褐色	普通	胴部下部磨製工具(4本)による縦刻痕やヘラ工具による格子状文 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	覆土中	5% PL29
DP6	弥生土器	広口壺	-	(4.7)	-	長石・石英質	褐色	普通	口部部降文層による押入 複合口縁 口辺部附加条一種(附加2条)の縄文 下部に縄文層による押入	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
QP8	礫石	15.3	7.5	5.5	1020.0	砂岩	表面部に磨痕 胴部全面に15×10の磨痕 穴を文けたいわがたに未定 裏面全面に磨痕	覆土下層	
QP9	礫石	29.2	17.1	8.4	(490.0)	砂岩	上面に高直1か所 両面に縦石と横石 磨削痕1か所	覆土下層	

第159号住居跡(第61~65区)

位置 調査区東部のD1313区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.60mの隅丸長方形で、主軸方向はN-1°-Eである。壁高は18~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が広く踏み固められている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径101cm、短径66cmの楕円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。砂岩の炬石がL字状に炉床中央部に据えられていた。

土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 13か所。P1~P4は深さ32~53cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6~P13は16~25cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから、壁柱穴と考えられる。

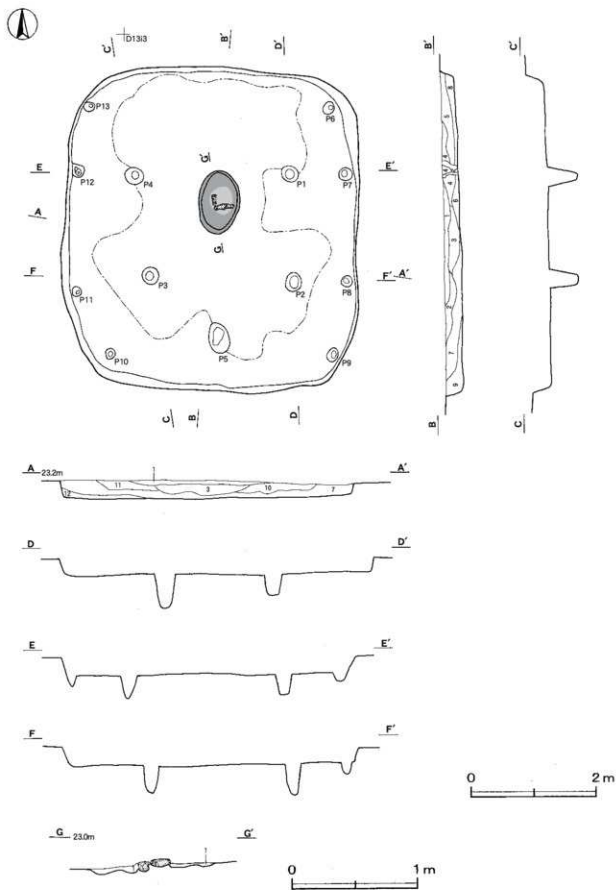
覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

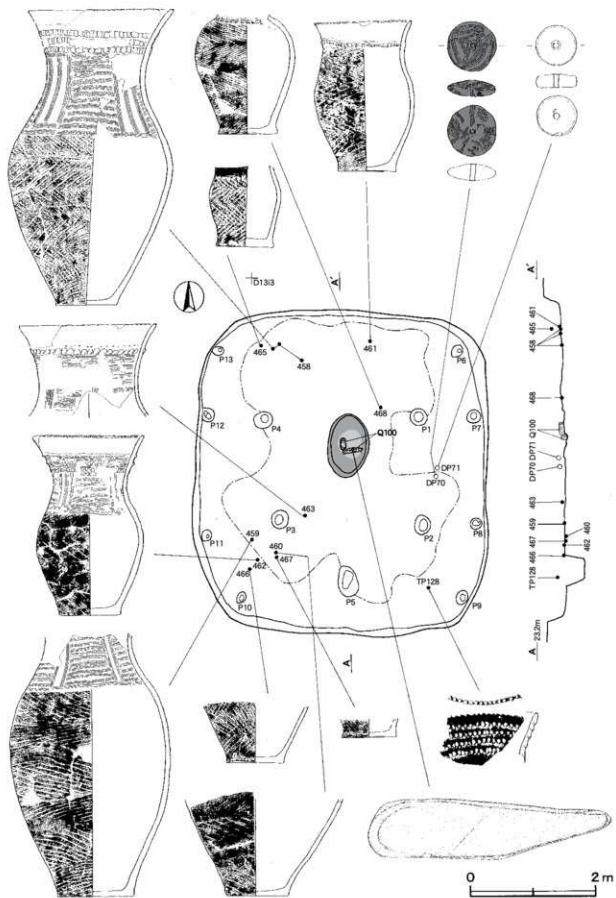
- | | | | |
|--------|------------------------|---------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 7 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 10 極暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 11 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片91点(広口壺)、土製品2点(紡錘車)、石製品4点(磨石1、炉石1)、礫2点の他に、混入した縄文土器片1点も出土している。458は北西コーナー一部の床面、465は北西コーナー覆土中層、459・462は南西コーナー一部の床面、461は北側壁寄りの床面からそれぞれ出土している。また、DP70・DP71は東壁寄りの覆土下層から出土している。

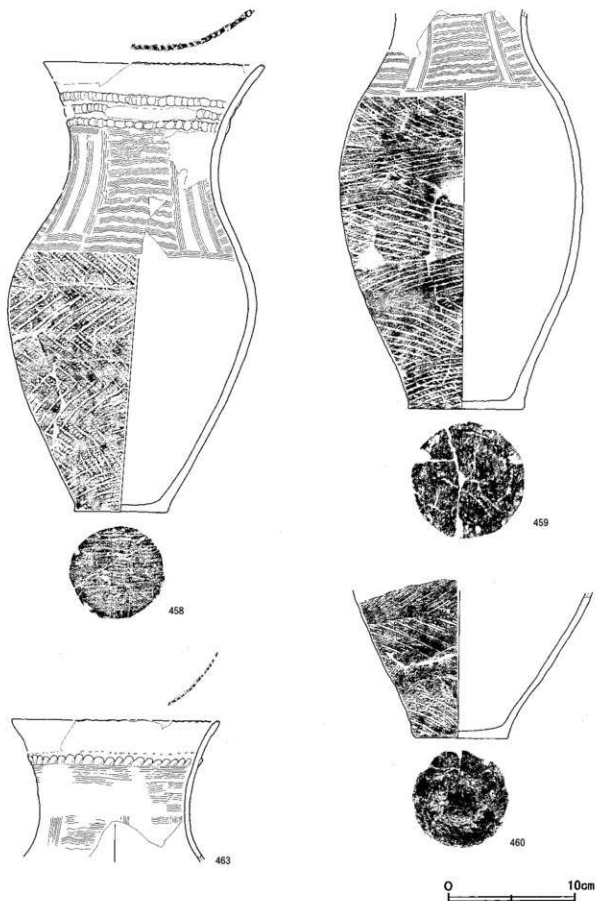
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



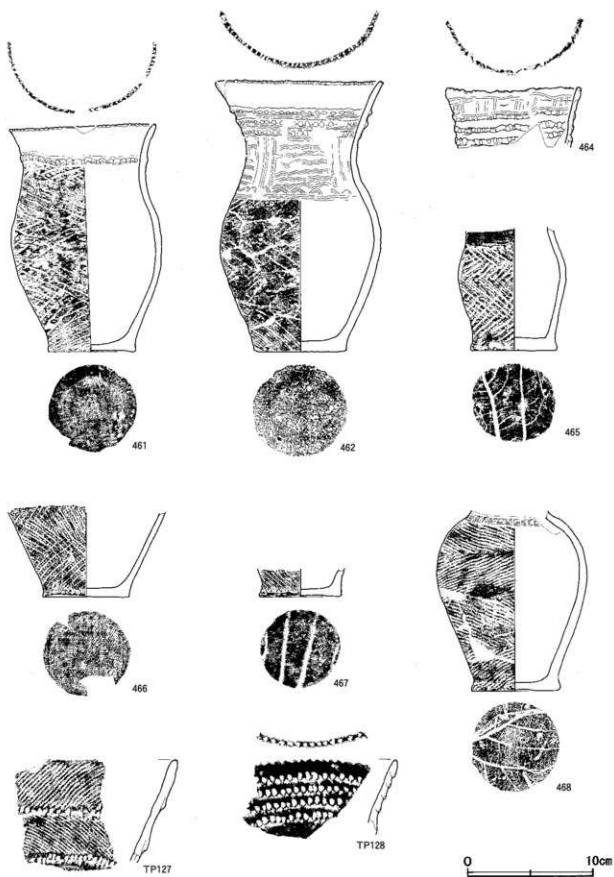
第61图 第159号住居跡实测图



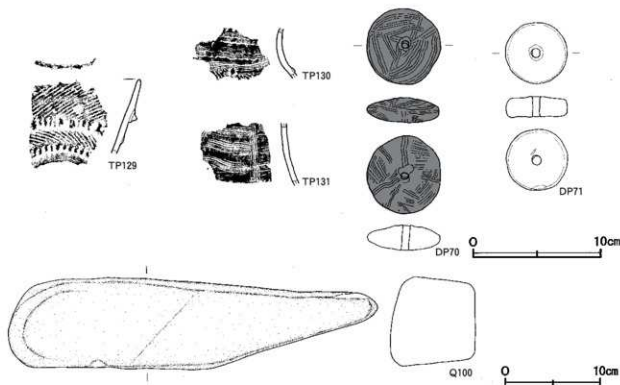
第62图 第159号住居跡遺物出土状況図



第63图 第159号住居跡出土遺物実測図(1)



第64图 第159号住居跡出土遺物実測図(2)



第65図 第159号住居跡出土遺物実測図(3)

第159号住居跡出土遺物観察表(第63~65図)

番号	種別	形種	口径	厚高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
638	弥生土器	広口壺	[17.2]	35.4	7.4	長石-石英-雲母	に54-靑	普通	口唇部に原形押圧 口唇部無文 胴部上位に斜め・甲圧による 後垂3条 磨滅状工具(4本)による3条一単位縦区画(4 分割)内に段状文2条 胴部に附加条二種(附加1条)の羽 状構成 底部有目肌	床面	90% 胴部・胴部 外面僅付着 内面灰化物付着
639	弥生土器	広口壺	-	[31.5]	9.1	長石-石英-雲母	に54-靑	普通	磨滅状工具(3本)による2条縦区画(6分割)内・面状文2条 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 羽状構成 底部有目肌	床面	80% P1.20
640	弥生土器	広口壺	-	[11.5]	7.2	長石-石英-雲母・ 赤鉄鉱子	靑	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部調整	床面	50% 内面灰化物付着
641	弥生土器	広口壺	11.4	18.0	6.8	長石-石英-雲母	に54-靑	普通	口唇部に原形押圧 口唇部無文 胴部上位に半縦管による 刺突のある後垂1条 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部有目肌	床面	30% 胴部外面僅付着 P1.20
642	弥生土器	広口壺	13.0	21.5	7.3	長石-石英-雲母	に54-靑	普通	口唇部に原形押圧 口唇部無文 胴部上位に磨滅状工具による押圧 のある後垂3条 胴部上位に磨滅状工具(3本)による3条文 磨 滅状工具による3条一単位(一部2条)の縦区画(4分割)内 に段状文2条 胴部下部に段状文と縦区画(胴部に附加条一 種(附加2条)と附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部調 整	床面	90% 胴部 外面灰化物付着 内面灰化物付着 P1.20
643	弥生土器	広口壺	[16.2]	[10.9]	-	長石-石英-雲母	浅黄緑	普通	口唇部に原形押圧 口唇部無文 胴部上位に指圧による押圧 のある後垂1条 胴部上位に磨滅状工具(4本)による段状文 胴部に磨滅状工具による縦区画後段状文2条	甕土下層	10%
644	弥生土器	広口壺	[18.4]	(4.7)	-	長石-石英-雲母	に54-靑	普通	口唇部に原形押圧 口唇部に磨滅状工具(2本)による縦文2 条 任意に縦区画(2分割) 胴部上位に磨滅状工具による押圧の ある後垂3条以上	甕土中層	5% 外面僅付着
645	弥生土器	広口壺	-	(9.7)	6.6	長石-石英-雲母・ 赤鉄鉱子	に54-靑	普通	胴部下無文 胴部 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 底部調整	甕土中層	80% P1.23
646	弥生土器	広口壺	-	(6.7)	6.8	長石-石英-雲母	靑	普通	胴部に附加条一種(附加2条)と附加条二種(附加1条)の羽 状構成 底部有目肌	床面	10% 胴部外面僅付着
647	弥生土器	広口壺	-	(2.2)	6.5	長石-石英-雲母	灰黄	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部調整	床面	5%
648	弥生土器	壺	-	[14.3]	6.6	長石-石英-雲母	明赤靑	普通	胴部下部に磨滅状工具(7本)による磨滅文 胴部に附加条 一種(附加2条)の羽状構成 底部調整	床面	50%
DP70	弥生土器	広口壺	-	(8.0)	-	長石-石英-雲母	浅黄緑	普通	縦文 上段下部に物の指印付 上下段とも下部に縄文原形 による押圧 磨滅状工具(本数不明)による下部の縦区画	甕土中層	5%
DP71	弥生土器	広口壺	-	(5.9)	-	長石-石英-雲母	浅黄緑	普通	口唇部に原形押圧 41段の縦管口縁 各段とも下部に縄文原 形による押圧	甕土下層	5% P1.38
DP72	弥生土器	広口壺	-	(5.8)	-	長石-石英-雲母	靑	普通	口唇部に原形押圧 口唇部に附加条一種(附加2条)の縄文 上 段下部に指印付 上下段とも下部に縄文原形による押圧 磨 滅状工具(本数不明)による段状文	甕土中層	5% P1.38
DP73	弥生土器	月口壺	-	(4.8)	-	長石-石英-雲母	に54-黄緑	普通	胴部下部に磨滅状工具(7本)による縦区画内面に段状文 による横走磨滅文・ボタ文・縦管口縁付	甕土中層	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
D970	鉢鉢車	6.0	0.6	2.0	64.5	土(長石・石英・雲母)	両面に磨面状工具(3本)による不規則な傷文。横面→同一工具による傷文。一方面からの穿孔	覆土下層	PL40
D971	鉢鉢車	4.8	0.7	1.6	49.8	土(長石・石英・雲母)	丁穿ナデ。一方面からの穿孔	覆土下層	PL40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q00	炉石	30.7	9.7	8.9	4220.0	砂岩	火を受けて赤変	伊東面	

表3 弥生時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係 (旧→新)		
						注柱	出入口	ピット						
88	D9e5	N-29°-W	隅丸長方形	5.53 × 4.12	14~48	平壇	4	—	1	人為 自然	弥生土器、土製品、石製品、 縄文土器、土師器	後期後半	本跡→SK167	
90	D9d0	N-2°-W	[隅丸方形]	5.00 × [4.70]	6~66	平壇	4	1	—	1	自然	弥生土器、土製品、土師器	後期後半	本跡→SI70-90
92	D9c7	N-43°-W	[円形]	[8.30] × 7.80	20~48	平壇	4	2	1	1	自然	弥生土器、土製品、石器、縄、 縄文土器、土師器	後期後半	本跡→SI80-90-96
96	D9e6	N-52°-W	隅丸長方形	6.08 × 4.89	30~44	平壇	4	1	—	1	自然	弥生土器、土製品、石器、 縄文土器、土師器	後期後半	SI92→本跡
100	D9d6	N-38°-W	隅丸長方形	5.76 × 4.92	20~36	平壇	4	1	—	1	人為 自然	弥生土器、縄、土師器	後期後半	本跡→SI99
105	D9d2	N-54°-W	隅丸長方形	4.93 × 4.70	30~44	平壇	3	—	15	2	人為	弥生土器、平段土器、縄、 土師器	後期後半	本跡→SI100- SB1-2-S8-106
112	C9j1	N-34°-W	隅丸長方形	5.23 × [3.94]	12~37	平壇	3	1	3	1	自然	弥生土器、土製品、石器、縄、 土師器	後期後半	本跡→SI110-111
114	D9i0	N-26°-W	隅丸方形	6.00 × 5.92	23~41	平壇	4	1	—	1	自然	弥生土器、土製品、石器、縄、 縄文土器、土師器	後期後半	本跡→SB1
134	D8d0	N-29°-W	[隅丸長方形]	6.62 × 2.32	8~12	平壇	2	—	—	1	人為	弥生土器、縄	後期後半	本跡→SI133- SB1-2-105
137	D9e4	N-8°-W	[隅丸長方形]	6.50 × 5.86	12~46	平壇	2	1	—	1	自然	弥生土器、縄、土師器	後期後半	本跡→SI91-101- SI93- SI94-15番目
141	D10e0	N-8°-W	[隅丸方形]	5.00 × 4.72	5	平壇	4	—	—	1	不明	弥生土器、炭化材	後期後半	本跡→SI142- SB106-107-SD7
143	D10e9	N-50°-W	[隅丸長方形]	5.60 × 4.70	20~45	平壇	3	—	—	1	人為	弥生土器、炭化材	後期後半	
148	D11f9	N-44°-W	[隅丸方形・ 隅丸長方形]	[3.70 × 3.40]	14	平壇					不明	弥生土器、縄	後期後半	本跡→SI146
149	D11j7	N-52°-W	[隅丸方形・ 隅丸長方形]	[5.90 × 1.12]	16	平壇	—	—	—	—	自然	弥生土器、縄	後期後半	本跡→SI146
152	D11i0	N-15°-W	[隅丸方形]	[5.30 × 3.60]	—	平壇	2	1	—	1	不明	弥生土器	後期後半	
153	D12e2	N-52°-W	[隅丸方形]	[5.10 × 4.70]	—	平壇	—	—	—	1	不明	弥生土器	後期後半	
154	D12e0	N-31°-E	[隅丸長方形]	[4.30 × 3.90]	—	平壇	—	1	—	1	不明	弥生土器、石製品、瓦質土器、 不明器製品	後期後半	
155	D12f3	N-55°-E	[隅丸長方形]	5.26 × [4.30]	7	平壇	4	—	—	1	不明	弥生土器	後期後半	
156	D12e5	N-50°-W	隅丸長方形	5.10 × 4.26	20~32	平壇	4	1	—	1	人為	弥生土器、土製品、石製品、 縄、炭化材	後期後半	
158	D13e3	N-2°-E	隅丸長方形	5.35 × 4.18	40~48	平壇	4	1	9	1	人為 自然	弥生土器、石製品	後期後半	
159	D13i3	N-1°-E	隅丸長方形	5.10 × 4.60	18~30	平壇	4	1	8	1	自然	弥生土器、土製品、石製品、 縄文土器	後期後半	

(2) 土坑

第174号土坑 (第66図)

位置 調査区東部のD12e2区で、標高23.4mほどの台地上に位置している。

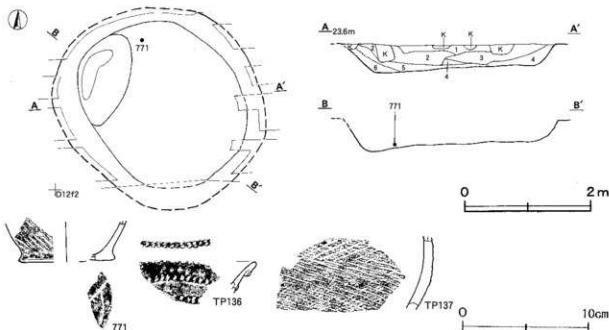
規模と形状 長径3.36m、短径3.00mの楕円形で、深さは32~50cmである。主軸方向はN-73°-Wで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、北西方向に緩やかに傾いている。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 灰褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子・埴土粒子・炭化粒子少量
2 灰褐色	ロームブロック少量、埴土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック・炭化物微量
3 灰褐色	ロームブロック少量、炭化物・埴土粒子微量	6 暗褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化物微量

遺物出土状況 弥生土器片31点（広口壺）が出土している。771は北側壁際の覆土下層から出土している。
所見 時期を特定できる遺物が少ないが，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第66図 第174号土坑・出土遺物実測図

第174号土坑出土遺物観察表(第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
771	弥生土器	広口壺	-	13.13	7.81	長石・石英・雲母・赤鉄粉	にじみ褐	普通	胴部附加条二種(附加1条)の縄文 底部本葉痕	覆土下層	5%
TP136	弥生土器	広口壺	-	12.53	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部・口辺部に厚体押付 複合口縁	覆土中	5%
TP137	弥生土器	広口壺	-	15.71	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加条二種(附加2条)の縄文 羽状突起	覆土中	5%

3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では，中位段丘から台地上にかけて古墳時代後期の住居跡 37 軒が確認された。以下，遺構と遺物について記載する。

竅穴住居跡

第72号住居跡（第67図）

位置 調査区西部のD10g3区で，標高17.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による擾乱が激しく，全体を検出することはできなかったが，N-5°-Eを主軸方向とする長軸3.00m，短軸3.46mほどの方形と推定される。壁高は50cm前後で，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 火床部や袖，煙道部の掘り込みなどは検出できなかったが，北壁の中央部付近に砂質粘土の散らばりが確認されたことから，北壁中央部に付設されていたと想定される。

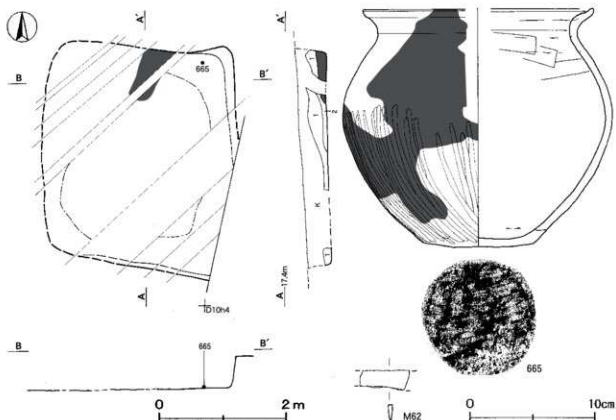
覆土 2層に分層されるが、耕作による攪乱が激しいため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片20点(坏2, 甕18)の他に、耕作による攪乱で混入した弥生土器片9点, 須恵器片12点, 灰軸陶器片1点も出土している。665は北東コーナー部の床面, M62は覆土中からそれぞれ出土している。その他は細片のため図示できない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から時期は7世紀前半と考えられる。



第67図 第72号住居跡・出土遺物実測図

第72号住居跡出土遺物観察表(第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
									口内・外面	胎体		
665	土師器	甕	18.2	18.9	9.0	長から長雲母・粒粒	にんべい	普通	口内・外面	胎体	床面	50% 外面残付者

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M62	刀子	(4.0)	1.6	0.4	(5.0)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損	覆土中	

第77号住居跡 (第68・69図)

位置 調査区西部のD 9 f9区で、標高15mほどの中段段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第98号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.60m, 短軸3.52mの方形で, 主軸方向はN-28°-Wである。壁高は4~12cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで112cmである。袖部幅は85cmほどで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は, 地山面に皿状に掘りくぼめて使用しているが, 赤変や硬化部分は確認されなかった。煙道部は, 壁外へ34cm掘り込まれ, 火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

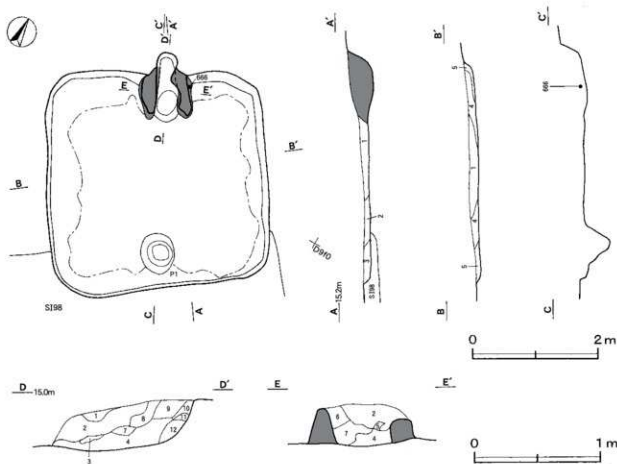
- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 濃い褐色 | 砂質粘土粒子多量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量 | 8 褐色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 3 濃い褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 9 黒褐色 | 炭化粒子中量, 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 10 褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 砂質粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子微量 |
| 6 明褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 12 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |

ピット 1か所。深さは40cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |



第68図 第77号住居跡実測図



第69図 第77号住居跡出土遺物
実測図

第77号住居跡出土遺物観察表(第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
666	土師器	杯	[14.5]	4.7	-	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	にじみ	普通	口辺内・外面横ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ	床面	6%

第79号住居跡 (第70~73図)

位置 調査区西部のD9-8区で、標高15.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第80・90号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一边が4.80mほどの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は20~66cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで116cmである。袖部幅は84cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りこぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ16cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第3層は天井部の崩落層であると考えられる。

遺土層解説

- | | | | | | |
|---|------|-------------------------------|----|-----|-------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 5 | にじみ | 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 | にじみ | 砂質粘土粒子中量、炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 | 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化物微量 |
| 3 | 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 | にじみ | 砂質粘土粒子中量、炭化物少量、焼土ブロック微量 |
| 4 | 褐色 | 砂質粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量 | 8 | 黒褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| | | | 9 | 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| | | | 10 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ48~54cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

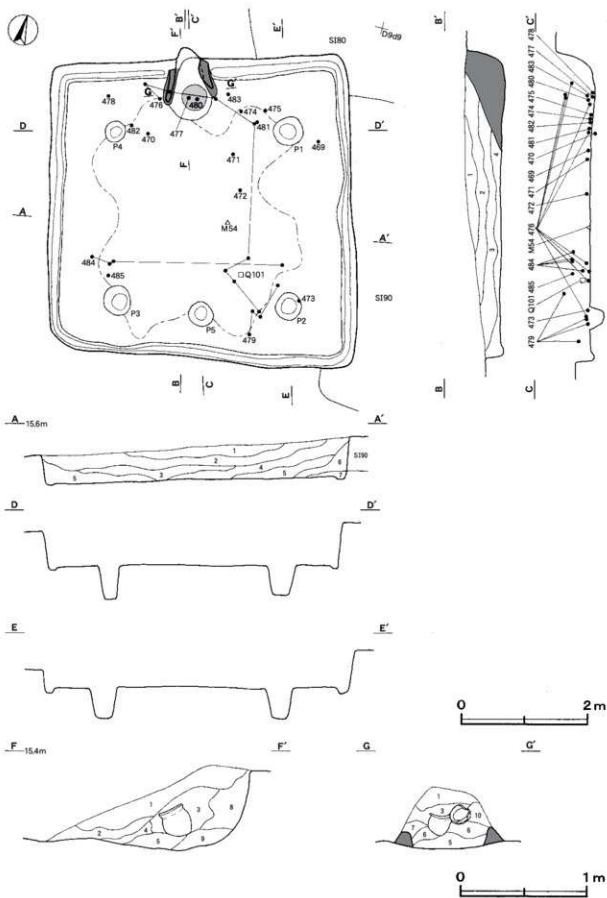
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示しているが、遺物の出土状況や接合関係などから人為堆積と考えられる。

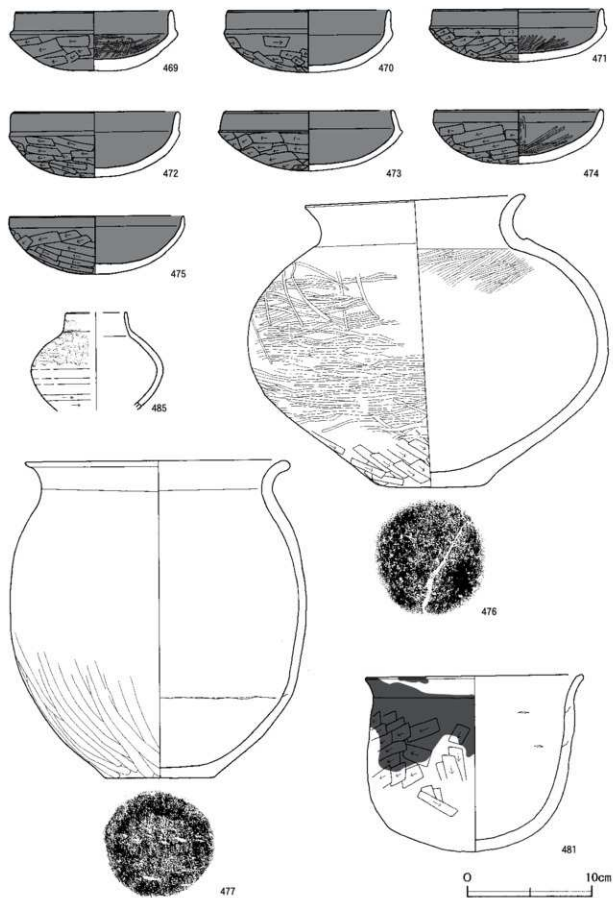
土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|--------------------|---|-----|---------------|
| 1 | 暗褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化物微量 | 5 | 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量 | 6 | 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 | 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | | | |

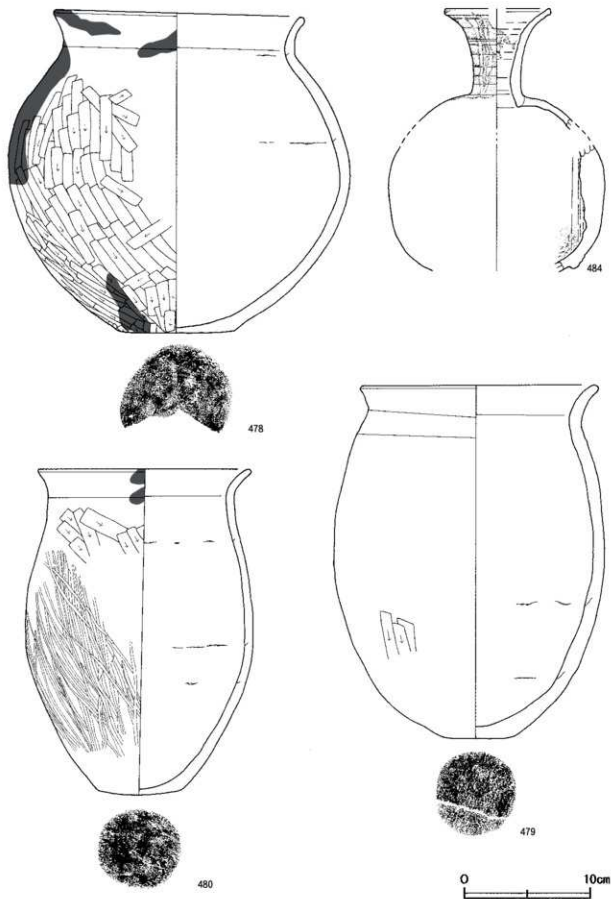
遺物出土状況 土師器片421点(坏類78, 高坏6, 壺1, 甕334, 甕2), 須臾器片5点(壺類1, 瓶類4), 土製品1点(支脚), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(刀子), 礫1点の他に、混入した弥生土器片53点, 須臾器片10点も出土している。469は東壁のやや北側, 470は北西コーナー寄り, 472は中央部, 471・474は中央部のやや竈寄りの床面からそれぞれ出土している。477・480は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。

所見 時期は、出土土器などから6世紀中葉と考えられる。

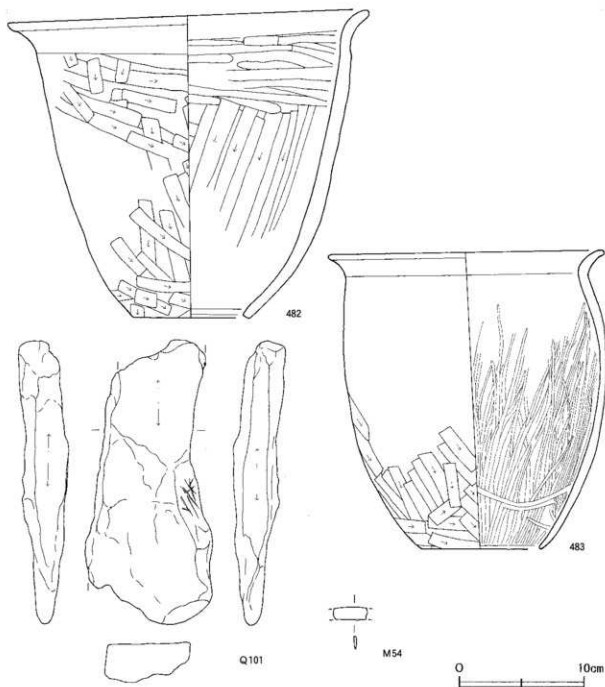




第71图 第79号住居跡出土遺物実測図(1)



第72图 第79号住居跡出土遺物実測図(2)



第73図 第79号住居跡出土遺物実測図(3)

第79号住居跡出土遺物観察表(第71~73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
469	土師器	坏	12.4	4.8	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	100% PL24
470	土師器	坏	13.0	5.0	-	長石・石英・赤色粒子	靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラナゲ	床面	95% PL24
471	土師器	坏	13.4	4.2	-	長石・雲母	靑・黄緑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	95%
472	土師器	坏	13.3	5.2	-	長石・石英・赤色粒子	暗赤靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラナゲ	床面	95%
473	土師器	坏	13.3	4.8	-	長石・石英・雲母	靑・赤靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラナゲ	床面	60% PL24
474	土師器	坏	13.2	4.3	-	長石・石英・雲母	靑・赤靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	100% PL24
475	土師器	坏	13.9	4.6	-	長石・石英・靑	靑・赤靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラナゲ	床面	60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特 徴	出土位置	備 考
406	土師器	甕	17.2	23.3	8.6	長石-石英-燧	にじみ橙	良好	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 体部上段の 下半部へラ削り 一部の底へラ削り	覆土上層 ～下層	90% PL30
477	土師器	甕	20.6	25.3	8.6	長石-石英-燧	明赤橙	良好	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラナデ 内面へラナデ 輪切痕	甕内	100% PL31
478	土師器	甕	19.8	25.8	9.0	長石-石英-赤色 粘土燧	靑	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪切痕	床面	90% 口唇部・胴 部・外面僅行着
479	土師器	甕	18.3	28.1	6.4	長石-石英-燧	にじみ橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内・外 面僅着 輪切痕	覆土上層 ～下層	85%
480	土師器	甕	16.8	26.0	6.7	長石-石英-燧	靑	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪切痕	甕内	95% 口辺部外面 僅行着 PL31
481	土師器	小形甕	17.1	14.0	-	長石-石英-燧 赤色粘土燧	にじみ橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪切痕	床面	100% 口辺部外面 僅行着 PL33
482	土師器	甕	28.6	24.6	9.2	長石-石英-燧 赤色粘土燧	にじみ黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面へラ削り 内面ナデ 輪切痕	床面	95% PL32
483	土師器	甕	21.7	23.8	9.7	長石-石英-燧	にじみ橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	95%
484	須恵器	樽瓶	[8.2]	[20.9]	-	長石-燧	灰オリーブ	良好	口口成形 口辺部外面に沈着 内・外面腐食による自然 磨蝕	覆土上層 ～土層	15%
485	須恵器	短頸甕	[4.8]	[7.8]	-	砂粒	明腐灰	良好	体部下層斜めへラ削り 口辺部・体部上段 腐食による 自然磨蝕	覆土上層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q101	砾石	[22.6]	10.1	3.1	(900.5)	粗河原石	砥面3面		覆土中層

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M54	刀子	[2.2]	0.7	0.2	(0.9)	鉄	刀身の一部 切先・茎欠損	床面	

第80号住居跡 (第74～77区)

位置 調査区西部のD9c9区で、標高15.7mほどの中段段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第90・92号住居跡を掘り込み、第79号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.70m、短軸7.40mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は8～58cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、甕部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで115cmである。袖部幅は86cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ36cm掘り込まれ、火床面から急激に立ち上がっている。

甕土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|---------|------------------------------|
| 1 黒 褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子・ローム粒子微量 | 9 暗褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | 砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 10 黒 褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 黄 褐色 | 砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 4 黒 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 13 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 6 暗 褐色 | 炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 | 14 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 7 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |
| 8 黒 褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 5か所。P1～P4は深さ56～70cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ37cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 14層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|---------|----------------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 黒 褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 10 黒 褐色 | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒 褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 11 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒 褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 12 黒 褐色 | 炭化物・ローム粒子微量 |
| 6 黒 褐色 | ローム粒子微量 | 13 黒 褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 7 黒 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 14 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |

貯蔵穴 南壁中央部の壁際に位置し、長軸81cm、短軸74cmの長方形で、深さは22cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

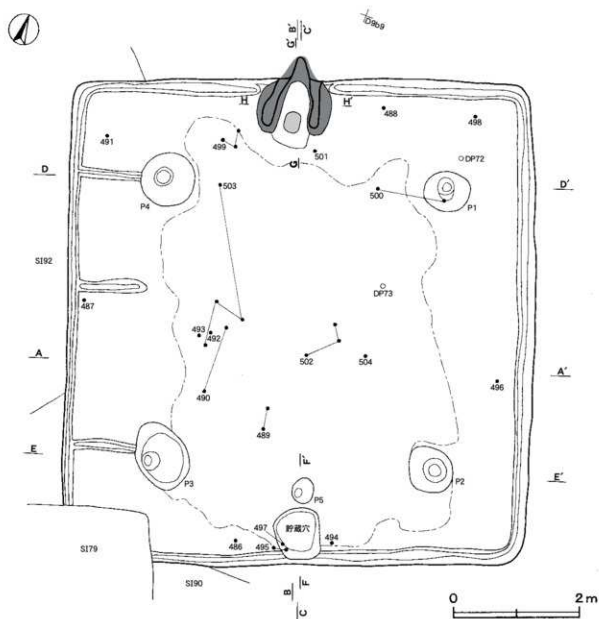
1 黒色 炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

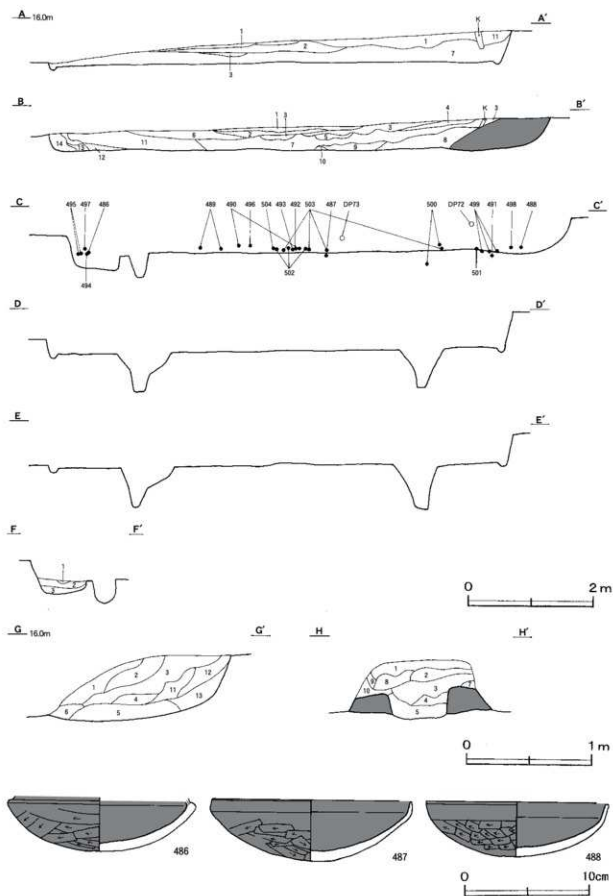
3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1352点(坏457、高坏31、碗12、鉢3、壺1、甕847、瓶1)、ミニチュア土器1点、土製品7点(球状土錘)、礫8点の他に、流れ込んだ縄文土器片5点、弥生土器片256点、須恵器片8点も出土している。486・494・495は南壁際から、487は西壁際から488は北壁際から、499・501は竈付近の床面からそれぞれ出土している。

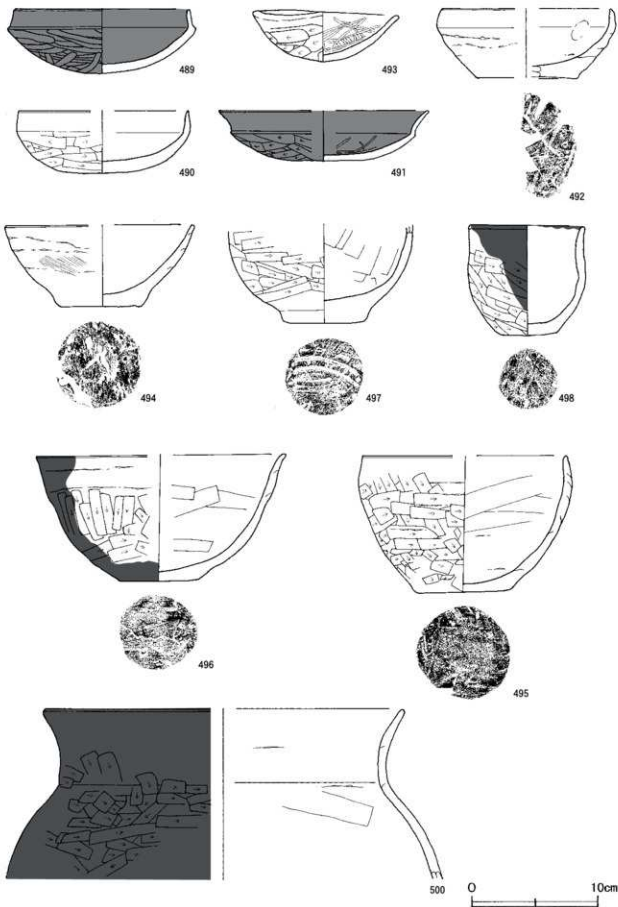
所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



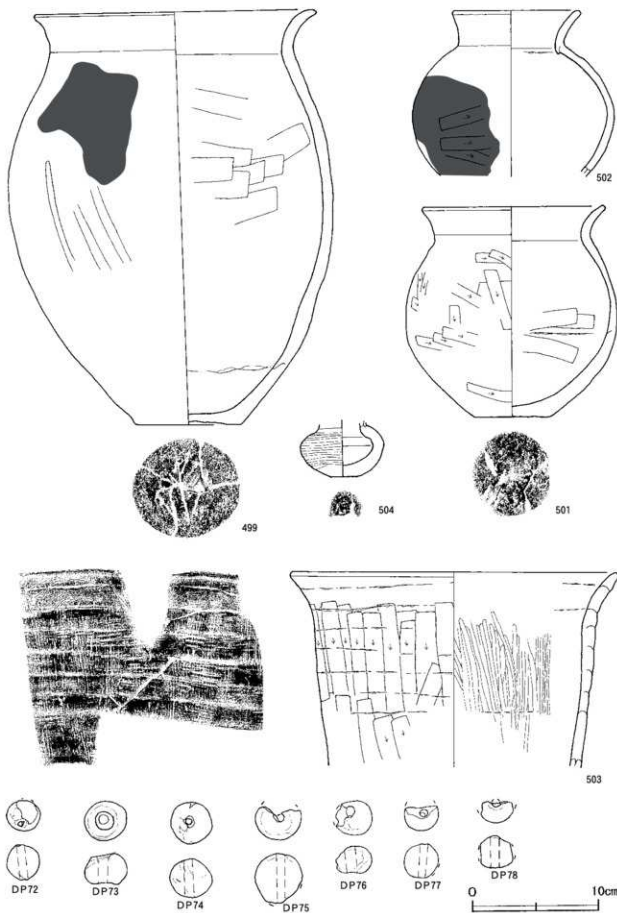
第74図 第80号住居跡実測図



第75图 第80号住居跡・出土遺物実測図



第76图 第80号住居跡出土遺物実測図(1)



第77图 第80号住居跡出土物実測図(2)

第80号住居跡出土遺物観察表(第75~77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特 徴	出土位置	備 考
886	土師器	杯	—	(4.2)	—	長石・石英雲母	にぶい	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	90%
887	土師器	杯	15.9	4.8	—	長石・石英雲母	にぶい	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	95% P.25
888	土師器	杯	14.6	4.3	—	長石・石英赤色 粘土	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	90% P.24
889	土師器	杯	13.7	5.2	—	長石・石英雲母	灰黄	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	80% P.24
890	土師器	杯	[13.3]	4.9	—	長石・石英赤色 粘土	にぶい	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土下層	70%
891	土師器	杯	[16.4]	4.0	—	長石・石英	灰黄	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	80%
893	土師器	杯	11.4	4.0	—	長石・石英雲母・ 赤色粘土	にぶい	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	63% P.24
892	土師器	鉢	[13.2]	5.5	[8.0]	長石・石英赤色 粘土	にぶい	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面側面によるナデ 内面ナデ 加須焼 龜甲焼 底面本裏割	覆土下層	80%
894	土師器	鉢	[14.8]	6.5	6.2	長石・石英赤色 粘土	橙	普通	体部内・外面ナデ 輪縁焼 体部外面へ削り	床面	95% P.33
895	土師器	鉢	[15.9]	11.0	7.5	長石・石英雲母・ 赤色粘土	にぶい	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ 底面へラ削り 輪縁焼	床面	70% P.27
896	土師器	鉢	[19.6]	10.0	6.6	長石・石英赤色 粘土	にぶい	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ 底面へラ削り 輪縁焼	覆土下層	60% P.27
897	土師器	鉢	—	(7.8)	6.3	長石・石英雲母・ 赤色粘土	にぶい	普通	体部外面へラ削り 内面へラナデ 底面へラ削り	覆土下層	50%
899	土師器	甕	21.6	32.7	8.5	長石・石英	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ磨き 内面へラナデ 輪縁焼	床面	95% P.31
900	土師器	甕	[28.2]	(13.5)	—	長石・石英雲母・ 赤色粘土	浅黄	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪縁焼	覆土下層 ～P.19	20% 外面付着
908	土師器	小形甕	8.9	8.9	4.9	長石・石英雲母・ 赤色粘土	にぶい	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 底面 へラ削り	床面	100% 口辺部内・ 外面付着 P.33
901	土師器	小形甕	14.2	16.6	6.0	長石・石英雲母	にぶい	赤焼	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪縁焼	床面	90% P.28
902	土師器	小形甕	9.8	(13.1)	—	長石・石英雲母	にぶい	赤焼	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪縁焼	覆土下層	80% 外面付着
903	土師器	甕	25.6	(15.3)	—	長石・石英雲母・ 赤色粘土	にぶい	赤焼	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き 輪縁焼	覆土下層	20%
904	土師器	ミニチュア	—	(4.4)	2.2	長石・石英雲母	赤焼	普通	体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナデ	覆土下層	60% P.33

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
B72	球状土師	2.6	0.6	(2.9)	(15.1)	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土上層	
B73	球状土師	3.4	1.5	2.4	22.9	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
B71	球状土師	3.4	0.6~0.8	3.1	28.5	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
B75	球状土師	3.7	0.6	(4.0)	(26.3)	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
B76	球状土師	(2.9)	0.9	2.1	(13.8)	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
B77	球状土師	2.8	[0.6]	(2.7)	(11.8)	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
B78	球状土師	(2.4)	[0.7]	2.5	(8.9)	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

第 81 号住居跡 (第78~80図)

位置 調査区西部のC 9 J8区で、標高16.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第84号住居跡を掘り込んでいる。

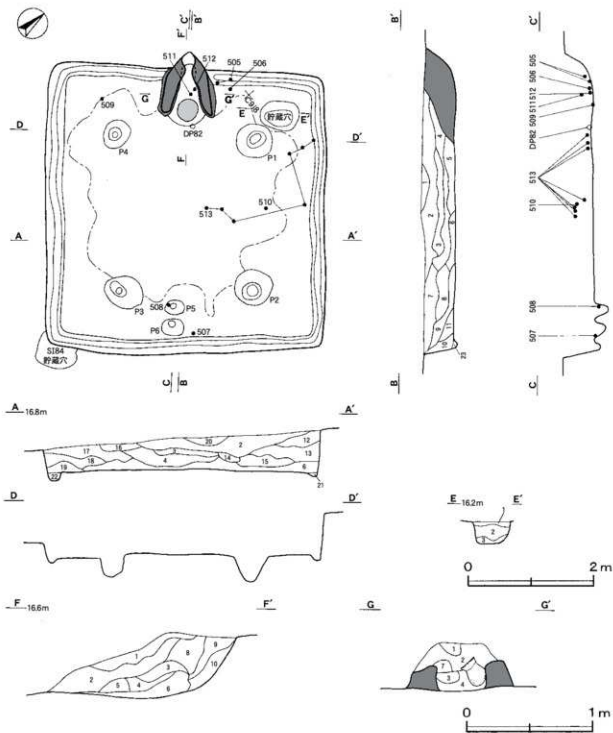
規模と形状 長軸4.55m、短軸4.42mほどの方で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は24~66cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで118cmである。袖部幅は86cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りこぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ26cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|---------|------------------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量 | 6 比色褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 比色褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 10 比色褐色 | 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |



第78図 第81号住居跡実測図

ピット 6か所。P1～P4は深さ32～48cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ18cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ21cmで配置から出入り口施設に伴うピットと考えられるが、P5との新旧関係は不明である。

覆土 23層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	14 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	15 極暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
4 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	18 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	19 暗褐色	ローム粒子・炭化物微量
8 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	20 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
9 褐色	ロームブロック少量	21 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
10 黒褐色	ロームブロック微量	22 暗褐色	ローム粒子微量
11 暗褐色	ロームブロック微量	23 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
12 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量		

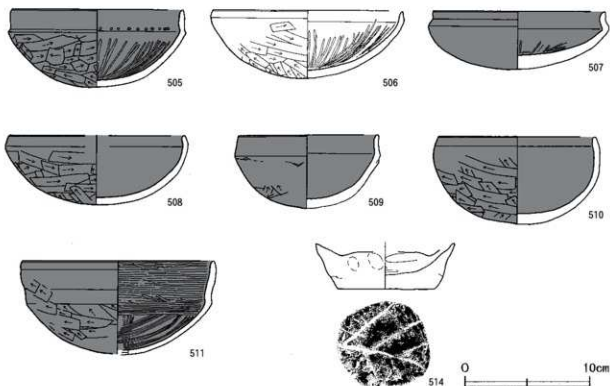
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径61cm、短径46cmの楕円形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

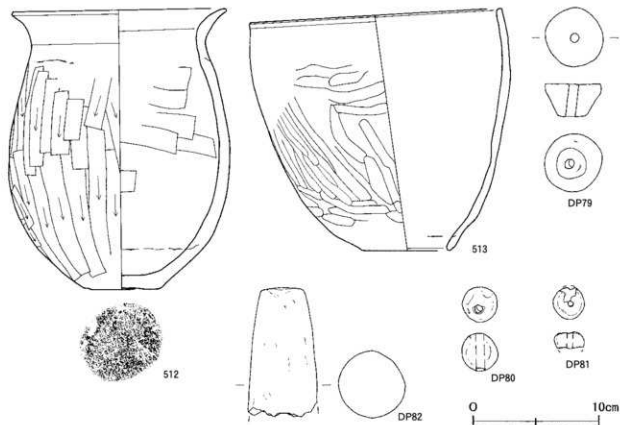
1 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
2 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片664点（坏164、高坏1、甕496、瓶3）、手捏土器1点、土製品4点（球状土錘、管状土錘、紡錘車、支脚）の他に、混入した弥生土器片81点、須恵器片7点も出土している。505・506は竈右側、507が南東壁際、509は西側コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。508はP5内、511・512は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高いと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第79図 第81号住居跡出土遺物実測図(1)



第80図 第81号住居跡出土遺物実測図(2)

第81号住居跡出土遺物観察表(第79-80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
505	土師器	坏	13.6	6.1	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にじみ・粗	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲへラ磨き	床面	100%
506	土師器	坏	15.1	5.4	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	浅黄緑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲへラ磨き	床面	95% PL25
507	土師器	坏	13.7	4.6	—	長石・石英・赤色粘土・糠	にじみ・赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部内面斜線調整不明 内面へラ磨き	床面	90% PL24
508	土師器	坏	[14.0]	5.5	—	長石・石英・雲母	にじみ・赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	P5内	60%
509	土師器	坏	11.0	5.9	—	長石・石英・雲母・糠	にじみ・粗	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ 輪轆痕	床面	90% PL24
510	土師器	碗	12.5	6.9	—	長石・石英・赤色粘土	にじみ・黄緑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	覆土中層	95% PL29
511	土師器	碗	15.2	7.4	—	長石・石英・雲母	にじみ・赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲへラ磨き	覆土中層	90% PL29
512	土師器	壺	16.7	22.2	6.1	長石・石英・雲母	にじみ・粗	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲナゲ	壺内	100% PL31
513	土師器	壺	19.8	19.1	6.9	長石・石英・雲母・赤石・赤色粘土	粗	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナゲ 輪轆痕	覆土中層へ下層	60%
514	土師器	手取土器	[11.0]	3.7	7.6	—	浅黄緑	普通	体部内・外面指節こなるナゲ 輪轆痕 本表皿	P1覆土中	80%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP79	土師器	4.6	6.7	2.5	56.1	土(長石・石英・雲母)	丁部ナゲ 片面穿孔 断面L字形	覆土中	PL40
DP80	土師器	2.8	6.7	3.0	21.9	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP81	土師器	2.5	6.4	(1.2)	(7.5)	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP82	土師器	(10.2)	3.4 ~ (5.5)	(292.0)	土(長石・石英・雲母)	全面丁部ナゲ	床面	

第84号住居跡 (第81・82図)

位置 調査区西部のD9a8区で、標高16.0mほどの中段丘上の南西緩斜面に位置している。

重複関係 第81号住居に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平が激しく、東西長3.10mほど、南北長2.20mほどが確認された。主軸方向は、竈の位置や貯蔵穴の配置などからN-62°-Eと考えられる。

床 確認された床面はほぼ平坦で、竈前付近が踏み固められている。

竈 遺存している床面から判断して、東壁中央部に付設されていると考えられる。袖部幅は77cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子 2 極暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物・砂質粘土粒子微量

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量 3 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

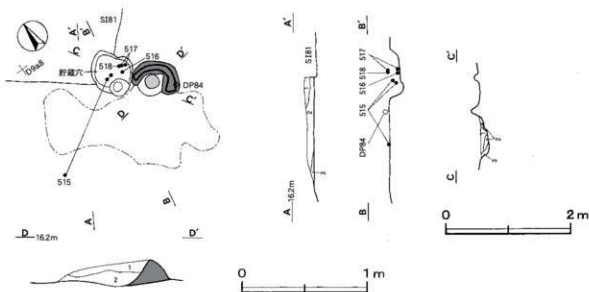
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径68cm、短径60cmの楕円形で、深さは12cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土中に焼土粒子や焼土粒子ブロック、白灰などが混じっている。

貯蔵穴土層解説

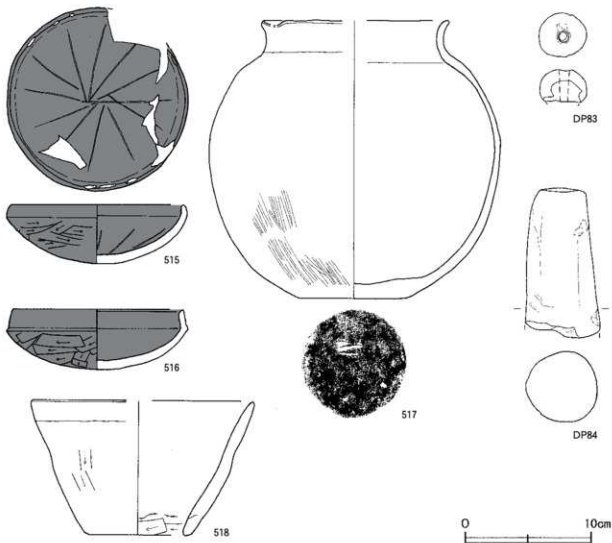
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 3 極暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物・砂質粘土粒子・灰微量
- 2 極暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片43点(坏9, 甕34), 土製品2点(球状土錘, 支脚), 薬2点の他に、流れ込んだ弥生土器片81点も出土している。517・518は貯蔵穴内から出土しており, 518は517の内部から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第81図 第84号住居跡実測図



第82図 第84号住居跡出土遺物実測図
第84号住居跡出土遺物観察表(第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
515	土器器	鉢	13.6	4.7	-	長石・石英・雲母 赤色胎土	明赤褐色	普通	口内・外面横ナデ 体部外面へラ削り横丁家ナデ 内面放射状の削痕	床面～ 貯蔵穴内	90% PL25
516	土器器	鉢	13.3	4.8	-	長石・石英・雲母 赤色胎土	淡黄褐色	普通	口内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	貯蔵穴内	90% PL24
517	土器器	壺	[14.4]	21.9	8.2	長石・石英・雲母 赤色胎土	濃い黄褐色	普通	口内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	貯蔵穴内	60%
518	土器器	瓶	[17.3]	10.6	8.4	長石・石英・雲母 赤色胎土	濃い黄褐色	普通	口内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 単孔口へラ削り	貯蔵穴内	70%

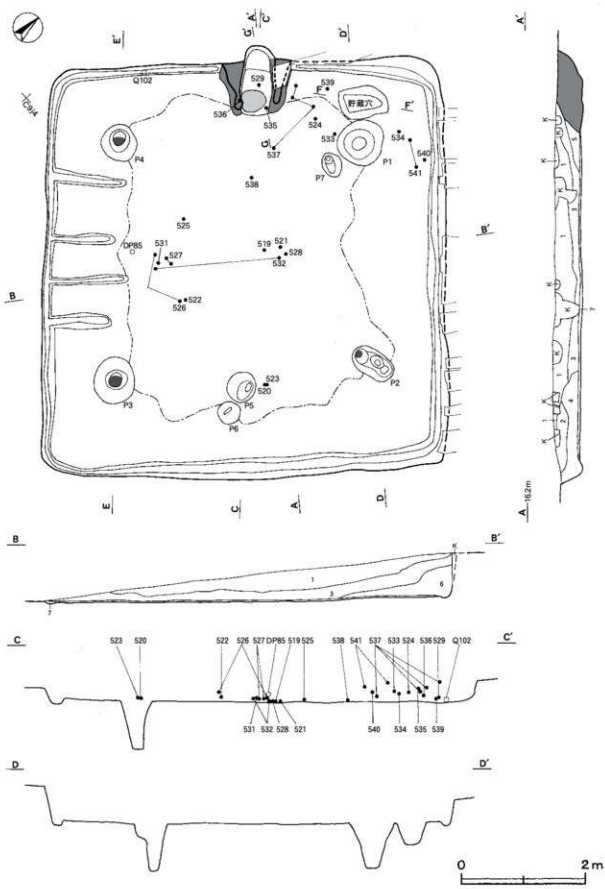
番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP83	球状土埴	3.8	0.6~0.8	(2.6)	(31.4)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方方向の穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP84	支脚	(11.8)	3.2~(5.9)	(32.1)	粘土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ	覆土下層	

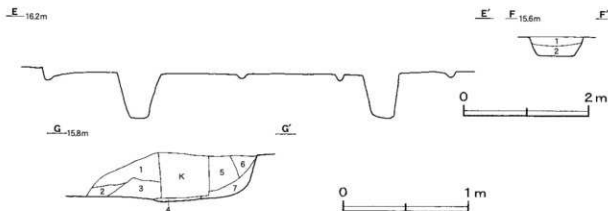
第86号住居跡(第83~87図)

位置 調査区西部のC915区で、標高15.8mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸6.68m、短軸4.66mほどの方形で、主軸方向はN-46°-Wである。壁高は24~66cmで、外傾して立ち上がっている。



第83图 第86号住居跡実測図(1)



第84図 第86号住居跡実測図(2)

床 掘り方を調査した結果、床面は2面あることが確認された。廃絶時の床面(第2次面)は、ほぼ平埠で、中央部が踏み固められており、第1次面上に覆土土層第7層を客土して構築している。第1次面も中央部が踏み固められていた。壁溝が竈部分を除いて周回しており、第2次面の南西壁側には間仕切り溝が4条確認された。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで112cmである。耕作による攪乱を受けており、袖部幅は112cmほどと考えられ、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ24cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------|--------|----------------------|
| 1 にごり褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化物・砂質粘土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 6 褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 4 にごり褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量 | | |

ピット 7か所。P1～P4は深さ70～74cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ78cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられ、P1以外は柱痕跡が確認できた。また、P2は拡張されたような状態で柱穴が確認されたことから柱を差し替えた可能性があるが明確ではない。P6・P7の性格は不明である。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。第7層は1次面の床材である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | | |

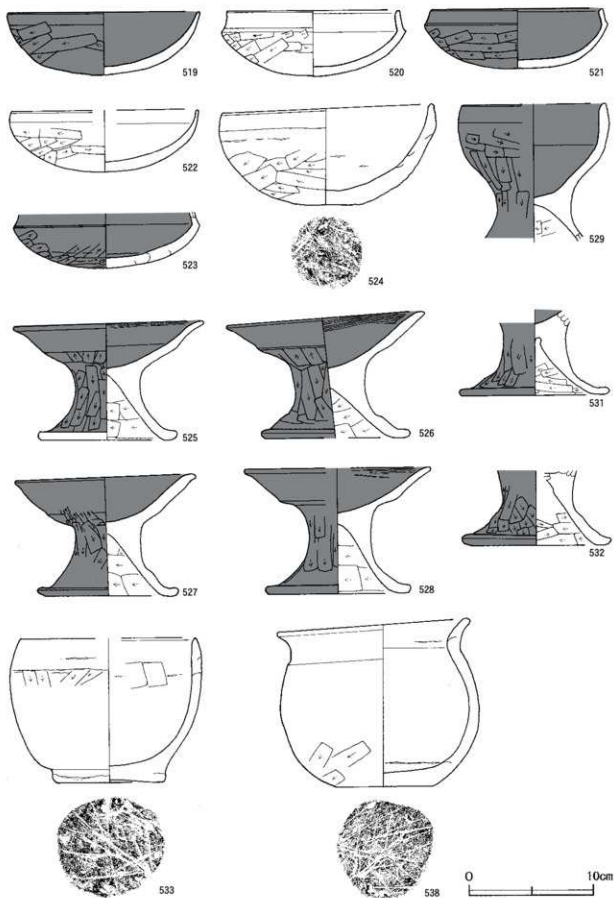
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径76cm、短径50cmほどの不整形円形で、深さは35cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

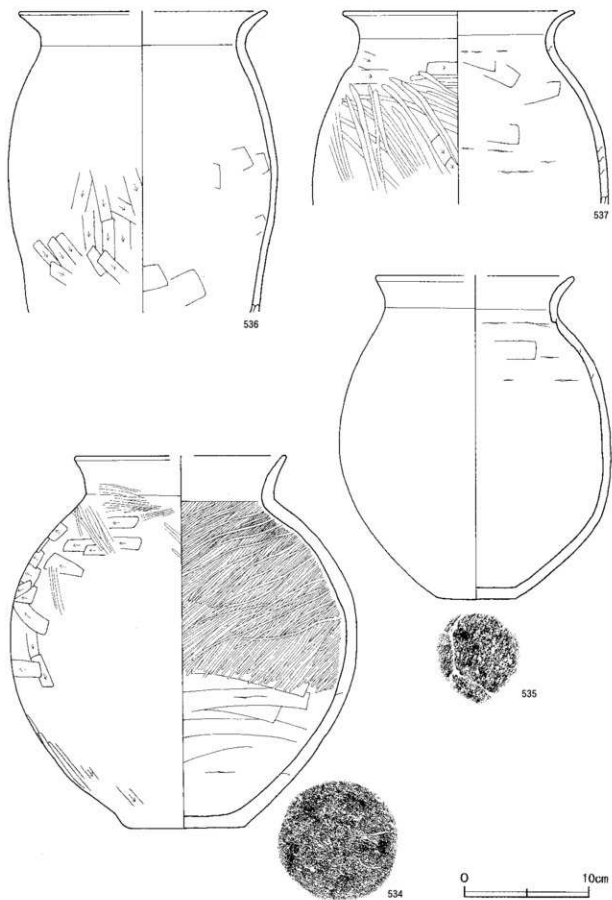
- | | | | |
|-------|---------------------|------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
|-------|---------------------|------|----------------|

遺物出土状況 土師器片1701点(坏246、高坏47、碗1、鉢1、甕1403、甌3)、土製品4点(球状土錘、管状土錘、支脚2)、石器1点(砥石)、竈4点の他に、流れ込んだ弥生土器片18点、須恵器片5点も出土している。高坏は、529が竈内から出土している他はすべて中央部の床面や床面に近い覆土下層から出土している。また、534は北コーナー付近の覆土下層から、539は竈右側の床面から逆位でそれぞれ出土している。535・536は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高いと考えられる。

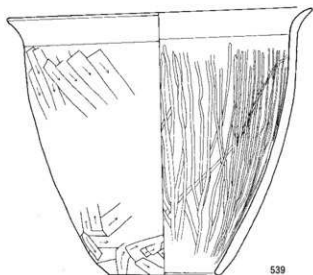
所見 床は2面あり、住居構築時の床の上に新たに貼床をしていることが確認できた。時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第85图 第86号住居跡出土遺物実測図(1)



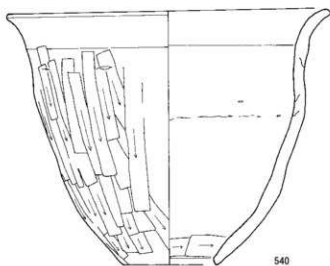
第86图 第86号住居跡出土遺物実測図(2)



539



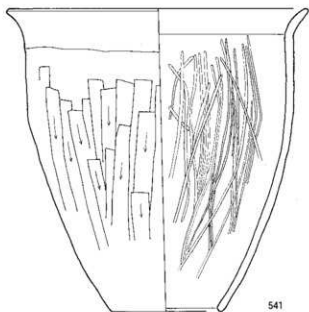
DP85



540



DP86



541



Q102



第87图 第86号住居跡出土遺物実測図(3)

第86号住居跡出土遺物観察表(第85～87図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
S19	土銅器	杯	15.2	5.0	—	長石-石英-雲母-赤色胎子	にじみ-靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後丁寧ナゲ	床面	95% P.25
S20	土銅器	杯	13.6	5.2	—	長石-石英-雲母	にじみ-靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後ナゲ	内面ナゲ	床面 70% P.25
S21	土銅器	杯	13.6	4.7	—	長石-石英-雲母	灰靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後ナゲ	内面ナゲ	床面 75% P.23
S22	土銅器	杯	[14.8]	4.9	—	長石-石英-雲母	にじみ-靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後ナゲ	内面ナゲ	履土下層 70% P.25
S23	土銅器	杯	— (4.3)	—	—	長石-石英-雲母	にじみ-黄靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後ナゲ	内面ナゲ	床面 75%
S24	土銅器	碗	16.8	8.1	5.5	長石-石英-雲母-赤色胎子-靑	灰靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付 内面ナゲ	輪襷肌	履土下層 95% P.29
S25	土銅器	高杯	15.1	9.4	11.2	長石-石英-雲母	にじみ-黄靑	普通	杯部外面 胴部内・外面へうけ付後ナゲ	杯部内面へうけ付	床面 90% P.30
S26	土銅器	高杯	15.6	10.0	[12.0]	長石-石英-雲母-赤色胎子	にじみ-黄靑	普通	杯部外面 胴部内・外面へうけ付後ナゲ	杯部内面へうけ付	履土下層 60% P.30
S27	土銅器	高杯	14.0	9.7	10.2	長石-石英-雲母-赤色胎子	にじみ-黄靑	普通	杯部外面 胴部内・外面へうけ付	杯部内面ナゲ	履土下層 60% P.30
S28	土銅器	高杯	[14.8]	10.0	11.7	長石-石英-雲母	にじみ-黄靑	普通	杯部外面 胴部内・外面へうけ付	杯部内面へうけ付後ナゲ	床面 60% P.30
S29	土銅器	高杯	[11.4]	(11.0)	—	長石-石英-雲母-赤色胎子	にじみ-靑	普通	杯部外面 胴部内・外面へうけ付	杯部内面ナゲ	履土下層 60%
S31	土銅器	高杯	— (6.7)	12.1	—	長石-石英-雲母	にじみ-黄靑	普通	胴部内・外面へうけ付後ナゲ	—	履土下層 40%
S32	土銅器	高杯	— (5.9)	12.0	—	長石-石英-雲母	にじみ-黄靑	普通	胴部内・外面へうけ付後ナゲ	—	履土下層 40%
S33	土銅器	鉢	[14.0]	11.5	9.1	長石-石英-雲母-赤色胎子	にじみ-靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後ナゲ	内面へうけ付 輪襷肌 底面木葉肌	履土下層 70% P.27
S34	土銅器	壺	[16.5]	29.7	9.8	長石-石英	にじみ-靑	良好	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後ナゲ	西面へうけ付 輪襷肌	履土下層 95% P.31
S35	土銅器	壺	[15.6]	25.9	6.4	長石-石英-雲母-赤色胎子	にじみ-黄靑	普通	体部外面摩滅調整不明	内面へうけ付 輪襷肌	甕内 70%
S36	土銅器	壺	[19.7]	(24.0)	—	長石-石英-雲母	靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付	内面へうけ付	甕内 40%
S37	土銅器	壺	18.1	(15.5)	—	長石-石英-雲母	靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後へうけ付	西面へうけ付 輪襷肌	履土上層へ上層 40%
S38	土銅器	小形壺	15.2	13.4	7.7	長石-石英-雲母	にじみ-靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付後ナゲ	内面ナゲ	床面 90% P.27
S39	土銅器	瓶	24.3	21.4	8.8	長石-石英-雲母-赤色胎子	にじみ-赤靑	良好	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付	内面へうけ付	床面 100% P.32
S40	土銅器	瓶	25.3	20.3	7.7	長石-石英-靑	にじみ-靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付	内面ナゲ	車孔 履土下層 95% P.32
S41	土銅器	瓶	23.8	24.2	8.6	長石-石英-雲母-赤色胎子	にじみ-黄靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付	内面へうけ付	履土中層 50%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IF85	球状土埴	3.2	0.7~0.8	2.8	(29.3)	土長石-石英-雲母	ナゲ 一方均等な穿孔	履土下層	
IF96	管状土埴	3.9	1.7~1.8	9.7	(175.0)	土長石-石英-雲母-赤色胎子	ナゲ	履土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q102	磁石	(17.0)	5.9	4.0	(397.7)	磁石岩	砥面2面	履土下層	

第93号住居跡(第88～90図)

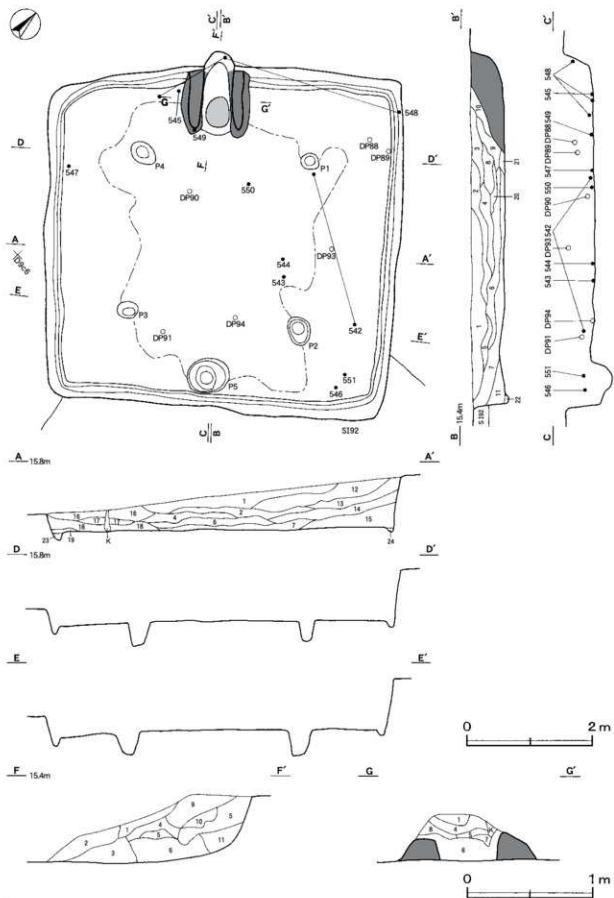
位置 調査区西部のD 9 b6区で、標高15.4mほどの中段段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第92号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.70m、短軸5.54mほどの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は30～78cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで134cmである。袖部幅は112cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ22cm掘り込まれ、火床面から急激に立ち上がっている。第5層は天井部の崩落層と考えられる。



第88图 第93号住居跡実測図

甕土層解説

1 極暗褐色	炭化物・砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	7 灰褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	8 にんべん色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量
3 にんべん色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
4 極暗褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	10 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 にんべん色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	11 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
6 にんべん色	ロームブロック中量、炭化粒子少量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ32～42cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ35cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

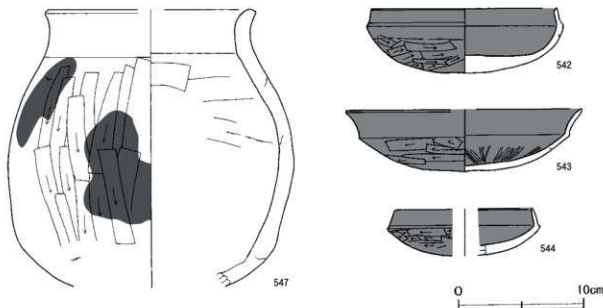
覆土 24層に分層される。周囲から土砂が流入し、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

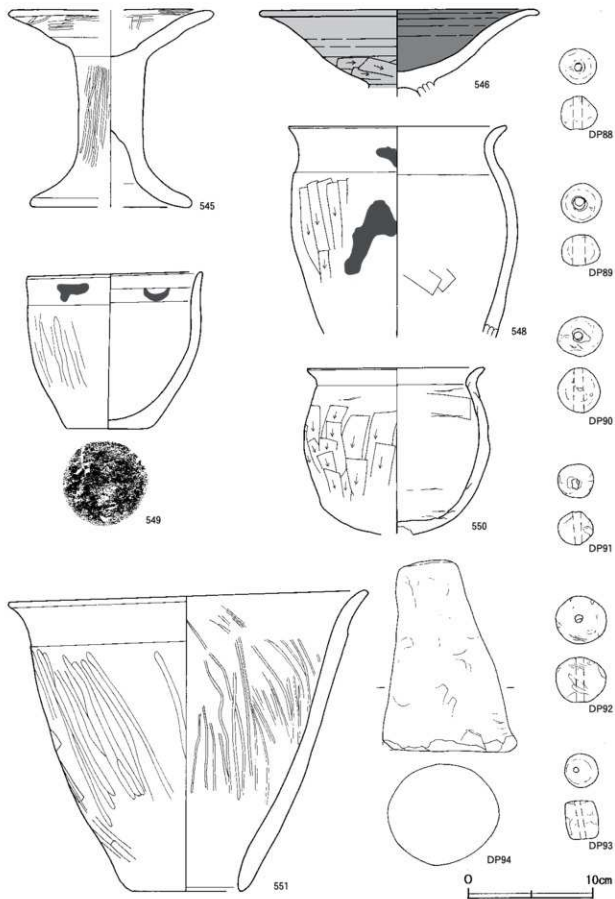
1 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	13 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	14 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	15 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	16 暗褐色	ローム粒子少量
5 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	18 極暗褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	ロームブロック微量	19 暗褐色	ロームブロック微量
8 灰褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	20 にんべん色	砂質粘土粒子中量、ロームブロック微量
9 黒褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子微量	21 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
10 黒褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	22 暗褐色	ロームブロック少量
11 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	23 極暗褐色	ローム粒子少量
12 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	24 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1052点（坏302、高坏16、甕733、甕1）、土製品8点（紡錘車1、球状土錘5、管状土錘1、支脚1）、竊1点の他に、流れ込んだ縄文土器片21点、弥生土器片4点、須恵器片7点も出土している。543・544・550は中央部、545は北西壁の竈左側、547は南西壁際の床面からそれぞれ出土している。549は竈左袖部の補強材として使用されていたと考えられ、逆位の状態で出土している。548は北西壁際の覆土下層、北側コーナー付近の覆土下層、竈煙道部からそれぞれ出土したものが接合したもので、住居が埋没していく過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第89図 第93号住居跡出土遺物実測図(1)



第90图 第93号住居跡出土遺物実測図(2)

第93号住居跡出土物観察表(第89・90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	手法の特徴	出土位置	備考
542	土師器	杯	14.7	5.0	-	長石・石英・雲母	にじみ・赤染	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後丁寧ナデ 内面ナデ	覆土下層	80% P1.25
543	土師器	杯	[18.6]	4.9	-	長石・石英・雲母	にじみ・橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	70%
544	土師器	杯	[18.6]	(3.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰濁	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	床面	50%
545	土師器	高杯	[15.4]	15.7	[12.4]	長石・石英・雲母	橙	普通	杯部外周 脚部外面へラ削り後へラ磨き 杯部内面へラ磨き	床面	40%
546	土師器	高杯	21.6	(6.8)	-	長石・石英・雲母	明赤濁	普通	杯部外面下端へラ削り 内面ナデ	覆土下層	90% 外面赤染 内面褐色灰濁
547	土師器	甕	[16.0]	(22.1)	-	長石・石英・雲母	にじみ・赤染	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	70% 外面残付着
548	土師器	甕	17.2	(16.7)	-	長石・石英・雲母	にじみ・赤染	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後一部平行叩き	覆土上層 ～下層	40% 外面残付着
549	土師器	小形甕	13.2	12.5	6.5	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナデ	床面	70%
550	土師器	小形甕	13.6	(13.2)	-	長石・石英・雲母	灰濁	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	70% P1.36
551	土師器	瓶	28.4	24.0	8.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にじみ・橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面へラ削り後へラ磨き	覆土下層	85% P1.32

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D98	球状土埴	3.0	0.7	2.6	22.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向のみの穿孔	覆土中層	
D99	球状土埴	3.2	1.0	2.4	22.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向のみの穿孔	覆土中層	
D99	球状土埴	3.5	0.7~0.8	3.5	(36.8)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向のみの穿孔	覆土下層	
D99	球状土埴	2.8	0.6~0.7	2.7	19.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向のみの穿孔	覆土中層	
D99	球状土埴	4.0	0.6	3.7	36.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向のみの穿孔	覆土中層	
D99	管状土埴	2.8	0.4	3.1	26.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向のみの穿孔	覆土上層	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D94	支脚	15.3	4.2~10.7	(1998.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	全面ナデ 指環状	床面	P1.41

第97号住居跡(第91・92図)

位置 調査区西部のD9g0区で、標高15.2mほどの中段段丘上の南西緩斜面面に位置している。

重複関係 第98号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.90m、短軸4.70mほどの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は25~52cmで、外傾して立ち上がっている。

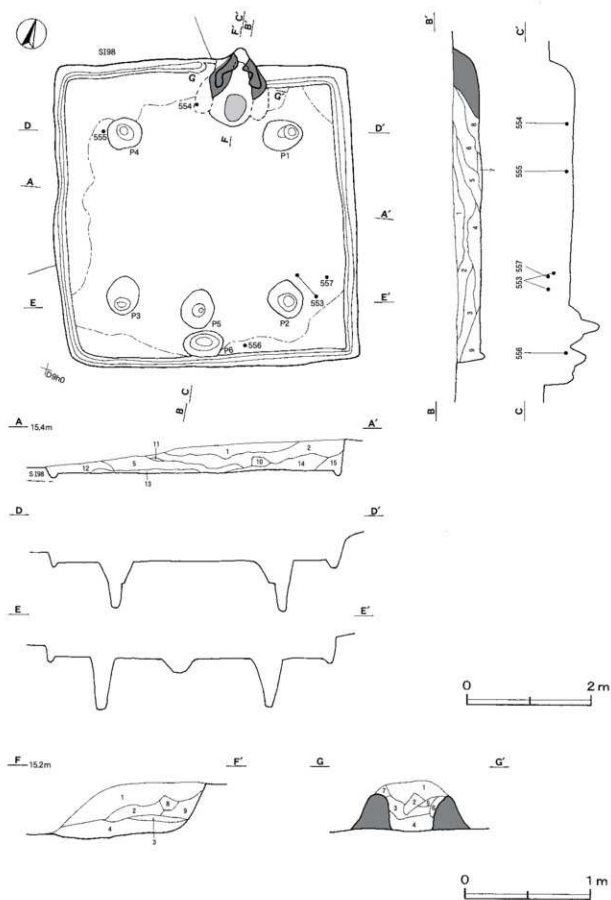
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のやや東寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで126cmである。袖部幅は96cmほどが遺存しており、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ21cmほど掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

甍土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量 | 9 黒褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 4 赤褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | | |
| 5 黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子微量 | | |
| 6 褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 6か所。P1~P4は深さ73~84cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ46cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ23cmで、配置から出入り口施設に伴う補助的な役割を果たした可能性があるが明確ではない。



第91图 第97号住居跡实测图

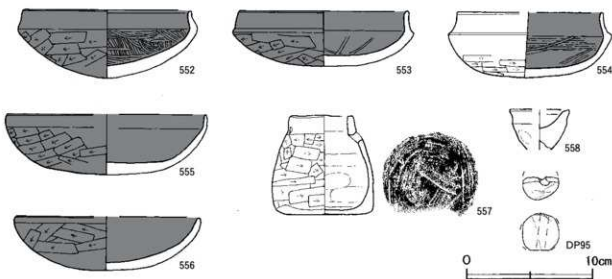
覆土 15層に分層される。周囲から土砂が流入し、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐色 | 粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 12 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量、
焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片197点(坏52,高坏2,鉢1,壺1,甕141),ミニチュア土器1点(高坏カ),土製品3点(球状土錘1,不明2),礫3点の他に、流れ込んだ弥生土器片142点,須恵器片4点も出土している。553は南東コーナー付近の覆土上層,554は竈左側の覆土下層,555は北西コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。557は覆土上層からの出土である。

所見 時期は,出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第92図 第97号住居跡出土遺物実測図

第97号住居跡出土遺物観察表(第92図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考	
									口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り残ナデ			
552	土師器	坏	13.1	5.4	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り残ナデ	内面へう割	覆土中	95% Ⅱ.25
553	土師器	坏	13.1	4.4	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り残ナデ	内面へう割	覆土上層	90% Ⅱ.26
554	土師器	坏	11.4	5.1	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り	内面へう割	覆土下層	60%
555	土師器	坏	15.6	4.8	-	長石-石英-雲母	灰焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り	内面ナデ	覆土下層	50%
556	土師器	坏	14.4	4.2	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り	内面ナデ	覆土下層	50%
557	土師器	小形壺	4.8	7.8	7.5	長石-石英-雲母 黄色粒子	にじみ黄焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部上面に相対する穿孔	体部外面へう割り 内面指跡によるナデ	覆土上層	95% Ⅱ.33
558	土師器	ミニチュア	4.6	0.2	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面指跡によるナデ	指跡	覆土中	10% 高坏カ

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP95	球状土錘	0.0	0.7	2.9	(13.5)	土(長石-石英-雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

第98号住居跡（第93・94図）

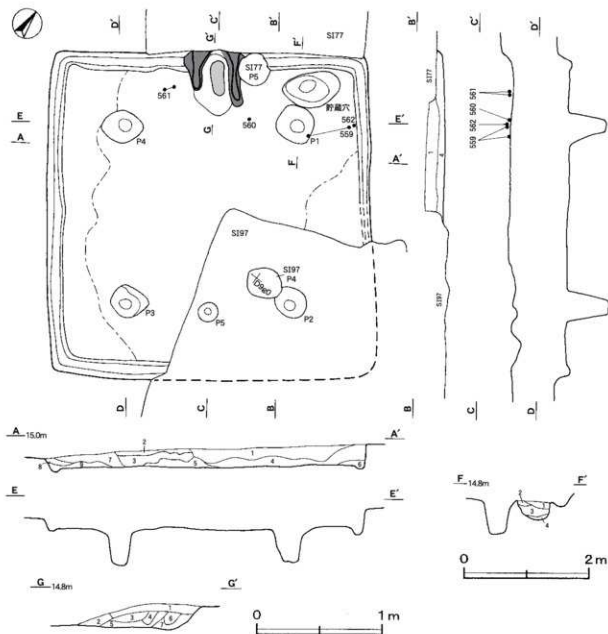
位置 調査区西部のD9F9区で、標高14.8mほどの中段丘上の南西緩斜面に位置している。

重複関係 第77・97号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.26m、短軸5.16mの方形で、主軸方向はN-34°-Wである。壁高は18~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分と重複部分を除いて壁溝が周囲に回っている。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで106cmである。右袖部は第77号住居のP5に掘り込まれているが、袖部幅は80cmほどが確認できた。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、重複のための不明であるが、遺存状態から緩やかに外傾して立ち上がっていたものと考えられる。



第93図 第98号住居跡実測図

甕土層解説

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 黄褐色 砂質粘土ブロック多量、焼土粒子微量 |
| | 7 極暗褐色 砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ54～62cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ8cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 7 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 9 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量 | |

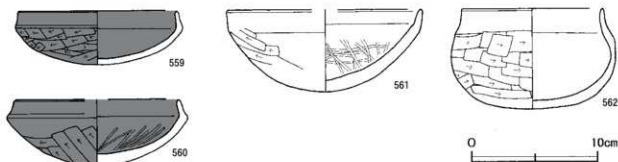
貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、長径91cm、短径56cmほどの楕円形で、深さは35cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片149点(坏28, 碗1, 甕120)の他に、混入した弥生土器片74点も出土している。560は北コーナー付近の床面、562は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第94図 第98号住居跡出土遺物実測図

第98号住居跡出土遺物観察表(第94図)

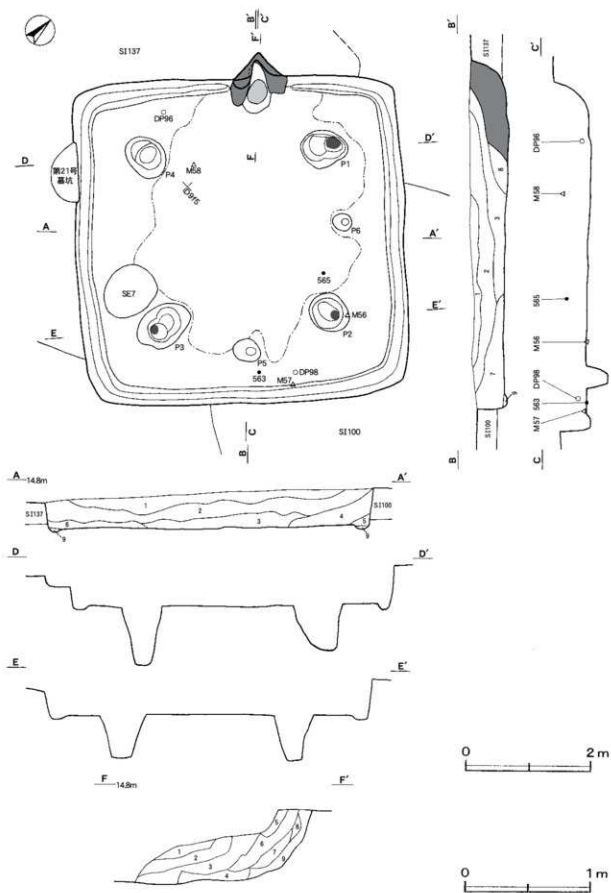
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
559	土師器	坏	12.5	4.2	-	長石・石英	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	70% P.25
560	土師器	坏	[13.0]	5.2	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	60%
561	土師器	坏	[15.2]	6.4	-	長石・石英・雲母・炭化粒子	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	70%
562	土師器	甕	11.2	7.9	-	長石・石英・雲母	にじみ黄焼	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土下層	100% P.29

第99号住居跡 (第95・96図)

位置 調査区西部のD9e5区で、標高14.4mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第100号・137号住居跡を掘り込み、第21号墓坑、第7号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.26m、短軸5.15mの方形で、主軸方向はN-44°-Wである。壁高は35～60cmで、外傾して立ち上がっている。



第95图 第99号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで96cmである。袖部幅は88cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ39cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子微量 | 6 黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 6か所。P1～P4は深さ70～93cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ35cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ40cmで、主軸に沿って主柱穴と直線的に配置されていることから補助柱穴の可能性が想定される。P1～P3には柱痕跡が認められ、その対角線上の内側に柱抜き取りのための掘り方が確認された。

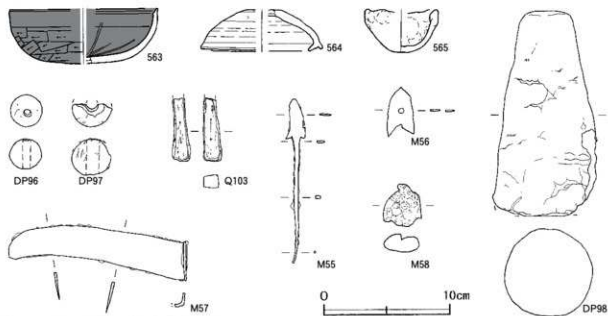
覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片885点(坏217, 高坏7, 壺1, 甕660), 手捏土器1点(坏形カ), 土製品3点(球状土錘2, 支脚1), 鉄製品4点(鏃2, 鎌1, 椀状洋1), 礫13点の他に、流れ込んだ弥生土器片195点, 須恵器片5点も出土している。563は南東壁際の床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第96図 第99号住居跡出土遺物実測図

第99号住居跡出土遺物観察表(第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特 徴	出土位置	備 考
963	土師器	埴	[11.6]	4.2	-	灰石・石炭屑・赤色粒子	明赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へうけ付 内面へうけ付き	床面	90%
964	須恵器	蓋	[8.2]	(3.3)	-	灰石	灰	良好	天井部全周のへうけ付	覆土中	20%
965	土師器	手取土師	[5.6]	3.4	-	灰石・石炭屑	にじろ	普通	口辺部・内面指頭部 体部外面ナゲ 輪破痕	覆土上層	50%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
996	埴状土師	2.5	0.6	2.4	13.4	土(灰石・石炭屑)	ナゲ 一方向の厚孔	覆土下層	
997	埴状土師	(3.2)	1.0	2.9	(13.0)	土(灰石・石炭屑)	ナゲ 一方向の厚孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
998	支脚	16.2	3.4 ~ (7.8)	(77.0)	土(灰石・石炭屑・赤色粒子)	全面ナゲ 曲頭痕	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
999	瓦石	(5.0)	1.4	1.5	(120.0)	凝灰岩	両面2面	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M55	鉄鏝	13.0	1.5	0.3~0.5	1.9	鉄	長頭三角鏝 鎌身部三角形 輪状溝	覆土中	PL43
M56	鉄鏝	4.0	2.1	0.1	2.9	鉄	無頭三角鏝 断面平型 中央に径0.4mmの透かし	床面	PL43
M57	鏝	14.1	4.3	0.2	50.7	鉄	弓形に彎曲 端部全面折返し 断面形は三角	床面	PL43
M58	横穴平	3.3	3.0	1.3	15.4	鉄	両面に漆喰付着 凹凸有り	覆土上層	

第101号住居跡(第97~99図)

位置 調査区西部のD 9 84区で、標高14.6mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第137号住居跡を掘り込み、第104号住居、第3号掘立柱建物、第161号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.36m、短軸5.14mの方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は38~90cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分と北西コーナー一部を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで131cmである。袖部幅は89cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ38cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--|------------------------------------|
| 1 黒褐色 砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にじろ褐色 砂質粘土中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| | 7 暗褐色 ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ36~64cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ26cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

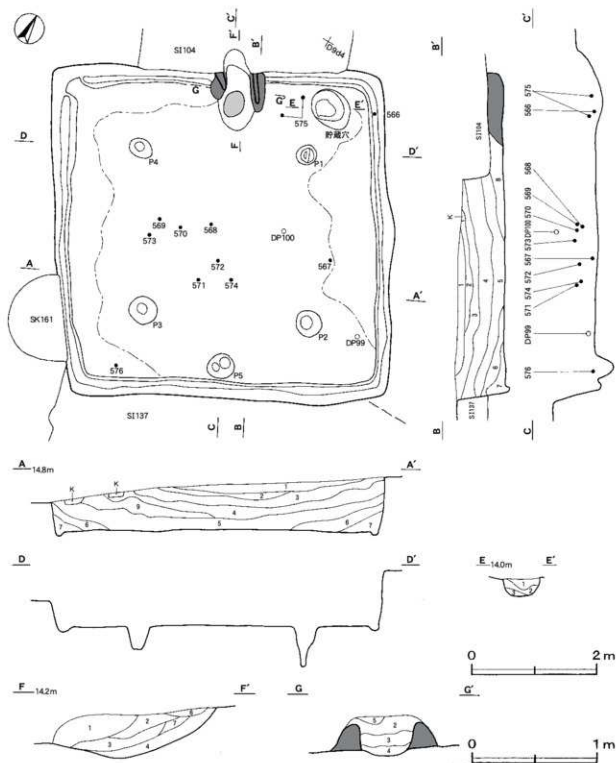
- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 9 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 | |

貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径67cm、短径56cmほどの楕円形で、深さは30cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

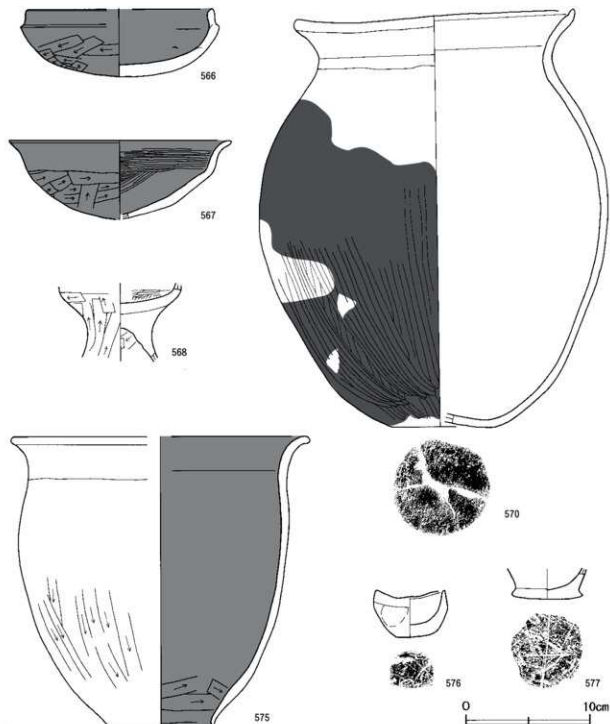
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量



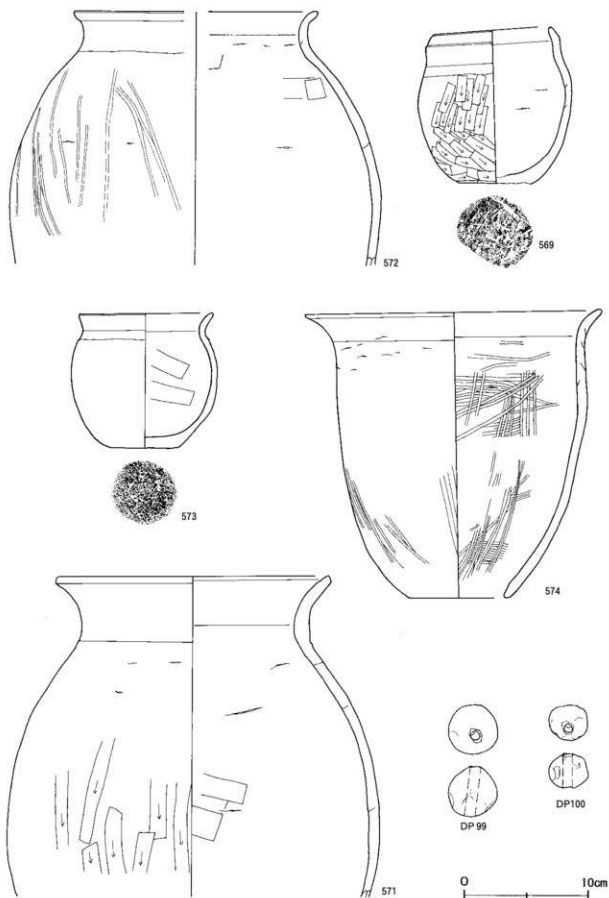
第97図 第101号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片1098点(坏310, 高坏19, 壺1, 甕764, 甗4), 手捏土器2点(坏形カ), 土製品6点(球状土錘2, 支脚4), 石器1点(敲石), 鉄製品1点(鉄滓カ), 礫5点の他に, 流れ込んだ縄文土器片3点, 弥生土器片140点, 須恵器片19点も出土している。566は北コーナー部の壁溝内, 568~574は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 出土した遺物のほとんどが覆土第3・4層内から出土しており, 住居廃絶後の確みに投棄されたものと考えられる。時期は, 出土土器から7世紀前半と考えられる。



第98図 第101号住居跡出土遺物実測図(1)



第99图 第101号住居跡出土遺物実測図(2)

第101号住居跡出土遺物観察表(第98-99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特 徴	出土位置	備 考
986	土師器	杯	[14.7]	5.4	—	長石・石英・炭化粒子	にひ・赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へう削り 内面横削り不明 輪襷痕	覆土層	90%
987	土師器	杯	17.7	(6.2)	—	長石・石英	にひ・黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へう削り 内面へう磨き	覆土下層	80%
988	土師器	高杯	—	(6.8)	—	長石・石英・炭化粒子	にひ・黄褐色	普通	杯部外面、脚部内・外面へう削り 杯部内面へう磨き	覆土中層	20%
989	土師器	小形壺	9.3	12.5	5.7	長石・石英	にひ・黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へう削り 輪襷痕	覆土中層	70% P.28
970	土師器	壺	22.9	32.3	7.4	長石・石英・炭化粒子	浅黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面中位から下端へう磨き	覆土中層	80% 外面横削り付 P.21
971	土師器	壺	21.6	(25.7)	—	長石・石英・炭化粒子	にひ・黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へう削り 内面へう磨き	覆土中層	50%
972	土師器	壺	[18.6]	(20.1)	—	長石・石英・赤色粒子	にひ・黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へう削り後へう磨き 内面へう磨き	覆土中層	30%
973	土師器	小形壺	10.7	10.8	5.6	長石・石英	にひ・黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面横削り不明 内面へう磨き	覆土中層	90% P.28
974	土師器	瓶	23.4	23.0	8.1	長石・石英・赤色粒子	にひ・赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へう削り後へう磨き 体部内面へう磨き	覆土中層	70%
975	土師器	瓶	[23.6]	23.0	8.4	長石・石英	にひ・黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へう削り 体部外面横削り横ナゲ 内面へう磨き	覆土下層	60% 保存者
976	土師器	手取土器	5.5	3.8	2.1	長石・石英・炭化粒子	黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面部面によるナゲ 内面ナゲ	覆土下層	70% P.33
977	土師器	手取土器	—	(2.4)	5.6	長石・石英・赤色粒子	黄褐色	普通	指輪によるナゲ 底部本葉痕	覆土中	10%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
9799	球状土埴	4.0	0.9	4.0	59.2	土(長石・石英・炭化)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土下層	
9798	球状土埴	3.2	0.8	2.8	38.7	土(長石・石英・炭化)	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土下層	

第106号住居跡(第100-101図)

位置 調査区西部のD 9 e1区で、標高14.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第105号住居跡を掘り込み、第1号・第2号掘立柱建物、第10号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.56m、短軸4.47mの方形で、主軸方向はN-49°-Eである。壁高は23~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部から竈前付近にかけてが踏み固められている。

竈 北東壁のやや南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで91cmである。袖部幅は96cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ14cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 9 暗褐色 | 砂質粘土中量、焼土粒子微量 |
| | | 10 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ30~60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P2・P4からは柱立て替えの痕跡が確認され、それぞれの内側に柱痕跡が確認された。P5は深さ46cmで、柱建て替え以前の主柱穴と考えられる。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

貯蔵穴 東側コーナー部に位置し、長径91cm、短径56cmほどの楕円形で、深さは42cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

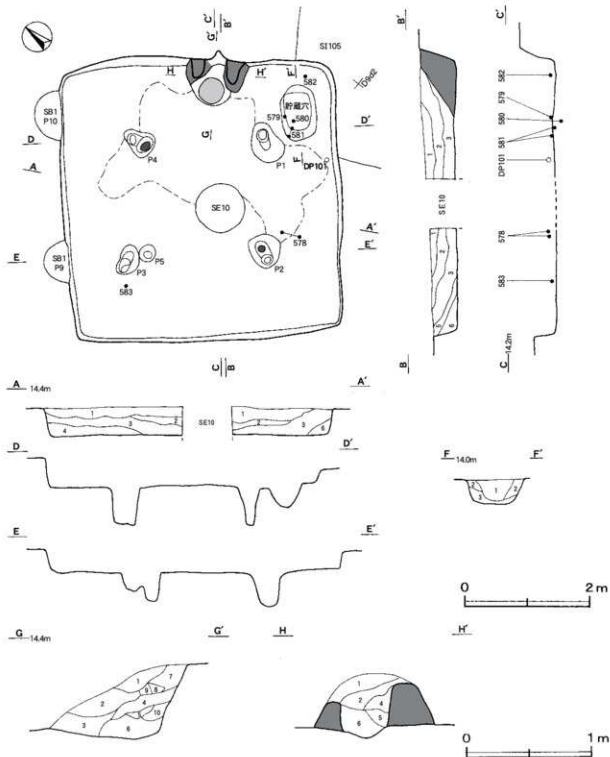
1 黒色 炭化粒子少量、ローム粒子微量

2 黒色 ロームブロック・炭化粒子少量

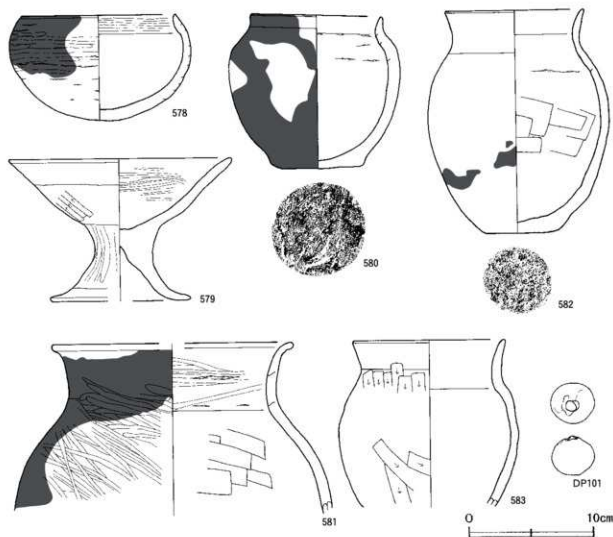
3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片686点(坏94, 器台2, 高坏7, 壺1, 甕579, 甌3), 土製品1点(球状土錘), 鉄滓1点, 礫16点の他に, 流れ込んだ弥生土器片115点, 須恵器片5点も出土している。578は南コーナー寄りの覆土下層, 579は東コーナー寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。580は貯蔵穴内からの出土である。

所見 時期は, 出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第100図 第106号住居跡実測図



第101図 第106号住居跡出土遺物実測図

第106号住居跡出土遺物観察表(第101図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
578	土師器	碗	12.3	8.4	—	長石・石英	に染・橙	普通	口辺部内・外面横ナゲ内面へラ磨き 体部外面へラ磨き 輪襷肌	覆土下層 目29	70% 外面残付着
579	土師器	高杯	17.4	11.3	[11.2]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	に染・橙	普通	杯部口辺部内・外面横ナゲ 杯部外面へラ削り 内面へラ磨き 脚部外面へラ磨き	覆土下層	70%
580	土師器	小形壺	10.4	12.4	7.5	長石・石英・赤色 粒子	に染・赤肌	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面ナゲ 輪襷肌	貯蔵穴内	95% 外面残付着 目28
581	土師器	甕	[19.0]	[13.7]	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り後へラ磨き 輪襷肌	灰面へ 貯蔵穴内	15% 外面残付着
582	土師器	小形壺	11.0	17.7	5.2	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	浅黄肌	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面横肌調整不明 内面へラナゲ 輪襷肌	覆土下層	70% 外面一部残付着
583	土師器	小形壺	12.0	[13.2]	—	長石・石英・雲母	に染・橙	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラナゲ	覆土下層	50%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP101	球状土塊	3.5	0.8~0.9	3.1	28.4	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 一方からの穿孔	覆土下層	

第116号住居跡(第102・103図)

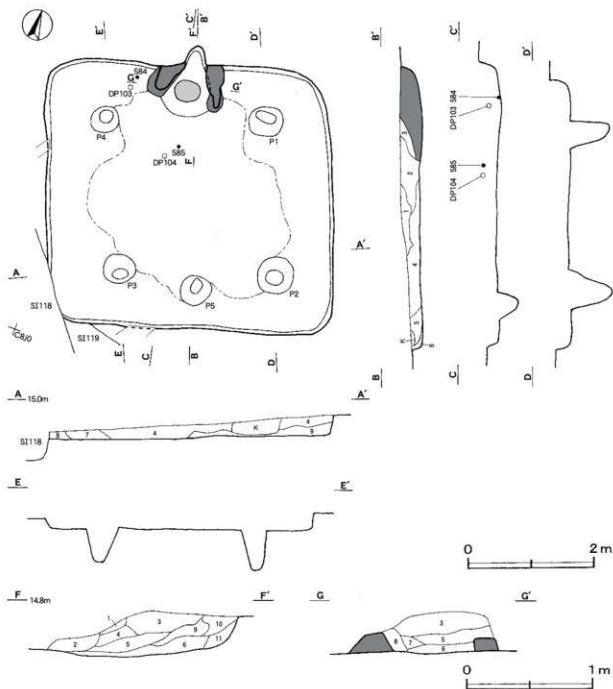
位置 調査区西部のC 8 10区で、標高14.7mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第119号住居跡を掘り込み、第118号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.58m，短軸4.26mほどの方形で，主軸方向はN-21°-Wである。壁高は20~32cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで117cmである。袖幅は118cmほどで，床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は，地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており，火を受けて赤変硬化している。煙道部は，壁外へ28cm掘り込まれ，火床面から外傾して立ち上がっている。第3・8層は天井部や袖材の崩落層と考えられる。



第102図 第116号住居跡実測図

甌土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7 黒褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8 黄褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黄褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子微量	9 灰褐色	砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
4 暗褐色	焼土粒子少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
6 黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ58～68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ34cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

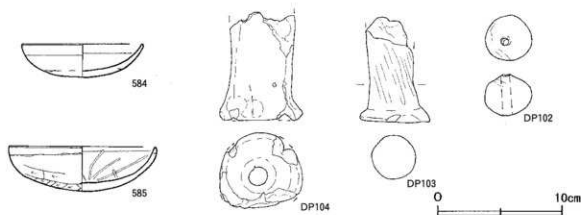
覆土 9層に分層される。周囲から土砂が流れ込んだ様相を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	8 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
4 黒褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片374点（坏45、高坏2、甕類327）、土製品3点（球状土錘、支脚、羽口）、礎5点の他に、流れ込んだ弥生土器片48点、須恵器片20点も出土している。584は竈左側の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。



第103図 第116号住居跡出土遺物実測図

第116号住居跡出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
384	土師器	坏	9.6	2.7	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へ7割り 内面ナデ	床面	79% PL28
385	土師器	坏	11.7	3.6	—	長石・石英・雲母・赤土粒子	明赤焼	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へ7割り 内面へ7割り	覆土上層	60% PL28

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP102	球状土錘	3.8	0.7	3.3	42.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方側からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP103	支脚	(8.0)	3.5～3.8	3.6	(32.1)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	へ7割り	覆土中層	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP104	羽口	(8.0)	4.3～2.8	1.4～2.8	(20.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	外面ナデ	覆土上層	

第119号住居跡 (第104・105図)

位置 調査区西部のC8j0区で、標高14.3mほどの中段丘上に位置している。

重複関係 第116・118号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.95m、短軸4.30mほどの長方形と推定され、主軸方向はN-10°-Eである。確認された壁高は60cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦であるが、硬化面などは確認できなかった。

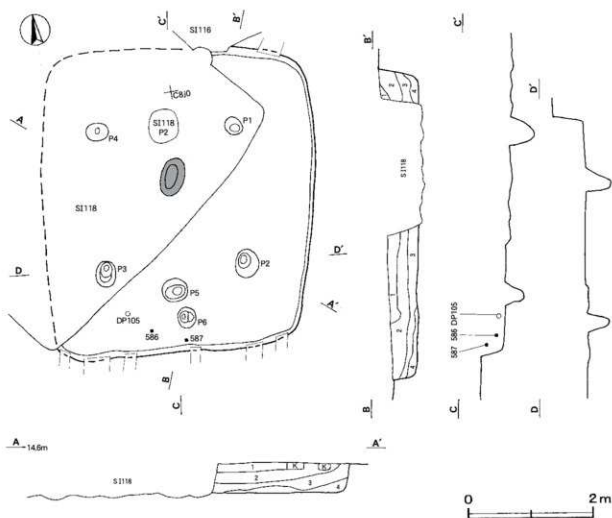
炉 中央部やや北寄りに確認され、長径63cm、短径39cmほどの楕円形と推定される。第118住居の掘り方に壊されているため、赤変部分は確認されなかったが、皿状にややくぼんだ状態でロームが熱を受けて硬化している。

ピット 6か所。P1～P4は深さ33～39cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ29cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ36cmで、配置から出入り口施設に伴う補助的な役割を果たした可能性があるが明確ではない。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

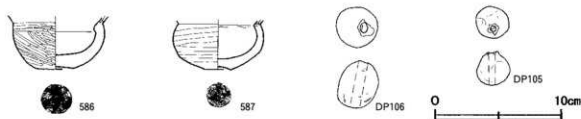
- | | |
|------------------------|---------------------|
| 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 極暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック微量 |



第104図 第119号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片70点(坏20, 埴2, 甕48), 土製品2点(球状土鍾), 礫5点の他に, 流れ込んだ弥生土器片65点も出土している。586は南壁際の覆土下層から, 587は覆土中層から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが, 時期は, 出土土器から4世紀代と考えられる。



第105図 第119号住居跡出土遺物実測図

第119号住居跡出土遺物観察表(第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
586	土師器	埴	-	(4.2)	2.6	長石・石英雲母	にんじ	普通	体部外面へう磨き 内面ナデ	覆土下層	50% PL33
587	土師器	埴	-	(3.9)	2.0	長石・石英赤色 粘土	明赤艶	普通	体部外面へう磨き 内面ナデ 輪痕付	覆土中層	50% PL33

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP05	球状土鍾	2.7	0.5	2.7	17.0	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの厚孔	覆土下層	
DP06	球状土鍾	3.4	0.7	3.9	37.6	土(長石・石英雲母)	ナデ 一方向からの厚孔	覆土中	

第122号住居跡(第106・107図)

位置 調査区西部のD 8 a7区で, 標高13.9mほどの中段段丘上に位置している。

重複関係 第124・125・126号住居跡を掘り込み, 第22号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.24m, 短軸0.95mの方形で, 主軸方向はN-39°-Wである。壁高は14~30cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で, 中央部が踏み固められており, 竈右側部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁のやや北寄りに付設されている。第22号墓坑に右袖部が掘り込まれているため, 煙道部までの82cmだけが確認された。遺存している袖部幅は117cmほどで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は, 床面と同じ高さの地山面を使用しており, 火を受けて赤変硬化している。煙道部は, 壁外へ59cm掘り込まれ, 火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

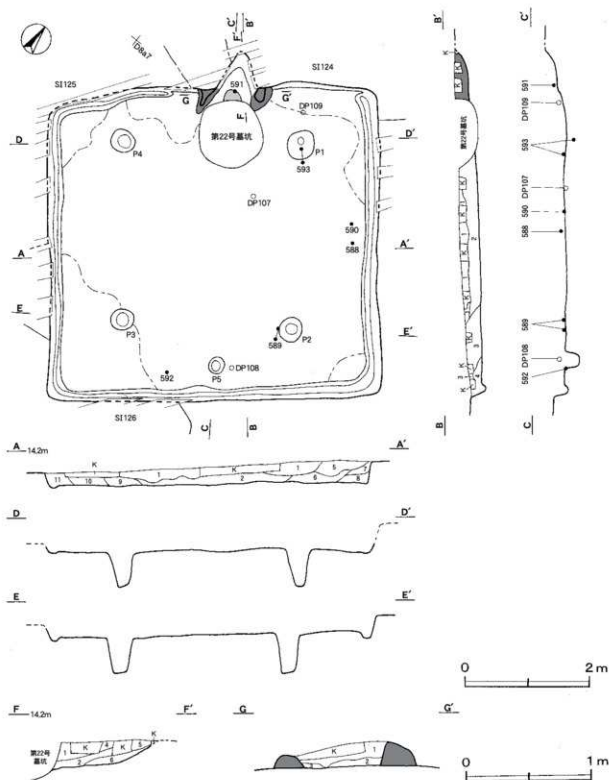
- | | | | |
|---------|----------------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 黒 艶 色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にんじ明艶 | 焼土ブロック中量, 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 にんじ明艶 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ57~62cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ26cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層に分層される。壁際はブロック状の堆積状況を示す人為堆積で, 中央部はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

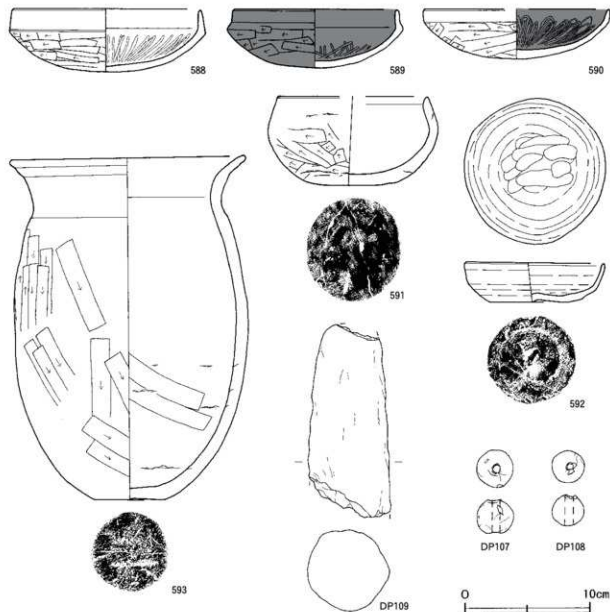
土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量。焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子少量。炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量。炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック少量。炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量。焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量。焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |



第106図 第122号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片365点(坏48, 高坏1, 甕316), 須恵器1点(坏), 土製品3点(球状土錘2, 支脚1), 礫9点の他に, 流れ込んだ弥生土器片63点, 須恵器片10点も出土している。588・590は北東壁際の覆土下層, 589はP2付近の覆土下層, 592は南東壁際の床面からそれぞれ出土している。593はP1付近の床面とP1覆土中層から出土した土器片が接合しており, 住居廃絶により柱の抜き取り穴に流れ込んだものと考えられる。
所見 時期は, 出土土器から7世紀前半と考えられる。



第107図 第122号住居跡出土遺物実測図

第122号住居跡出土遺物観察表(第107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
588	土師器	坏	15.1	5.0	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	100% PL26
589	土師器	坏	13.0	4.7	—	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き 輪切肌	覆土下層	80% PL26
590	土師器	坏	[14.6]	3.9	—	長石・石英・雲母・赤鉄粉子	紅褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	70%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特 徴	出土位置	備 考
992	須恵器	杯	11.0	3.2	7.2	長石-石英	灰	良好	底面彫刻ヘラ切り 内面仕上げナデ	床面	100% P3.28 落着
991	土師器	甗	11.8	7.1	7.0	長石-石英-雲母	灰褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ 輪縁低	甗内	60%
993	土師器	甗	18.5	27.4	5.6	長石-石英-雲母	にじみ緑	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪縁低	床面～P1 甗土中層	70%

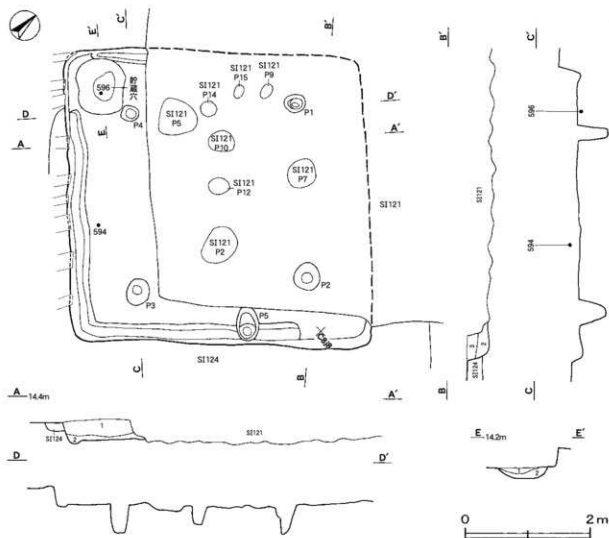
番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
9F97	球状土埴	2.9	0.6	2.7	(25.1)	土(長石-石英-雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
9F98	球状土埴	2.6	0.6～0.7	2.4	13.9	土(長石-石英-雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	甗土中層	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
9F99	支脚	(15.4)	4.6～4.5	(51.8)	土(長石-石英-雲母-赤色鉄子)	指跡によるナデ	甗土下層	

第123号住居跡 (第108・109図)

位置 調査区西部のC 8 j7区で、標高14.1mほどの中段丘上に位置している。

重複関係 第124号住居跡を掘り込み、第121号住居に掘り込まれている。



第108図 第123号住居跡実測図

規模と形状 遺存している壁や柱穴の配置から、N-47°-Wを主軸方向とする一辺が4.80mほどの方形と推定される。確認された壁高は13~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦と考えられる。南コーナー部を中心に両側へ壁溝が延びている。

ピット 5か所。P1~P4は深さ40~49cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。ロームブロックや焼土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

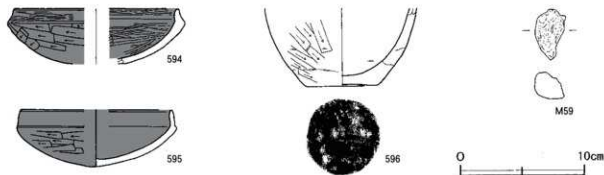
貯蔵穴 西側コーナー部に位置し、長径88cm、短径70cmの楕円形で、深さは18cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片174点（坏20、高坏1、器台1、甕152）、鉄製品2点（鉄滓、不明）、縄1点の他に、混入した弥生土器片15点、須恵器片6点も出土している。594は南西壁際の覆土下層、596は貯蔵穴からそれぞれ出土している。

所見 本跡は大部分を第121号住居に掘り込まれており、時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第109図 第123号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡出土遺物観察表(第109図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
594	土師器	坏	[13.2]	(4.5)	—	長石・石英・雲母	にら・黄褐色	普通	口辺部内・外面へろ磨き 体部外面へろ削り 内面へろ磨き	覆土下層	30%
995	土師器	坏	[12.0]	4.5	—	長石・石英・雲母	にら・黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へろ削り 内面ナゲ	覆土中	30%
706	土師器	甕	—	(6.2)	5.9	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	にら・黄褐色	普通	体部外面へろ削り 輪切製	貯蔵穴内	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M59	縄状滓	4.1	2.4	2.1	25.7	鉄	表面に赤錆付着 凹凸有り	覆土中	

第124号住居跡(第110・111図)

位置 調査区西部のC8J7区で、標高14.1mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第121・122・123号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁や柱穴の配置から、 $N-44^{\circ}-W$ を主軸方向とする長軸6.00mほど、短軸5.70mほどの方形と推定される。確認された壁高は6~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と考えられる。

ピット 4か所。深さは47~65cmで、配置から主柱穴と考えられる。

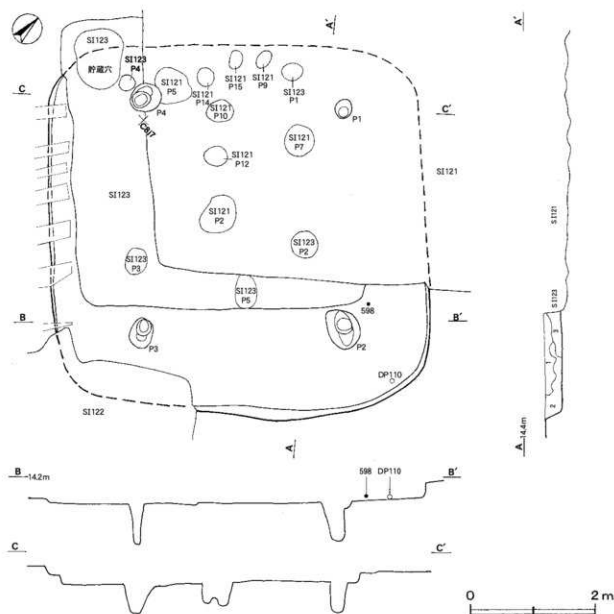
覆土 3層に分層される。不規則な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

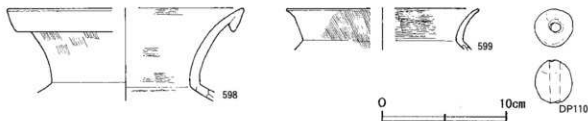
- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片26点（高坏8，器台1，甕17），土製品1点（球状土錘），礫3点の他に、流れ込んだ弥生土器片18点も出土している。598は東コーナー付近の覆土下層から出土している。

所見 大部分は第121・122・123号住居に掘り込まれているため、時期を特定できる遺物が少ないが、4世紀代と考えられる。



第110図 第124号住居跡実測図



第111図 第124号住居跡出土遺物実測図

第124号住居跡出土遺物観察表(第111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
598	土師器	甕	[18.8]	7.4	-	長石・石英雲母	浅黄褐色	普通	口辺部内・外面ハケ目調整後擦り直し・輪碾痕	覆土下層	10%
599	土師器	甕	[15.3]	3.2	-	長石・石英雲母	褐色	普通	口辺部内・外面ハケ目調整	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
598	球状土埴	3.1	0.7~0.8	3.4	31.2	土(長石・石英雲母)	ナブ 一方向からの厚孔	覆土下層	

第125号住居跡 (第112・113図)

位置 調査区西部のD 8 a6区で、標高13.8mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第122号住居、第168・169号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.60m、短軸3.80mの長方形で、主軸方向はN-55°-Wである。壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、遺存している部分には、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁中央部に付設されている。耕作による攪乱を受けており、焚口部から煙道部までは82cmほどと推定される。袖部幅は88cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しているが、赤変や硬化部分を検出することはできなかった。煙道部は、壁外へ10cmほど掘り込まれていると推定され、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7 黄褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量
2 にもみ焼	砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3 にもみ焼	焼土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	10 にもみ焼	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5 にもみ焼	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	11 黒褐色	炭化粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ25～51cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ19cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

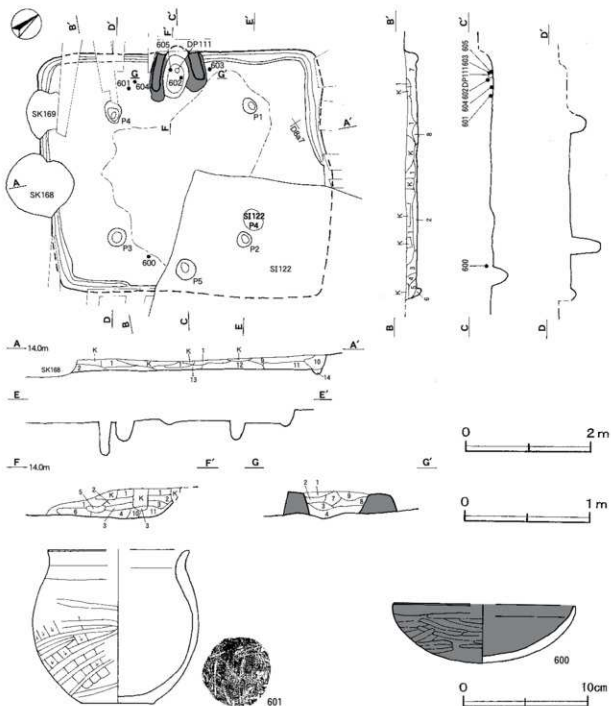
覆土 14層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

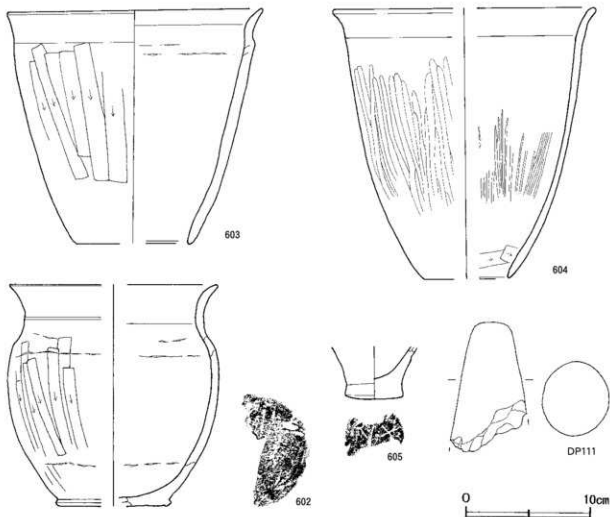
1 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	8 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
2 暗褐色	ローム粒子少量	9 黒褐色	ロームブロック微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
4 極暗褐色	ロームブロック微量	11 極暗褐色	ロームブロック少量
5 暗褐色	ロームブロック少量	12 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
6 褐色	ローム粒子中量	13 暗褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量	14 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片160点(坏35, 高坏2, 壺1, 甕121, 瓶1), 手捏土器1点(甕カ), 土製品2点(支脚), 礫2点の他に, 耕作時の攪乱により混入した須恵器片2点も出土している。600は出入り口付近の覆土下層から出土している。その他の遺物は竈付近を中心に出土しており, 601・604は竈左側の床面, 603は竈右側の床面からの出土である。602・DP111は竈内から重なるように出土しており, 住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。また, 605も竈内からの出土で, 住居の廃絶時に竈に関わる祭祀的な行為の可能性も考慮できる。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第112図 第125号住居跡・出土遺物実測図



第113図 第125号住居跡出土遺物実測図

第125号住居跡出土遺物観察表(第112・113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
600	土師器	杯	[14.4]	(4.7)	—	長石・石英雲母	灰褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き	覆上下層	80%
602	土師器	甕	[16.5]	17.7	[8.5]	長石・石英雲母	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 輪轆痕	甕内	40%
601	土師器	小形甕	[11.2]	12.2	5.8	長石・石英赤色 粘土	褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 底面へラ削り	床面	50%
603	土師器	甕	20.3	18.7	[8.9]	長石・石英雲母	褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 輪轆痕	床面	50%
504	土師器	甕	[21.0]	21.6	[6.8]	長石・石英雲母	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ削り 足孔部内面へラ削り	床面	45%
605	土師器	手捏土器	—	(4.2)	4.7	長石・石英雲母	褐色	普通	体部外面ナデ	甕内	70%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP11	支脚	(10.3)	3.0~6.0	284.0	土(長石・石英雲母)	丁寧なナデ	甕内	

第126号住居跡(第114図)

位置 調査区西部のD8b7区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第122号・127号住居に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による擾乱のため床面まで削平された状態で検出され、長軸4.50m、短軸4.40mほどが確認

された。遺存している床面や炉の位置などから判断して、 $N-8^{\circ}-W$ を主軸方向とする方形と推定される。

床 平坦であるが、削平により硬化面は確認できなかった。

炉 北寄りに2か所確認された。炉1は中央部の北側に位置し、長径78cm、短径57cmの楕円形で、床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉2は北側のやや東寄り位置し、長径41cm、短径33cmの楕円形で、床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

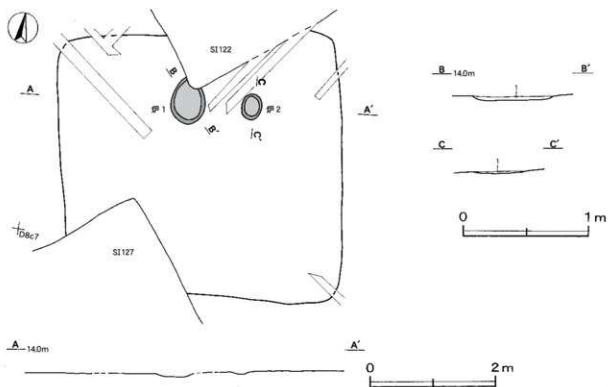
炉1土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子中量

炉2土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子少量

所見 遺物が出土していないため、時期は不明であるが、第122・127号住居に掘り込まれ、また、炉を有することなどから5世紀以前と想定される。



第114図 第126号住居跡実測図

第127号住居跡（第115図）

位置 調査区西部のD8c7区で、標高13.7mほどの中段段丘上に位置している。

重複関係 第126号住居跡を掘り込み、第9号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 大部分は擾乱を受けており、長軸6.20mほど、短軸2.60mほどが確認された。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向 $N-37^{\circ}-W$ である。壁高は50cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、北西壁と南東壁に壁溝が周回している。

ピット 1か所。深さは51cmで、配置から支柱穴と考えられる。

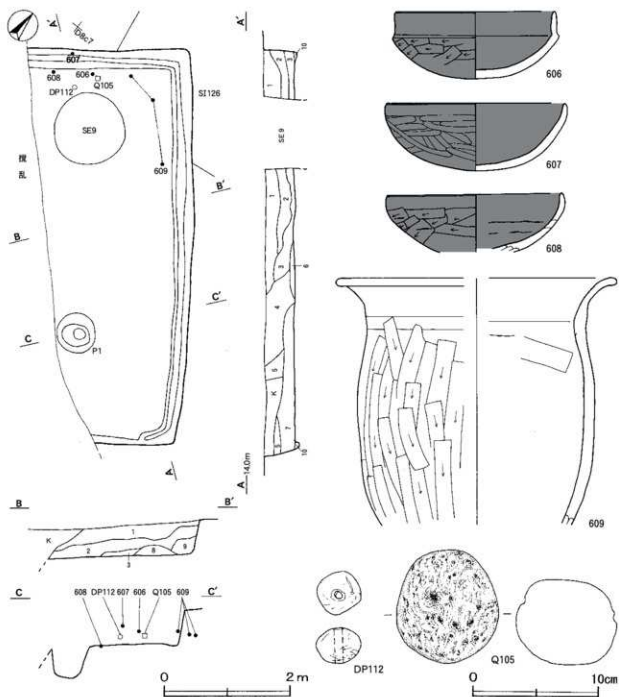
覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 10 褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片352点（坏141、甕211）、土製品2点（球状土錘）、石器1点（磨石）、礫2点の他に、混入した弥生土器片32点、須恵器片6点も出土している。606・609・DP112・Q105は北コーナー付近の覆土下層、608は床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第115図 第127号住居跡・出土遺物実測図

第127号住居跡出土遺物観察表(第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特 徴	出土位置	備 考
606	土銅器	杯	12.4	5.3	-	長石-石英-雲母	黒艶	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ	覆土下層	95% P.26
607	土銅器	杯	14.2	5.2	-	長石-石英-雲母・ 赤土胎土	黒艶	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へう割り後へう割き 内面ナデ	覆土中層	80% P.26
608	土銅器	杯	13.8 (4.6)	-	-	長石-石英-雲母	にじみ艶	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ 輪割痕	床面	50%
609	土銅器	壺	31.8 (19.5)	-	-	長石-石英-雲母	にじみ艶	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へう割り 内面へうナデ 輪割痕	覆土下層	30%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
伊P12	球状土埴	3.4	0.6	2.9	31.3	土(長石-石英-雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
伊65	不明	9.0	8.0	6.6	152.3	軽石	研磨痕	覆土下層	伊子a P.42

第128号住居跡 (第116図)

位置 調査区西部のC9h1区で、標高15.1mほどの中段段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱のため床面の一部が削平されており、長軸3.80m、短軸3.40mほどが確認された。遺存している壁や検出された炉の位置などから判断して、N-48°-Wを主軸方向とする長方形と推定される。遺存している壁高は8cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径68cm、短径47cmの楕円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

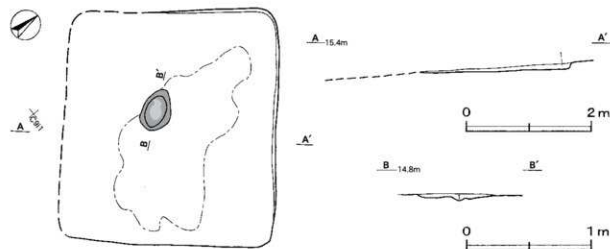
覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片43点(埴1, 埴42)が出土しているが、細片のため図示することはできない。

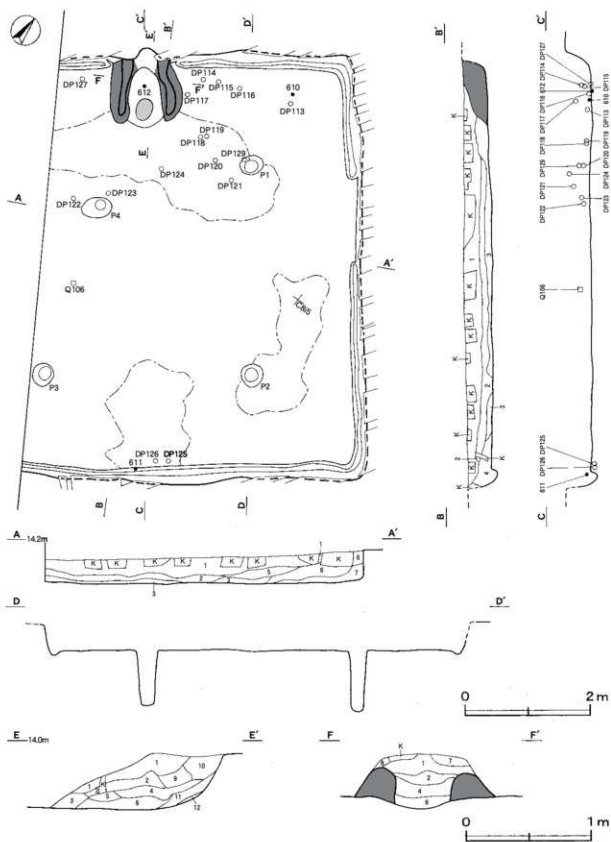
所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土遺物や遺構の形態などから4世紀代と考えられる。



第116図 第128号住居跡実測図

第130号住居跡 (第117~119図)

位置 調査区西部のC 8 4区で、標高13.9mほどの中段段丘上に位置している。



第117図 第130号住居跡実測図

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸6.82m、短軸は5.40mほどが確認された。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は40～44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前や出入り口付近が踏み固められている。竈部分と北東壁の一部を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで126cmである。袖部幅は114cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第9層は天井部の崩落層と考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------|---------|----------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 | 8 柿暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 濃い褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 9 黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 灰褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 | 10 濃い褐色 | 砂質粘土中量、ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 5 赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 | 11 暗褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 12 黒褐色 | 炭化物・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量 |

ピット 4か所。P1～P3は深さは92～102cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ37cmで、性格は不明である。

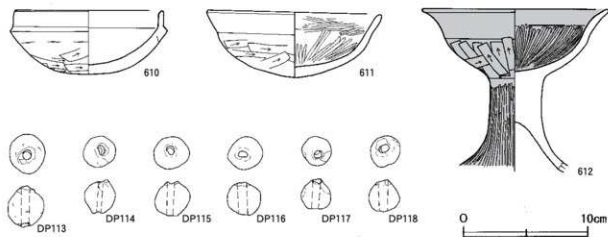
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

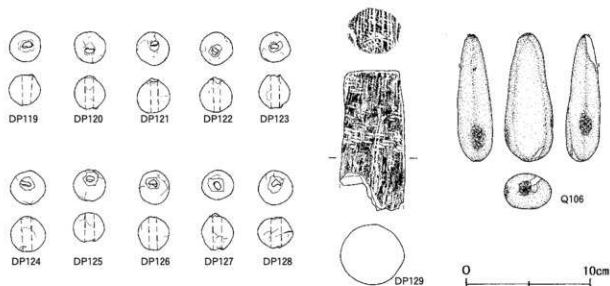
- | | | | |
|--------|----------------|--------|----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 柿暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 濃い褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片584点（坏47、高坏6、甕529、甗2）、土製品23点（球状土鐘19、支脚3、不明1）、石器1点（敲石）、鉄滓1点、礫6点の他に、混入した弥生土器片125点、須恵器片22点も出土している。610は北コーナー部の床面から出土している。612は竈内の火床面よりやや奥まった位置から逆位の状態でも出し、二次焼成を受けていることから支脚として転用された可能性が高い。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第118図 第130号住居跡出土遺物実測図(1)



第119図 第130号住居跡出土遺物実測図(2)

第130号住居跡出土遺物観察表(第118・119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
600	土師器	杯	11.7	5.1	-	長石・石英・雲母・赤鉄粉子	にんじょう	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪縁炊	床面	100% PL26
611	土師器	杯	13.9	5.2	-	長石・石英・雲母・赤鉄粉子	明赤艶	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土中層	90% PL27
612	土師器	高杯	14.7	(12.9)	-	長石・石英・雲母	にんじょう	普通	体部口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 脚部外面へラ削り	壺内	80% 赤彩 PL30

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP103	球状土埴	2.9	0.6	3.3	24.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP114	球状土埴	2.5	0.3	2.7	(15.2)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP115	球状土埴	2.8	0.5~0.6	2.7	18.5	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP116	球状土埴	2.8	0.7	2.6	(18.0)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP117	球状土埴	2.4	0.5~0.6	2.4	(10.3)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP118	球状土埴	2.5	0.6~0.8	2.5	(12.7)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP119	球状土埴	2.5	0.6~0.8	2.5	15.1	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP120	球状土埴	2.5	0.7	2.7	15.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP121	球状土埴	2.7	0.6	2.7	(18.7)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP122	球状土埴	2.6	0.4~0.6	2.8	17.0	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP123	球状土埴	2.5	0.7	2.6	15.6	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP124	球状土埴	2.9	0.7~0.8	2.8	18.6	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土上層	
DP125	球状土埴	2.6	0.7	2.3	14.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP126	球状土埴	2.7	0.6	2.6	16.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP127	球状土埴	2.5	0.7	2.9	14.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP128	球状土埴	2.9	0.9	2.5	(17.1)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP126	支脚	(11.3)	4.1~(5.2)	D06.0	土(長石・石英・雲母)	格子状の吹き目	覆土中層	

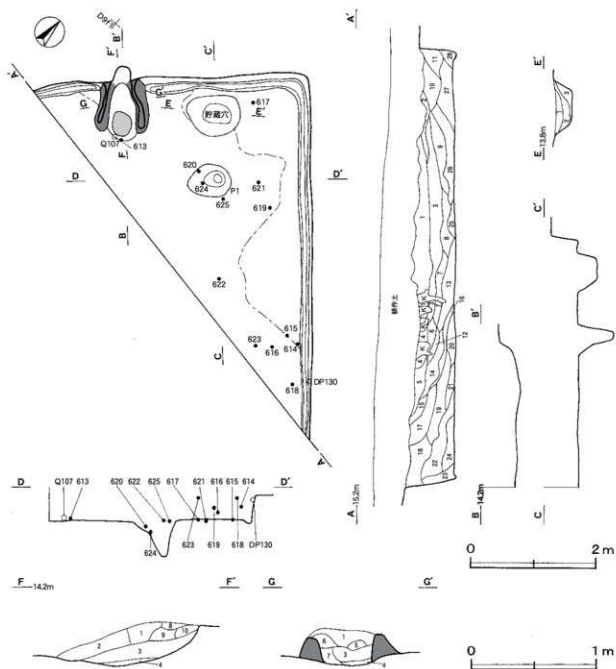
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q106	礎石	10.2	3.8	2.7	(138.2)	砂岩	両端部と側面に磨行痕	覆土中層	

第132号住居跡 (第120～122図)

位置 調査区西部のD9f2区で、標高14.2mほどの中位段丘上に位置している。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸5.80m、短軸4.48mほどが確認できた。竈や柱穴の位置などから判断して、N-42°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は39～78cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、遺存している部分には、竈部分を除いて壁溝が周回している。



第120図 第132号住居跡実測図

竈 北西壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで120cmである。袖口幅は88cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ24cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	ロームブロック、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	6 黒褐色	砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	7 黒褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量
3 極暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量	8 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック微量	9 極暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。深さは60cmで、配置から支柱穴と考えられる。

覆土 28層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	15 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子少量	16 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	17 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	18 褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	20 極暗褐色	ロームブロック少量
7 極暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	21 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
8 極暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	22 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	23 黒褐色	ローム粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	24 暗褐色	ローム粒子少量
11 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	25 黒褐色	ロームブロック少量
12 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	26 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	27 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
14 黒褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量	28 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量

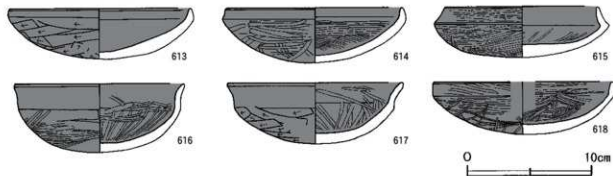
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径85cm、短径66cmの楕円形で、深さは31cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

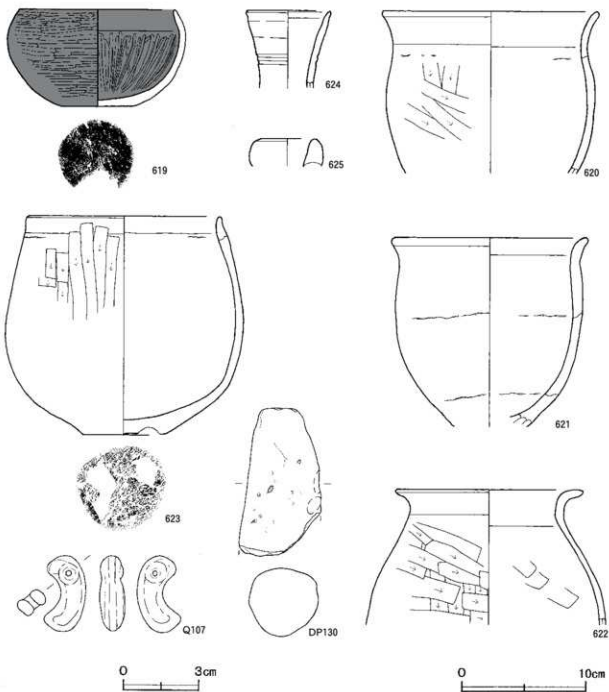
1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土師器片218点（坏37，碗1，甕179，瓶1），須恵器片1点（瓶類），手捏土器1（坏か），土製品1点（支脚），石製品1点（勾玉），鏝1点の他に、流れ込んだ弥生土器片26点も出土している。613は竈前、615は北東壁際、617は北コーナー部、621はP1付近の床面からそれぞれ出土している。624はP1覆土層から出土している。南東壁際の遺物は比較的高い位置から出土しており、埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第121図 第132号住居跡出土遺物実測図(1)



第122図 第132号住居跡出土遺物実測図(2)

第132号住居跡出土遺物観察表(第121・122図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地文	手法の特徴	出土位置	備考
613	土師器	杯	14.5	4.3	-	長石-石灰-雲母 含有胎子	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へフ削り 内面ナデ	床面	85% PL26
614	土師器	杯	13.9	4.4	-	長石-石灰-雲母 含有胎子	浅黄緑	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へフ削り後へフ磨き 内面へ フ磨き	履土中層	90% PL26
615	土師器	杯	12.2	4.0	-	長石-石灰-雲母 含有胎子	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へフ削り後へフ磨き 内面へ フ磨き	床面	85% PL26
616	土師器	杯	13.5	5.5	-	長石-石灰-雲母 含有胎子	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へフ削り後へフ磨き 内面へ フ磨き	履土下層	75% PL27
617	土師器	杯	13.9	4.9	-	長石-石灰-雲母 含有胎子	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へフ削り 内面へフ磨き	床面	70% PL26
618	土師器	杯	14.4	4.2	-	長石-石灰-赤色 胎子	にじみ赤焼	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へフ削り後へフ磨き 内面へ フ磨き	履土上層	90%
619	土師器	碗	12.4	7.7	3.7	長石-石灰-雲母	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へフ削り後へフ磨き 内面へ フ磨き 底部へフ削り	履土中層	85% PL29

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考		
620	土師器	甕	17.2	(12.9)	—	長石・石英・赤色粒子	明砂焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り	輪襷瓦	P1 覆土上層	66%
622	土師器	甕	14.6	(10.7)	—	長石・石英	浅黄焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り	内面へうナデ	床面	30%
623	土師器	甕	15.4	17.4	6.6	長石・石英・雲母	灰焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部外面へう割り	輪襷瓦	覆土上層	30%
621	土師器	小壺	15.2	(15.0)	—	長石・石英・雲母	に染り明焼	普通	口辺部内・外面横ナデ	体部内・外面横調整不明	輪襷瓦	床面	60%
624	須恵器	瓶	6.5	(6.2)	—	長石・石英	靨灰	良好	口縁部は2本の平行沈溝			P1 覆土上層	9%
625	土師器	手捏土器	4.4	(2.2)	—	長石・石英・赤色粒子	靨	普通	ナデ			床面	60%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
SP13	支脚	(11.8)	2.9～(6.6)	061.0	土(長石・石英・赤色粒子・雲母)	指環によるナデ	輪襷	覆土上層

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q107	勾玉	3.0	1.6	1.0	6.0	滑石	一方側からの穿孔 孔径0.2mm	覆土下層	P12

第133号住居跡 (第123・124図)

位置 調査区西部のD 8 e9区で、標高13.7mほどの中段段丘上に位置している。

重複関係 第134号住居跡を掘り込み、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、N-38°-Wを主軸方向とする長軸6.70m、短軸6.60mほどの方形と推定される。壁高は35～37cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、全体が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周囲にしている。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで146cmである。袖部幅は106cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りこぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ32cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 に染り明焼	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
2 暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量	6 に染り明焼	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
3 に染り明焼	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	7 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量
4 極暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量		

ピット 7か所。P1～P3は深さは22～41cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ16cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5～P7の性格は不明である。

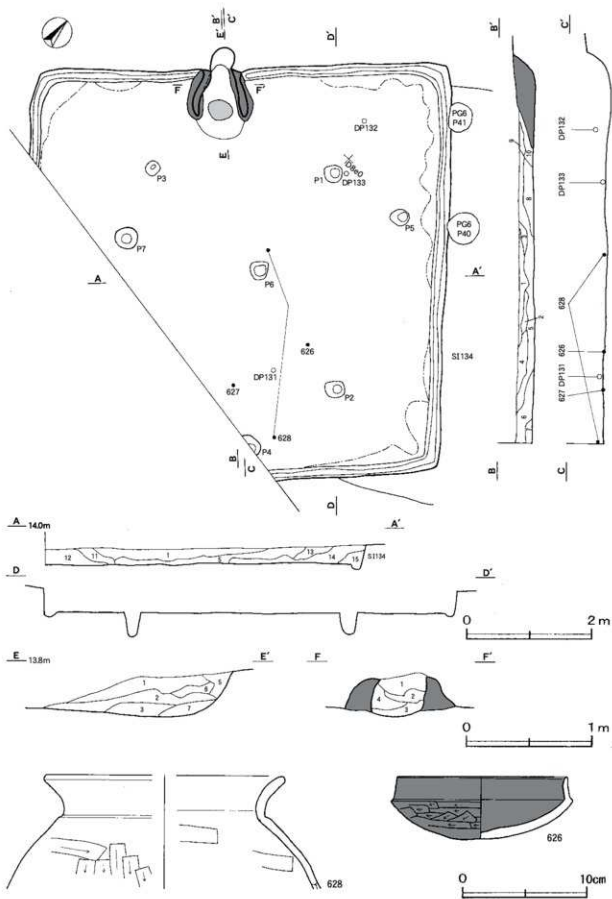
覆土 15層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

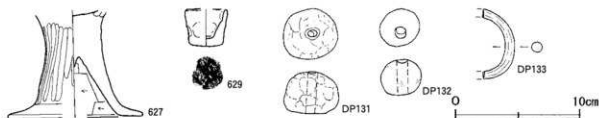
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
2 黒色	ロームブロック・炭化粒子微量	10 褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11 極暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	12 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	14 褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
7 暗褐色	ローム粒子少量	15 黒色	炭化粒子少量、ローム粒子
8 黒褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片649点(坏17, 高坏7, 甕624, 瓶1), 手捏土器1(壺カ), 土製品4点(球状土鐘2, 紡錘車1, 不明1), 環2点の他に、流れ込んだ弥生土器片106点, 須恵器片11点も出土している。626・627は中央部南東寄りの床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第123图 第133号住居跡・出土遺物実測図



第124図 第133号住居跡出土遺物実測図

第133号住居跡出土遺物観察表(第123・124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
626	土師器	杯	13.4	5.0	—	長石・石英母	黒	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	90%
627	土師器	高杯	—	8.53	10.8	長石・石英母	にぶ 黒	普通	脚部外面へラ削り後へラ磨き 脚部内面へラ削り	床面	25%
628	土師器	甕	18.6	9.0	—	長石・石英母	にぶ 黒	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	覆土下層	13%
629	土師器	手捏土器	3.2	2.9	2.1	長石・石英母	黒 焼	普通	指側によるナデ 指端削	覆土中	70%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP31	球状土埴	4.4	0.7	3.3	83.7	土(長石・石英母)	指端削 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP32	球状土埴	3.3	0.9	2.9	27.2	土(長石・石英母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP33	不明土製品	5.0	2.6	0.8	6.2	土(長石・石英母)	全面丁寧なナデ	覆土下層	

第136号住居跡 (第125・126図)

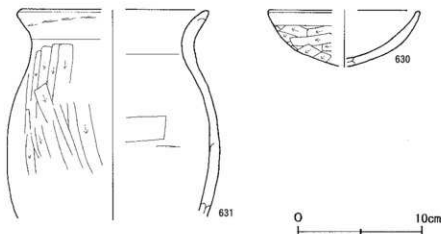
位置 調査区西部のC 8 h8区で、標高14.9mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第120号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、N-34°-Eを主軸方向とする一辺が5.80mほどの方形と推定される。壁高は50~80cm前後で、外積して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南側部分が踏み固められている。

ピット 3か所。深さは64~74cmで、配置から主柱穴と考えられる。



第125図 第136号住居跡出土遺物実測図

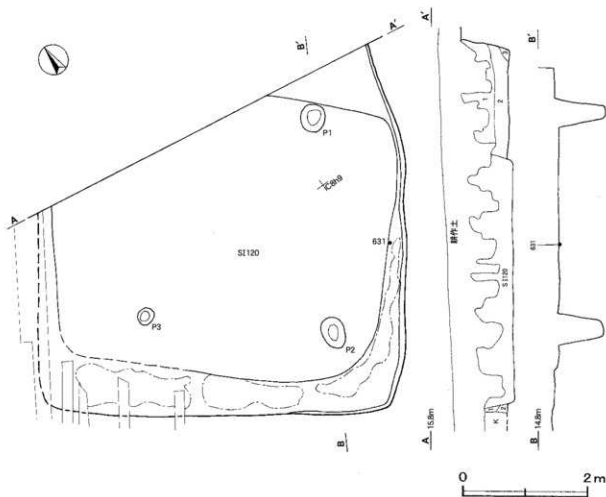
覆土 3層に分層されるが、耕作による攪乱が激しいため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片65点（坏13、高坏5、甕47）、礎1点の他に、流れ込んだ弥生土器片12点も出土している。
631は南東壁寄りの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から6世紀代と考えられる。



第126図 第136号住居跡実測図

第136号住居跡出土遺物観察表(第125図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
630	土師器	坏	[12.0]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	黒	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中	25%
631	土師器	甕	[15.0]	(8.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	40%

第138号住居跡（第127図）

位置 調査区中央部のD10c9区で、標高22.6mほどの台地縁部部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による攪乱が激しいため遺構全体の確認はできなかったが、N-7°-Wを主軸方向とする長軸3.23m、短軸3.18mの方形と推定される。遺存している壁高は23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されているが、第8号溝に掘り込まれているため煙道部は検出できなかった。遺存している袖部幅は85cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 鹿沼パミス少量、ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子微量

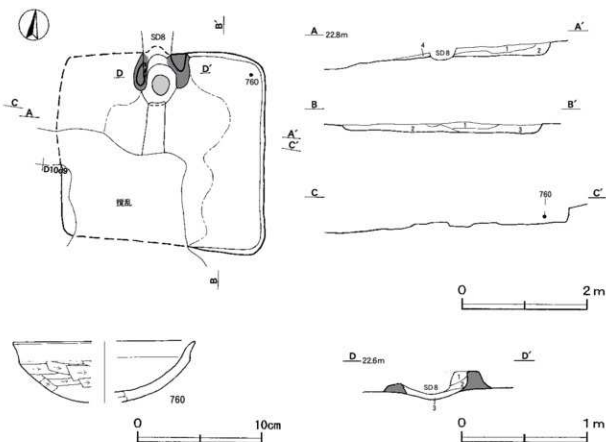
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・鹿沼パミス微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・鹿沼パミス微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・鹿沼パミスブロック・砂質粘土粒子微量
- 4 暗褐色 鹿沼パミスブロック少量、焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片10点（環1、環9）の他に、流れ込んだ縄文土器片1点、弥生土器片3点も出土している。760は北東コーナー一部の覆土下層から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、第139号住居跡と規模や主軸方向がほぼ同じであり、出土遺物の特徴も酷似することから7世紀前半と考えられる。



第127図 第138号住居跡・出土遺物実測図

第138号住居跡出土遺物観察表(第127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	手法の特徴	出土位置	備考
700	土器跡	杯	[14.6]	[4.8]	-	長石-6長雲母	にんべん	普通	口辺部内・外面ナデ 体部外面へ斜削 内面ナデ	履土下層	40%

第139号住居跡 (第128・129図)

位置 調査区中央部のD10-c0区で、標高23.0mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸3.42m、短軸3.30mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は4~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで83cmである。袖部幅は89cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ31cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

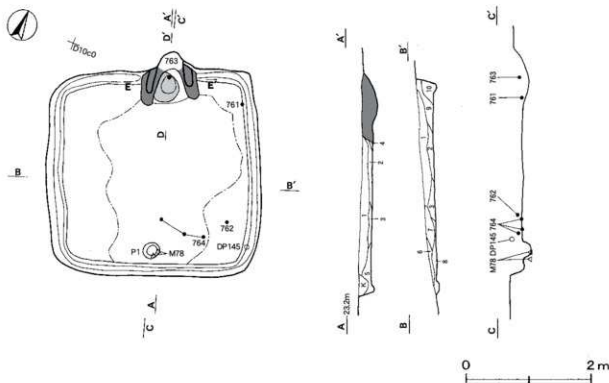
- | | | | |
|--------|---------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 にんべん | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス少量 |
| 2 にんべん | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

ピット 1か所。深さは13cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

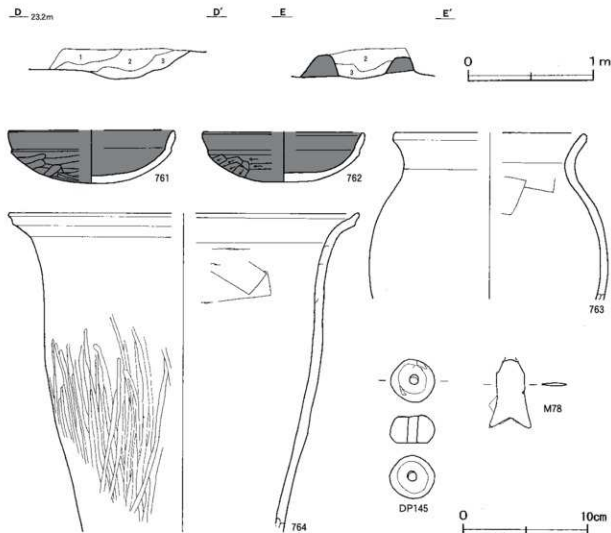
- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | 鹿沼バミス少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 5 褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子・鹿沼バミス微量 | 6 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼バミスブロック微量 |
| | | 9 褐色 | 鹿沼バミス中量、ローム粒子少量 |
| | | 10 褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス少量 |



第128図 第139号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片42点(坏4, 甕37, 瓶1), 土製品1点(紡錘車), 鉄製品1点(鉄鏝), 礫5点の他に, 流れ込んだ弥生土器片12点も出土している。761は北東コーナー一部の覆土下層, 762は南東コーナー一部の覆土下層からそれぞれ出土している。764は南東コーナー寄りの床面から覆土下層にかけて出土している。M78はP1の底面近くから出土している。

所見 時期は, 出土土器から7世紀前半と考えられる。



第129図 第139号住居跡・出土遺物実測図

第139号住居跡出土遺物観察表(第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	手法の特徴	出土位置	備考	
761	土師器	坏	[13.2]	4.2	-	長石・石英雲母	にひ・晒	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削後へラ磨き 内面ナゲ	覆土下層	50%	
762	土師器	坏	[12.8]	4.0	-	長石・石英雲母	にひ・美粒	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	覆土下層	40%	
763	土師器	甕	[15.0]	[13.2]	-	長石・石英雲母	にひ・晒	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面縦横調整不明 内面へラナゲ	壺内	20%	
764	土師器	瓶	[27.8]	[25.3]	-	長石・石英雲母	にひ・晒	普通	口辺部内・外面横ナゲ ナゲ 輪切削	体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナゲ	床面	40%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M78	紡錘車	3.6	0.7	2.3	30.0	土(長石・石英雲母)	ナゲ	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M28	鉄鍋	(長)5	3.3	0.3	(重)5	鉄	無家5角溝 断面平型	P1内	

第140号住居跡 (第130図)

位置 調査区中央部のD11d1区で、標高23.4mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸3.52m、短軸3.16mの長方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は10~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで75cmである。袖部幅は99cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

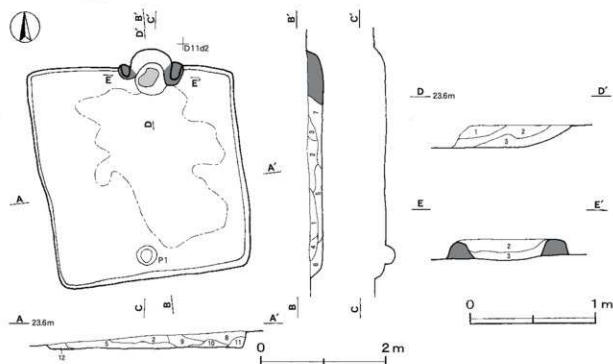
- 1 暗褐色 砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土プロ 3 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子・砂質粘土
粒少量
2 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物少量

ピット 1か所。深さ16cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 12層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、甕沼バミス微量 7 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質
粘土粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量、甕沼バミスブロック微量
3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・砂質 8 暗褐色 ロームブロック中量
粘土粒子微量
4 褐色 ロームブロック少量、甕沼バミス微量 9 暗褐色 ローム粒子少量、甕沼バミス微量
5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 10 暗褐色 ローム粒子少量、甕沼バミス微量
6 褐色 ロームブロック少量、炭化物・甕沼バミスブロック 11 暗褐色 ロームブロック中量、甕沼バミス微量
微量 12 褐色 ローム粒子少量、甕沼バミス微量



第130図 第140号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片13点(號)の他に、流れ込んだ弥生土器片4点も出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、第139号住居跡と規模や主軸方向がほぼ同じであり、出土遺物の特徴も酷似することから7世紀前半と考えられる。

第142号住居跡 (第131・132図)

位置 調査区中央部のD10f0区で、標高23.0mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第141号住居跡を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。

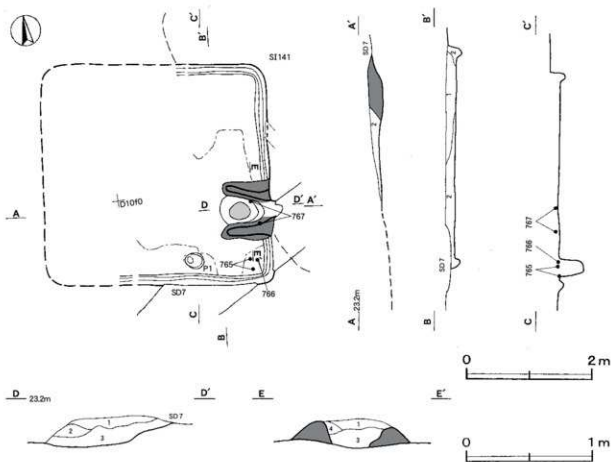
規模と形状 耕作による攪乱が激しく、遺構全体の確認はできなかったが、東西長2.90mほど、南北長3.50mほどが確認できた。遺存している竈や壁からN-97°-Eを主軸方向とする方形と推定される。壁高は6~15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈付近が踏み固められており、遺存部分には竈部分を除いて溝が周回している。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで101cmである。袖幅は93cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量 |
| 2 紅褐色 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量 | 4 紅褐色 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量 |



第131図 第142号住居跡実測図

ビット 1か所。深さ38cmで、性格は不明である。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

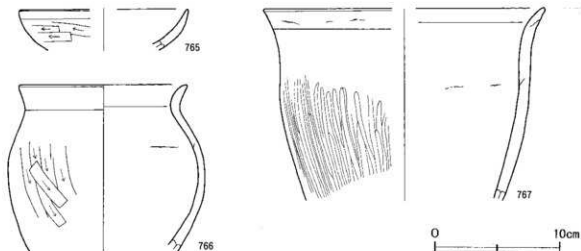
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片60点（坏4，甕55，甎1），礎2点の他に、流れ込んだ弥生土器片6点も出土している。

765・766は南東コーナー一部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第132図 第142号住居跡出土遺物実測図

第142号住居跡出土遺物観察表(第132図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	地成	手法的特徴	出土位置	備考
765	土師器	坏	[13.4]	(3.2)	-	長石-石英-雲母-赤鉄粒子	橙	普通	口径部内・外面横ナゲ 体部外面へ斜り 内面ナゲ	床面	20%
766	土師器	甕	13.4	(13.2)	-	長石-石英	にじみ橙	普通	口径部内・外面横ナゲ 体部外面へ斜り 輪轆痕	床面	70%
767	土師器	甎	[22.2]	(15.2)	-	長石-石英-雲母-赤鉄粒子	にじみ橙	普通	口径部内・外面横ナゲ 体部外面へ7割斜後へラ磨き 輪轆痕	礎内	15%

第144号住居跡(第133・134図)

位置 調査区中央部のD11e3区で、標高23.7mほどの台地上の平坦部に位置している。

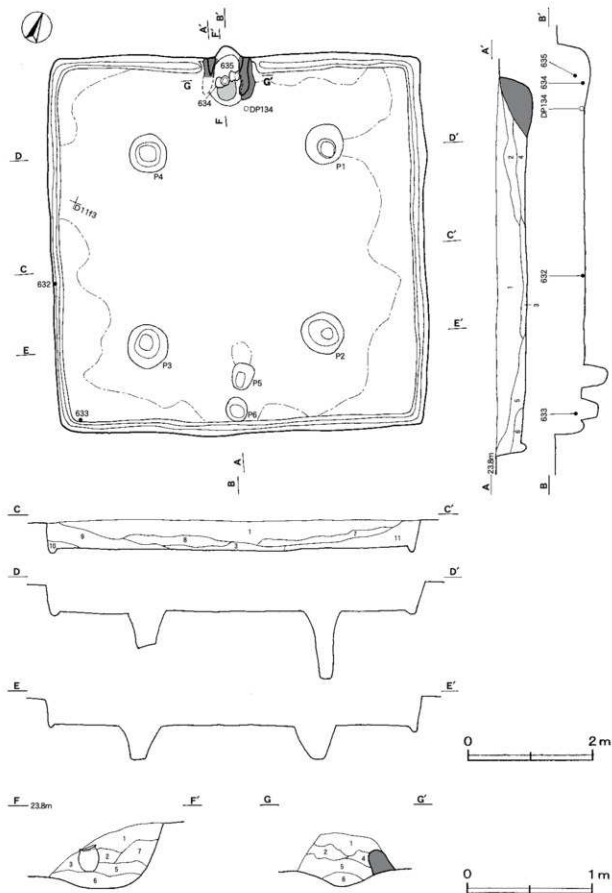
規模と形状 一边が6.00mほどの方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は41~45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のやや中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで96cmである。袖部幅は76cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面に皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ19cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

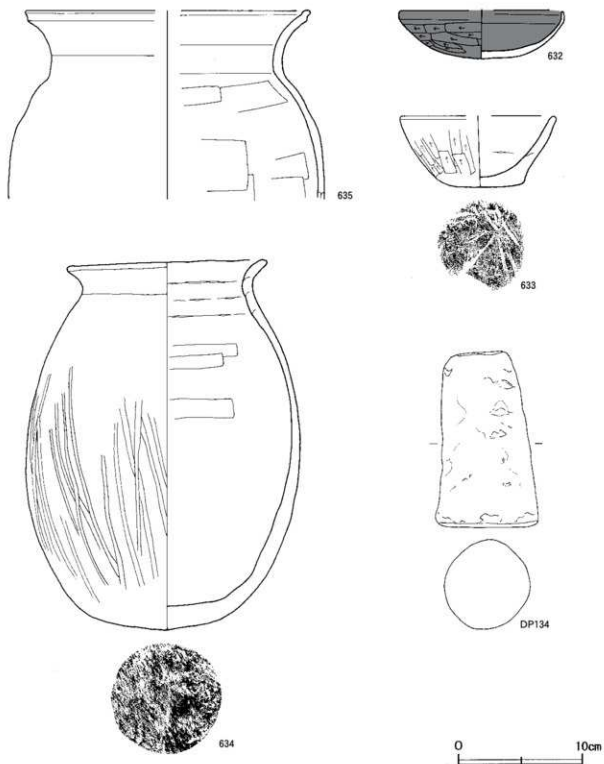
土層解説

- 1 にじみ褐色 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 4 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 5 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量
 3 暗褐色 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 6 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量
 7 極暗赤褐色 炭化物少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量



第133图 第144号住居跡実測図

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ57～106cmで、配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ44cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ32cmで、覆土上層部分に多少のしまりが確認されたことから、P 5以前の出入口施設に伴うピットと考えられる。



第134図 第144号住居跡出土遺物実測図

覆土 11層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量	6 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	8 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物少量
5 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量	10 黒褐色	炭化物少量、ローム粒子微量
		11 褐色	ローム粒子中量、炭化物少量

遺物出土状況 土師器片315点（坏51, 鉢1, 甕263）、土製品1点（支脚）、礫18点の他に、流れ込んだ弥生土器片1点も出土している。632は南西壁際の覆土下層、633は南コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。634・635は竈内からの出土で、住居の廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第144号住居跡出土遺物観察表(第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
632	土師器	坏	[13.0]	3.8	-	長石・石英質・赤色粘土	にひ・黄緑	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へう削り 内面ナデ	覆土下層	50%
633	土師器	鉢	[12.3]	3.6	6.8	長石・石英質	にひ・黄	普通	体部外面へう削り 輪線施	覆土下層	50%
634	土師器	甕	15.6	29.4	8.4	長石・石英質	にひ・黄	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へう削り 内面へう削り	竈内	100% P.32
635	土師器	甕	[22.6]	[15.0]	-	長石・石英質・赤色粘土	浅黄緑	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面へう削り	竈内	20%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
IP34	支脚	[14.1]	5.9-8.2	(860.6)	土(長石・石英質・赤色粘土・礫)	指環によるナデ 粗製	床面	P.41

第145号住居跡(第135・136図)

位置 調査区中央部のD11g6区で、標高23.8mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸5.50m、短軸5.00mほどが確認され、N-23°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認された壁高は32~40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されていると推定され、焚口部から煙道部まで102cmである。袖部幅は92cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、熱を受けて硬化しているが赤変部分は確認できなかった。煙道部は、壁外へ28cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。第3層は天井部の崩落層と考えられる。

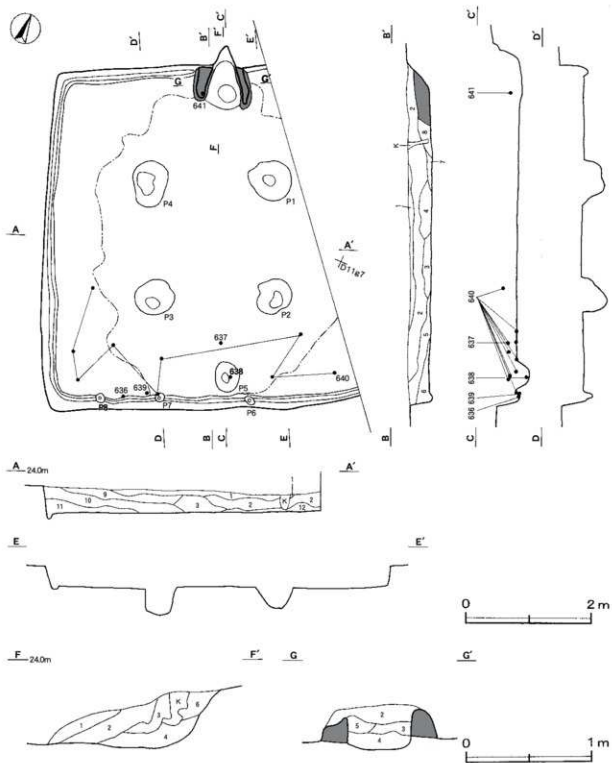
土層解説

1 暗褐色	炭化物少量、砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	4 黒褐色	焼土粒子・炭化物少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
2 黒褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	5 暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
3 オリーブ色	砂質粘土粒子多量、焼土ブロック・炭化物微量	6 にひ・黄緑	砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物少量

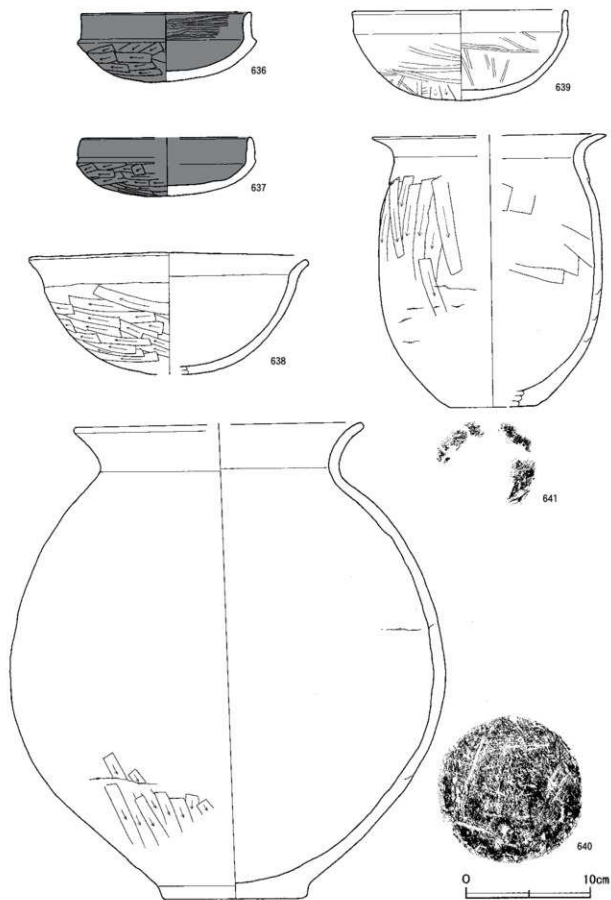
ピット 8か所。P1~P4は深さ33~44cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6~P8は深さ12~14cmで、壁柱穴と考えられるが明確ではない。覆土 12層に分層される。一部の層はレンズ状の堆積状況を示しているが、遺物の出土状況や接合関係などから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・砂質粘土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |



第135図 第145号住居跡実測図



第136图 第145号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片164点(坏38, 碗2, 甕124), 礫4点の他に, 流れ込んだ弥生土器片137点も出土している。636は南側の壁溝, 637は出入り口ピット付近の床面からそれぞれ出土している。638は底部が穿孔されており, 出入り口ピットの底面から逆位で出土している。640は南寄りの覆土中層から床面より出土していることから, 埋没の過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第145号住居跡出土遺物観察表(第136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
636	土師器	坏	13.4	5.6	-	長石-石英-雲母 赤色粒子	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナゲ(後内面へラ磨き) 体部外面へラ削り	壁溝	100%
637	土師器	坏	[13.4]	4.6	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	床面	90%
638	土師器	坏	22.0	9.7	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	P5内	95% P129
639	土師器	坏	17.0	7.1	-	長石-石英-雲母	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り(後へラ磨き) 体部内面へラ磨き	床面	75% P129
640	土師器	甕	[22.8]	38.0	11.4	長石-石英-赤色 粒子	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 輪襷	覆土中層 ~床面	60%
641	土師器	甕	[18.4]	21.6	7.1	長石-石英	にじみ焼	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へナゲ 輪襷	覆土 ~室内	40%

第146号住居跡(第137・138図)

位置 調査区中央部のD1118区で, 標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第148・149号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが, 長軸5.96m, 短軸5.70mの方形で, 主軸方向はN-12°-Wである。確認された壁高は42~52cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められており, 竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されていると考えられ, 焚口部から煙道部まで110cmである。袖部幅は97cmで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は, 床面と同じ地山面を使用しており, 火を受けて赤変硬化している。煙道部は, 壁外へ19cm掘り込まれ, 火床面から急激に立ち上がっている。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | 砂質粘土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量 |
| | | 7 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 8 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ76~90cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ27cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

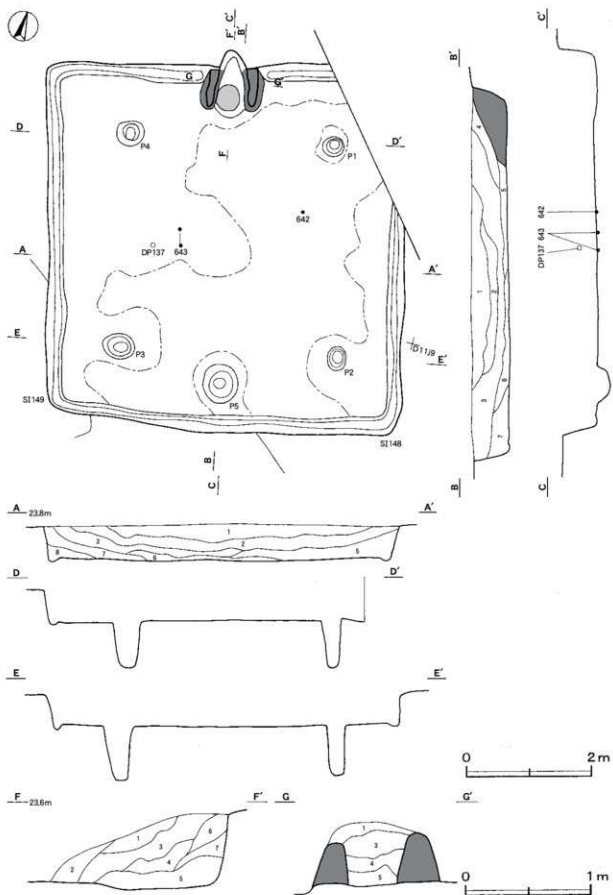
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

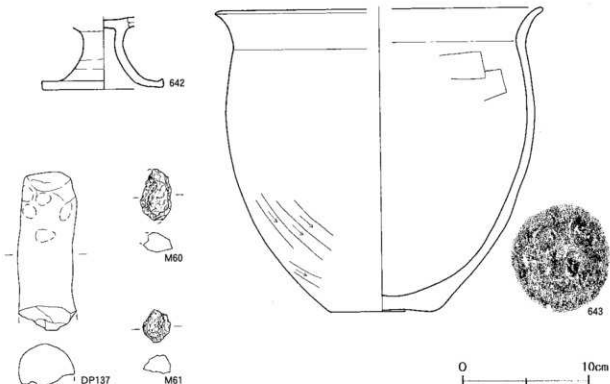
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化物微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片388点(坏90, 甕298), 須恵器1点(高坏カ), 土製品6点(支脚1, 不明5), 鉄滓2点, 礫20点の他に, 流れ込んだ弥生土器片261点も出土している。642・643は中央部の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀代と考えられる。



第137图 第146号住居跡実測図



第138図 第146号住居跡・出土遺物実測図

第146号住居跡出土遺物観察表(第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
642	須恵器	高壁	—	(15.7)	9.7	長石-石英	褐色	普通	脚部内・外面ロクロナデ	床面	45%
643	土師器	甕	(25.6)	23.9	8.2	長石-石英-雲母 赤土胎子	にじみ	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	50%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP137	支脚	(12.4)	4.8	(25.6)	土(長石-石英-雲母)	ナデ 指通版	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M60	筒状片	(4.0)	(2.6)	1.5	(28.7)	鉄	表面に赤錆付着 凹凸有り	覆土中	
M61	筒状片	2.6	2.3	1.6	6.4	鉄	表面に赤錆付着 凹凸有り	覆土中	

第147号住居跡(第139～142図)

位置 調査区中央部のE11a9区で、標高23.6mほどの台地上に位置している。

規模と形状 北東側と南西側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸4.90m、短軸3.82mほどが確認された。竈や柱穴の位置などから判断して、N-42°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は40～62cmで、外傾して立ち上がっている。

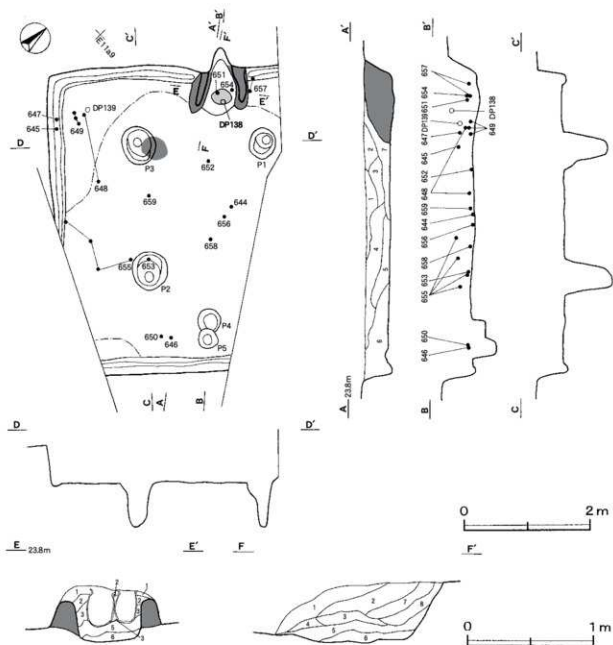
床 ほほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで107cmである。袖部幅は93cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ28cm掘り込まれ、火床面から急激に立ち上がっている。

土層解説

- | | |
|----------------------------------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量 | 7 暗褐色 砂質粘土粒子少量、炭化物微量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 暗褐色 炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P3は深さ70～74cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ24cm、P5は深さ42cmで、配置からいずれも出入り口施設に伴うピットと考えられるが、土層断面からP5が新しいことが確認された。



第139図 第147号住居跡実測図

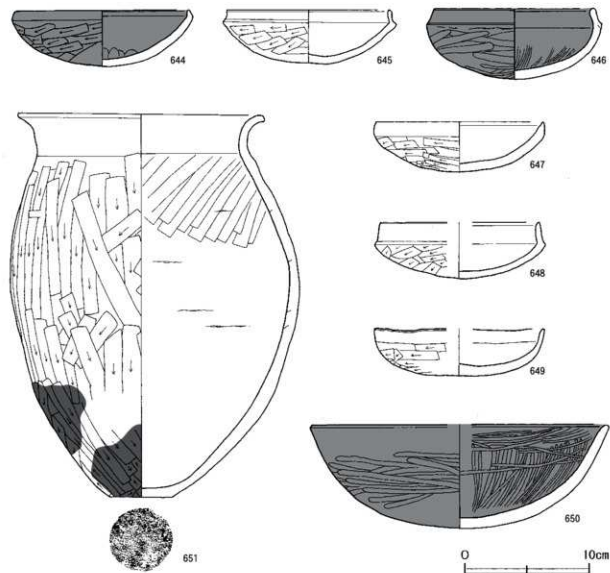
覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

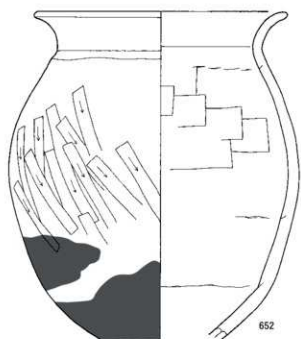
- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化物粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| | | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片396点（坏70点，椀1，高坏1，甕324），ミニチュア土器2点（壺，甕），土製品2点（球状土錘，支脚），礫14点の他に、流れ込んだ弥生土器片97点も出土している。粘土塊はP3に流れ込むような状態で検出された。遺物は覆土中全体から出土しており、平面的にも散らばりが認められることから、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。644は中央部の床面，645は南西壁際の覆土中層，646・650は出入りロピット付近の床面からそれぞれ出土している。651・654は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。654については激しい2次焼成を受けており底部の復元が不可能であった。658は中央部のほぼ床面，659は中央部P3寄りの床面からそれぞれ出土している。

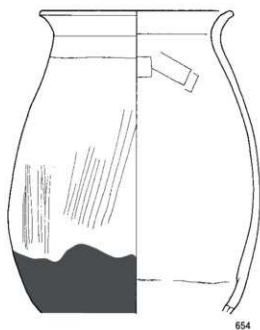
所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



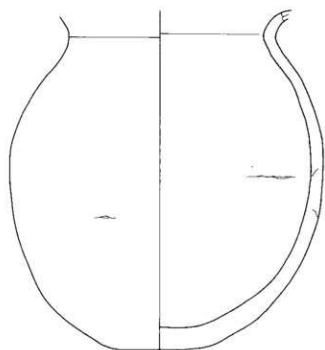
第140図 第147号住居跡出土遺物実測図(1)



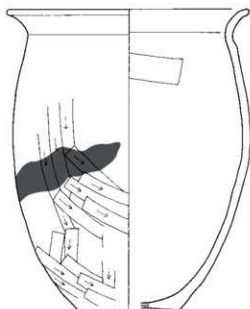
652



654



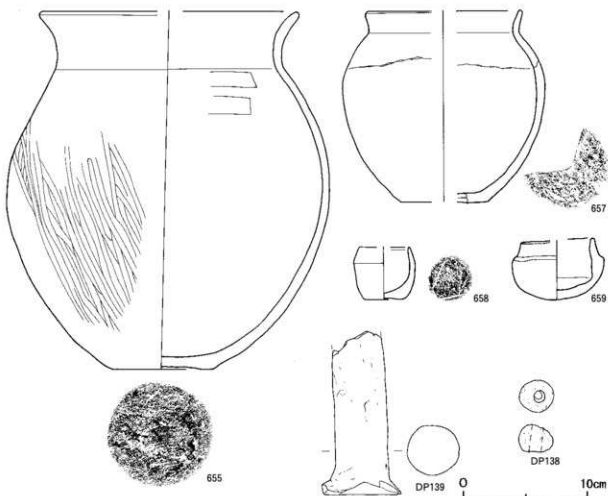
653



656



第141图 第147号住居跡出土遺物実測図(2)



第142図 第147号住居跡出土遺物実測図(3)

第147号住居跡出土遺物観察表(第140~142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他記	手法の特徴	出土位置	備考
644	土銅器	杯	13.9	4.5	—	長石・石英・雲母	灰褐色		口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ後仕上げナゲ	床面	100% P1.27
645	土銅器	杯	13.0	4.4	—	長石・石英・雲母	靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	覆土中層	90%
646	土銅器	杯	12.7	5.6	—	長石・石英・雲母	褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	床面	90%
647	土銅器	杯	13.4	3.9	—	長石・石英・雲母	にじみ赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	覆土中層	90% P1.27
648	土銅器	杯	[12.6]	4.5	—	長石・石英・雲母	にじみ赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	覆土下層	75%
649	土銅器	杯	[13.6]	3.8	—	長石・石英	灰黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	覆土下層	90%
650	土銅器	杯	[23.6]	8.3	—	長石・石英・雲母	にじみ靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削りへラ磨き 内面へラ磨き	床面	50%
651	土銅器	甕	19.4	30.7	5.0	長石・石英・雲母・砂	にじみ黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラナゲ 輪縁肌	甕内	95% 外面残付着 P1.32
652	土銅器	甕	19.8	(26.3)	—	長石・石英・赤色粘土	にじみ靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面へラナゲ 輪縁肌	床面	90% 外面残付着
653	土銅器	甕	(27.1)	9.3	—	長石・石英・赤色粘土	にじみ靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部内・外面華輪調整不明 輪縁肌	床面	90%
654	土銅器	甕	15.1	(24.2)	—	長石・石英・赤色粘土	にじみ靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナゲ 輪縁肌	甕内	75% 外面残付着
655	土銅器	甕	[20.4]	28.6	8.0	長石・石英	にじみ靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り後へラ磨き 体部内面へラナゲ	覆土中層	50%
656	土銅器	甕	19.0	24.1	[8.2]	長石・石英	にじみ赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へラ削り 内面ナゲ	床面	50% 外面残付着
657	土銅器	小形甕	[12.2]	15.2	[6.8]	長石・石英・雲母	靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部内・外面華輪調整不明 輪縁肌	覆土下層	50%
658	土銅器	ミョウブア	[4.0]	4.2	3.2	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面ナゲ 内面ナゲ	床面	95% 甕型 内面残付着 P1.33 55% 輪縁肌 内面残付着
659	土銅器	ミョウブア	[5.8]	5.0	—	長石・石英・雲母	にじみ靑	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面ナゲ 内面ナゲ	床面	

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
IPX3	球状土埴	2.8	0.9~1.0	2.1	13.3	土(長石・石英・雲母)	一方はらの穿孔	覆土土層	

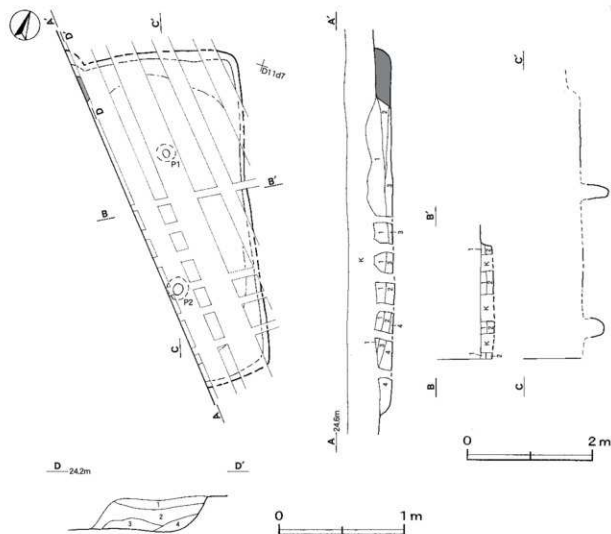
番号	器種	長さ	径	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
IPX3	支脚	(13.0)	(4.1)~(6.4)	(287.0)	土(長石・石英・雲母)	ナデ	覆土土層	

第150号住居跡 (第143図)

位置 調査区中央部のD11d6区で、標高24.0mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかつたが、長軸5.40m、短軸2.60mほどが確認された。確認できた壁や柱穴から判断して、N-26°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。



第143図 第150号住居跡実測図

竈 検出された状況から北東壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで100cmほどが確認された。耕作による擾乱により袖部は遺存しておらず、構築状況については不明である。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ26cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量 | 4 比色不明 | 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量 |

ピット 2か所。深さは35～43cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子 | 4 灰褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片4点（環1、甕3）、礫1点の他に、流れ込んだ弥生土器片1点も出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土遺物や遺構の形態などから6世紀代と考えられる。

第151号住居跡（第144図）

位置 調査区中央部のD11e8区で、標高23.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸5.50m、短軸5.40mの方形で、主軸方向はN-39°-Wである。壁高は12～28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周囲している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで115cmである。耕作による擾乱が激しく右袖部の一部しか遺存していない。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されていたと考えられる。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ42cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|---------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子中量、炭化物微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量 |
| 2 黄褐色 | 砂質粘土粒子多量、焼土粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 3 比色不明 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量 | | |

ピット 6か所。P1～P4は深さ46～60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ52cmで、覆土上層部分に多少の硬化面が確認されたことから、P5以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。

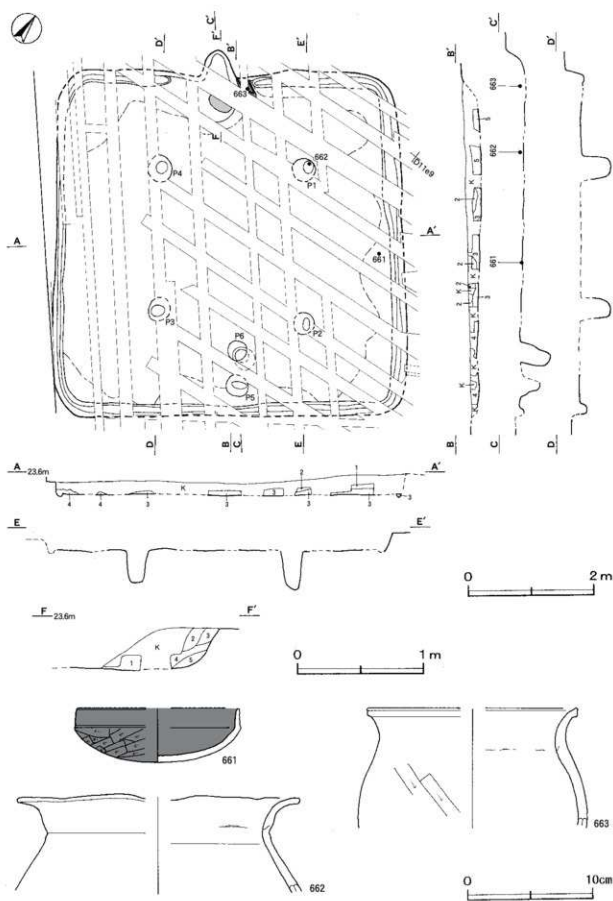
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片87点（環55、甕32）の他に、流れ込んだ弥生土器片53点も出土している。661は北東壁際の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第144图 第151号住居跡・出土遺物実測図

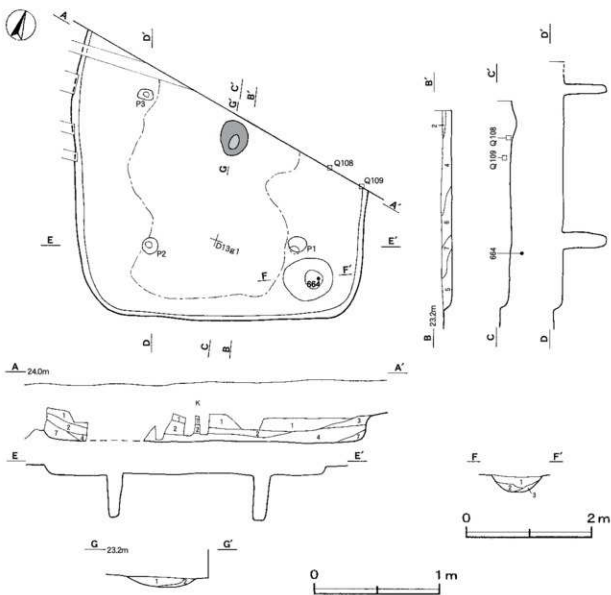
第151号住居跡出土遺物観察表(第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	手法の特徴	出土位置	備考
661	土製器	杯	[12.8]	4.3	-	長石・石英・雲母・金剛砂子	明赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へ9割り 内面ナゲ	床面	40%
662	土製器	壺	[23.8]	7.59	-	長石・石英・雲母	にじみ褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部内・外面ナゲ 輪襷痕	床面	10%
663	土製器	壺	[16.6]	9.59	-	長石・石英・赤色砂子	にじみ褐色	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へ9割り 内面ナゲ 輪襷痕	履土下層	10%

第157号住居跡 (第145・146図)

位置 調査区東部のD12f0区で、標高23.0mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸4.60m、短軸4.50mほどが確認された。確認できた壁や柱穴から判断して、N-17°-Wを主軸方向とする隅丸方形または隅丸長方形と推定される。確認できた壁高は12~38cmで、外傾して立ち上がっている。



第145図 第157号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北西寄りに位置していると考えられ、長径55cm、短径45cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。深さ69～74cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 5 極暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 6 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 7 黒褐色 ローム粒子少量
4 暗褐色 ローム粒子少量

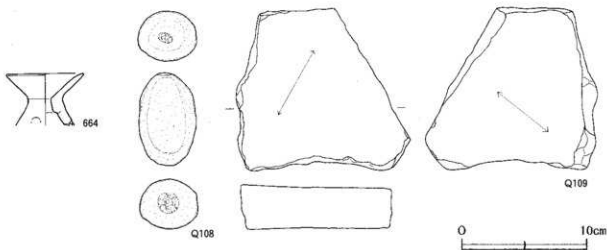
貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径80cm、短径68cmの楕円形で、深さは24cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片35点（坏3、高坏1、器台1、甕30）、石器2点（敲石、砥石）の他に、流れ込んだ弥生土器片29点も出土している。664は貯蔵穴内から出土している。Q108・Q109は東壁側の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀代と考えられる。



第146図 第157号住居跡出土遺物実測図

第157号住居跡出土遺物観察表(第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
664	土師器	器台	6.0	(4.1)	—	長石・石英・雲母	明黄褐色	普通	坏器内・外面十デ 輪轆痕	貯蔵穴内	66%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q108	敲石	7.4	4.6	4.0	197.6	石英	全面二層痕 内端部二層打痕	覆土下層	P142
Q109	砥石	(12.9)	(13.9)	3.6	(8015.1)	砂岩	片面二面	覆土下層	

表4 古墳時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (m)	床面	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係 (前→新)	
							壁溝	土柱	土間	土	石	骨					瓦
72	D10g3	N-S°-E	[長方形]	3.52×[3.00]	30	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器	7世紀前半		
77	D9f9	N-28°-W	方形	3.40×3.52	4~12	平坦	-	-	1	-	-	堀	-	自然	土師器、手捏土器、礎	6世紀後葉	S108→本跡
79	D9d8	N-18°-W	方形	4.80×4.80	20~66	平坦	全周	4	1	-	-	堀	1	人瓦	土師器、須恵器、土製品、石器、鉄製品、礎	6世紀中葉	S100-90→本跡
80	D9c9	N-20°-W	方形	7.70×7.40	8~56	平坦	全周	4	2	-	-	堀	1	自然	土師器、ミニチュア土器、土製品、礎	6世紀後葉	S100-02→本跡-S179
81	C9j8	N-47°-W	方形	4.55×4.42	24~66	平坦	全周	4	2	-	-	堀	1	人瓦	土師器、手捏土器、土製品	6世紀中葉	S184→本跡
84	D9a8	N-62°-E	不明	(3.10×2.20)	-	平坦	-	-	-	-	-	堀	-	自然	土師器、土製品、礎	6世紀後葉	本跡-S181
86	C9i5	N-46°-W	方形	6.68×6.46	24~66	平坦	全周	4	1	2	-	堀	1	自然	土師器、土製品、石器、礎	6世紀後葉	
93	D9i6	N-44°-W	方形	5.70×5.54	30~78	平坦	全周	4	1	-	-	堀	-	自然	土師器、土製品、軽石	6世紀後葉	S192→本跡
97	D9g0	N-18°-W	方形	4.90×4.70	25~52	平坦	全周	4	1	1	-	堀	-	自然	土師器、土製品、礎	6世紀後葉	S198→本跡
98	D9f9	N-34°-W	方形	5.26×5.16	18~24	平坦	土柱全周	4	1	-	-	堀	1	人瓦	土師器	6世紀後葉	S117→本跡-S177-97
99	D9e5	N-44°-W	方形	5.26×5.15	35~60	平坦	全周	4	1	1	-	堀	-	自然	土師器、手捏土器、土製品、鉄製品、礎	7世紀前半	S100-137→本跡-第21号墓坑-SF7
101	D9d4	N-30°-W	方形	5.36×5.14	28~90	平坦	土柱全周	4	1	-	-	堀	1	自然	土師器、手捏土器、土製品、石器、鉄製品、礎	7世紀前半	S117→本跡-S114-SB3-SR161
106	D9c1	N-49°-E	方形	4.56×4.47	23~46	平坦	-	5	-	-	-	堀	1	自然	土師器、土製品、鉄器	6世紀前葉	S105→本跡-SR1-6-SF10
116	C8j0	N-21°-W	方形	4.58×4.26	20~32	平坦	-	4	1	-	-	堀	-	自然	土師器、土製品、礎	7世紀後半	S119→本跡-S118
119	C8j0	N-10°-E	[長方形]	4.95×[4.30]	60	平坦	-	4	1	1	伊1	自然	土師器、土製品、礎	4世紀代	本跡-S110-118		
122	D8a7	N-30°-W	方形	5.24×5.05	14~30	平坦	土柱全周	4	1	-	-	堀	1	人為自然	土師器、須恵器、土製品、礎	7世紀前半	S124-125-126→本跡-第22号墓坑
123	C8j7	N-47°-W	[方形]	[4.80×4.76]	13~29	平坦	一部	4	1	-	-	1	人瓦	土師器、鉄製品、礎	6世紀後葉	S124→本跡-S123	
124	C8j7	N-44°-W	[方形]	[5.98×5.69]	6~29	平坦	-	4	-	-	-	-	人瓦	土師器、土製品、礎	4世紀代	本跡-S121-122-123	
125	D8a6	N-55°-W	長方形	4.60×3.80	20	平坦	一部	4	1	-	-	堀	1	人瓦	土師器、手捏土器、土製品、礎	6世紀後葉	本跡-S122-S169-169
126	D8b7	N-8°-W	方形	4.50×4.40	-	平坦	-	-	-	-	伊2	-	-	不明	-	5世紀以前	本跡-S122-127
127	D8c7	N-37°-W	方形-長方形	6.20×(2.96)	30	平坦	土柱全周	1	-	-	-	-	-	人瓦	土師器、土製品、石器、礎	6世紀後葉	S126→本跡-SF9
128	C9h1	N-68°-W	[長方形]	3.80×[3.40]	8	平坦	-	-	-	-	-	伊1	-	不明	土師器	4世紀代	
130	C8i4	N-35°-W	方形-長方形	6.82×(5.40)	40~44	平坦	土柱全周	4	-	-	-	堀	1	自然	土師器、土製品、石器、鉄器、礎	6世紀前葉	
132	D9f2	N-42°-W	方形-長方形	(5.80)×(4.40)	39~78	平坦	土柱全周	1	-	-	-	堀	1	人瓦	土師器、須恵器、手捏土器、土製品、石器、礎	6世紀後葉	
133	D8e9	N-38°-W	[方形]	6.70×6.60	36~37	平坦	土柱全周	3	1	3	-	堀	1	人瓦	土師器、手捏土器、土製品、礎	6世紀中葉	S134→本跡-P166
136	C8i8	N-34°-E	[方形]	(5.80)×(5.80)	50~80	平坦	-	3	-	-	-	-	-	不明	土師器	6世紀代	本跡-S1320
138	D10c9	N-77°-W	方形	3.23×3.18	23	平坦	-	-	-	-	-	堀	1	自然	土師器	7世紀前半	本跡-S138
139	D10c0	N-21°-W	方形	3.42×3.30	4~26	平坦	全周	-	1	-	-	堀	1	人瓦	土師器、土製品、鉄製品、礎	7世紀前半	
140	D1d1	N-77°-W	長方形	3.82×3.16	10~20	平坦	-	-	-	-	-	堀	1	人瓦	土師器	7世紀前半	
142	D10f0	N-97°-E	[方形]	3.50×[2.30]	6~15	平坦	土柱全周	-	-	-	-	堀	1	自然	土師器、礎	7世紀前半	S141→本跡-S137
144	D1i6	N-25°-W	方形	6.00×6.00	41~45	平坦	全周	4	2	-	-	堀	1	自然	土師器、土製品、礎	6世紀中葉	
145	D1i6g	N-27°-W	方形-長方形	5.50×(5.00)	32~40	平坦	土柱全周	4	1	3	-	堀	1	人瓦	土師器、礎	6世紀中葉	
146	D1i18	N-12°-W	方形	5.96×5.70	42~52	平坦	一部	4	1	-	-	堀	1	自然	土師器、須恵器、土製品、鉄器、礎	6世紀代	S148-149→本跡
147	E1i1g	N-42°-W	方形-長方形	4.90×(3.82)	40~62	平坦	土柱全周	3	2	-	-	堀	1	自然	土師器、ミニチュア土器、土製品、礎	6世紀後葉	
150	D1i16	N-26°-W	方形-長方形	5.40×(2.60)	16	平坦	-	2	-	-	-	堀	1	自然	土師器、礎	6世紀代	
151	D1i16	N-30°-W	方形	5.50×5.40	12~28	平坦	全周	4	2	-	-	堀	1	自然	土師器	6世紀中葉	
157	D12f0	N-17°-W	(圓丸方形-圓丸長方形)	4.60×(4.50)	12~38	平坦	-	3	1	-	伊1	1	自然	土師器、石器	4世紀代		

4 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、中段段丘上から奈良時代・平安時代の住居跡11軒と掘立柱建物跡3棟が確認された。

以下、遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第74号住居跡 (第147図)

位置 調査区西部のD10f2区で、標高16.2mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による擾乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸3.10m、短軸2.50 mほどが確認された。遺存している壁や検出された竈の位置などから判断して、N-120°-Eを主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は4 cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前付近が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周囲している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで74cmである。袖部幅は79cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を若干皿状に掘りくぼめて使用している。煙道部は、壁外へ23cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量、小石微量 |
| 2 紅褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量 | |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、小石微量 | 5 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |

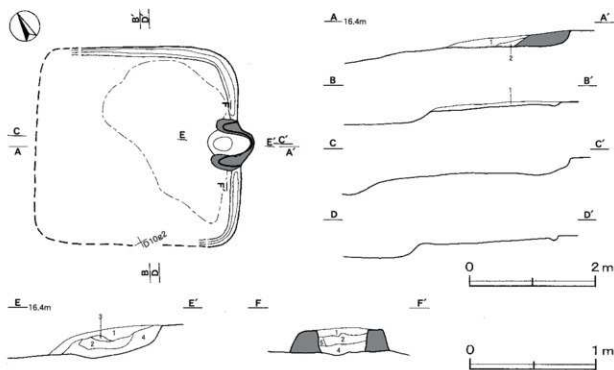
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒 | 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
|-------------------------------|---------------------------------|

遺物出土状況 土師器片9点(坏3、甕6)の他に、流れ込んだ弥生土器片6点も出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から9世紀代と考えられる。



第147図 第74号住居跡実測図

第76号住居跡（第148・149図）

位置 調査区西部のD10e1区で、標高15.8mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸3.24m、短軸3.08mほどが確認された。遺存している壁や検出された竈の位置などから判断して、N-0°を主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は11~30cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで103cmである。袖部幅は110cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用している。煙道部は、壁外へ50cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

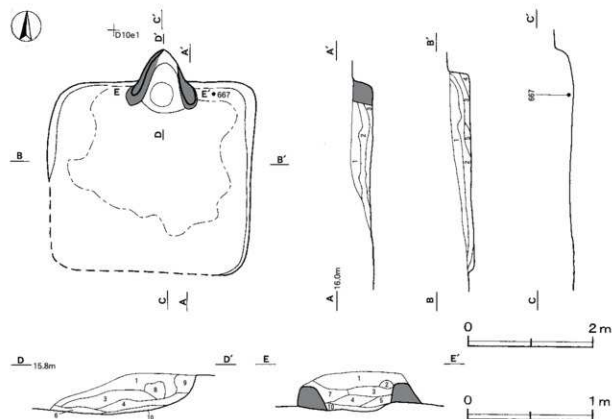
竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 黒色 | 炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 灰赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、砂質粘土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| | | 9 暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| | | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |

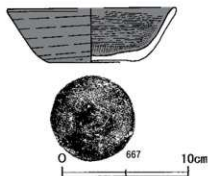
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 灰褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | | |



第148図 第76号住居跡実測図



第149図 第76号住居跡出土遺物
実測図

第76号住居跡出土遺物観察表(第149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
667	土師器	環	13.2	4.2	4.7	長から赤褐色 粒子	黒褐色	普通	裏面裏へう切り跡跡へう有り 内面へう磨き	覆土下層	90%

第78号住居跡 (第150・151図)

位置 調査区西部のD 9a0区で、標高16.7mほどの中段段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.93m、短軸3.45mの長方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は10~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前が踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで86cmである。右袖部は遺存していないが、床面に砂質粘土がわずかに確認されたことから、袖部幅は95cmほどと推定され、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ57cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 8 にい褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 | 9 灰褐色 | 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 4 にい褐色 | 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量 | 10 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量 |
| 5 灰褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量 |
| 6 にい褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 12 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |

貯蔵穴 東側コーナー部に位置し、長径94cm、短径80cmほどの楕円形で、深さは38cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

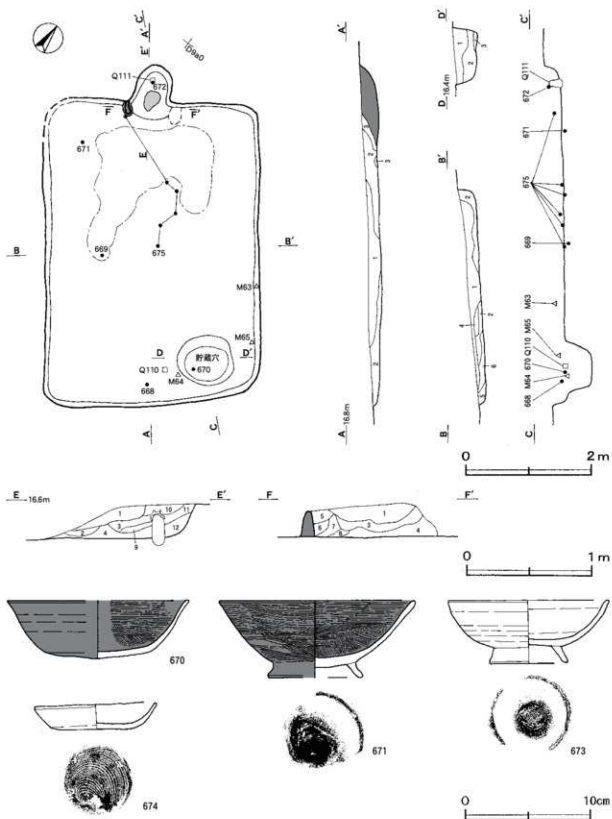
貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|--------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 にい褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | | |

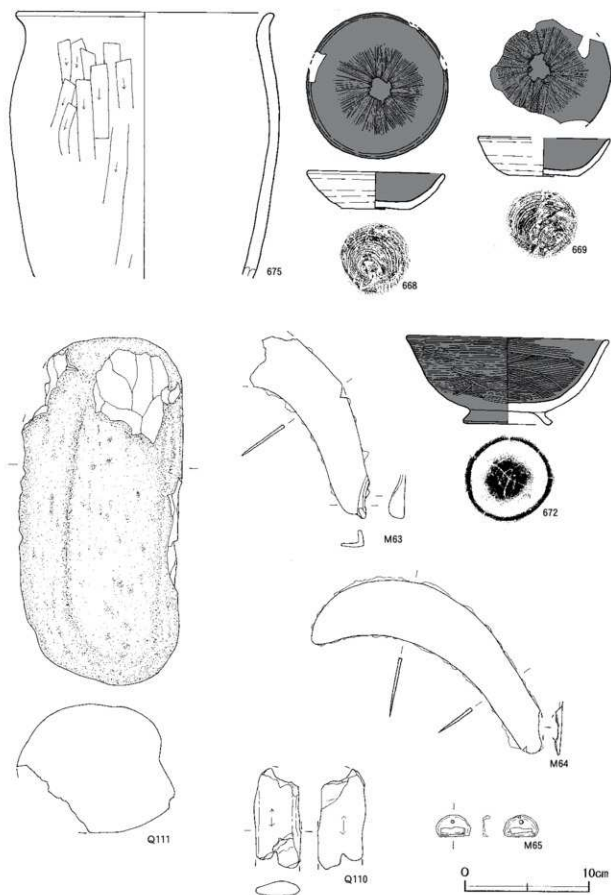
遺物出土状況 土師器片144点(環52, 高台付環5, 甕87), 土師質土器1点(小皿), 鉄製品2点(鎌), 銅製品1点(帯金具), 石器1点(砥石), 礫10点の他に、流れ込んだ弥生土器片35点, 須恵器片34点も出土している。668は南東壁寄りの床面, 669は中央部の床面, 671は西コーナー寄りの床面からそれぞれ出土している。672は竈内の出土で、Q111の上から逆位で出土し、二次焼成も受けているため支脚として使用されていた可能性が

高い。M63・M65は東壁際の覆土中層，M64は貯蔵穴付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀後半と考えられる。



第150図 第78号住居跡・出土遺物実測図



第151图 第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土遺物観察表(第150-151図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
698	土鍋	杯	10.8	3.0	5.5	長石-石英部 含有粘土	にじみ焼	普通	底脚縁縁未切り 内面放射線状にヘナナデ	床面	100% PL36
699	土鍋	杯	[10.6]	3.1	5.6	長石-石英部 含有粘土	にじみ焼	普通	底脚縁縁未切り 内面放射線状にヘナナデ	床面	50%
630	土鍋	杯	[14.4]	4.7	-	長石-石英部 含有粘土	にじみ黄焼	普通	底脚縁縁ヘナ切り後ナデ 内面ヘナ磨き	貯蔵穴内	60%
671	土鍋	高台付筒	15.7	6.1	[7.6]	長石-石英部 含有粘土	黒焼	普通	底脚縁縁ヘナ切り後高台取り付 体部内・外面ヘナ磨き	床面	90% PL36
672	土鍋	高台付筒	16.0	7.0	6.6	長石-石英部 含有粘土	にじみ焼	普通	底脚縁縁ヘナ切り後高台取り付 体部内・外面ヘナ磨き	甕内	85% PL36
673	土鍋	高台付筒	12.6	5.1	6.0	長石-石英部 含有粘土	にじみ黄焼	不良	底脚縁縁ヘナ切り後高台取り付 内・外面磨減不明	甕土中	70% PL36
674	土質土鍋	小皿	9.7	2.2	5.4	長石-石英部 含有粘土	浅黄焼	普通	底脚縁縁未切り 内面指掘によるナデ	甕土中	85% PL36
675	土鍋	壺	20.3	[21.5]	-	長石-石英部 含有粘土	にじみ黄焼	普通	口辺部内・外面ヘナデ 体部外面ヘナ磨 内面ナデ	甕土下層	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q110	磁石	8(8.0)	3.7	1.2	(73.7)	磁石岩	砥面2面 筋痕有り	床面	
Q111	支脚	28.0	13.0	10.3	(328.2)	磁石岩	熱による割傷痕有り	甕内	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M83	鎌	8(8.6)	[14.5]	0.3	(84.2)	鉄	弓状に彎曲 断面四角三角 一部欠損	甕土中層	
M84	鎌	13.9	[18.6]	0.25	(118.9)	鉄	弓状に彎曲 断面四角三角 一部欠損	床面	PL43

番号	器種	縦	横	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M85	丸刷	1.8	2.8	0.7	[3.5]	鉄	丸刷道具金具 裏面に30°程度の傾定の円口の溝欠損 中央に穿孔 2次加工	甕土中層	PL43

第104号住居跡(第152図)

位置 調査区西部のD9d3区で、標高14.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第101号住居跡を掘り込み、第173号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.00m、短軸3.30mの長方形で、主軸方向はN-157°-Eである。壁高は18~42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 南壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで101cmである。袖部幅は90cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ38cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第4・9・14層は、天井部の崩落層と考えられる。

甕土層解説

1	黒褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量	8	暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
2	暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	9	黄褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10	赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
4	にじみ焼	砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	にじみ焼	焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5	暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	12	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
6	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量	13	明赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量
7	にじみ焼	焼土ブロック少量、炭化粒子微量	14	明黄褐色	砂質粘土粒子多量、炭化粒子微量
			15	黒褐色	炭化粒子少量、焼土粒子微量

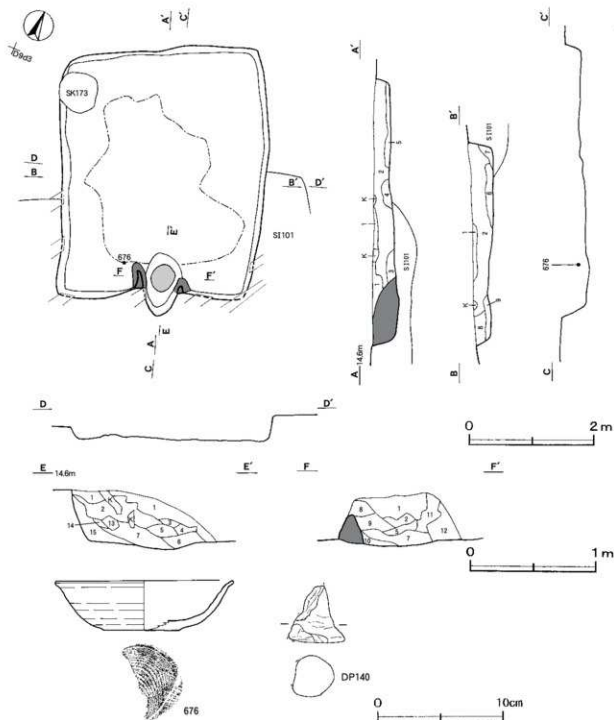
覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5	極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	極暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	8	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
			9	黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片97点(坏45, 高台付坏1, 甕51)の他に, 流れ込んだ弥生土器片36点, 須恵器片24点も出土しているが, 遺物の大半は細片のため図示することはできない。676は竈右袖近くの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが, 出土土器から10世紀前半と考えられる。



第152図 第104号住居跡・出土遺物実測図

第104号住居跡出土遺物観察表(第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
676	土師器	坏	14.2	3.9	6.2	長石・石英質器	浅黄緑	普通	底部(隅切) 内外面ナデ	礎上下層	70%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DF10	支脚	(4.5)	(4.5)	(定.6)	土長石(石製)	全面ナデ	覆土中	

第107号住居跡 (第153・154図)

位置 調査区西部のD8b0区で、標高14.2mほどの中段丘上に位置している。

重複関係 第109・110号住居跡を掘り込み、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による攪乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸2.55m、短軸2.50mほどが確認された。遺存している壁や検出された竈の位置などから判断して、N-71°-Eを主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は12cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈前部分が踏み固められている。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで73cmである。袖部は遺存していないが床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されていたと推定される。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ58cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

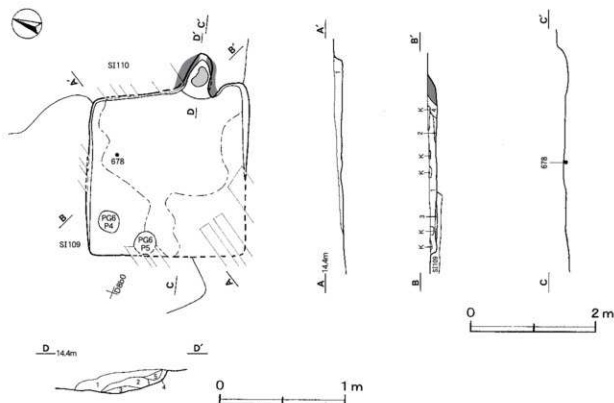
竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|------------------|
| 1 紅褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子中量 | 4 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量 |
| 3 赤褐色 | 焼土粒子多量、砂質粘土粒子微量 | | |

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

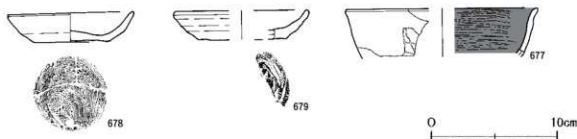
- | | | | |
|-------|----------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |



第153図 第107号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片96点(坏10, 高台付坏1, 甕85), 土師質土器2点(小皿)の他に, 流れ込んだ弥生土器片4点, 須恵器片24点も出土しているが, 遺物の大半は細片のため図示することはできない。678は北壁寄りの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが, 出土土器から10世紀後半と考えられる。



第154図 第107号住居跡出土遺物実測図

第107号住居跡出土遺物観察表(第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
677	土師器	钵	[15.0]	0.80	—	長心葉母	黒褐色	普通	内面へ9割き	覆土中	5% 刻書[口]
678	土師質土器	小皿	10.0	2.4	6.0	長から長赤褐色 赤子	にんべん黄	普通	底面(断未切) 西・外面ナデ	床面	100% PL36
679	土師質土器	小皿	10.0	2.2	[7.0]	長から長赤褐色 赤子	にんべん	普通	底面(断未切) 西・外面ナデ	覆土中	30%

第109号住居跡 (第155・156図)

位置 調査区西部のD 8 a0区で, 標高14.2mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第110号住居跡を掘り込み, 第107号住居, 第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.72m, 短軸3.22mの長方形で, 主軸方向はN-46°-Eである。壁高は9~14cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。

竈 北東壁中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで85cmである。袖部幅は92cmで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されており, 左袖部には土師器甕, 右袖部には須恵器甕がそれぞれ竈材として転用されていた。火床部は, 地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており, 火を受けて赤変硬化している。煙道部は, 壁外へ29cm掘り込まれ, 火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗赤褐色	焼土粒子中量, 砂質粘土粒子微量	7 にんべん黄	砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
2 にんべん黄	焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化物微量	8 極暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量
3 極暗褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子微量	9 極暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量	10 灰褐色	砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量
5 黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11 暗灰色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量
6 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量		

覆土 4層に分層される。焼土ブロックや炭化材を含む人為堆積と考えられる。

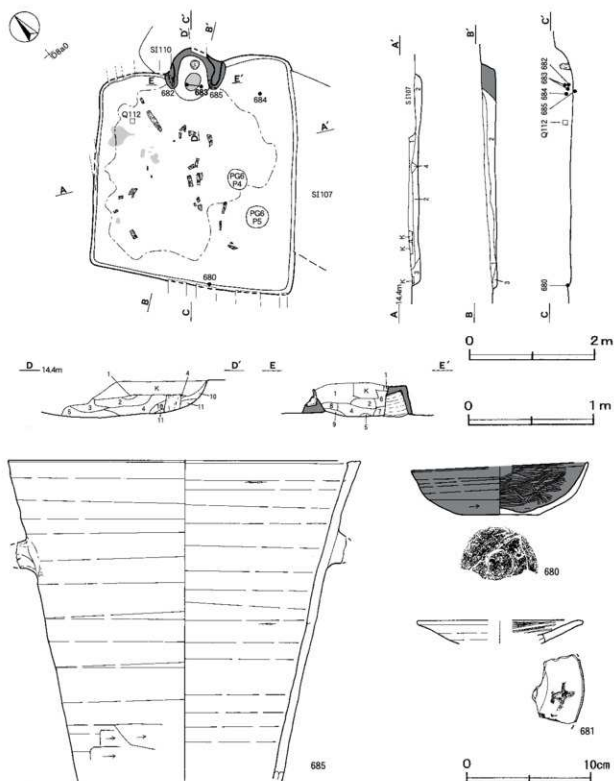
土層解説

1 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	3 極暗褐色	焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	焼土ブロック・炭化物少量, ローム粒子微量	4 黒褐色	炭化粒子微量

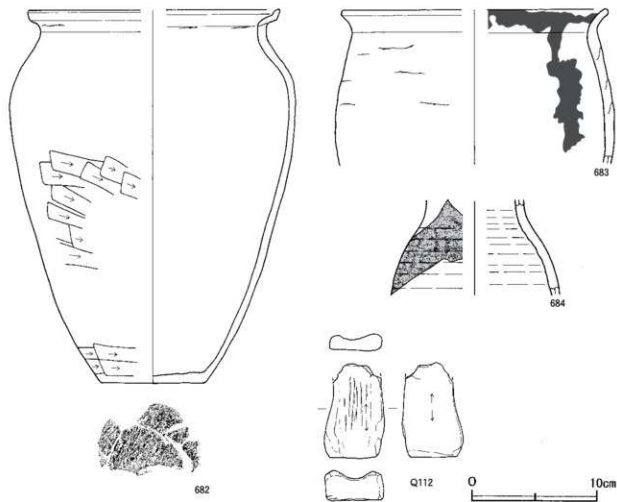
遺物出土状況 土師器片267点(坏29, 高台付皿1, 甕237), 須恵器片7点(坏5, 短頸壺1, 甕1), 灰釉陶器1点(甕類), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(不明)の他に, 混入した弥生土器片16点も出土している。680は南西壁際の覆土上層から出土している。682は竈左袖部, 685は竈右袖部からそれぞれ逆位で出土しており,

袖部の補強材として転用されたものである。また、多量の炭化材と焼土が出土していることから焼失住居と考えられるが、火を受けて赤変した床面を確認できなかった。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。焼失時期は、焼土や炭化材が床面から検出されていることから廃絶後間もない時期と考えられる。



第155図 第109号住居跡・出土遺物実測図



第156図 第109号住居跡出土遺物実測図

第109号住居跡出土遺物観察表(第156図)

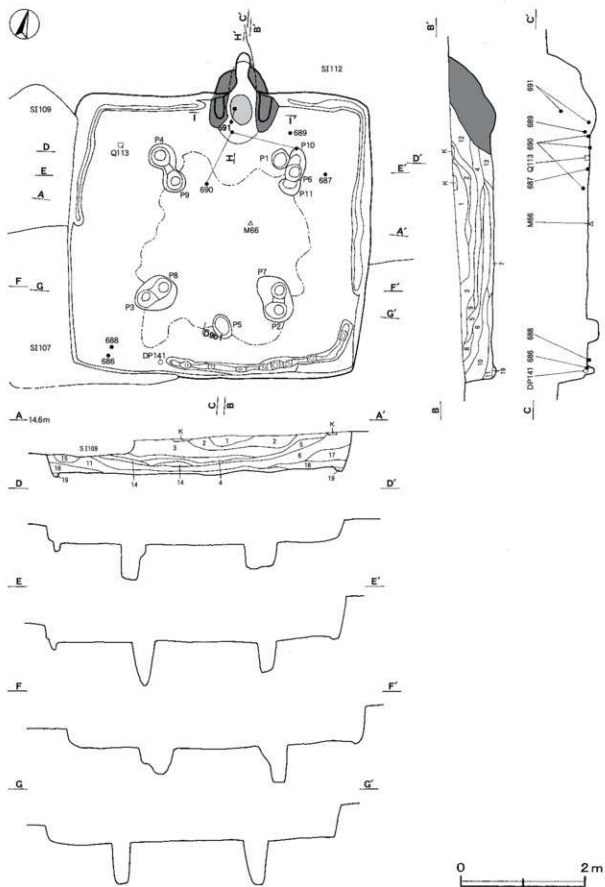
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
680	土師器	坏	[14.2]	4.2	6.2	長石・雲母赤色 粘土	靑	普通	底面・裏面へラ削り・内面へラ削り 内面へラ磨き	覆土中層	50%
681	土師器	高台付甕	[13.2]	(1.8)	-	長石・石英	にび・靑	普通	内面へラ磨き	覆土中層	10% 壺蓋「中口」 P.37
682	土師器	甕	[19.8]	29.7	8.4	長石・赤・赤色 粘土	靑	普通	口の部内・外面横ナゲ 輪切瓶	覆土中層	40%
683	土師器	甕	[21.0]	(12.2)	-	長石・赤・雲母	にび・靑	普通	口の部内・外面横ナゲ 輪切瓶	壺内	10% 内面灰付着
684	灰釉陶器	瓶型	-	(7.6)	-	長石・石英	灰白	良好	体部外面のクロナゲ	覆土中層	10%
685	灰釉器	瓶	28.0	(25.9)	-	長石・赤・雲母・ 鉄質粘土	灰黄靑	良好	体部外面下端へラ削り 把手・輪切瓶 内面ナゲ 輪切瓶	覆土中層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q112	砥石	17.9	5.0	2.4	(73.7)	凝灰岩	砥面2面	覆土中層	

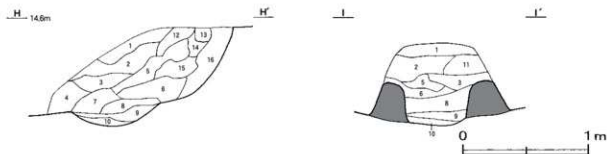
第110号住居跡 (第157~160図)

位置 調査区西部のD 8 a0区で、標高14.3mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第112号住居跡を掘り込み、第107・109号住居に掘り込まれている。



第157图 第110号住居跡実測図(1)



第158図 第110号住居跡実測図(2)

規模と形状 長軸4.70m, 短軸4.61mの方形で, 主軸方向はN-8°-Wである。壁高は45~65cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められており, 南西コーナー及び竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで147cmである。袖部幅は108cmほどで, 床面と同じ高さの地山面を掘り込んでから砂質粘土で構築している。火床部は, 地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており, 火を受けて赤変硬化している。煙道部は, 壁外へ64cm掘り込まれ, 火床面から外傾して立ち上がっている。第5層は天井部の崩落層と考えられる。

遺土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 紅褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | 12 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子多量, 炭化粒子微量 | 13 紅褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 14 紅褐色 | 砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 7 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 15 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 16 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

ピット 11か所。P1~P4は深さ42~73cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ21cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6~P9は深さ42~72cmで, 柱建て替え以前の柱穴と考えられる。P10・P11の性格は不明であるが, 柱建て替え時の掘り方の可能性も想定できる。

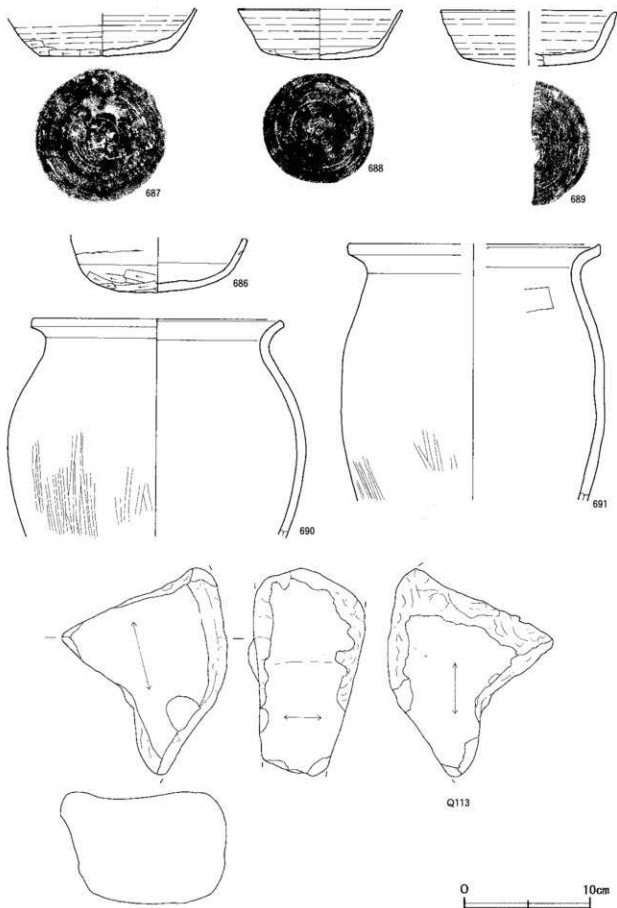
覆土 19層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

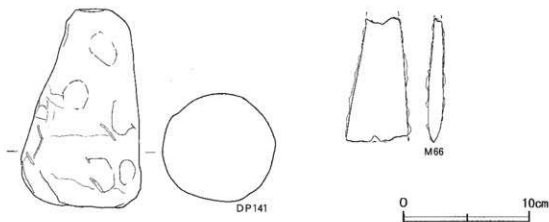
- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 11 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 極暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 13 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 14 黒褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 15 黒褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 16 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 7 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 17 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 18 極暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 9 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 19 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 10 黒褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片570点(坏50, 高坏1, 器台1, 甕518), 須恵器片28点(坏25, 蓋1, 甕2), 土製品1点(支脚), 石器1点(砥石), 鉄製品3点(鉄鏃, 刀子, 鉄斧)の他に, 流れ込んだ縄文土器片2点, 弥生土器片102点も出土している。686・688は南西コーナー一部の床面, 687は北東コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後半と考えられる。



第159图 第110号住居跡出土遺物実測図(1)



第160図 第110号住居跡出土遺物実測図(2)

第110号住居跡出土遺物観察表(第159・160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
686	土師器	杯	-	(4.2)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪縁依	床面	83% 二次利用 PL36
687	須恵器	埴o	-	(3.7)	10.3	長石・石英	灰	普通	口辺部横へラ削り 口縁へラ削り後へラ削り 体部下 端子持土へラ削り	床面	90%
688	須恵器	杯	13.0	3.9	8.6	長石・石英・針状 赤物	灰黄靨	良好	口辺部横へラ削り 口縁部横へラ削り 体部外面下端部横へラ削り	床面	90% PL34
689	須恵器	杯	[13.7]	4.4	[10.0]	長石・石英・針状 赤物	靨灰	良好	口辺部横へラ削り 口縁部横へラ削り	覆土下層	80%
690	土師器	甕	19.6	(17.1)	-	長石・雲母・雲母・ 赤色砂子	にじみ	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ削り 内面ナデ	覆土下層	20%
691	土師器	甕	[19.6]	(20.2)	-	長石・雲母・雲母・ 赤色砂子	にじみ	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ削り 内面へ ラナデ	壺内	20%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP41	支脚	15.7	5.0(9.4)	(105.5)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 指摺痕	床面	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q112	砥石	(16.0)	(13.0)	9.2	(1835.2)	砂岩	砥石3面	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M66	鉄片	(9.8)	(4.9)	1.1	(181.6)	鉄	刃部土や幅広	床面	PL43

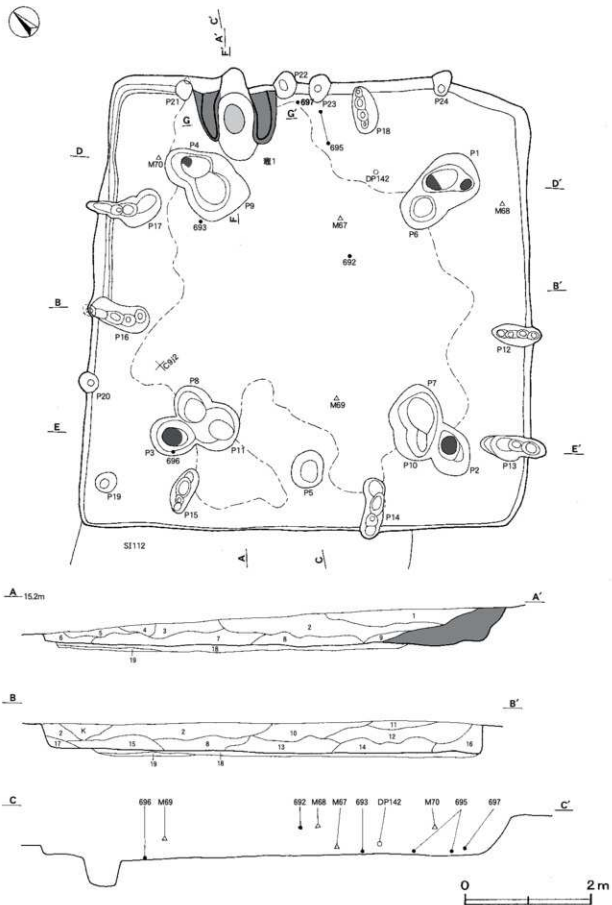
第111号住居跡(第161~164図)

位置 調査区西部のC9j2区で、標高15.0mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

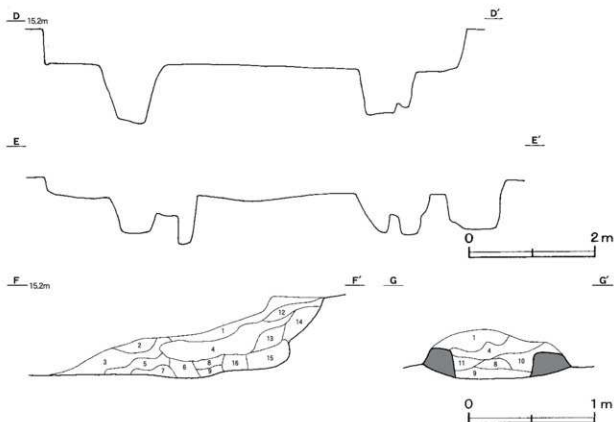
重複関係 第112号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸7.08m、短軸6.88mの方形で、主軸方向はN-49°-Eである。壁高は18~65cmで、外傾して立ち上がっている。また、掘り方調査の結果、竈痕跡が検出され、柱穴も対角線上に移動していることから本跡は四壁が拡張されている。拡張以前の長軸は6.50mほど、短軸6.20mほどの方形と想定される。

床 掘り方を調査した結果、床面は2面あることが確認された。廃絶時の床面(第2次面)はほぼ平坦で、中央部と竈前付近が踏み固められており、第1次面上に覆土土層第18・19層を客土して構築している。第1次面は拡張以前の床面で、中央部と竈前付近が踏み固められている。



第161图 第111号住居跡実測図(1)



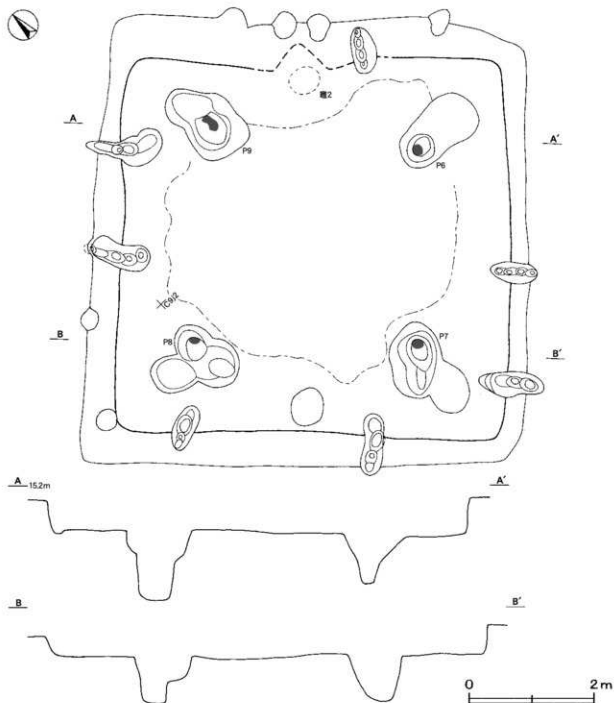
第162図 第111号住居跡実測図(2)

竈 拡張後の竈は、北東壁の左寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで148cmである。袖部幅は127cmほどで、床面と同じ高さの地山面を掘り込んでから砂質粘土で構築している。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。拡張以前の竈は、北東壁の中央部に付設されており、火床部が遺存しているだけで、袖部の痕跡は確認できなかった。

竈1土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	9 赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化物微量
2 暗褐色	砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	10 褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量	11 にいり褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量	12 黒褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	13 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量
6 にいり褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	14 黒褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
7 黒色	炭化粒子多量、ロームブロック・焼土粒子微量	15 暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物
8 にいり褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、炭化物微量	16 明赤褐色	焼土ブロック多量、砂質粘土粒子微量

ピット 24か所。P1～P4は深さ58～95cmで、配置から廃絶時の主柱穴と考えられる。P5は深さ37cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P6～P11は深さ75～113cmで、配置から拡張以前の主柱穴と想定される。P12～P24は深さ46～116cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから壁柱穴と考えられ、中でもP12～P18は、拡張に伴って柱を移動したと想定される。また、P21・P22は、竈を挟むように北東壁際に位置していることから、竈の付属施設の柱穴と考えられる。

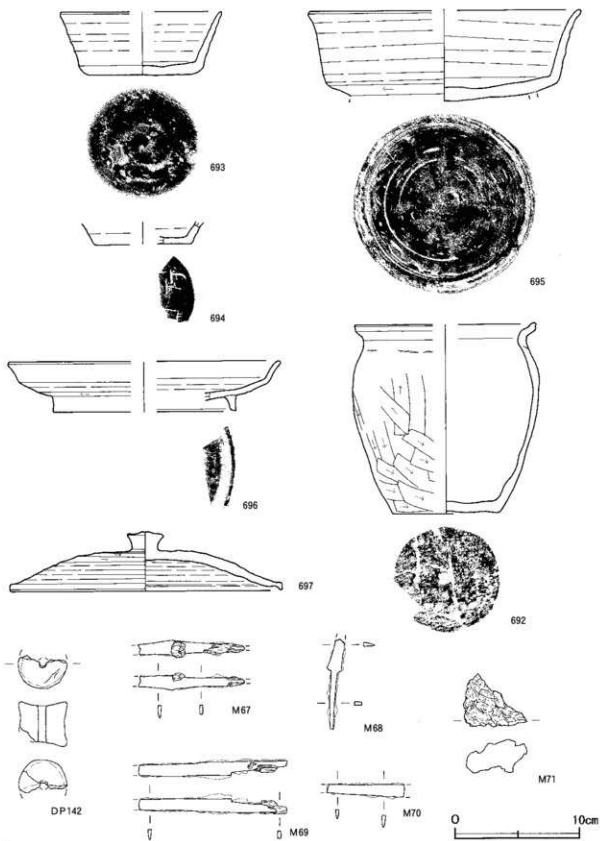


第163図 第111号住居跡実測図(3)

覆土 17層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。第18・19層は第2次面の床である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	12 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	14 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
6 極暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	15 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
7 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	16 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
8 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
9 黒褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック微量	18 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
		19 極暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量



第164图 第111号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片1412点(坏124, 高坏8, 埴1, 甕1274, 甌5), 須恵器片113点(坏35, 高台付坏4, 甕26, 高甕3, 蓋45), 土製品12(紡錘車1, 支脚11), 鉄製品5点(刀子4, 不明1), 鉄滓1点, 礎62点の他に, 流れ込んだ縄文土器片5点, 弥生土器片211点も出土している。693はP4付近の覆土下層, 695・697は北東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれの遺物も覆土下層より上から出土しており, 住居に伴わないと判断される。

所見 廃絶時期は, 出土土器から8世紀後半と考えられる。また, 拡張以前の時期については, 1次面の床面調査や掘り方調査でも遺物が出土していないため明確ではないが, 廃絶時期からはそれほど遅らなないと考えられる。

第111号住居跡出土遺物観察表(第164図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他成	手法の特徴	出土位置	備考
693	須恵器	坏	[12.8]	5.0	9.0	長石・石英・斜状 長石	紅・黄緑	良好	底面磨削ヘラ切り	覆土下層	60%
694	須恵器	坏	-	(1.8)	[7.8]	長石・石英	灰黄緑	良好	底面磨削ヘラ切り後磨削ヘラ削り	覆土中	10% 灰黄緑・上・上・口・口・口・口
695	須恵器	高台付坏	[24.5]	(7.2)		長石・石英・斜状 長石	灰	良好	底面磨削ヘラ切り後磨削ヘラ削り 高台取付付け 体部外面下層磨削ヘラ削り	覆土下層	70% PL35
696	須恵器	甕	[21.4]	4.0	[14.6]	長石・石英	黄緑	良好	底面磨削ヘラ削り後高台取付付け 体部外面下層磨削ヘラ削り	覆土下層	20%
697	須恵器	蓋	21.6	4.7	-	長石・石英・斜状 長石	灰	普通	天井部石割りのヘラ削り	覆土下層	60% PL35
692	土師器	小型甕	[14.2]	15.0	8.4	長石・石英・赤色 粘土	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ 輪縁底	覆土上層	50%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP42	紡錘車	3.7	0.6	3.6	(8.5)	土(長石・石英・雲母・赤色粘土)	全面ナデ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M98	鉄鏝	(7.2)	1.4	0.3	(8.3)	鉄	長柄鏝部 鏝身部片断形	覆土上層	PL43
M97	刀子	(8.5)	1.4	0.4~0.5	(8.4)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損 茎の一部に木質遺存	覆土下層	PL43
M99	刀子	(11.8)	1.0	0.3	(13.4)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損 茎の一部に木質遺存	覆土中層	
M98	刀子	(6.2)	1.0	0.3	(8.1)	鉄	刀身の一部 切先・茎欠損	覆土上層	
M91	鉄滓	4.2	5.1	2.7	30.2	鉄	表面2階赤褐色 凹凸有り	覆土中	

第118号住居跡(第165~172図)

位置 調査区西部のC819区で, 標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第116・119号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.40m, 短軸5.18mの方形で, 主軸方向はN-38°-Wである。壁高は35~60cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 南東壁側が踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されており, 焚口から煙道部まで148cmである。袖部幅は138cmほどで, 床の上に砂質粘土で構築されている。火床部は, 地山面を15cm前後掘り込み, 竈土層第13~15層に相当する土を入れて使用していたと考えられるが, 赤変硬化部分は検出されなかった。煙道部は, 壁外へ42cm掘り込まれ, 火床面から緩やかに立ち上がっている。第3層は, 天井部の崩落層と考えられる。第16層~19層は床構築材, 第20層~26層はP7・P8の覆土である。

土層解説

1 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	15 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量
2 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	16 明褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 深黄褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック少量、砂質粘土粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	18 灰褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
5 褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
6 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	20 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量
7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	21 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・焼土粒子微量
8 黒褐色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量	22 褐色	ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子微量
9 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	23 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
10 褐色	砂質粘土ブロック少量、焼土粒子微量	24 褐色	ローム粒子少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子微量
11 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	25 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
12 深黄褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	26 褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
13 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		
14 明褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量		

ピット 8か所。P1～P4は深さ72～89cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5・P6は深さ89～99cmで、壁柱穴の可能性も考えられるが明確ではない。P7・P8は深さは27～34cmで、竈袖部の断り割りの際、両袖部下の貼り床をはがした時点で検出されている。竈の作り替え以前の竈に関わる付属施設の柱穴と考えられるが明確ではない。また、検出状況から床の張り替えが想定される。

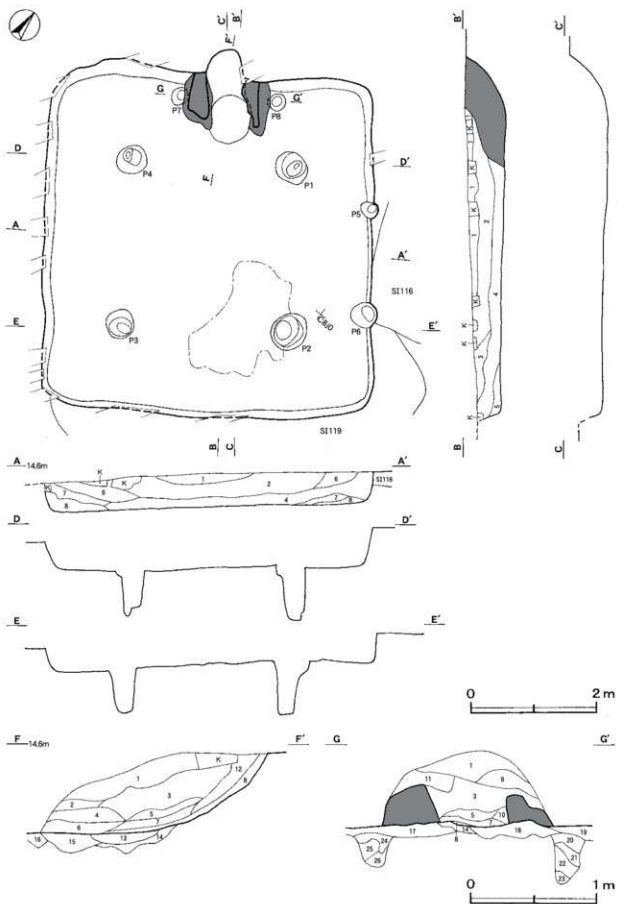
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示しているが、遺物の出土状況などから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	5 黒褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	8 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2190点(環570, 高環9, 器台1, 甕1610), 須恵器片771点(環490, 高台付杯33, 盤15, 高盤7, 蓋59, 短頸壺35, 長頸壺11, 有耳壺1, 壺類9, 甕110, 片面碗1), 手捏土器2点, 土製品6点(支脚2, 不明4), 石器2点(砥石), 鉄製品2点(刀子), 鉄滓2点, 礫55点の他に、流れ込んだ弥生土器片166点や古墳時代の土師器も出土しており、埋没の過程で流れ込んだものと考えられる。土師器片は、覆土上層からの出土はなく、すべてが覆土中層以下からの出土で、特に覆土下層からの出土割合が高く、住居が廃絶された後の早い段階から投棄され始めたものと想定される。中でも、竈付近から北コーナー部にかけて出土している土師器片は、散在はしているが、須恵器片より下層から出土しているものが多く、始めの段階では北側から投棄されたと考えられる。一方、南東コーナー寄りから出土している土師器片は、覆土中層・下層から須恵器片に混じって出土しており、南東コーナー側から投棄されている様子を読み取ることができるとともに、竈付近や北コーナー部からの投棄時期よりやや遅れて投棄され始めたことが想定される。須恵器片は、広範囲に散らばりが認められるが、南西壁側では比較的出土が少ない傾向にある。土師器片同様に、竈付近を中心とする北コーナー側と南東コーナー側に集中地点が認められ、覆土第4層と第2層との層界付近から第1層にかけて出土しており、第4層が堆積した後から投棄され始めたと考えられる。土師器も須恵器のいずれも完形に復元できたものではなく、大部分の土師器や須恵器は近接する位置から出土したものが接合しているが、708・733・735・741のように比較的離れた位置から出土したものや出土層位が違うものが接合している例もあることから、覆土は土器片を投棄する過程で人為的に堆積していることを裏付けている。701は中央部の覆土中層、716はP1付近の覆土中層、698・699・704・706はP2付近の覆土中層、700はP4付近の覆土中層からそれぞれ出土している。718は中央部南東壁寄りの覆土下層、744はP3付近の覆土下層からそれぞれ出土している。Q114は中央部の床面、M72は竈左側の覆土中層から出土している。

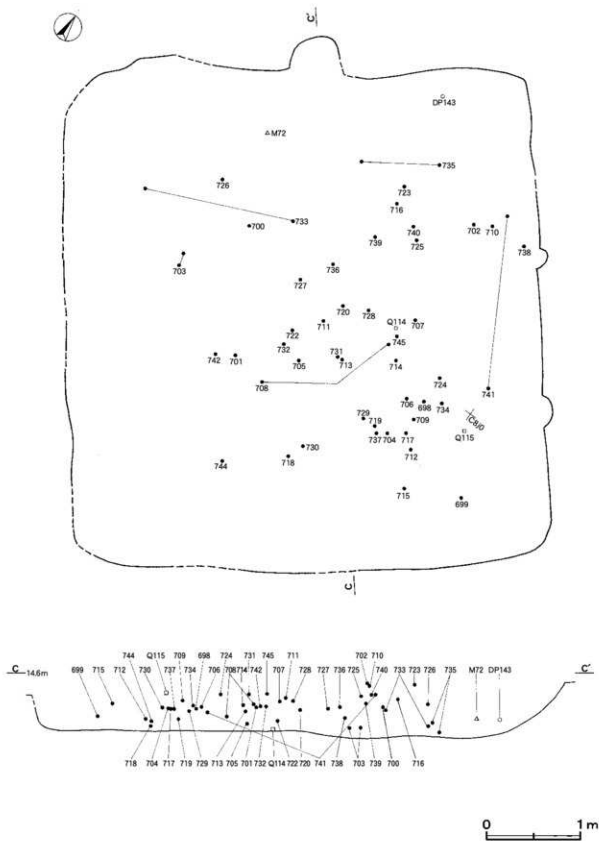
所見 出土遺物は、やや長期間にわたって投棄されたと考えられ、土師器は口縁部の形状から8世紀後半から9世紀初頭の時期と考えられる。また、出土土器の大部分を占める須恵器も器形的な特徴から同時期のもと考えられ、廃絶時期は9世紀以前と考えられる。



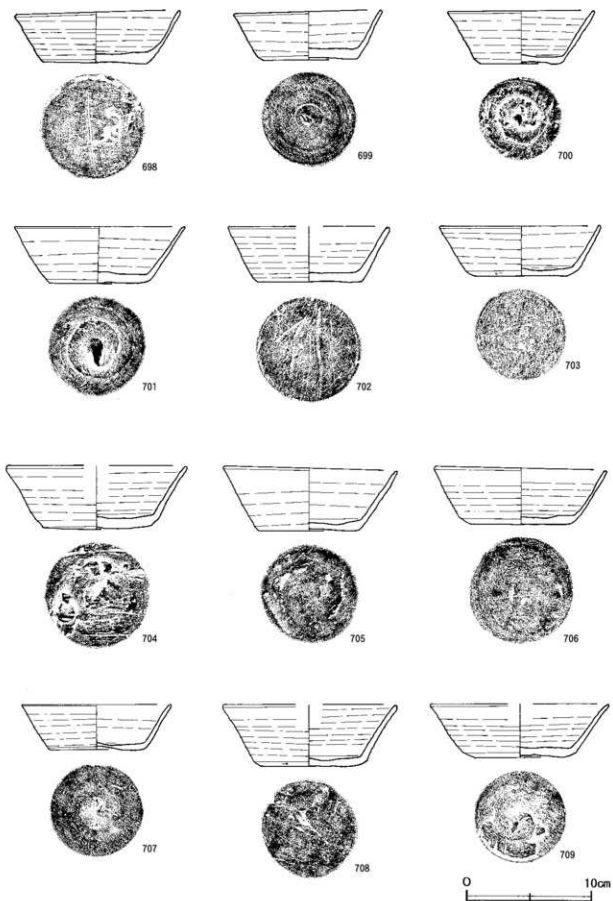
第165图 第118号住居跡実測图(1)



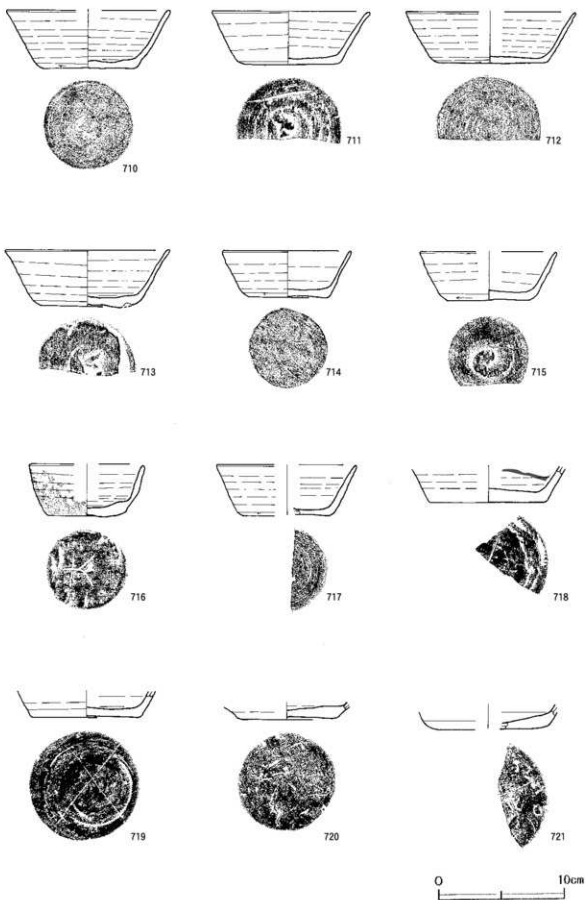
第166図 第118号住居跡実測図(2)



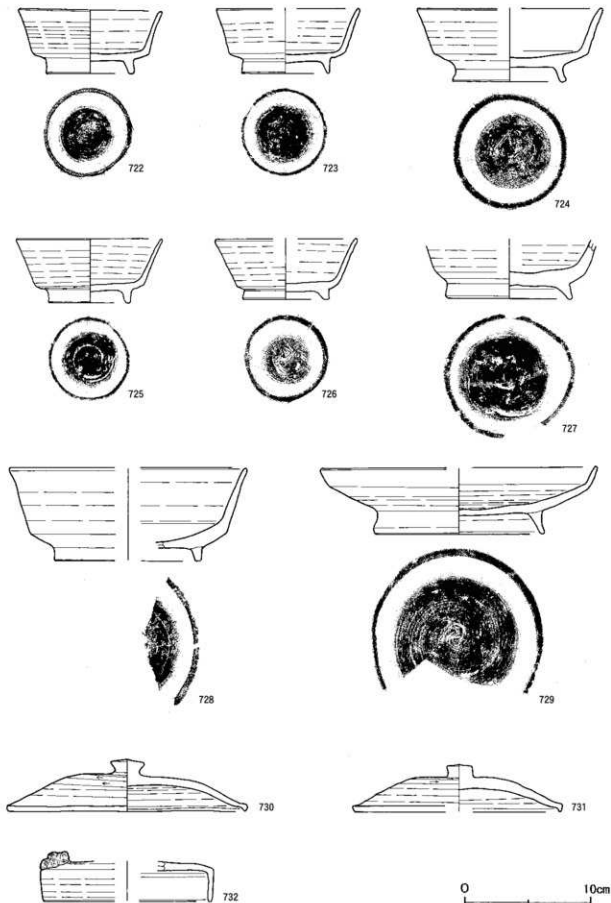
第167图 第118号住居跡実測图(3)



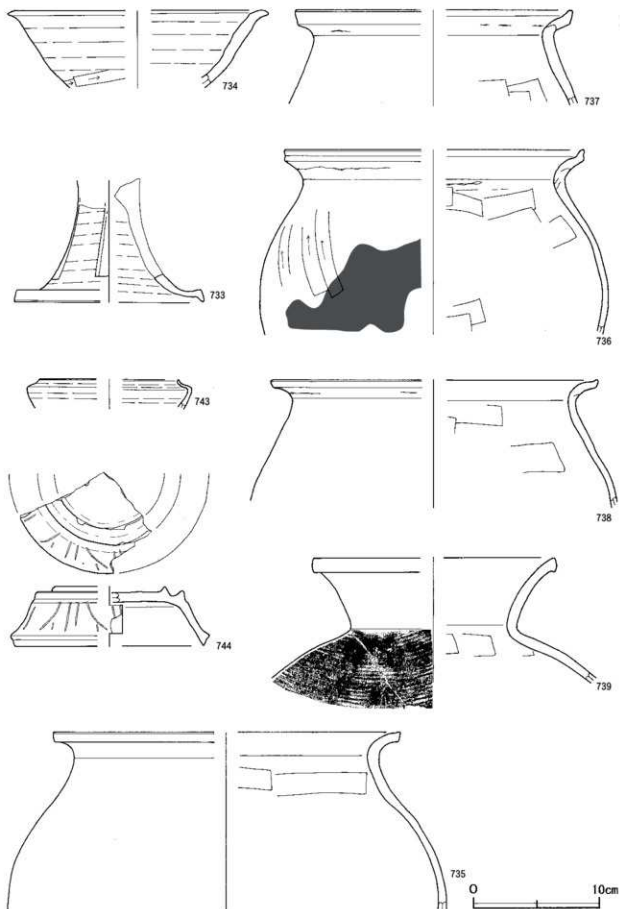
第168图 第118号住居跡出土遺物実測図(1)



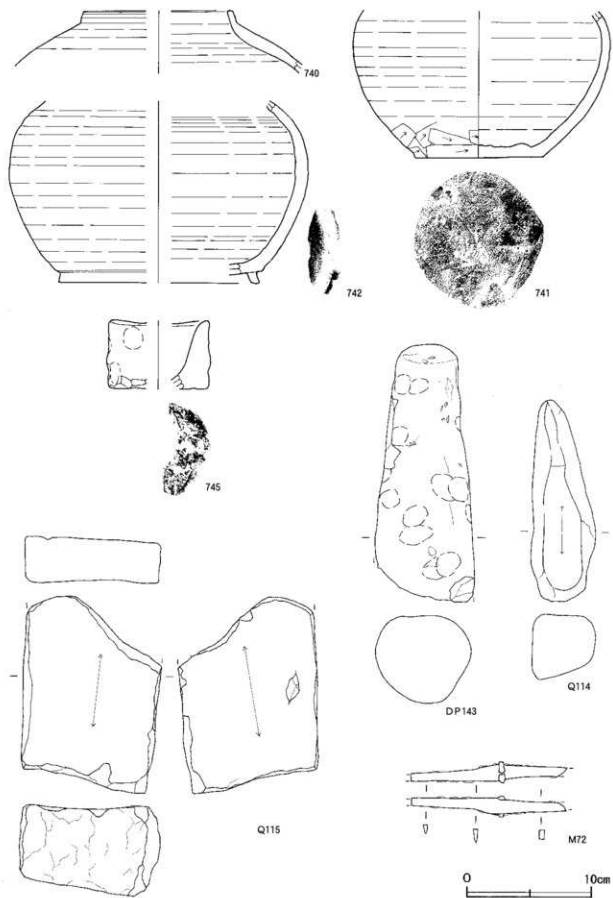
第169图 第118号住居跡出土遺物実測図(2)



第170图 第118号住居跡出土遺物実測図(3)



第171图 第118号住居跡出土遺物実測図(4)



第172图 第118号住居跡出土遺物実測図(5)

第118号住居跡出土遺物観察表(第168～172図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
688	須恵器	杯	13.0	4.2	8.1	長石・石英・群状鉄質	黄灰	良好	底縁溝へつ切り後一方方向へつ切り	覆土中層	95% 須恵「B」P.34-37
689	須恵器	杯	11.7	3.9	7.4	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り縁溝へつ切り	覆土中層	90% P.34
700	須恵器	杯	11.6	4.2	6.4	長石・石英・群状鉄質	陶灰	良好	底縁溝へつ切り	覆土中層	90% P.34
701	須恵器	杯	13.5	4.5	7.7	長石・石英・群状鉄質	灰白	良好	底縁溝へつ切り	覆土中層	90%
702	須恵器	杯	[12.6]	4.5	8.4	長石・石英・群状鉄質	灰白	良好	底縁溝へつ切り後多方向へつ切り	覆土上層	70%
703	須恵器	杯	12.8	4.1	7.2	長石・石英	黄灰	良好	底縁溝へつ切り縁溝へつ切り 体部外面下縁溝へつ切り	覆土中層	90% P.34
704	須恵器	杯	[14.2]	5.0	8.6	長石・石英	灰	良好	底縁溝へつ切り後一方方向へつ切り	覆土中層	70%
705	須恵器	杯	13.7	5.2	7.8	長石・石英・群状鉄質	灰黄陶	普通	底縁溝へつ切り後一方方向へつ切り	覆土下層	70%
706	須恵器	杯	13.4	4.6	8.0	長石・石英	黄灰	良好	底縁溝へつ切り後多方向へつ切り	覆土中層	70%
707	須恵器	杯	11.9	3.6	7.4	長石・石英・群状鉄質	陶灰	良好	底縁溝へつ切り後十ナゲ	覆土中層	70%
708	須恵器	杯	[13.8]	4.9	7.5	長石・石英	黄灰	良好	底縁溝へつ切り後多方向へつ切り 体部外面下縁溝へつ切り	覆土中層	90%
709	須恵器	杯	[14.2]	4.2	7.2	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り後一方方向へつ切り	覆土中層	55%
710	須恵器	杯	[12.8]	4.7	7.2	長石・石英	灰黄	良好	底縁溝へつ切り縁溝へつ切り 体部外面下縁溝へつ切り	覆土上層	55%
711	須恵器	杯	12.6	4.3	8.3	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り後多方向へつ切り	覆土上層	50% 須恵「C」
712	須恵器	杯	[13.6]	4.1	8.4	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り縁溝へつ切り 体部外面下縁溝へつ切り	覆土下層	50%
713	須恵器	杯	13.0	4.6	7.4	長石・石英	黄灰	良好	底縁溝へつ切り後一方方向へつ切り	覆土上層	50%
714	須恵器	杯	10.1	3.8	6.2	長石・石英	灰黄	良好	底縁溝へつ切り縁溝へつ切り 体部外面下縁溝へつ切り	覆土上層	90% P.34
715	須恵器	杯	[10.8]	3.9	6.4	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り縁溝へつ切り 体部外面下縁溝へつ切り	覆土中層	60%
716	須恵器	杯	[9.0]	4.1	6.3	長石・石英	明灰黄	良好	底縁溝へつ切り後一方方向へつ切り 外面隅欠による自然崩	覆土中層	90% 須恵「A」P.34
717	須恵器	杯	[11.0]	4.1	[6.6]	長石・石英	灰	良好	底縁溝へつ切り縁溝へつ切り 体部外面下縁溝へつ切り	覆土中層	70%
718	須恵器	杯	-	(2.9)	[9.2]	長石・石英	明灰黄	良好	底縁溝へつ切り後一方方向へつ切り	覆土下層	20% 須恵「1」内面底付着
719	須恵器	杯	-	(2.1)	8.8	長石・石英	灰黄陶	良好	底縁溝へつ切り縁溝へつ切り	覆土下層	60% 須恵「1」
720	須恵器	杯	-	(1.3)	8.1	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り後十ナゲ	覆土中層	41% 須恵「山」P.33
721	須恵器	杯	-	(2.0)	[9.6]	長石・石英・群状鉄質	灰白	良好	底縁溝へつ切り後一方方向へつ切り	覆土中	20% 須恵「1」
722	須恵器	高台付杯	11.2	5.1	7.0	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付	覆土上層	70% P.35
723	須恵器	高台付杯	[11.2]	5.1	7.0	長石・石英・群状鉄質	黄灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付	覆土上層	60% P.35
724	須恵器	高台付杯	[14.6]	5.8	9.0	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付	覆土中層	60% 須恵「1」P.35
725	須恵器	高台付杯	11.4	5.1	6.4	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付 体部外面下縁溝へつ切り	覆土中層	90% P.35
726	須恵器	高台付杯	[11.2]	4.8	6.8	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付	覆土中層	60% P.35
727	須恵器	高台付杯	-	(4.7)	10.2	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付	覆土上層	40% 須恵「1」P.37
728	須恵器	高台付杯	[18.6]	7.3	[11.6]	長石・石英	陶灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付	覆土中層	90%
729	須恵器	盤	[21.6]	5.3	13.1	長石・石英	灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付	覆土中層	50%
730	須恵器	蓋	18.7	4.2	-	長石・石英	陶灰	良好	天井部取付のへつ切り	覆土中層	60% P.35
731	須恵器	蓋	[16.2]	3.7	-	長石・石英・群状鉄質	明陶	良好	天井部取付のへつ切り	覆土上層	40%
732	須恵器	蓋	[13.2]	3.1	-	長石・石英	灰	良好	天井部・隅欠による自然物 輪欠止	覆土中層	20%
733	須恵器	高盤	-	(9.7)	[14.6]	長石・石英・群状鉄質	灰	良好	脚部へつ切りによる通小し4.0西	覆土中層～下層	20%
734	須恵器	鉢	[18.8]	6.1	-	長石・石英・群状鉄質	赤灰	良好	体部外面下位へつ切り	覆土中層	20%
735	土師器	甕	[27.2]	(14.1)	-	長石・石英・雲母	にじみ・橙	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面ナゲ 内面へつナゲ	覆土下層	20%
736	土師器	甕	[21.6]	(14.0)	-	長石・石英・雲母	にじみ・橙	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面へつナゲ 内面へつナゲ 輪縁割	覆土中層	20% 外面底付着
737	土師器	甕	[21.6]	(7.4)	-	長石・石英・雲母	にじみ・橙	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面ナゲ 内面へつナゲ 輪縁割	覆土中層	20%
738	土師器	甕	[25.6]	(10.1)	-	長石・石英・雲母・赤鉄質	にじみ・赤紫	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面ナゲ 内面へつナゲ 輪縁割	覆土下層	15%
739	須恵器	甕	[19.0]	(9.8)	-	長石・石英	にじみ・黄陶	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面面位の平行切止 内面へつナゲ	覆土中層	20%
740	須恵器	短頸甕	[11.8]	(5.0)	-	長石・石英	灰	良好	コケナナゲ	覆土上層	20%
741	須恵器	甕	-	(11.8)	10.4	長石・石英	黄灰	良好	底縁溝へつ切り後多方向へつ切り 体部下縁へつ切り	覆土上層～中層	20%
742	須恵器	甕	-	(14.0)	[15.8]	長石・石英	灰	良好	底縁溝へつ切り後高台取付付	覆土中層	20%

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特長	出土位置	備考
743	須恵器	短頸壺	[11.0]	[2.3]	—	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
744	須恵器	円筒甕	[8.6]	4.7	[14.8]	長石・石英	オリーブ黒	良好	体部外面に刻み 自然軸	覆土下層	30% PL34
745	土師器	手取土器	[7.8]	5.5	[8.0]	長石・石英・雲母・赤鉄粉子	にじみ黒	普通	内・外面ナデ 割明痕	覆土上層	40%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
SP143	支脚	(20.7)	4.9~(7.7)	(3071.4)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 指環痕	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q114	瓦石	16.1	5.2	5.3	653.4	砂岩	瓦面1面	床面	
Q115	瓦石	(15.7)	11.3	7.2	(1336.7)	砂岩	瓦面2面	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	刀子	(12.9)	1.7	0.3~0.4	(15.7)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損 緑金具遺存	覆土下層	PL43

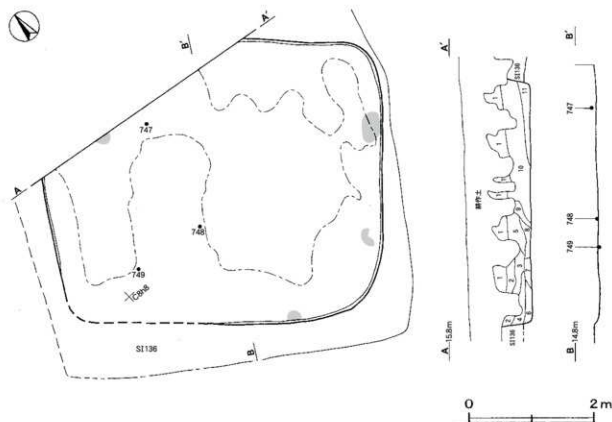
第120号住居跡 (第173・174図)

位置 調査区西部のC 8 b8区で、標高15.3mほどの中段段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第136号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.39m、短軸4.45m長方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は10~51cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部の一部を除いて踏み固められている。



第173図 第120号住居跡実測図

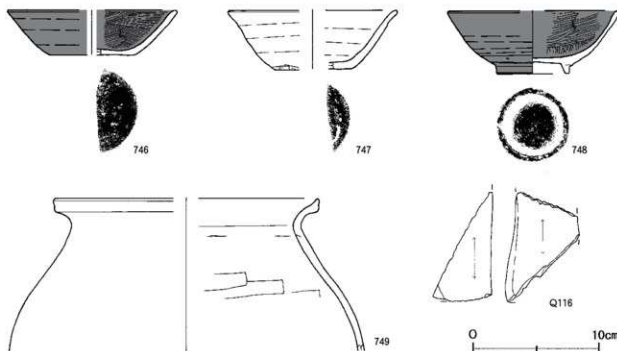
覆土 11層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | 砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片281点(坏62, 高台付坏1, 高坏2, 甕216点), 須恵器片28点(坏16, 蓋1, 甕11), 石器1点(砥石), 礫8点の他に, 流れ込んだ弥生土器片54点も出土している。748は中央部の床面から出土している。北側と東側の壁際に焼土が検出され焼失住居の可能性があるが明確ではない。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第174図 第120号住居跡出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物観察表(第174図)

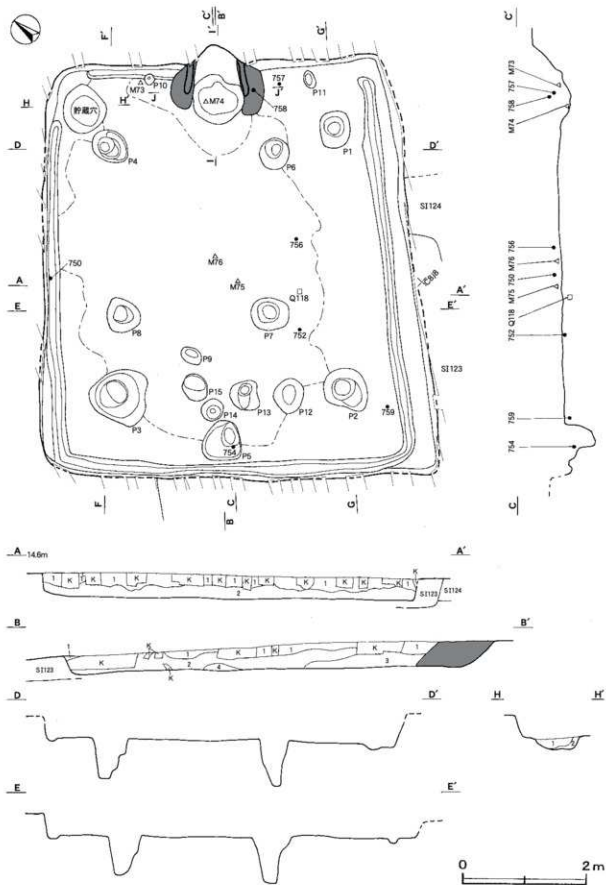
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
746	土師器	坏	[13.2]	3.5	[6.8]	長石-石英-雲母 に灰・炭粒	普通	底面焼へつ切り 底面焼へつ割り	内面へつ磨き	覆土中	40%	
747	須恵器	坏	[13.2]	4.6	[6.0]	長石-石英-雲母 付炭粒	灰	普通	底面焼へつ切り 体部下縁手持ちへつ割り	覆土下層	50% 異常「口」	
748	土師器	高台付坏	[13.3]	4.9	5.6	長石-石英-赤色 粒子	に灰・炭粒	普通	底面焼へつ割り 高台付	内面へつ磨き	床面	50%
749	土師器	甕	[20.6]	[12.1]	-	長石-石英-雲母	に灰・炭	普通	口内面・外面焼ナデ 体部外面ナデ 内面へつナデ	輪切瓦	床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q106	砥石	(9.6)	(5.8)	(4.7)	(110.5)	凝灰岩	砥面2面	覆土中	

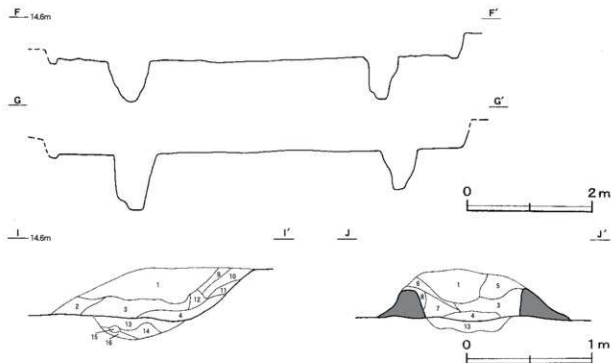
第121号住居跡(第175~178図)

位置 調査区西部のC 8 i7区で, 標高14.3mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第123・124号住居跡を掘り込んでいる。



第175图 第121号住居跡実測図(1)



第176図 第121号住居跡実測図(2)

規模と形状 長軸6.74m、短軸5.90mほどの長方形で、主軸方向はN-49°-Eである。壁高は30~41cmで、外傾して立ち上がっている。また、拡張以前の柱穴が検出され、南東側と南西側の二辺が拡張されている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝はほぼ周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで126cmである。袖口幅は153cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめた後、竈土層第13~16層を充填して使用していたと考えられるが、赤変や硬化部分は検出されなかった。煙道部は、壁外へ28cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|----------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 | 砂質粘土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 10 黒褐色 | 炭化物中量、焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 黒灰色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量 | 12 暗褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | 13 日向黄褐色 | 砂質粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 14 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 15 黄褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化物・砂質粘土ブロック少量 | 16 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 8 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |
| 9 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 | | |

ピット 15か所。P1~P4は深さ63~88cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ46cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P6~P8は64~75cmで、配置から拡張以前の主柱穴と考えられる。P9は深さ32cmで、配置から拡張以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。P10・P11は深さ42~49cmで、竈を挟むように北東壁際に位置していることから、竈の付属施設の柱穴と考えられる。P12~P15は性格は不明である。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|------|------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | | |
| 3 極暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量 | | |

貯蔵穴 北コーナー部に位置し、長径80cm、短径69cmほどの楕円形で、深さは18cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

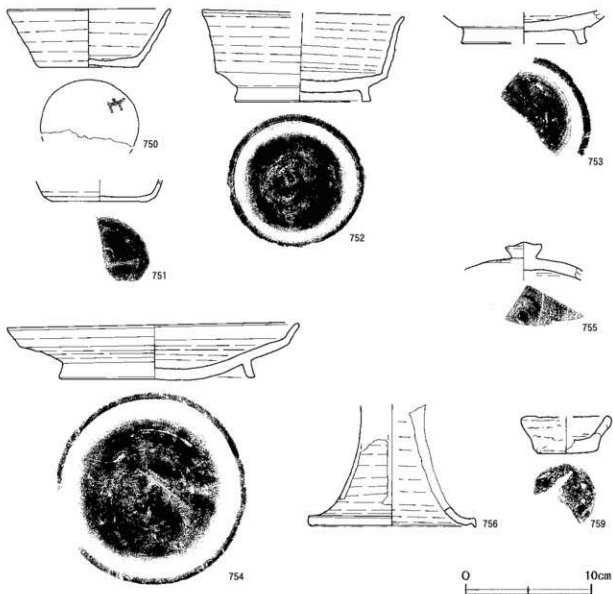
貯蔵穴土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック少量

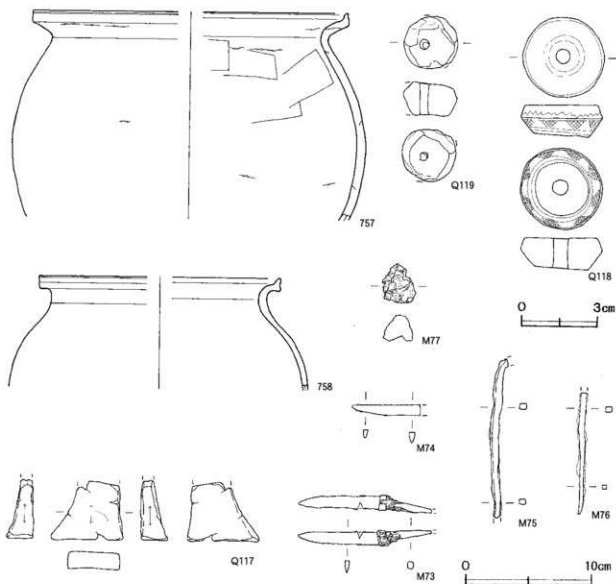
2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土器片1181点(坏119, 高坏3, 甕1059), 須恵器片118点(坏89, 高台付坏4, 甕15, 高甕1, 蓋9), 土製品4点(紡錘車1, 支脚3), 石器1点(砥石), 石製品2点(紡錘車), 鉄製品4点(刀子2, 釘2), 鉄滓1点, 手捏土器1点, 礫21点の他に、流れ込んだ縄文土器片1点, 弥生土器片125点, 耕作により混入した陶器片1点も出土している。752は中央部の床面, 754はP5内からそれぞれ出土している。M73は北東壁際の床面から, M74は竈の火床面からの出土である。Q118は第123号住居跡の調査の際に木跡の掘り方から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第177図 第121号住居跡出土遺物実測図(1)



第178図 第121号住居跡出土遺物実測図(2)

第121号住居跡出土遺物観察表(第177・178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考	
770	須恵器	坏	12.8	4.7	7.8	長石-石英・斜状 長石	灰黄褐色	普通	底面縁へつ切り後多方向へつ切り	覆土下層 R.35	10% 黒書「上」	
771	須恵器	坏	-	(1.8)	7.6	長石-石英	黄灰	良好	底面縁へつ切り縁部へつ切り	覆土中	10% 黒書「上」	
772	須恵器	高台付坏	15.9	6.8	10.5	長石-石英・斜状 長石	灰	良好	底面縁へつ切り後高台部付	床面	70% R.35	
773	須恵器	高台付坏	-	(2.5)	(9.6)	長石-石英	灰黄	普通	底面縁へつ切り後高台部付付 高台部に割み	覆土中	20%	
774	須恵器	甕	23.0	4.6	15.3	長石-石英	灰黄褐色	良好	底面縁へつ切り後高台部付付	P14# R.35	80% 黒書「上」	
775	須恵器	蓋	-	(3.0)	-	長石-石英	灰黄	良好	天井部斜面的へつ切り	覆土中	5% 黒書「上」	
776	須恵器	高盤	-	(9.6)	13.2	長石-石英・斜状 長石	灰	良好	脚部へつ切りによる透かし4ヶ所	覆土下層	30%	
777	土師器	甕	[25.0]	(16.3)	-	長石-石英・雲母 赤鉄粒子	にじみ褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面へつナデ	輪切痕	覆土下層	10%
778	土師器	甕	[19.2]	(8.8)	-	長石-石英・雲母	にじみ褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ		覆土下層	10%
779	土師器	手取土器	(8.6)	2.9	4.4		灰黄褐色	普通	内・外面ナデ	輪切痕	床面	50% R.36

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q117	砥石	(4.7)	3.8	1.4	(22.6)	福尾岩	砥石3面	翻り方	

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q18	結核鏝	3.2	0.5	1.8	22.0	磨石	両面及び側面に微細有り 両方からの穿孔	掘り方	PL40
Q19	結核鏝	(4.0)	0.6~0.8	(2.7)	(37.7)	鉱山岩	自然面を利用して加工 両方からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M23	刀子	(10.6)	(1.0)	0.4~0.5	(7.5)	鉄	紫灰欠削 緑金具遺存 基部に木質遺存	灰函	PL43
M74	刀子	(5.5)	0.9	0.4~0.5	(3.8)	鉄	刀身の一部	竈内	
M75	釘	(12.0)	0.8	0.5	(13.3)	鉄	断面は方形の棒状 角釘か	覆土下層	
M76	釘	(9.6)	0.5	0.4	(9.6)	鉄	断面は方形の棒状 角釘か	覆土下層	
M77	鉄平	3.1	2.6	2.0	17.8	鉄	両面に赤褐色 凹み有り	覆土中	

表5 奈良時代・平安時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高	床面	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係 (旧→新)		
							壁溝	土柱	土間						
74	D102	N-120°-E	[方形]	(3.10 × 2.50)	4	平坦	—	—	—	1	—	自然土師器	9世紀代		
76	D104	N-0°	[方形]	3.24 × 3.08	11~30	平坦	—	—	—	1	—	自然土師器、須恵器	9世紀中葉		
78	D940	N-37°-W	長方形	4.93 × 3.45	10~24	平坦				1	1	土師器、土師質土器、鉄製品、銅製品、石器、鏡	10世紀後半		
104	D945	N-157°-W	長方形	4.00 × 3.30	18~42	平坦	—	—	—	1	—	土師器	10世紀前半	SI101→本跡→SK173	
107	D810	N-71°-E	[方形]	2.55 × 2.50	12	平坦	—	—	—	1	—	自然土師器、土師質土器	10世紀後半	SI109-110→本跡→P6	
109	D840	N-86°-E	長方形	3.72 × 3.22	9~14	平坦	—	—	—	1	—	土師器、須恵器、灰輪陶器、石器、鉄製品	9世紀後半	SI110→本跡→SI107-P6	
110	D840	N-8°-W	方形	4.70 × 4.61	45~65	平坦	打込全周	8	1	2	2	—	自然土師器、須恵器、土製品、石器、鉄製品	8世紀後半	SI112→本跡→SI107-109
111	C932	N-49°-E	方形	7.08 × 6.88	18~65	平坦	一部	10	1	13	1	土師器、須恵器、土製品、鉄製品、鏡	8世紀後半	SI112→本跡	
118	C819	N-38°-W	方形	5.40 × 5.18	35~60	平坦	—	4	—	4	1	土師器、須恵器、手捏土器、土製品、石器、鉄製品、鏡	9世紀以前	SI116-119→本跡	
120	C818	N-47°-W	長方形	5.39 × 4.45	10~51	平坦	—	—	—	—	—	自然土師器、須恵器、石器	9世紀中葉	SI136→本跡	
121	C817	N-89°-E	長方形	6.74 × 5.90	30~41	平坦	打込全周	7	2	6	1	1	自然土師器、須恵器、手捏土器、土製品、石器、石製品、鉄製品、鏡	8世紀後半	SI123-124→本跡

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第179図)

位置 調査区西部のD9C2区で、標高14.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

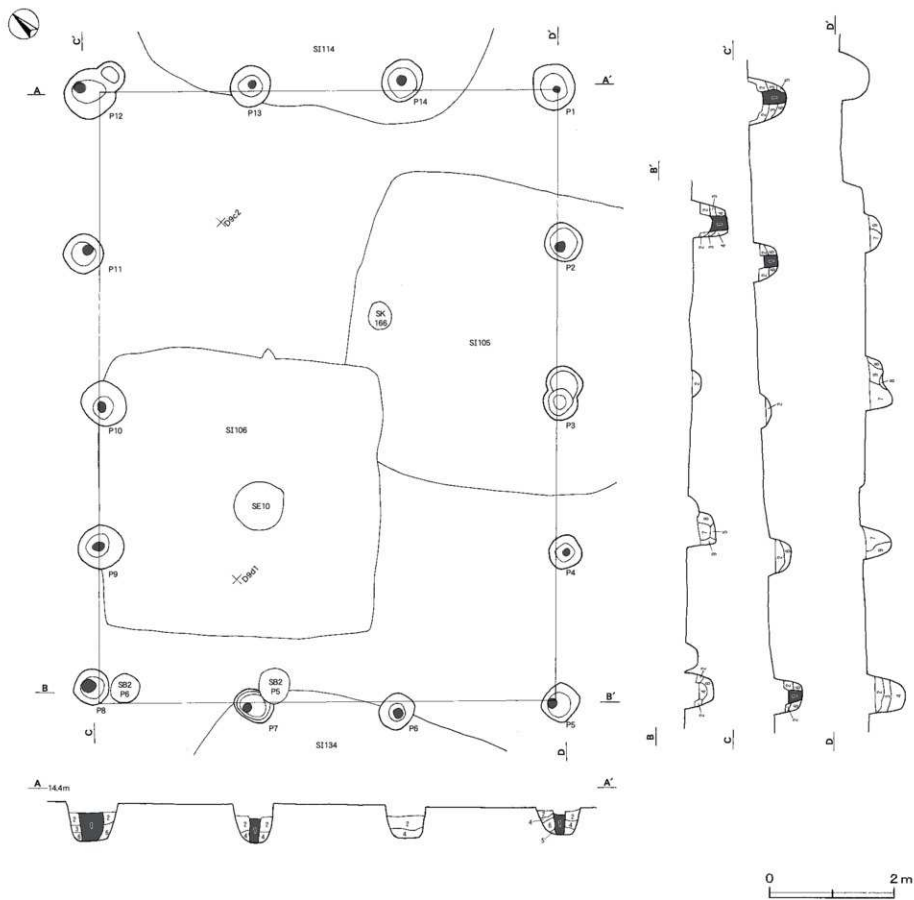
重複関係 第105・106・114・134号住居跡を掘り込み、第2号掘立柱建物、第10号井戸、第166号土坑、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行3間の側柱建物跡で、桁行方向N-48°-Eの東西棟である。規模は、桁行9.68m(32尺)、梁行7.26m(24尺)で、柱間寸法は桁行・梁行ともに2.42m(8尺)である。なお、桁行・梁行ともに柱筋の通りが悪い。

柱穴 14か所。平面形は円形を基調とし、深さは48~64cmである。土層の第1層が柱痕跡に相当し、締まりの弱い黒褐色土である。第2~7層は掘り方の埋土で、ローム土を主体とした褐色系の土であるが、強く突き固めた底筋は認められない。その他の層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5 褐色	ロームブロック少量		



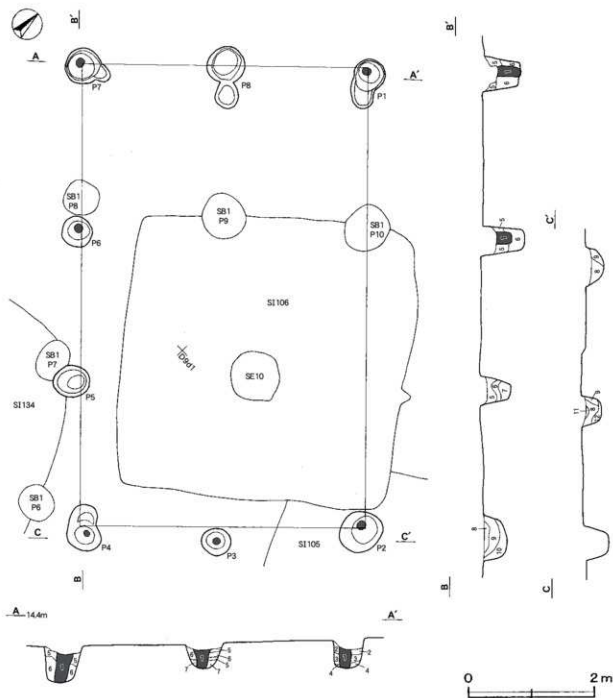
第179图 第1号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片32点、土師器片53点、須恵器片5点が出土しているが、いずれも細片のため図示することはできない。

所見 第2号掘立柱建物に掘り込まれているが、時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが、8～9世紀代と想定される。

第2号掘立柱建物跡 (第180図)

位置 調査区西部のD 8 c0区で、標高14.1mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。



第180図 第2号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第105・106・134号住居跡，第1号掘立柱建物跡を掘り込み，第10号井戸，第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡で，桁行方向N-46°-Wの南北棟である。規模は，桁行7.26m(24尺)，梁行4.54m(15尺)で，柱間寸法は，桁行2.42m(8尺)，梁行2.27m(7.5尺)である。南妻筋の通りが悪いが，その他はほぼ柱筋が通っている。

柱穴 8か所。平面形は円形を基調とし，深さは36~71cmである。土層は第1層が柱痕跡に相当し，締まりの弱い黒褐色土である。第2~7層は掘り方の埋土で，ローム土を主体とした褐色系の土であるが，強く突き固めた痕跡は認められない。その他の層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	8 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量	9 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 に近い褐色	ロームブロック少量	10 黒褐色	ロームブロック微量
5 褐色	ロームブロック少量	11 黒褐色	炭化粒子少量，ロームブロック微量
6 暗褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量

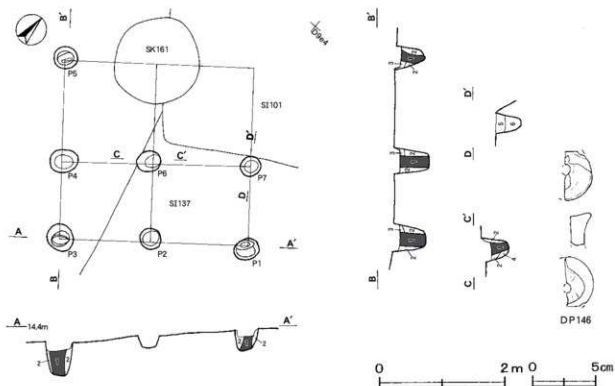
遺物出土状況 弥生土器片2点，土師器片5点，須恵器片1点が出土しているが，いずれも細片のため図示することはできない。

所見 第1号掘立柱建物跡を掘り込んでいるが，時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが，8~9世紀代と想定される。

第3号掘立柱建物跡 (第181図)

位置 調査区西部のD9e3区で，標高14.4mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第101・137号住居跡を掘り込み，第161号土坑に掘り込まれている。



第181図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

規模と構造 確認できた桁行・梁行は2間の総柱建物である。桁行方向N-48°Eの東西棟である。規模は桁行3.02m(10尺)、梁行2.87m(9.5尺)で、柱間寸法は桁行1.51m(5尺)、梁行は南間1.21m(4尺)、北間1.51m(5尺)で、南の柱間が狭い。おおむね桁行・梁行ともに柱筋が通っている。

柱穴 7か所。平面形は円形を基調とし、深さは21~59cmである。土層は第1層が柱痕跡に相当し、締まりの弱い黒褐色土である。第2~4層は掘り方の埋土で、ローム土を主体とした褐色系の土であるが、強く突き固めた痕跡は認められない。その他の層は、柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック微量 | 6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片2点、須恵器片1点、土製品1点(紡錘車)が出土している。DP146はP6の埋土中から出土している。その他の土器片は細片のため図示することはできない。

所見 他の掘立柱建物跡とは異なる小形の総柱建物跡であるが、時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが、第1・2号掘立柱建物跡と時期差がない8~9世紀代と想定される。

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第181図)

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	備 考
DP146	紡錘車	[4.4]	[0.8]	(2.5)	(14.5)	土(炭石・石英・雲母)	丁取なナデ	P6埋土中

表6 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁間)	規 模 (桁×梁)(m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱 穴 (cm)			主な出土遺物	備 考 (調査関係/時期/注)	
								構造	柱穴数	平面形			
1	D9c2	N-48°E	4×3	9.68×7.36	70.27	2.42	2.42	欄柱	11	円形	48~64	弥生土器、土師器、須恵器	S105-996-119(31)→本跡→S2-4919-S106-45G
2	D8c0	N-46°W	3×2	7.26×4.54	32.96	2.42	2.27	欄柱	8	円形	36~71	弥生土器、土師器、須恵器	S105-996-134(第1)→本跡→S10-45G
3	D9d0	N-48°E	(2×2)	(3.02×2.87)	(8.66)	1.51	1.21(96) 1.51(本)	総柱	7	円形	21~29	土師器、須恵器、土製品	S101-137→本跡→S3(6)

5 近世の遺構と遺物

今回の調査では、中段段丘上から近世の墓坑2基の他に井戸跡4基が確認された。以下、遺構と遺物について記載する。

なお、墓坑については既に報告されている『茨城県教育財団文化財調査報告書第216集 大戸下郷遺跡』(以下、『大戸下郷遺跡1』と略す)の判断基準に従い「底面や壁面に粘土が貼られているもの、土層中に粘土を多く含んでいるもの」を墓坑と判断した。

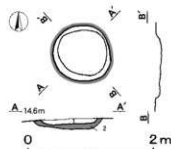
(1) 墓坑

第21号墓坑 (第182図)

位置 調査区西部のD9f4区で、標高14.5mほどの中段段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第99・137号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径長0.96m、径短0.90mの円形で、深さは8cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦で、粘土が貼り付けられている。



第182図 第21号墓坑実測図

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。第2層は貼り付けられた粘土層である。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子微量 礫中量
- 2 濃い黄色 粘土ブロック多量、ローム粒子微量

所見 底面に粘土が貼られていることから墓坑の可能性はある。時期は、遺物が出土していないため明確ではないが、『大戸下郷遺跡1』で報告されている墓坑と特徴が似ていることから近世以降と考えられる。

第22号墓坑（第183図）

位置 調査区西部のD 8 a7区で、標高14.0mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第122号住居跡を掘り込んでいる。

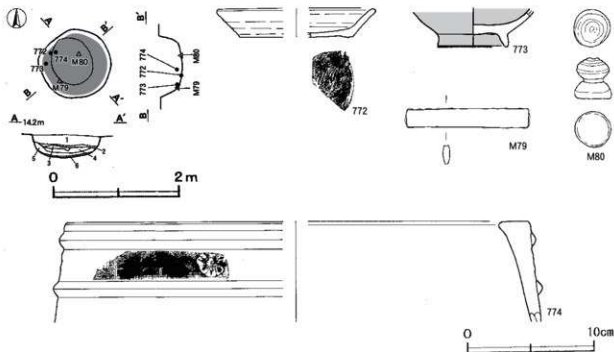
規模と形状 長径1.10m、短径1.09mの円形で、深さは35cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は中央部が緩やかにくぼみ粘土が貼り付けられている。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。第6層は底面に貼り付けられた粘土層である。

土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------|---------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 濃い赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量 | 6 灰ナリ褐色 | 粘土多量、砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 陶器片1点(丸碗)、土師質土器片2点(小皿)、瓦質土器片7点(火舎)、銅製品2点(小柄、銅網)、骨片2点(部位不明)、礫66点の他に、混入した土師器片5点、須恵器片2点も出土している。772・774、M



第183図 第22号墓坑・出土遺物実測図

80はやや北寄り、773はやや西寄り、M79は南寄りからそれぞれ出土しており、いずれも底面に密着した状態で出土している。骨片も同様でやや南寄りの位置から出土しているが、細片のため図示することはできない。骨粉も中央部から検出されている。

所見 底面に粘土が貼られており、また骨片や骨粉が検出されたことから墓坑と判断した。時期は、出土陶器が17世紀後半に位置づけられることから、それ以降と考えられる。

第22号墓坑出土遺物観察表(第183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
772	土師質土器	小皿	[12.4]	2.3	[8.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄緑	普通	底面(深部)に切り内・外面ナデ	覆土中	15%
774	瓦質土器	火舎	[36.8]	18.0	-	長石・石英・雲母	焼灰	普通	2条の縁帯 隆帯間に花文彫り	底面	10%
773	陶器	煎	-	[3.1]	5.5	砂粒	黄黒	良好	量付以外全面に磨削機 細い貫入	底面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M79	小柄	9.6	1.6	0.5	24.4	陶	調整不明	底面	

番号	器種	高さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M80	分銅	3.3	3.9	2.9	36.6	陶	上部に3条の文様	底面	孔3

表7 墓坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	構造	底面	覆土	出土遺物	備考 新住居関係(旧→新)
21	D9f4	N-0°	円形	0.96×0.90	8	外積	平坦	人為	—	S199→137→本跡
22	D8a7	N-0°	円形	1.10×1.09	35	外積	平坦	人為	陶器、土師質土器、瓦質土器、小柄、分銅、骨	S122→本跡

(2) 井戸跡

第7号井戸跡(第184図)

位置 調査区西部のD9f5区で、標高14.5mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

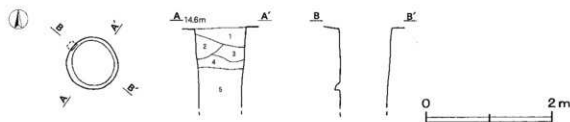
重複関係 第99号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.83m、短径0.80mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは125cmであるが底面までは調査できなかった。壁は直立しており、壁面に足場穴が1か所確認された。

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 細砂少量、ロームブロック微量 | 4 黒褐色 ロームブロック・細砂微量 |
| 2 極暗褐色 細砂少量、ローム粒子微量 | 5 褐色 細砂中量、ロームブロック・砂粒少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量、細砂微量 | |



第184図 第7号井戸跡実測図

所見 遺物が出土していないため、時期は不明であるが、規模や形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。

第8号井戸跡（第185図）

位置 調査区西部のD 9 a2区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

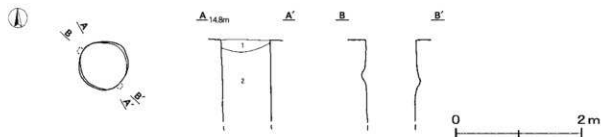
規模と形状 長径0.80m、短径0.78mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは126cmであるが底面までは調査できなかった。壁は直立しており、足場穴が2か所確認された。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・細礫・焼土粒子・ 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・小礫少量、炭化粒子微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明であるが、規模や形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。



第185図 第8号井戸跡実測図

第9号井戸跡（第186図）

位置 調査区西部のD 8 e7区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第127号住居跡を掘り込んでいる。

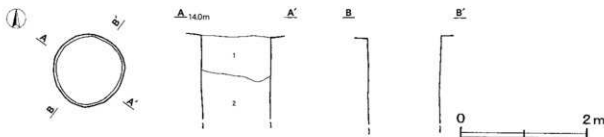
規模と形状 長径1.14m、短径1.10mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは135cmほどであるが底面までは調査できなかった。壁は直立して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・細礫微量 2 黒褐色 砂粒多量、細礫中量、ロームブロック少量、粘土ブロック微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明であるが、形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。



第186図 第9号井戸跡実測図

第10号井戸跡 (第187・188図)

位置 調査区西部のD9c1区で、標高14.1mほどの中位段丘上の南西斜面部に位置している。

重複関係 第106号住居跡、第1・2号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.80m、短径0.78mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは190cmほどであるが底面までは調査できなかった。壁は直立しており、足場穴が2か所確認された。

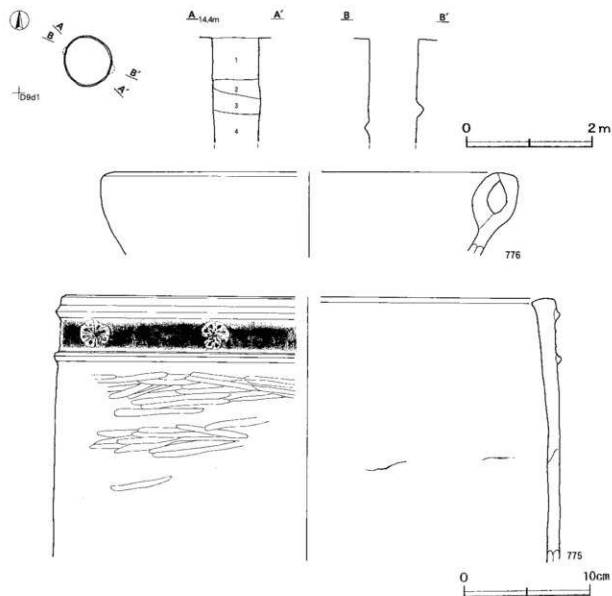
覆土 4層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

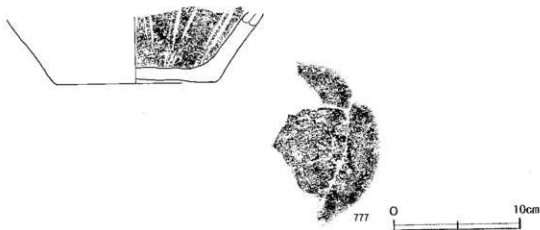
- | | | | |
|-------|-------------------------|------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 3 黒色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量、焼土 | 4 褐色 | 砂粒多量、粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)、瓦質土器片4点(播鉢1、火舎3)、礫1点の他に、混入した土師器片6点も出土している。いずれの遺物も覆土中からの出土である。

所見 時期は、出土土器から近世と考えられる。



第187図 第10号井戸跡・出土遺物実測図



第188図 第10号井戸跡出土遺物実測図

第10号井戸跡出土遺物観察表(第187・188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
776	土師質土器	内扉罎	[30.6]	6.7	-	長石・石英・雲母	浅黄緑	普通	1内扉残存 内面から口縁部外面横ナデ	覆土中	10%
775	瓦質土器	火舎	[38.0]	21.0	-	長石・石英・雲母・鉛黄・赤土	灰	普通	2条の縁帯 縁帯間に花文彫印 外面へウ磨き	覆土中	15%
777	瓦質土器	磁鉢	-	5.4	[12.6]	長石・石英	灰	普通	4条1單位の摺り目	覆土中	10%

表8 井戸跡一覧表

番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
7	D9f5	N-0°	円形	0.83×0.80 (125.0)	100.0	垂直	不明	人為	—	S199→本跡
8	D9e2	N-0°	円形	0.80×0.78 (126.0)	100.0	垂直	不明	人為	—	—
9	D8c7	N-0°	円形	1.14×1.10 (135.0)	100.0	垂直	不明	人為	—	S127→本跡
10	D9e1	N-0°	円形	0.80×0.78 (100.0)	100.0	垂直	不明	人為	土師質土器、瓦質土器、織	S106, SB1・2→本跡

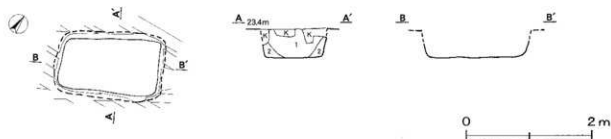
6 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期及び性格を判断することができなかった方形堅穴遺構2基、土坑25基、溝跡4条、ピット群3か所が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

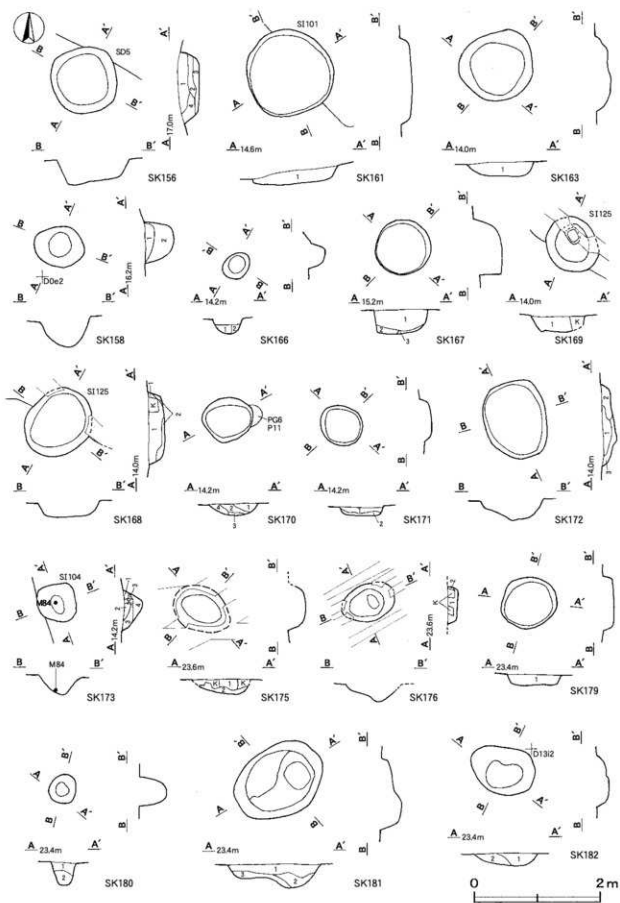
(1) 方形堅穴遺構

第1号方形堅穴遺構(第189図)

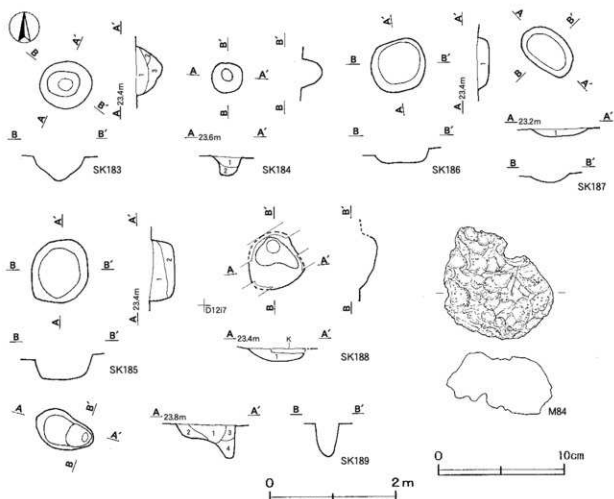
位置 調査区東部のD12f6区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している



第189図 第1号方形堅穴遺構実測図



第191図 その他の土坑実測図



第192図 その他の土坑・出土遺物実測図

第156号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

第158号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 炭化物・ローム粒子微量

第161号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第163号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第166号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第167号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 極暗褐色 ローム粒子微量

第168号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第169号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第170号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子少量

第171号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第172号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第173号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第175号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第176号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子少量

第179号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第180号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック微量

第181号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック微量
3 褐色 ロームブロック少量

第182号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量
2 暗褐色 ロームブロック少量

第183号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
2 褐色 ロームブロック少量
3 暗褐色 ロームブロック少量

第184号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック微量

第185号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
2 極暗褐色 鹿沼バミス少量、ロームブロック微量

第186号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・鹿沼バミス少量、炭化物微量

第187号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第188号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

第189号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 褐色 ロームブロック少量
4 暗褐色 ロームブロック少量

第173号土坑出土遺物観察表(第192図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M81	鉄滓	8.9	8.8	4.9	218.1	鉄	表面暗赤褐色 斑あり	底面	

表10 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(旧→新)
156	C 9 9	N-0°	円形	1.13	27~38	緩斜	皿状	人為	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	SD 5→本跡
158	D162	N-72°-W	楕円形	0.80×0.67	44	緩斜	平坦	自然	—	
161	D 9e3	N-0°	円形	1.38	18	緩斜	皿状	不明	弥生土器、土師器、須恵器	S1101-SB 3→本跡
163	D 816	N-0°	円形	1.18	22	緩斜	皿状	不明	土師器、須恵器	
166	D 9e2	N-52°-E	楕円形	0.46×0.38	25	緩斜	皿状	人為	—	S1105-SB 1→本跡
167	D 9a5	N-0°	円形	0.88	45	垂直	皿状	人為・自然	弥生土器、土師器、縄文土器、須恵器、鐵	S188→本跡
168	D 8a6	N-45°-E	楕円形	1.17×0.98	23	緩斜	皿状	自然	弥生土器、土師器、須恵器、鐵	S1125→本跡
169	D 8a6	N-41°-W	楕円形	1.60×0.90	24	緩斜	皿状	不明	弥生土器、土師器、須恵器	S1125→本跡
170	D 816	N-13°-W	(楕円形)	(0.80)×0.70	16	緩斜	皿状	人為	—	PG 6→本跡
171	D 8a5	N-0°	円形	0.70×0.64	14	緩斜	皿状	自然	土師器、須恵器、鐵	
172	D 8e9	N-17°-W	楕円形	1.26×1.00	34	緩斜	皿状	人為	—	
173	D 9d3	N-51°-W	円形	0.70×0.65	28	緩斜	平坦	人為	鉄滓	S1104→本跡
175	D12g4	N-57°-W	(楕円形)	(0.97×0.73)	32~50	緩斜	皿状	自然	—	
176	D12b5	N-67°-E	楕円形	(0.86)×0.62	10~23	緩斜	皿状	人為	—	
179	D1216	N-57°-E	円形	0.90×0.84	16	緩斜	皿状	不明	—	
180	D1217	N-40°-E	円形	0.48×0.42	42	外傾	平坦	人為	—	
181	D1259	N-55°-E	楕円形	1.48×1.10	14~32	緩斜	皿状	人為	—	
182	D1311	N-65°-W	楕円形	1.06×0.78	18	緩斜	皿状	人為	—	
183	D131a	N-80°-W	円形	0.84×0.74	34	緩斜	平坦	人為	—	
184	D1266	N-0°	円形	(0.48)	30	緩斜	平坦	人為	—	
185	D10g9	N-30°-E	円形	1.04×0.91	37	緩斜	皿状	人為	—	
186	D16a0	N-0°	円形	0.92	19	緩斜	皿状	不明	—	S1141→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (旧→新)
187	D106	N-50°-W	楕円形	0.90×0.61	11	緩斜	平坦	不明	—	S141→本跡
188	D1207	N-29°-E	不整形	(0.98×0.92)	26	緩斜	屈状	不明	—	
189	D1107	N-70°-W	楕円形	0.97×0.60	20~50	外傾	平坦	人為	—	

(3) 溝跡

第5号溝跡 (第193図)

位置 調査区西部のC9i9~D10c4区で、標高17.2mほどの中段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第156号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西側と南東側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D10c4区から北西方向(N-48°-W)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは25.70mで、上幅0.40~1.80m、下幅0.21~0.62m、深さ19~44cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含んでいるがレンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片1点、土師器片6点、須恵器片1点、礫1点が出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第193図 第5号溝跡実測図

第6号溝跡 (第194図)

位置 調査区中央部のD10c7~D10c8区で、標高21.7mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

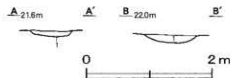
規模と形状 東西方向(N-86°-W)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは5.35mで、上幅0.60~0.92m、下幅0.50~0.84m、最深部は12cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量

所見 遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第194図 第6号溝跡実測図

第7号溝跡（第195図）

位置 調査区中央部のD10f0～D11d4区で、標高23.8mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第141・142号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D11d4区から南西方向（N-117°-W）へほぼ直線的に延びている。確認された長さは20.01mで、上幅0.75～1.60m、下幅0.60～1.32m、最深部は16cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

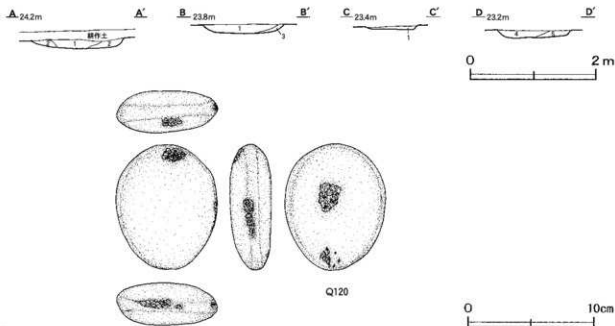
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 4 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭沼バミス微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 褐色 ロームブロック・炭沼バミス少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片3点、土師器片2点、須恵器片8点、石器1点（礫石）、礎22点が出土している。Q120は覆土中から出土している。その他の土器片は細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第195図 第7号溝跡・出土遺物実測図

第7号溝跡出土遺物観察表(第195図)

番号	図種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q120	礫石	9.9	8.0	3.3	382.8	砂岩	敲打痕5ヶ所	覆土中	

第8号溝跡（第196図）

位置 調査区西部のD10t9～D10e9区で、標高22.5mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

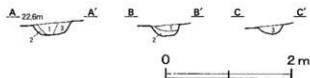
重複関係 第138号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D10b9区から南方向（N-172°-E）へほぼ直線的に延びている。確認された長さは13.80mで、上幅0.34~0.58m、下幅0.23~0.38m、深さ12~18cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 3層に分層される。ロームブロックや甕沼バミスブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・甕沼バミスブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、甕沼バミスブロック微量



遺物出土状況 礎2点しか出土していない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。

第196図 第8号溝跡実測図

第9号溝跡（第197図）

位置 調査区東部のD14i5~E14c7区で、標高22.2mほどの台地縁辺部の東斜面部に位置している。

規模と形状 北側と南側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D14i5区から南南東方向（N-160°-E）へほぼ直線的に延びている。確認された長さは19.00mで、上幅2.00~3.20m、下幅0.42~1.76m、深さ20~104cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

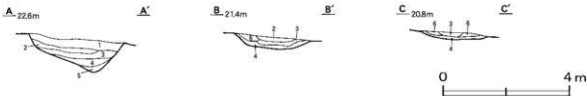
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片1点、弥生土器片16点、土師器片20点、須恵器片4点、土製品1点、鉄滓1点、礎6点が出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第197図 第9号溝跡実測図

表11 時期不明溝一覧表

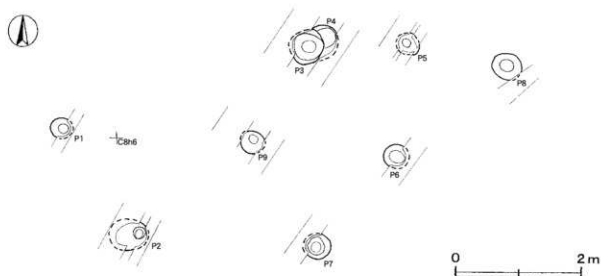
番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				確認長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
5	C9i9~D10c4	N-88°-W	直線状	25.70	0.40~1.80	0.21~0.62	19~44	緩斜	平坦	自然	弥生土器、土師器、須恵器、礎	本跡→C156
6	D10c7~D10c8	N-86°-W	直線状	5.35	0.60~0.92	0.50~0.84	12	緩斜	平坦	不明	—	
7	D10f0~D11d4	N-117°-W	直線状	20.01	0.75~1.60	0.60~1.32	16	緩斜	平坦	自然	弥生土器、土師器、須恵器、石器、礎	SI141-142→本跡

番号	位置	方向	形状	規模			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考	
				確認長(m)	上幅(m)	下幅(m)						深さ(cm)
8	D106~D106b	N-172°-E	直線状	13.8	0.34~0.58	0.23~0.38	12~18	緩斜	平坦	人為	礎	SI138→本路
9	D145~E147	N-107°-E	直線状	19.00	2.00~3.20	0.42~1.76	20~104	外傾	平坦	自然	彌生土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、鉄、礎	

(4) ビット群

第5号ビット群 (第198図)

調査区西側のC 8 b6区付近から9か所のビットが検出された。平面形は径36~62cmほどの円形または楕円形と推定され、深さは25~62cmである。P 1~P 3, P 6からは土師器片(甕類)が, P 7からは弥生土器片と土師器片が出土しているがいずれも細片である。時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、ビットの配置に掘立柱建物跡などの規則性を見つけることができないためビット群として扱った。以下、各ビットの一覧表を記載する。



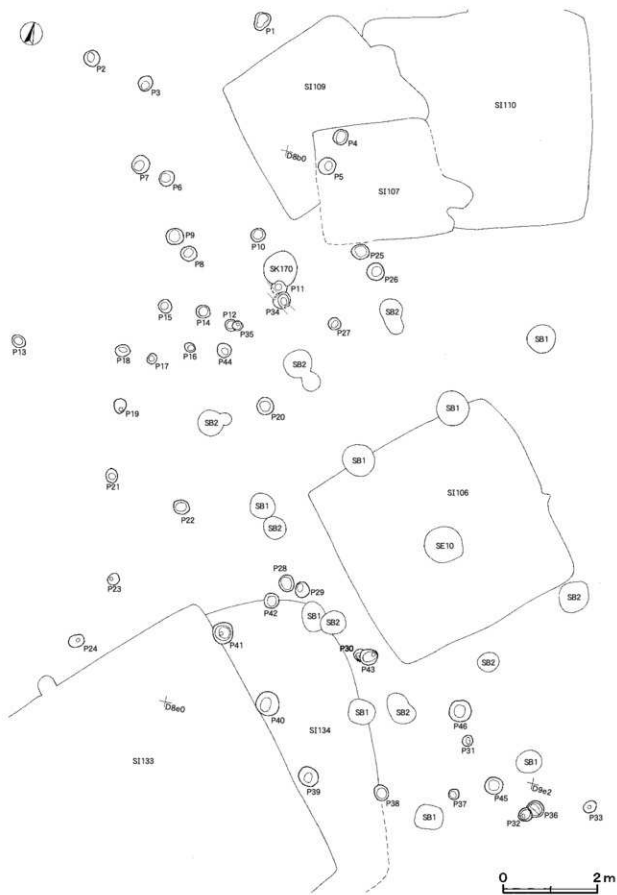
第198図 第5号ビット群実測図

第5号ビット群ビット計測表(第198図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	[38]	32	38	4	[52]	[48]	32	6	[40]	37	48	8	49	42	30
2	[62]	[51]	35	5	[36]	34	25	7	[44]	41	31	9	[38]	33	33
3	54	[52]	62												

第6号ビット群 (第199図)

調査区西側のD 8 a8~D 9 e2区から46か所のビットが検出された。平面形は径22~53cmほどの円形または楕円形で、深さは7~54cmである。P 24, P 30からは弥生土器片(甕類)が, P 40・P 41からは弥生土器片と土師器片が, P 3, P 6, P 9~P 11, P 34からは土師器片が, P 7からは土師器片と須恵器片が出土しているがいずれも細片である。時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、ビットの配置に掘立柱建物跡などの規則性を見つけることができないためビット群として扱った。以下、各ビットの一覧表を記載する。



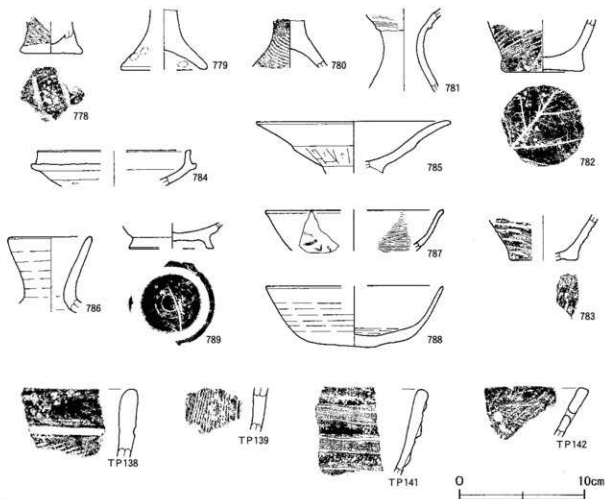
第199図 第6号ピット群実測図

第6号ピット群ピット計測表(第199図)

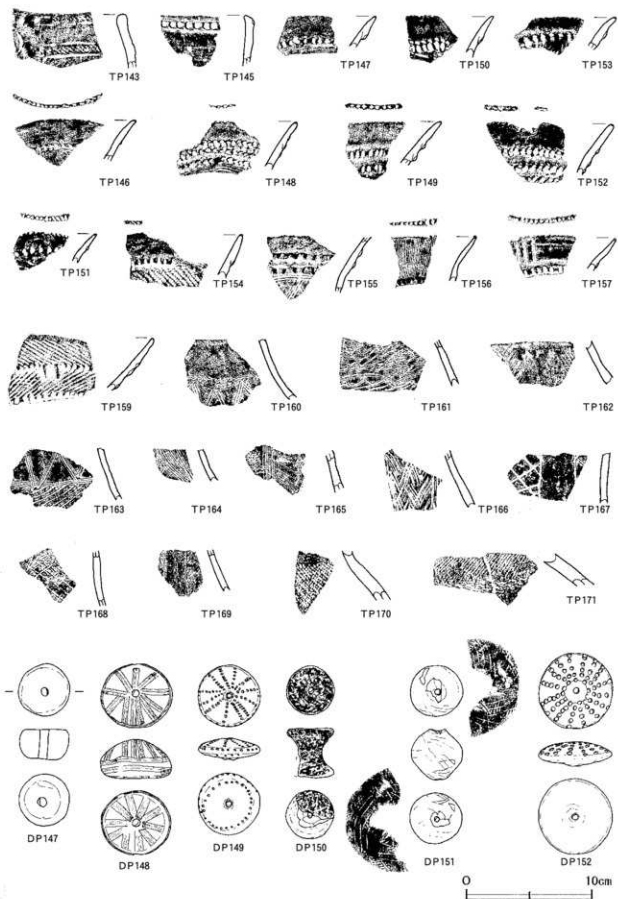
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	42	35	25	13	30	23	14	25	40	32	28	37	23	22	28
2	35	33	32	14	30	30	30	26	39	37	34	38	35	29	17
3	33	31	24	15	29	27	10	27	27	24	14	39	43	38	30
4	34	32	16	16	23	19	32	28	35	32	30	40	53	50	30
5	37	35	28	17	24	20	28	29	35	30	41	41	45	40	44
6	36	33	32	18	31	28	17	30	28	[26]	54	42	34	30	24
7	40	36	26	19	30	23	31	31	24	22	20	43	38	32	30
8	32	31	38	20	37	35	30	32	30	27	26	44	32	31	7
9	36	35	24	21	30	23	26	33	29	23	24	45	39	37	28
10	30	29	22	22	31	30	27	34	[34]	32	38	46	52	47	23
11	[38]	30	36	23	26	24	26	35	22	21	35				
12	26	[26]	24	24	34	24	24	36	35	[31]	21				

(5) 遺構外出土遺物

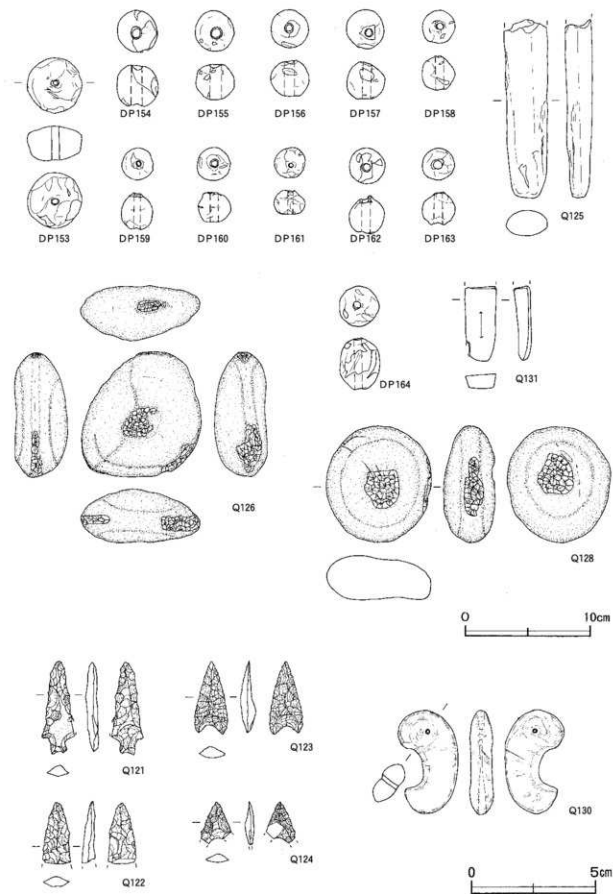
当遺跡から出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表に記載する。



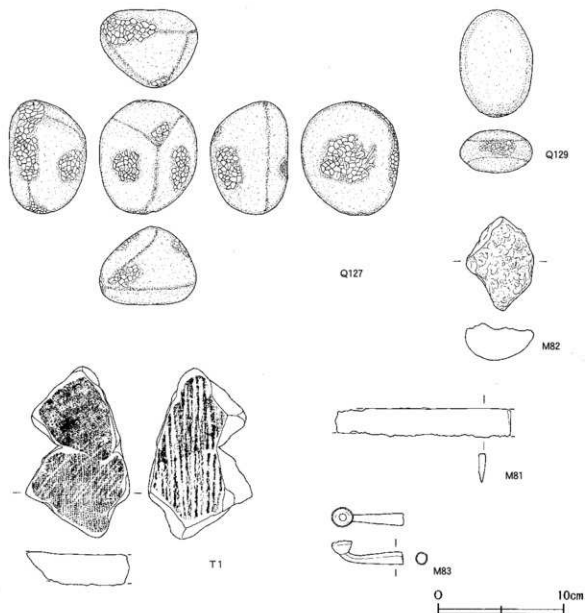
第200図 遺構外出土遺物実測図(1)



第201图 遺構外出土遺物実測図(2)



第202图 遗構外出土遺物実測図(3)



第203図 遺構外出土遺物実測図(4)

遺構外出土遺物観察表(第200~203図)

番号	種別	脚種	口径	脚高	直径	胎土	色調	地成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
778	弥生土器	高坏a	-	(2.5)	4.5	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部2附加条一種(附加2条)の縄文 底部木炭痕	D9a区	10%
779	弥生土器	高坏a	-	(4.7)	[6.6]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	脚部内・外面指頭痕	D11a区	30%
280	弥生土器	高坏a	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	二色・黄橙	普通	胴部外面2附加条一種(附加2条)の縄文	D9a区	20%
281	弥生土器	片口器b	-	8.5	-	長石・石英・雲母・赤鉄鉱子	二色・黄橙	普通	口縁部下端に層状状工具(4本)による絞状文 側面彫文	D9a区	20%
282	弥生土器	広口壺	-	(4.1)	6.6	長石・石英・雲母	二色・黄橙	普通	胴部2附加条一種(附加2条)の縄文 底部木炭痕	D10a区	10%
283	弥生土器	広口壺	-	(3.5)	[7.4]	長石・石英・雲母	二色・赤橙	普通	胴部2附加条二種(附加1条)の縄文 底部木炭痕	D8a区	5%
285	土師器	高坏	15.3	(4.1)	-	長石・石英・赤色鉄子	橙	普通	杯部口辺部内・外面横ナデ 体部外面へ9割り	D9a区	30%
284	須恵器	坏	[12.0]	(2.8)	-	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面縁へ9割り	D9a区	10%
286	須恵器	横瓶	6.4	8.0	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口辺部外面口コナデ	C9区	10%
287	土師器	坏	[14.2]	(2.2)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面口コナデ 内面へ9割り	C9区	5% 遺書1本a

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・技法の特徴	出土位置	備考
788	須恵器	罎	[14.0]	4.8	8.0	長石石英	灰黄	良好	底面彫刻へ切り取られ縁部へつり	C848E	60%
789	須恵器	高台付罎	-	2.0	[6.8]	長石石英	赤褐	良好	底面彫刻へ切り取られ高台部が付	D848E	30% 発着(一)
D138	縄文土器	深鉢	-	0.5	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	土に窪みによる縦位の波状文	D946E	5% P.38
D139	縄文土器	深鉢	-	0.5	-	長石石英	にんべい黄	普通	櫛歯状工具による縦位の波状文	D946E	5% P.38
D141	縄文土器	深鉢	-	0.9	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	櫛歯状工具による縦位の波状文	D947E	5% P.38
D142	縄文土器	深鉢	-	0.9	-	長石石英	黒褐	普通	土及の甲斐縄文 輪彫孔10所	D947E	5% P.38
D143	縄文土器	深鉢	-	1.8	-	長石石英雲母	黄褐	普通	縄文と棒状文 突起部が付	C946E	5% P.38
D145	縄文土器	深鉢	-	0.9	-	長石石英雲母	橙	普通	口辺に土台に押印のある隆帯 縄文	D936E	5% P.38
D146	赤生土器	広口壺	-	0.3	-	長石石英雲母	黒褐	普通	口唇部に棒状文・口辺に縄文 原形押印で口辺部と口唇部を繋ぐ文	C846E	5% P.38
D147	赤生土器	広口壺	-	0.5	-	長石石英雲母	橙	普通	口唇部に棒状文・口唇部・下縁に櫛歯状工具による押印 胴部に櫛歯状工具(本数不明)による隆帯	D117E	5%
D148	赤生土器	広口壺	-	0.8	-	長石石英雲母	浅黄橙	普通	口唇部に棒状文・口唇部・胴面上部に原形押印のある隆帯3条 櫛歯状工具(本数不明)による隆帯	E1160E	5%
D149	赤生土器	広口壺	-	0.4	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	口唇部に棒状文・口唇部・胴面上部に原形押印のある隆帯2条 櫛歯状工具(本数不明)による隆帯	D1160E	5% P.38
D150	赤生土器	広口壺	-	0.2	-	長石石英雲母	灰黄	普通	口唇部に棒状文・胴面上部に原形押印のある隆帯1条 胴部に附加条(附加1条)の縄文	D1160E	5%
D151	赤生土器	広口壺	-	0.2	-	長石石英雲母	赤褐	普通	口唇部に棒状文・口唇部・胴面上部に原形押印のある隆帯2条以上	D1160E	5% P.38
D152	赤生土器	広口壺	-	0.2	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	口唇部に棒状文・胴面上部に原形押印のある隆帯1条 胴部に櫛歯状工具(本数不明)による隆帯	D1160E	5%
D154	赤生土器	広口壺	-	0.4	-	長石石英雲母	橙	普通	口唇部に棒状文・口唇部・胴面上部に棒状工具による押印のある隆帯1条 胴部に附加条(附加1条)の縄文	D1160E	5%
D156	赤生土器	広口壺	4.9	-	-	長石石英雲母	浅黄橙	普通	口唇部に棒状文・胴面上部に原形押印のある隆帯2条 胴部に櫛歯状工具(本数不明)による隆帯	D1160E	5% P.38
D158	赤生土器	広口壺	-	0.5	-	長石石英雲母	明赤	普通	口唇部にへつり状工具による押印 小突起 口唇部に櫛歯状工具(本数不明)による隆帯区画 胴面上部の隆帯	D948E	5% P.38
D159	赤生土器	広口壺	-	0.6	-	長石石英雲母	橙	普通	口唇部に棒状文・口唇部・胴面上部に櫛歯状工具(4本)による縦区画 胴面上部に原形押印のある隆帯	E140E	5%
D158	赤生土器	広口壺	-	4.1	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	口唇部に棒状文・口唇部・胴面上部に原形押印のある隆帯2条 胴部に附加条(附加1条)の縄文 上縁部に輪彫部が付 下段にも下縁に縄文部が付	E140E	5% P.38
D166	赤生土器	広口壺	-	4.7	-	長石石英雲母	明褐	普通	胴面上部に櫛歯状工具(3本)による波状文 櫛歯状工具(2本)による山形文	D1160E	5% P.39
D165	赤生土器	広口壺	-	0.7	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	胴面に櫛歯状工具(4本)による波状文 胴面上部に附加条二條(附加1条)の縄文	D809E	5% P.39
D162	赤生土器	広口壺	-	0.4	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	櫛歯状工具(3本)によるV字文	D1160E	5% P.38
D163	赤生土器	広口壺	-	4.0	-	長石石英雲母	橙	普通	胴面下部に櫛歯状工具(4本)による山形文と直状文 胴面に附加条二條(附加1条)の縄文	D948E	5% P.39
D164	赤生土器	広口壺	-	0.5	-	長石石英雲母	赤黄	普通	櫛歯状工具(4本)による山形文	D1160E	5%
D165	赤生土器	広口壺	-	0.4	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	櫛歯状工具(6本)により縦区画され格子状文・区画内は波状文	C810E	5%
D166	赤生土器	広口壺	-	4.4	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	櫛歯状工具(4本)により縦区画され山形文	D1160E	5% P.39
D167	赤生土器	広口壺	-	0.8	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	へつり状工具により縦区画され格子状文	D946E	5% P.39
D168	赤生土器	広口壺	-	4.4	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	櫛歯状工具(4本)により縦区画され格子状文・胴面に附加条二條(附加1条)の縄文	D117E	5% P.39
D169	赤生土器	広口壺	-	0.1	-	長石石英雲母	にんべい黄	普通	へつり状工具により縦区画され格子状文	D117E	5%
D170	赤生土器	壺	-	0.8	-	長石石英雲母	橙	普通	附加条二條(附加2条)の縄文	D947E	5% 赤影 P.39
D171	赤生土器	壺	-	0.5	-	長石石英雲母	橙	普通	附加条二條(附加2条)の縄文 S字状筋文で文様帯区画	D947E	5% 赤影 P.39

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
D147	鉢	4.0	0.7	2.5	0.2	土(長石石英雲母)	ナブ 一方向からの穿孔	D948E	P.40
D148	鉢	5.6	0.6	3.0	0.17	土(長石石英雲母)	側面に櫛歯状工具(本数不明)による放射状の筋文 胴面に附加条二條(附加1条)の縄文 一方向からの穿孔	D946E	P.40
D149	鉢	4.9	0.5	1.7	0.64	土(長石石英雲母)	片面に棒状工具による放射状の筋文 胴面に波状文 側面に附加条二條(附加1条)の縄文 一方向からの穿孔	D117E	P.40
D150	鉢	4.8	0.5	4.9	0.24	土(長石石英雲母)	側面に附加条二條(附加1条)の縄文	D117E	P.40
D151	鉢	4.2	0.5	4.0	0.12	土(長石石英雲母)	ナブ 一方向からの穿孔	D848E	P.40
D152	鉢	5.9	0.5	2.0	0.19	土(長石石英雲母)	片面に棒状工具による放射状の筋文 一方向からの穿孔	C940E	P.40
D153	鉢	4.5	0.6	2.8	0.51	土(長石石英雲母)	ナブ 一方向からの穿孔	C817E	
D154	鉢状土埴	3.2	0.8	3.3	0.52	土(長石石英雲母)	ナブ 一方向からの穿孔	D106E	
D155	鉢状土埴	3.1	0.9	2.8	0.80	土(長石石英雲母)	ナブ 一方向からの穿孔	D948E	
D156	鉢状土埴	3.1	0.8	2.8	0.70	土(長石石英雲母)	ナブ 一方向からの穿孔	C942E	
D157	鉢状土埴	3.0	0.7	3.0	0.80	土(長石石英雲母)	ナブ 一方向からの穿孔	C940E	

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
IP18	球状土鏝	2.7	0.7	2.8	(19.1)	土長石-石英-雲母	ナデ 一方向からの穿孔	D948区	
IP19	球状土鏝	2.5	0.5	2.9	(18.6)	土長石-石英-雲母	ナデ 一方向からの穿孔	D947区	
IP98	球状土鏝	2.7	0.7	2.4	(18.3)	土長石-石英-雲母	ナデ 一方向からの穿孔	C706区	
IP61	球状土鏝	2.5	0.4	1.9	11.6	土長石-石英-雲母	ナデ 一方向からの穿孔	C915区	
IP62	球状土鏝	2.9	0.7	3.1	(22.9)	土長石-石英-雲母	ナデ 一方向からの穿孔	D857区	
IP63	球状土鏝	2.7	0.7	2.7	(16.8)	土長石-石英-雲母	ナデ 一方向からの穿孔	D847区	
IP64	球状土鏝	3.2	0.6	4.1	(42.9)	土長石-石英-雲母	ナデ 一方向からの穿孔	C706区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q121	有茎尖頭錐	3.6	(1.3)	0.5	(1.8)	チャート	両面剥離調整 一部自然面を残す	D940区	凡.42
Q122	石鏝	(2.5)	(1.1)	(0.5)	(1.2)	安山岩	両面剥離調整	D940区	左側部を 凡.42
Q123	石鏝	2.9	1.3	0.6	1.5	チャート	両基無茎錐 両面剥離調整 押圧剥離	C806区	凡.42
Q124	石鏝	(1.7)	(1.2)	0.4	(0.4)	頁岩	両基無茎錐 両面剥離調整 押圧剥離	D946区	凡.42
Q125	石鏝	(1.5)	3.5	2.1	(17.4)	板状岩	丁寧な研磨成形	D946区	
Q126	礫石	9.9	10.0	4.4	549.9	砂岩	敲打痕4小所	D116区	凡.42
Q127	礫石	10.0	7.8	6.2	37.1	砂岩	敲打痕7小所	D945区	
Q128	礫石	9.3	8.5	3.5	433.0	砂岩	敲打痕3小所	D1185区	凡.42
Q129	礫石	8.5	5.8	3.4	242.8	砂岩	敲打痕1小所	C706区	凡.42
Q100	勾玉	4.2	2.4	0.9	12.5	滑石	一方向からの穿孔 孔径0.15mm	D946区	凡.42
Q131	礫石	(6.0)	2.5	1.3	(26.7)	凝灰岩	紙面1小所	D847区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M81	小刀	(14.0)	2.2	0.5	(61.0)	鉄	刀身の一部 平縁平造り	E1467区	
M83	標管	5.8	1.6	1.9	6.1	銅	標首 膨反し急	D1085区	
M82	筒状押	(7.4)	(5.3)	2.9	(127.0)	鉄	裏面に赤錆付着	C90区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	粘土	色調	焼成	手法の特 徴	出土位置	備 考
T1	平瓦	(13.5)	(8.4)	2.7	(2.0)	長石-石英	灰オリーブ	普通	両面赤目肌 凸面隅切	D945区	10%

第4節 ま と め

1 はじめに

大戸下郷遺跡は、平成13・14年度に一次調査として6,418㎡が調査され、『茨城県教育財団文化財調査報告書第216集 大戸下郷遺跡^[1]』として報告されている（以下、『大戸下郷遺跡1』と略す）。平成16年度の二次調査では6,208㎡の調査（本報告分を『大戸下郷遺跡2』と略す）が行われ、延べ12,626㎡が調査された。

一次調査では、堅穴住居跡62軒（縄文5、弥生8、古墳39、奈良6、平安4）、墓坑20基（古墳1、近世19）、土坑106基（弥生2、平安1、中世1、近世7、時期不明95）、井戸跡6基（近世）、溝跡3条（時期不明）、ピット群4か所が検出されている。二次調査では、堅穴住居跡69軒（弥生21、古墳37、奈良4、平安7）、掘立柱建物跡3棟（奈良時代～平安時代）、墓坑2基（近世）、土坑26基（弥生1、時期不明25）、井戸跡4基（近世）、方形堅穴遺構2基（時期不明）、溝跡5条（時期不明）、ピット群2か所が検出されている。

ここでは、二次にわたる調査で検出された遺構について時代順に概略を述べ、簡単な考察を加えてまとめとしたい。

※ 調査区域概念

『大戸下郷遺跡1』では、調査区を8区に分けているが、調査1区から3区（遺構確認面の標高が13m以下）を「低位段丘部」、調査4区から8区（遺構確認面の標高が13～15m）を「中位段丘部」とする。それをふまえ、『大戸下郷遺跡2』での遺構確認面の標高13～18mを「中位段丘部」に加え、遺構確認面の標高が20m以上を「台地上」とする。

2 縄文時代

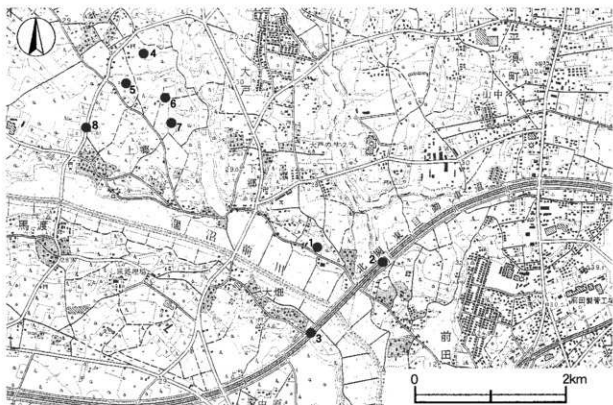
二次にわたる調査の結果、縄文時代の住居跡5軒、陥し穴8基が確認されている。5軒の住居跡は、いずれも「低位段丘部」で確認されており、それ以外の場所では検出されていない。「中位段丘上」から「台地上」にかけて行われた今回の二次調査では該期の住居跡は検出されず、「低位段丘上に当遺跡における縄文時代の集落が存在した可能性が考えられる。」という『大戸下郷遺跡1』の指摘の通り、潤沼前川という水場へ比較的近い場所が選地されて集落が営まれていたと考えられる。また、土器片についても「低位段丘上の表面採集や後世の遺構内からも、流れ込みや混入と考えられる前期前葉（関山期）の破片が出土している。（中略）中央部から東側に至る3区から8区の中位段丘上の住居跡などからの縄文土器片の検出は少なくなる」とあり、『大戸下郷遺跡2』でも後世の住居跡への流れ込みや表土中などから少数の確認しかできず、土器片の出土も『大戸下郷遺跡1』と同様の傾向を示している。

「台地上」に位置している陥し穴8基は、第8号陥し穴が南東側にやや離れて位置しているものの、その他の7基は10mほどの範囲内に分布しており、特に、第2・3・5・6号陥し穴は標高23.1mラインにほぼ同間隔で直行して並んでいる。遺構の形態から縄文時代の陥し穴と判断したが、いずれも遺物が出土しておらず、明確な時期は特定できなかった。

遺跡周辺の地形を考え合わせると、低位段丘上に集落を形成した場合、遺跡南部を東流する潤沼前川を水場及び内水性漁業として利用し、集落の後背地となる台地上は植物質食料の採集及び狩猟が可能となる森林として利用されていた事を想定したい。

3 弥生時代

瀬沼前川流域に分布する多くの遺跡は「大戸遺跡群」²¹⁾(第205図参照)と呼ばれ、当遺跡を含む大畑遺跡³⁾(10軒)、矢倉遺跡⁴⁾(31軒)、その支群である「桜の郷遺跡群」⁹⁾の宮後遺跡⁴⁾(5軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭⁷⁾4軒)、大塚遺跡1⁸⁾・大塚遺跡2⁹⁾(28軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭12軒)、綱山遺跡⁶⁾(弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭12軒)、石原遺跡¹⁾(23軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭6軒)、木戸遺跡²⁾(2軒)の8遺跡が報告または調査されており、該期及び後続する時期の良好な資料を提供している。



第204図 大戸遺跡群遺跡分布図

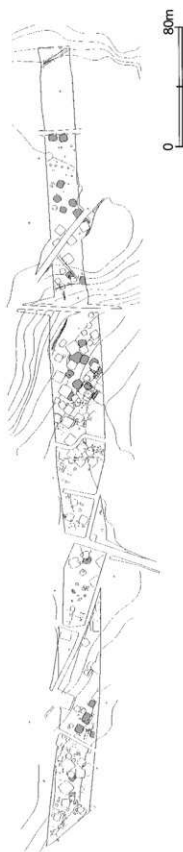
1 大戸下郷遺跡 2 矢倉遺跡 3 大畑遺跡 4 宮後遺跡
5 大塚遺跡 6 綱山遺跡 7 石原遺跡 8 木戸遺跡

(1) 遺構と遺物について

『大戸下郷遺跡1』での該期の遺構は堅穴住居跡8軒(他に十玉台式土器と土師器が共存している古墳時代初頭の住居跡1軒と第1号墓坑が検出されている)の他に、土坑2基が報告されている。『大戸下郷遺跡2』の堅穴住居跡21軒、土坑1基を合わせると、堅穴住居跡29軒、土坑3基が確認されたことになる。住居跡は、「低位段丘部」に5軒、「中位段丘部」に13軒、「台地上」では11軒が確認され、調査区全体に分布しており、出土土器(十玉台式土器)から弥生時代後期後半と捉えた。

以下、「低位段丘部」、「中位段丘部」、「台地上」の3か所に分けて遺構と遺物について概観する。

まず、「低位段丘部」の5軒(第14・28・33・35・37号住居跡)は、標高11~12mの南西緩斜面に位置しており、斜面地のため後世の耕作の影響を受けていずれも遺存状態が悪く、覆土も薄い。形状は隅丸方形あるいは隅丸長方形で、主軸方向は北から西へ37~47°の範囲に収まっている。規模は4~5mが多いが、



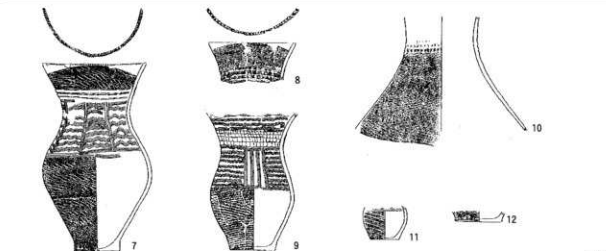
第205図 弥生時代遺構配置図

第33号住居跡は長軸6.67m、短軸5.32mで、「低位段丘部」の中では最大である。5軒の住居跡の中で、比較的多く遺物が包蔵されていたのは第28・33・37号住居跡である。第28号住居跡からは、群馬県方面を中心に分布する樽式土器（第206図1）が覆土下層から出土しており、『大戸下郷遺跡1』では「糜状文がなく胴部が球胴化しており、Ⅲ期またはⅣ期に該当するものと推定される」と報告されている。第33号住居跡からは、口辺部に附加条二種（附加1条）を施して頸部上位に2条の隆帯を表出し、頸部には縦区画充填波状文を施した広口壺（第206図7）が出土しているが、口辺部に附加条二種（附加1条）を施したものと縦区画充填波状文を施した土器の出土は少ない傾向にある。第37号住居跡からは、広口壺（第206図13）と小形広口壺（第206図15）が出土している。15は第33号住居跡から出土した7と同様に口辺部は附加条二種（附加1条）の施文であり、この土器の頸部文様帯の施文が雑になっていることを認めることができる。また、茨城県において該期を代表する十王台式土器と上稲吉式土器の文化圏においては、炉跡に炉石を伴う例が比較的多いという指摘¹³⁾がなされており、第14号住居跡は安山岩が、第33号住居跡は粘土塊がそれぞれ火床面から検出されている。

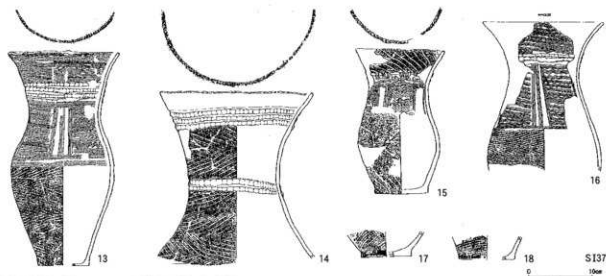
次に「中位段丘部」の13軒（第61・63・70・88・90・92・96・100・105・112・114・134・137号住居跡）について述べる。これら13軒の中の、第61号住居跡は大部分が調査区域外であり、第70号住居跡は後世の住居跡に掘り込まれているため、遺構は一部しか確認されていない。それらを除く11軒の形状は、第92号住居跡が円形であり、他の10軒が隅丸方形と隅丸長方形である。主軸方向は北から西へ2～6°の範囲にあり、このことは「中位段丘部」では長い期間にわたって主軸方向を変えながら集落が営まれてきたことを物語っているのではないだろうか。規模は、長軸が6mを超える住居跡が5軒検出され、「低位段丘部」とは異なる様相を示している。第92号住居跡は、長径8.30m、短径7.90mの円形で、該期の中では最大規模である。水戸市二の沢B遺跡（古墳群）¹⁴⁾でも同様な形状を示すものや八角形の形状を示す住居跡が複数報告されており、単なる住居ではなくそれ以外の性格を



S128



S133

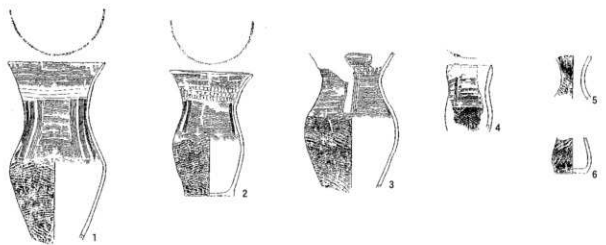


S137

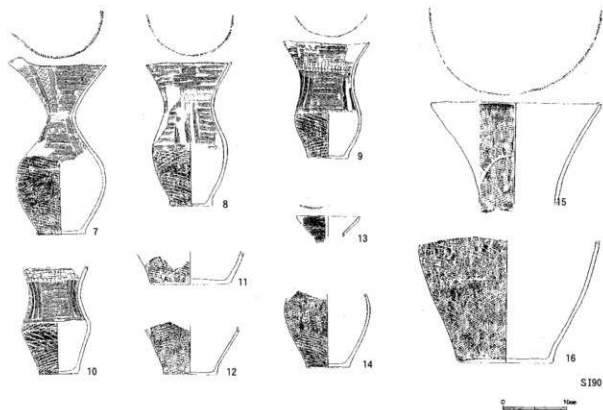
第206図 第28・33・37号住居跡出土土器

考慮する必要もあるが、調査例が少ないため不鮮明な部分も多く、今後の類例の増加を待ちたい。

「中位段丘部」の13軒の住居の中で、比較的良好的な状態で弥生土器が出土している住居跡は、第88・90・96・100・105・112・114・134号住居跡である。第92・134号住居跡からは完形の小形広口壺（第208図8、第209図26）が出土しており、頭部下端に縷状文が施され胴部に附加条一種（附加2条）が施されていることから、栃木県東部や茨城県西部を中心に分布する二軒屋式土器と考えられる。また、第100号住居跡からは口辺部から頭部の大部分を欠損しているもの、胴部に附加条一種（附加2条）の縄文が施されている広口壺（第208



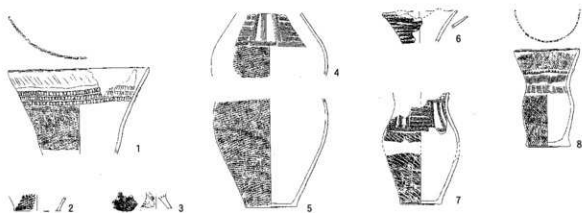
S188



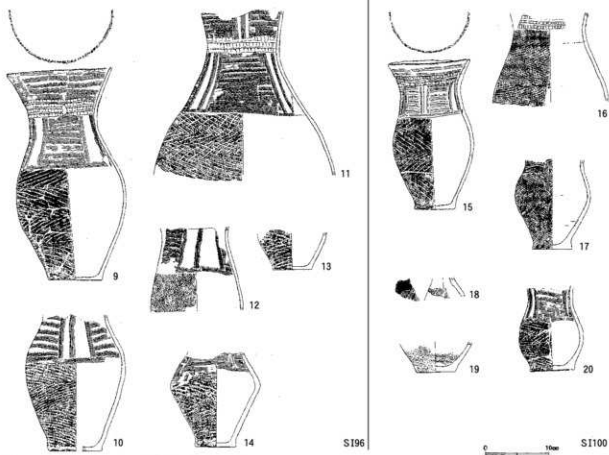
S190

第207図 第88・90号住居跡出土土器

図17)が出土しており、これも二軒屋式土器と考えられる。同様の特徴を備える破片は、第90・112・114号住居跡からも出土している。第100号住居跡からは、樽式と思われる体部内・外面及び底部がヘラ磨きされた土器(第208図19)が出土しているが、底部近くのわずかな部位のため明確ではない。第114・134号住居跡からは、埼玉県北部や群馬県東部、栃木県南西部に分布する吉ヶ谷式土器¹³⁾(第209図21・25)が出土している。21は口縁部片で、口唇部に縄文原体による押圧、口辺部には意図的に輪積痕を残しRLの単節縄文が施されている。25は口唇部にRLの単節縄文を回転押圧し、口辺部上位は輪積痕を残したうえで丁寧にナデが施されている。さらに、口辺部中位から頭部にかけては3段に分けて蒂状の指頭痕が認められ、口辺部中位から胴部上位にかけて口唇部と同じRLの単節縄文が施文されている。また、第134号住居跡から出土している22・23(第



S192



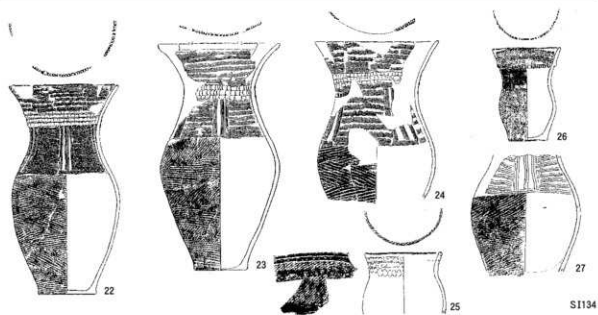
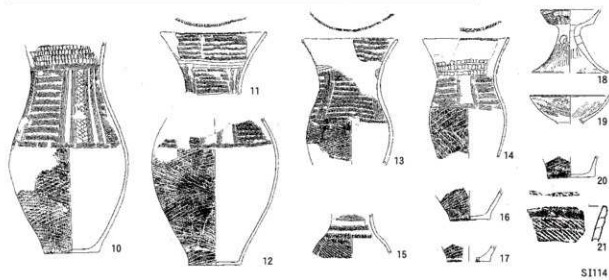
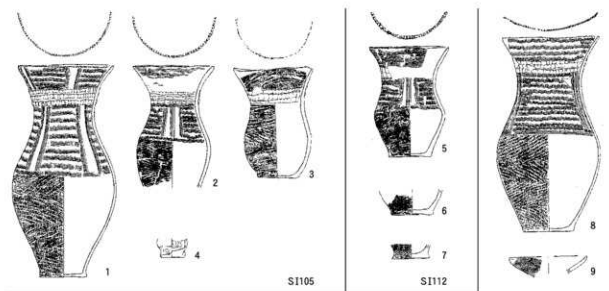
S196

S1100

第208図 第92・96・100号住居跡出土土器

209図)の文様構成や器形は十王台式土器と同様であるが、胴部に附加条一種(附加2条)の縄文が施文されており、23は複合口縁であることから他地域の影響を受けていると考えられる。『大戸下郷遺跡1』では、当区域の第100号土坑から「2段の複合口縁を有し、胴部に羽状構成をとる附加条一種(附加2条)の縄文が施された上稲吉式土器が出土している」と報告されている。

以上、「中位段丘部」の住居から出土した他地域の土器について述べてきたが、十王台式土器についても良好な遺存状態を示している。第88(第207図1～6)・96(第208図9～14)・105(第209図1～4)・112(第209図5～7)・134号住居跡(第209図22～27)は、文様構成や施文の特徴などから同時期のものと考えられる。また、第100号住居跡からも良好な資料(第208図15)が出土しているが、前述の時期より一段階古いものと判断され



第209图 第105·112·114·134号住居跡出土土器

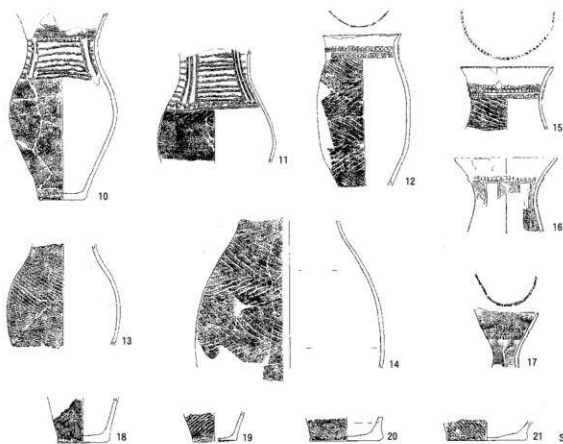
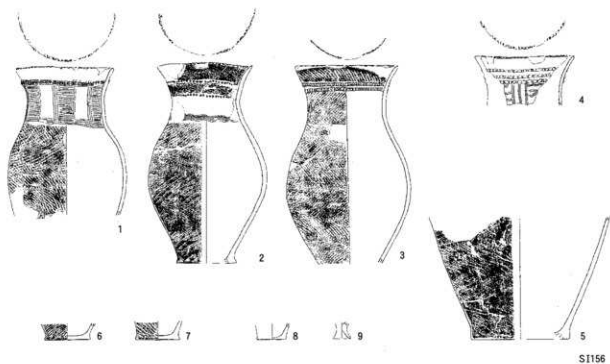
0 10cm

る。第114号住居跡の覆土中層からは「帯状に刺突された区画文」を有する土器（第209図10）が出土しており、投棄されたと判断できる。この土器は、中位段丘部の十王台式土器の中では最新段階⁽⁶⁾に属するものと考えられ、同じ覆土中層からは土師器高坏（第209図19）も出土している。特徴的な土器は、頸部文様帯と胴部文様帯を区画する下向きの連弧文が施文された土器である。第88号住居跡からは小形広口壺（第207図2）、第90号住居跡からは片口壺（第207図7）がそれぞれ出土しており、久慈川流域の影響を受けている可能性が高い⁽⁷⁾。炉跡に炉石が据えられていた住居跡は第88号住居跡（粘土塊）と第96号住居跡（凝灰岩）の2軒である。

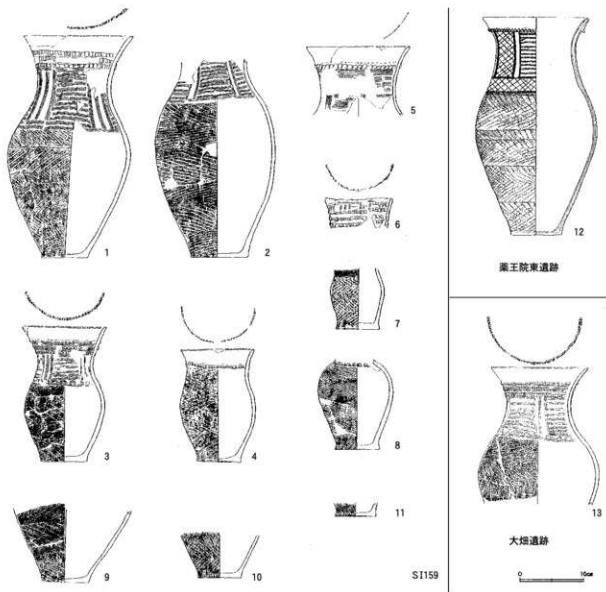
「台地上」では、前述したように11軒（第141・143・148・149・152～156・158・159号住居跡）が検出されている。その中で第141～155号住居跡は耕作による攪乱を受けていたり、大部分が調査区外のものもあり、遺存状態が良くない。形状は、隅丸方形あるいは隅丸長方形で、主軸方向は、第141・149号住居跡が北から西へ20°未満、第143・148・149・153・156号住居跡が北から西へ40～55°の範囲に取りまり、第154・155・158・159は東寄りであり、3パターンが認められる。規模は、ほぼすべての住居跡が当遺跡内での平均的な大きさを示している。

「台地上」の11軒の住居群の中で、特徴的な遺物が出土しているのは第156（第210図1～9）・158（第210図10～21）・159（第211図1～11）号住居跡である。第156号住居跡では口辺部が無文の土器が出土している。1は、口辺部が無文で縄文原体による刺突のある隆帯が1条巡り、頸部文様帯の施文幅が狭い。類似する土器は水戸市栗王院東遺跡⁽⁸⁾（第211図12）から出土している。また、2・3は文様構成から粗製土器と考えられ、2は口辺部及び頸部と胴部に付加条二種（付加1条）が施文され、頸部上位には縄文原体による刺突列が2条、頸部下端には無文帯を有し、頸部と胴部に櫛歯状工具による波状文で区画している。全体的な器形は十王台式土器と思われるが、施文の手法は上稲吉式土器の様相を示している。しかし、口辺部上位に貼瘤が無いこと、頸部下端の無文帯に櫛歯文を有していること、付加条二種（付加1条）が施文されていることが上稲吉式土器との違いとしてあげられる。同様の土器は土浦市根拠北遺跡⁽⁹⁾や大洗町長峯遺跡⁽¹⁰⁾からも出土しており、十王台式文化圏と上稲吉式文化圏の交流を示す好資料と考える。第158号住居跡から出土した11は、頸部と胴部の文様帯を波状文と直状文で分割している。同様の土器は潤沼前川を挟んで南に位置する大畑遺跡⁽¹¹⁾（第211図13）からも出土している。また、10は口辺部が無文で、隆帯には棒状工具による押圧、隆帯間には櫛歯状工具による横走文が施されており、頸部文様帯の施文幅が狭く古い段階の様相を示している。第159号住居跡から出土した2も口辺部を欠損するものの第158号住居跡の10と同様の文様構成で、古い様相を示している。口辺部が無文の土器は、第159号住居跡からも数個帯が出土しており、1には古い段階から新しい段階への過渡期の様相を認めることができる。3は小形の広口壺で、口辺部は無文、隆帯間に櫛歯状工具による横走文を有している点は第158住居跡の11と共通し、頸部文様帯の文様構成は第158号住居跡の11と共通している。

「台地上」においても他地域の弥生土器は検出されている。第158号住居跡からは、胴部下端に付加条一種（付加2条）が施文された底部片（第210図20・21）、口唇部は縄文原体押圧で、2段の複合口縁下端には原体による刺突、頸部には櫛歯状工具による下向きの連弧文が施文された片口壺の口辺部片（第210図17）、第159号住居跡からは頸部が無文帯で胴部に付加条一種（付加2条）が施文された小型広口壺（第211図7）、頸部下端に連状文、胴部には付加条一種（付加2条）が施文された壺（第211図8）、胴部下端に付加条一種（付加2条）が施文された底部片（第211図11）などが出土しており、二軒屋式土器の様相を示している。炉跡に炉石が据えられていたのは、第154・159号住居跡でいずれも砂岩である。第154号住居跡の炉石は、後世の耕作機械の影響を受けている可能性がある。また、第159号住居跡では「L字状」に設置されており、当遺跡における唯一の例である。



第210图 第156·158号住居跡出土土器



第211図 第159号住居跡・葉王院東遺跡・大畑遺跡出土土器

(2) 集落の変遷

ここでは、出土遺物から該期の時期分けを行い、集落の変遷についてまとめてみたい。

「台地上」では、第156号住居跡から出土した1（第210図参照）は、口辺部幅が無文で狭く、降帯が1条であり、頭部の文様帯幅が狭いなどの特徴から葉王院東遺跡（第211図12）と時期が同じかそれに後続する時期への過渡期の土器と考えられ、当遺跡における該期の中でもっとも古い段階の大戸下郷Ⅰ期とする。

第158・159号住居跡から出土している土器では10（第210図参照）・1・3（第211図参照）が特徴的で、いずれも口辺部幅が狭く無文であり、頭部の文様帯幅も狭い。中でも、3は小形広口壺で、大畑遺跡の第1号住居跡から出土した土器（第211図13）と大きさが違うが、同様の文様構成が認められ、第158号住居跡の11（第210図参照）も同様である。大畑遺跡の土器（第211図13）は、十王台式土器群の中で第2段階にあることがすでに明らかになっており²²、同様の文様構成を示す第158・159号住居跡の出土土器を大戸下郷Ⅱ期とする。

「中位段丘部」では「台地上」に続く段階の土器が見られる。第100号住居跡の出土土器では、15や20(第208図参照)が時期判断の対象となろう。15は、粗いながらも口辺部に櫛齒状工具による波状文が施文されており、大戸下郷Ⅱ期とは違った様相を示している。また、頸部の文様帯幅が狭いことも特徴といえよう。20は口辺部が欠損しているため明確ではないが、15同様に頸部の文様帯幅が狭いことが時期判断の対象となり、第100号住居跡から出土した土器を大戸下郷Ⅲ期とする。第92号住居跡の出土土器もこの時期に含まれると考える。

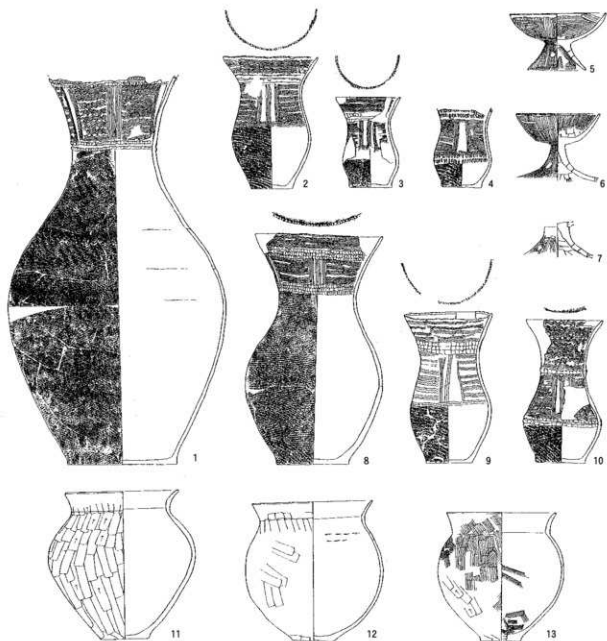
次いで第88・90・96・105・112・114・134号住居跡からの出土土器であるが、第88号住居跡では1と2(第207図参照)が目される。1は底部を欠損する中型の広口壺であるが、頸部の文様帯幅が大戸下郷Ⅲ期より広くなり、小形の広口壺の2も文様構成は1と同様である。このような傾向は、第114号住居跡から出土した8や13(第209図参照)、第112号住居跡から出土した5(第209図参照)にも同様の傾向を認めることができる。次いで第90号住居跡から出土した8・9・10(第207図参照)は、頸部の文様帯幅がさらに広がり、下端が胴部最大径近くまで広がっている。第96号住居跡から出土した9(第208図参照)は口辺部も頸部文様帯の幅も広くなり、第134号住居跡から出土した22・23・24(第209図参照)も同様である。さらに、第105号住居跡から出土した1(第209図参照)は、頸部の文様帯幅がより広がる傾向が認められる。また、第105号住居跡から出土した3(第209図参照)の文様構成から粗製土器と考えられるが、施文の退化傾向が認められる。これらの住居跡から出土した土器は、文様構成の特徴などから大戸下郷Ⅳ期とする。

最後に「低位段丘部」について概観してみる。「低位段丘部」では、明確な時期を特定できる住居跡が少ないが、第28・33・37号住居跡の遺物を抽出してみる。第33号住居跡から出土した7(第206図参照)は、隆帯に押圧が認められないため退化傾向にあると考えられ、9(第206図参照)は頸部の文様帯幅が胴部最大径近くまで広がっている。同様の傾向は第28号住居跡から出土した4(第206図参照)や第37号住居跡から出土した13(第206図参照)にも認められ、頸部文様帯の下端が胴部最大径まで確実に拡大している。さらに、第37号住居跡から出土した15(第206図参照)には、頸部文様帯の施文に粗さが目立ち、これも退化傾向の一つと捉えることができる。これら3軒の土器群は、前述した特徴から「中位段丘部」の第88・90・96・105・112・114・134号住居跡と同時期と考えられ、大戸下郷Ⅳ期に含むことにする。

この「低位段丘部」では第21号住居跡²³⁾が検出されている。第21号住居跡は、当遺跡における土師器との唯一の共存住居であり、「弥生土器と土師器の供伴が見られることから、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて生活が営まれた住居であると推定される」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。出土土器(第212図参照)の中には、頸部と胴部に「帯状に刺突された区画文」を持つ土器(第212図4)が出土している。これらの特徴を備えた弥生土器は古墳時代前期の土師器と供伴する例が認められるとの指摘²⁴⁾もあり、第21号住居跡も同じ出土傾向を示していると考えられる。同様の土器は「桜の郷遺跡群」の綱山遺跡²⁵⁾や宮後遺跡²⁶⁾などからも出土しており、「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」と位置づけられている。また、10(第212図参照)のように、十王台式土器としての器形が崩れてきている土器も出土している。

第21号住居跡を掘り込んでいる第1号墓坑については、「第21号住居の廃絶時期と埋葬時期の時間差はあまりないと考えられ、古墳時代初頭のこの集落の有力者の墓と想定される」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。墓坑からは威信財のガラス製玉31点(第212図14~44)と琥珀玉1点(第212図45)が出土しており、「十王台式最後の墓域」との指摘²⁷⁾もあり、第21号住居跡・第1号墓坑を大戸下郷Ⅴ期とする。

以上、簡単にはあるが「台地上」「中位段丘部」「低位段丘部」について出土土器から個々の住居跡の時期について概観してきた。「台地上」「中位段丘部」「低位段丘部」のいずれからでも該期の住居跡が複数検出されているが、そのすべてが同時期に存在したのではなく、出土土器の時期差や遺構形状の違いなどから、小集団



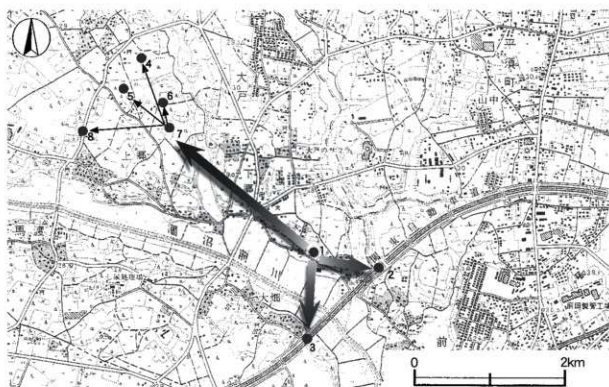
S121



第1号墓坑

第212図 第21号住居跡・第1号墓坑出土遺物

の移動や住居の建て替えが継続的に行われてきたことが想定され、大戸下郷Ⅰ～Ⅴ期に分けることが可能となる。つまり、「台地上」には古い段階の十王台式土器を持つ住居が所在し、「中位段丘部」ではそれに後続する時期、さらに、「低位段丘部」では「中位段丘部」と同じ時期かそれよりも新しい時期の住居の存在が確認され、時期が下るにつれて「台地上」から「低位段丘部」へと集落が移動する傾向を示していることが指摘できるのである。



第213図 「大戸遺跡群」集落変遷概念図 1大戸下郷遺跡 2矢倉遺跡 3大畑遺跡 4宮後遺跡
5大塚遺跡 6綱山遺跡 7石原遺跡 8木戸遺跡

3) 「大戸遺跡群」との関わり

「大戸遺跡群」全体の様相を見ると、「大戸遺跡群」は、大戸下郷遺跡と大畑遺跡、矢倉遺跡、さらには宮後遺跡、大塚遺跡、綱山遺跡、石原遺跡、木戸遺跡（「桜の郷遺跡群」）をも含んでいる。これまでの調査結果から、「大戸遺跡群」においては「大畑遺跡→矢倉遺跡→石原遺跡→大戸下郷遺跡」という集落の変遷が想定されていた³⁰⁾が、今回の調査結果から次のような新たな想定が可能となる。つまり、第156号住居跡の弥生土器（大戸下郷Ⅰ期）は、大畑遺跡のそれよりも1段階古く、粟王院東遺跡と酷似しており、後続する時期（大戸下郷Ⅱ期）の土器は当遺跡にも大畑遺跡にも認められることから、この段階において「大戸下郷遺跡→大畑遺跡」という「集団の移動または分派」の想定が可能となる。さらに、当遺跡の東に位置する矢倉遺跡についても大畑遺跡と同様の想定が可能である。矢倉遺跡で初出する古い時期の土器は大戸下郷Ⅲ期に相当し、この段階において「大戸下郷遺跡→矢倉遺跡」という「集団の移動または分派」があったと想定される。

「桜の郷遺跡群」では、「一部の集団が支流の小橋川を遡って「桜の郷遺跡群」最初の十王台式集落である石原遺跡に至った³¹⁾という指摘のように、石原遺跡では大戸下郷Ⅲ期に相当する時期から集落が営まれたことが明らかになっており、この時期に「大戸下郷遺跡→石原遺跡」という「集団の移動または分派」が想定できる。その後の「桜の郷遺跡群」内での集落変遷については「石原遺跡の集落が存続している期間に大塚遺跡の該期集落が形成されたものと考えられる。（中略）そして、大塚遺跡を拠点として、宮後遺跡と綱山遺跡に集落が広がっていったものと考えられる³²⁾という指摘の通りといえよう。

もちろん、大戸下郷遺跡からの「集団の移動・分派」だけではなく、各時期においては「各遺跡→大戸下郷遺跡」という想定も可能であろう。しかし、大戸下郷Ⅰ期の住居は「大戸遺跡群」の中では当遺跡だけで

大戸下郷遺跡

大畑遺跡

矢倉遺跡

石原遺跡

大塚遺跡

綱山遺跡

宮後遺跡

木戸遺跡

第214図 「大戸遺跡群」における集落変遷模式図

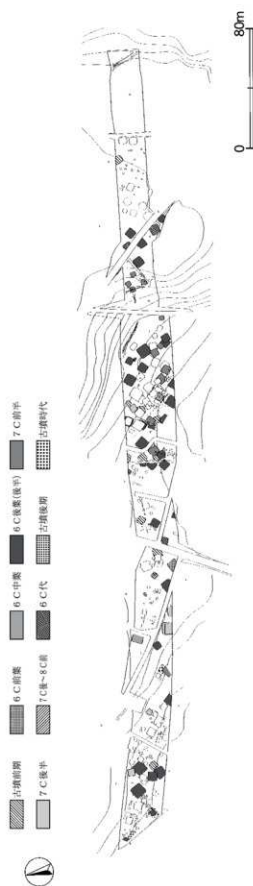
あり、それに後続する時期の集落が当遺跡も含めた周辺部にも所在していることから、該期の中心が大戸下郷遺跡であり、長期間存続した拠点的な集落であったという想定され、大戸下郷遺跡からの移動や分派により、周辺地域で同時に集落が存在したと考えられる。また、当遺跡において該期における他地域の土器(上稲吉式土器、二軒屋式土器、樽式土器、吉ヶ谷式土器、南関東系の土器)が揃って出土していることも拠点的な集落であったことを裏付けていると考える。

石原遺跡への「集団の移動または分派」が想定される時期後も、当遺跡における該期の集落は、大戸下郷Ⅳ期・Ⅴ期と存続してはいるものの、住居数が減少して集落の衰退傾向を読みとることができる。「桜の郷遺跡群」では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居数が40軒(宮後遺跡4軒、大塚遺跡18軒、綱山遺跡12軒、石原遺跡6軒)存在し、後続する「古墳時代前期」の住居数に至っては103軒(宮後遺跡9軒、大塚遺跡25軒、綱山遺跡53軒、石原遺跡16軒)を数え、かなりの規模で集落が存続するのに対し、当遺跡では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」に相当する住居跡は1軒であり、「古墳時代前期」と判断できる住居数も11軒と少ないことから、当遺跡は大戸下郷Ⅳ期からⅤ期にかけて衰退期を迎えたと考えられる³¹⁾。

4 古墳時代

該期における住居数は76軒である。そのうち前期は11軒(14.4%)に対して後期³²⁾は62軒(81.5%)と最も多く、その他に出土遺物や重複関係から3軒(約4%)が古墳時代と判断されている。62軒の古墳時代後期の住居跡は、「低位段丘部」で11軒(17.7%)、「中位段丘部」で41軒(66.1%)であり、「台地上」では西側縁辺部に10軒(約16.1%)が確認されたに留まっている。

ここでは、当遺跡の中心時代と考えられる古墳時代の中でも、特に古墳時代後期の62軒に焦点を絞り、若干の考察を述べることにする。



第215図 古墳時代遺構配置図

古墳時代後期の住居跡は、大きく6世紀代(62.9%)と7世紀代(32.2%)に分けられ、1軒だけが7世紀後葉から8世紀前葉とされ、出土土器と遺構の形状などから5期に分けられる。内訳は、6世紀前半(前葉と中葉を含む)が2軒(Ⅰ期)、6世紀後半(後葉を含む)が33軒(Ⅱ期)、7世紀前半が13軒(Ⅲ期)、7世紀後半(7世紀後葉から8世紀前葉を含む)は8軒(Ⅳ期)である。その他に、遺構の検出状況が悪く、遺物が少ない4軒は6世紀代とされ、残りの2軒は重複関係や出土土器などから古墳時代後期と判断している。

(1) 古墳時代後期第Ⅰ期

この時期の住居跡は2軒(第46・106号住居跡)である。第46号住居跡は「中段段丘部」西寄りの標高14mのやや広がった平場に位置しており、焼失住居である。出土遺物もわずかで、6世紀前葉の特徴を示す坏2点と須恵器の甕などが出土している。『大戸下郷遺跡1』では、「甕は出土状況から投棄された」と報告されている。第106号住居跡は「中段段丘部」の中央部に位置している。主軸方向は古墳時代後期の中では数少ない東向きである。

この時期、当遺跡にはまだ大きな集落が出現していなかった可能性が想定されるが、南側の緩やかな傾斜をもつ平坦部などに集落の広がりを求めることも可能であろう。

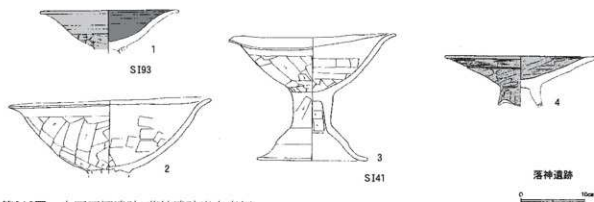
(2) 古墳時代後期第Ⅱ期

この時期の住居跡は33軒(第5・9・13・16・19・22・32・41・43・53・56・57・62・65・66・80・81・84・86・93・97・98・123・125・127・130・132・133・136・144・145・147・151号住居跡)である。Ⅰ期が2軒であるのに対し、住居数が増加して集落が拡大した時期と捉えられる。検出された地区も「低位段丘部」から「台地上」にわたっており、住居跡の分布は、集落が急激に拡大したことを裏付けている。該期の住居跡は、第57・84号住居跡を除いてすべてが北西方向を主軸としている。遺構全体が確認された住居跡の規模は3～8mで、「低位段丘部」では第5号住居

跡が当遺跡の中での最大規模の長軸8.08m、短軸7.98mである。第16号住居跡も長軸7.60m、短軸7.43mで大型に属している。この2軒は隣り合っており、第19号住居を含めて同時期に機能していた可能性が高い。

「中位段丘部」では、第80号住居跡の長軸7.70m、短軸7.40mが大きく、出土土器や遺構の配置、主軸方向などから第97号住居跡との同時性が指摘できる。

「台地上」でも同様で、第144・145号住居跡が形状、規模、主軸方向などが同規模である。遺物が少なく、遺構の形態などから6世紀代と判断した第150号住居跡も第144・145号住居跡と形状や規模、主軸方向を同じくしており、同時に機能していた可能性が高い。その他にも第81・86・93号住居跡や第132・133号住居跡などをまとまりとして見ることができ、「低位段丘部」から「台地上」にかけてそれぞれに2～3軒程度のまとまりがあったと考えられる。



第216図 大戸下郷遺跡・落神遺跡出土高坏

第Ⅱ期住居群の中で、特徴的な遺物は第41号住居跡の高坏（第216図2・3）である。『大戸下郷遺跡1』では6世紀後葉と判断しており、「口径約32cmの畝内では希な大形の高坏の坏部と口径約27cmの高坏が出土しており、当地域のこの時期の権力者の存在を窺わせる」と述べている。2・3の坏部の調整は、体部外面にヘラ削りが認められ、内面は共にナデ調整である。『大戸下郷遺跡2』でも、「中位段丘部」に位置している第93号住居跡（6世紀後葉）から口径約22cmの高坏の坏部（第216図1）が出土しており、体部外面下端にヘラ削りが認められるが内面のナデ調整は認められない。また、外面には赤彩が施され、内面は黒色処理されており、第41号住居跡の1・2とは様相を異にしている。潤沼前川流域を含む当遺跡周辺ではこのような大型の高坏の出土例がなく、大洗町落神遺跡³⁰の第58号住居跡から出土した高坏の坏部（第216図4）に類例を求めることができる。落神遺跡の例は6世紀後半と判断されており、他の出土土器からも当遺跡の第41・93号住居跡と同時期と考えられる。4は口径は約24cmで、体部外面にはヘラ削りやナデ調整が認められる。また、内・外面は赤彩されており、器形や調整など、当遺跡の第93号住居跡から出土した3との類似点が多い。落神遺跡では、4が竈東側袖部に寄り添うように逆位で出土していることから「竈祭祀」との関連性を指摘しているが、当遺跡ではそのような出土状況は認められない。しかし、このような高坏は畝内でも希であることから、限られた供献具として限定的に製作・使用されたものと考えられる。

この時期の住居群の中で、竈内から遺物が出土する住居跡が10軒（第16・32・65・66・81・86・122・130・144・147号住居跡）確認されている。第16号住居跡では2個体の甕が出土し、第32号住居跡では口辺部が欠損した甕が横位で出土している。第65号住居跡では、甕と小形甕が支脚上に並ぶような状態で出土している。第

66号住居跡では、坏・甕（2個体）・支脚の4点が出土し、「支脚上から倒れたと思われる甕がつぶれた状態で出土している」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。第81号住居跡では甕に坏が乗った状態で斜位で出土しており、支脚は焚き口付近から出土している。第86号住居跡でも甕が横位の状態でも1個体出土している。第144・147号住居跡からはそれぞれ甕が2個体出土しており、中でも第147号住居跡は、甕が正位の状態でも2個体並んで出土している。これらの住居跡では、住居の廃絶時には竈に甕が掛けられた状態で遺棄された可能性が高く、その後の崩落で位置が動いたため斜位や横位で出土したと想定される。

一方、第122号住居跡では碗が出土しており、出土状況から意図的に竈内に遺棄したものと考えられる。第130号住居跡では、竈内から赤彩された高坏が逆位で出土しており、裾部が意図的に打ち欠かれていることから、支脚として転用された可能性も考えられるが、強く二次焼成を受けていないことから、住居の廃絶時に何らかの祭祀的な行為がなされたとも想定される。

竈に遺棄された遺物について述べてきたが、第Ⅱ期の33軒の中で、住居の廃絶時に竈に甕を掛けたまま遺棄されていたと判断できる住居跡は8軒である。後続する第Ⅲ期からも2軒確認されている。当時、律令期の竈神祭祀などのような信仰はあるものの、竈に甕を掛けたまま遺棄することが日常的に行われていたことなのか、または何らかの目的を持つ行為なのかは調査からも究明することができなかった。今後の類例の増加を待ちたい。

(3) 古墳時代後期第Ⅲ期

この時期の住居跡は13軒（第36・45・68・72・77・79・99・101・122・138・139・140・142号住居跡）であり、「低位段丘部」から「台地上」まで住居跡の広がりが認められるが、最盛期を迎えた第Ⅱ期と比べると住居の規模や構成が縮小傾向にあり、衰退期を迎えていると想定される。特に、台地縁辺部の4軒（第138・139・140・142号住居跡）と「中位段丘部」の東部の2軒（第72・77号住居跡）などは小規模のものであり、集落の中心的な存在ではないと想定される。しかし、第36号住居跡から須恵器の提瓶・壺が出土し、第68号住居跡からは須恵器の壺、第79号住居跡でも須恵器の提瓶・小形壺が出土しており、集落の衰退期の中でも優位性をもつ集団がいたことは容易に想定できる。

この時期でも竈内から遺物が出土する住居跡が2軒確認されている。第79号住居跡では、竈内から2個体の甕が出土し、出土状況から住居廃絶時には竈に掛けられたまま遺棄されたと考えられる。第125号住居跡では、耕作機械による攪乱を受けてはいたが、竈内から甕と手捏土器、支脚が出土しており、甕は住居廃絶時に竈に掛けられたまま遺棄されたと想定されるが、手捏土器については竈崩落後に流れ込んだ可能性が高いと考えられる。

(4) 古墳時代後期第Ⅳ期

この時期の住居跡は8軒（第17・27・29・30²⁰・38・44・67・116号住居跡）であり、第Ⅲ期に引き続き衰退傾向が続いている。住居は「低位段丘部」と「中位段丘部」に散らばっている。該期の中では、第27・29・30号住居跡の軸がほぼ同じで規模も大きく、優位性をもつ住居であると想定される。また、遺構には伴わないと判断したが、須恵器高坏（第27号住居跡）や須恵器筒型器台（第30号住居跡）が出土していることは、これらを使用できる優位性をもつ中心的な住居が付近にあったことを裏付けている。また、第116号住居跡からは羽口が出土しており、鍛冶炉や鉄滓など具体的な遺構・遺物は見つかっていないが、この時期の前後に鉄関連の手工業が当集落において始まっていたと想定できる。

大戸下郷遺跡の中心である古墳時代後期の住居跡62軒を4期に分け、各時期を概観した。「大戸遺跡群」の他の遺跡には、古墳時代後期の住居が極端に少ないか皆無であるなか、当遺跡だけに該期の住居数が多いことは、この時期の中心が大戸下郷遺跡であったことを示していると考えることができる。

該期の大戸下郷遺跡は、一部台地上に遺構が所在するとはいえ、その大部分は「南西緩斜面部」という傾斜地に立地している。集落を営むのに平坦地を占地するのが当然と考えられるが、あえて傾斜地を集落とした背景には、当遺跡の南側には瀬沼前川とその支流である小橋川が合流してできた氾濫原（＝可耕地）が確保できることもひとつの要因と考えられる。農業を営み、その収穫を基本にそれなりの規模で生活するためには、当遺跡は目前に可耕地を持つという絶好の立地条件を兼ね備えており、その絶頂期を古墳時代後期第Ⅱ期に迎えるのである。しかし、より大規模な集落を営むためには平坦地であることが必須条件であり、その必須条件が満たされないことから第Ⅲ～Ⅳ期にかけて衰退していったと推察できる。特に、7世紀代後半の律令期直前期には、当遺跡での生活を継続する集団と、他の地での生活を求める集団とに分かれ、分派集団は「桜の郷遺跡群」へ進出したと想定されるが、それは権力的な移住とも推察できる。彼らはそこで律令期を迎えるが、残留した集団は「桜の郷遺跡群」へ進出していった集団に主導権を奪われていくと考えられる。

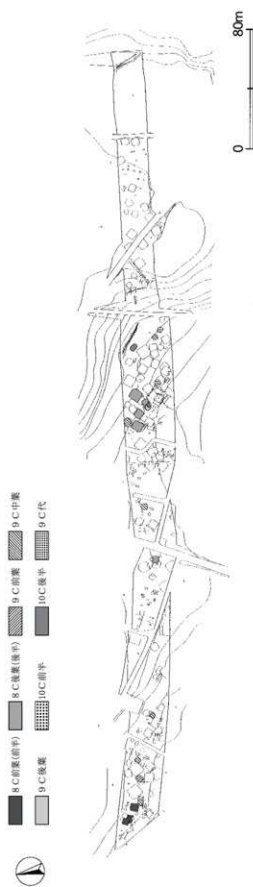
5 奈良時代・平安時代

該期の住居は21軒で、8世紀前半（前葉を含む）4軒、8世紀後半（後葉を含む）5軒、9世紀前葉1軒、9世紀中葉6軒、9世紀後葉1軒、10世紀前半1軒、10世紀後半2軒である。そのほか、出土土器が少量であり、住居の規模や主軸方向などから9世紀代と判断される住居跡が1軒である。以下、各時期ごとに概略を述べる。

8世紀前半の住居跡は4軒（第1～4号住居跡）で、「低位段丘部」の西に位置している。住居の規模は4～5mで、第4号住居跡が長軸5.25m、短軸5.15mの最大規模である。主な出土土器は須恵器環で、これらの中には胎土に針状鉱物を含むものが多いことから、『大戸下郷遺跡1』では「木葉下窯産の可能性が考えられる」と報告されている。また、第1・2号住居跡については「出土遺物に時期差がなく、建て替えの可能性も考えられる」と指摘されているように、この時期は小規模な集落構成と想定される。

8世紀後半の住居跡は5軒（第51・110・111・118・121号住居跡）で、「中位段丘部」に位置している。第110・111・118・121号住居跡は、「中位段丘部」のやや東寄りに集中して位置しているのに対し、第51号住居跡はやや西寄りに単独で位置していることから、調査区南側の緩斜面地にも同時期の住居が分布していたと思われる。検出された中の第111・121号住居跡は、規模の違いはあるものの主軸方向が同じであり、出土土器などから判断して同時期に機能していた可能性が極めて高いと考えられる。また、この2軒は建て替えが行われている。第111号住居跡は4辺が拡張され、第121号住居跡は2辺の拡張であり、拡張以前の住居は同様の規模であることが調査の結果判明している。出土遺物でも類似点が見られ、第111号住居跡からは須恵器高台付埴（口径21.5cm）・須恵器盤（口径21.4cm）・須恵器蓋（口径21.6cm）が出土しており、第121号住居跡では須恵器盤（口径23.0cm）が出土している。さらに、刀子も同様に出土していることから、この時期における中心的な住居であったと考えられる。

また、この時期の中では第118号住居跡も特徴的である。「中位段丘部」の東寄りに位置し、長軸5.40m、短軸5.18mの方形で、主軸方向はN-38°-Wであり、他の同時期の住居跡とは規模も軸方向も異なっている。住居跡からは土師器片2190点、須恵器片771点の他に、土製品、石器、鉄製品、鉄滓、手捏土器などが出土



第217図 奈良時代・平安時代遺構配置図

している。土師器片は、覆土中層以下からの出土割合が多く、住居廃絶後の早い段階に北側から投棄され始めたものと想定される。また、南東コーナー側からも投棄されており、北側からの投棄時期よりやや遅れて投棄されたと推察できる。須恵器片については、広範囲での散在が認められ、覆土中層以上から出土するものが多く、土師器片より遅れて投棄されたと考えられる。土器片のほとんどは近接する位置から出土したものが接合する傾向にあるが、わずかに比較的離れた位置から出土したものや出土層位が違うものが接合している例もある。しかし、完形に復元できるものがないことから、土器片を投棄する過程で人為的に埋め戻しをしていると想定される。さらに、出土状況からこれらの出土遺物は住居に伴わないと判断され、これらを使用していた人々の住居跡は調査区域外にあるものと考えられる。また、「大」とヘラ書きされた小形の坏や円面硯なども出土しており、文字を書ける人物の存在が想定される。

9世紀前葉の住居跡は1軒(第8号住居跡)で、「低位段丘部」に位置しており、竈の両脇に棚状施設を有しており、この形状を示した住居跡は当遺跡において1軒である。近隣遺跡では、宮後遺跡²⁶⁾で5軒、大塚遺跡²⁷⁾で4軒、綱山遺跡²⁷⁾で4軒、木戸遺跡²⁶⁾で1軒確認されている。棚状施設を有する住居跡については、「斉一性の強い様相を呈することから、その背景には同一の集団が関わっていたものと推測され、(中略)非農業民である特定工人集団の関与を(中略)示している²⁹⁾」という論説もあるが、当遺跡では特定工人集団に結びつくような遺構の検出は認められていない。

9世紀中葉の住居跡は6軒(7・12・39・64・76・120)である。これらは「低位段丘部」から「中位段丘部」にかけてまばらに検出されており、細々と集落が営まれていたと想定される。また、『大戸下郷遺跡1』では「第12号住居跡からは、「@」と墨書された土師器高台付皿や「川九万カ」と墨書された須恵器坏が出土している。第39号住居跡からも「@」と墨書された土師器坏が出土しており、字体も同一と考えられることから、両住居跡の同時性など密接な関係が想定される」と報告されている。

9世紀後葉の住居跡は1軒(第109号住居跡)で、多量の炭化材と焼土が出土していることから焼失住居と考えられる。竈右袖部からは須恵器甕、左袖部からは土師器甕がそれぞれ竈袖部の補強材として出土しており、当遺跡では唯一の出土例である。また、灰輪陶器も1点(瓶類。水瓶か)出土しており、これも唯一の出土例である。

10世紀前半の住居跡は1軒(第104号住居跡)で、当遺跡では唯一の南竈であり、底部を回転糸切りされた土師器坏が出土している。

10世紀後半の住居跡は2軒(第78・107号住居跡)である。第78号住居跡の竈からは、黒色処理でヘラ磨きされた土師器高台付坏が自然石の支脚上から逆位で出土している。貯蔵穴寄りの壁際から丸軋の表金具が出土し、中央部上位が二次利用を目的に穿孔されており、本来の意味とは異なった使い方がされていたと想定される。また、鎌が2点出土しており、形状の特徴などから草刈り用として使用されたと考えられる。

以上、奈良時代から平安時代にかけて簡単に述べてきたが、古墳時代後期Ⅲ期から始まった衰退の傾向は奈良時代・平安時代に入っても止まらなかった。その背景は、古墳時代後期Ⅲ期に「桜の郷遺跡群」方面へ移住していった集団の集落が「大戸遺跡群」の中での中心集落へと発展したことに大きく影響されていると考えられる。つまり、「桜の郷遺跡群」での大塚遺跡や宮後遺跡が行政的な主体となり、その他は周辺部の集落となって規模が小さくなったのではないかと考えられる。

6 終わりに

当遺跡は、縄文時代ではわずかに低位段丘部に住居が散らばるだけであつたのが、弥生時代後期後半以降は集落が継続し、他の遺跡への「集団の移動または分派」が想定されるまでに充実する。その後、古墳時代前期や中期において衰退期や断絶期を迎えるが、古墳時代後期(6世紀後半)には再び隆盛期を迎え、周辺遺跡を圧倒するかのよう集落が発展する。しかし、当遺跡が斜面地に立地しており、大規模集落を営めるだけの立地条件を備えていないのに対して、台地平坦部を占有する「桜の郷遺跡群」が「大戸遺跡群」の中心集落へと変わる中、当遺跡の衰退傾向は止まることはなかった。その結果、当遺跡は「桜の郷遺跡群」の衛星的な集落へと変わっていくのである。その後、大戸下郷遺跡は断絶期を経た後、中世や近世では墓域として利用されるのである。

これら「大戸遺跡群」における各遺跡の盛衰については、地理的環境が影響していることも想像できる。前述したように、当遺跡は緩斜面地に立地し、集落の立地としては決して適しているとは思えないが、立地要因のひとつに耕地の問題も考えられる。当遺跡の南には、潤沼前川とその支流である小橋川の合流点の広い氾濫原があり、水田耕作のための可耕地が十分に確保できる。大戸下郷の人々は、「斜面地」という“デメリット”よりも潤沼前川に面した氾濫原(=可耕地)を利用するという“メリット”を選択したかのようであるが、その意図は不鮮明である。一方、宮後遺跡、大塚遺跡、綱山遺跡、石原遺跡、木戸遺跡を含む「桜の郷遺跡群」は、大戸下郷遺跡と同様に潤沼前川に面しているとはいえ、可耕地までの距離が遠く、また、遺跡群の南東側に入り込んでいる小橋川は氾濫原が狭く可耕地を十分に確保できないという“デメリット”が考えられる。つまり、広い可耕地と狭い可耕地では、それぞれの地理的条件(可耕地や居住地の許容範囲)に見合った集落の規模が自ずと決まる。その結果として、弥生時代後期後半の拠点的な集落の出現を見、古墳時代後期第Ⅱ期における大規模集落の形成につながると考えられる。しかし、それは稲作のための水田開発や経営が小規模で行われていた時期内に留まるであろう。水田耕作のための技術や労力が組織的に編成され、集団内に首長的な人物が現れるようになると、当遺跡の斜面地では可耕地や居住地の許容が不足

し、必然的により広い可耕地や居住地を求めるようになるはずである。それが「桜の郷遺跡群」であると思われる。弥生時代後期に「桜の郷遺跡群」へ「集団の移動または分派」という形で移り住んだ集団は、石原遺跡を起点に「集団の移動または分派」を繰り返す、その後わずかの間に大塚遺跡、宮後遺跡、綱山遺跡、木戸遺跡などへ集落を拡大していったのではないだろうか。「弥生時代」の項でも触れたように、「桜の郷遺跡群」では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居数が40軒あり、後続する「古墳時代前期」の住居数が103軒を数えるのに対して、当遺跡では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居数は1軒で、「古墳時代前期」の住居数も11軒に留まることから、可耕地や居住地の許容が不足している当遺跡よりも、首長的な人物の出現に伴いより広い可耕地と居住地が確保できる「桜の郷遺跡群」が中心になっていったと考えるのである。

律令期に入ると国衙を頂点とした班田収授による効率的な税の確保を目的とした計画的な可耕地の確保とその整備がはかられ、大塚遺跡の掘立柱建物跡群が示しているように、都衙ないしは郷衙的な役割を担う建物群が建てられ隆盛を迎えていることから、奈良時代・平安時代においても当遺跡と「桜の郷遺跡群」との優劣関係は変わらないのは明らかである。「桜の郷遺跡群」では、高盤や灰釉陶器、鉄製品、帯金具などの優位性を表す遺物が多く出土しているのに対して、当遺跡でのそれは非常に少ないことから裏付けられるのである。

以上、大戸下郷遺跡について『大戸下郷遺跡1』と『大戸下郷遺跡2』を元に時代順に概略を述べてきたが、「大戸遺跡群」の中で当遺跡がどのような盛衰を繰り返してきたかについて、多少の光を当てることができたように思う。しかし、事実の羅列に徹してしまっただけでは、弥生時代後期後半や古墳時代後期Ⅱ期のように、「大戸遺跡群」の中で当遺跡が拠点的な集落へと発展した背景の解明など不十分な点が多い。さらに、「大戸遺跡群」の中で当遺跡と周辺遺跡との関わりについては偵測の域を出ていない面も事実である。

近年、羽黒山遺跡や大戸富士山遺跡が調査されており、今回触れることはできなかったが、「桜の郷遺跡群」と当遺跡との相関関係についての新たな課題も見えてきた。今後は「大戸遺跡群」全体の歴史的な評価が行われるであろうが、今回の報告がそのための一助となれば幸いである。

註

- 1) 近藤恒重「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塚崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 2004年3月
- 2) 鈴木素行「仙洲の辺一「武田式」以前の「十王台式」について」『茨城県史研究』第86号 茨城県立歴史館 2002年2月
- 3) 長谷川聡「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大塚遺跡・大塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 1998年3月
- 4) 飯島一生「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 1998年3月
- 5) 荒崎克一郎・田中幸夫「綱山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 茨城県教育財団 2005年3月
「桜の郷遺跡群」という呼称については「茨城県最新発掘情報」（元吹聖「茨城県最新発掘情報」『考古学ジャーナル』46 2000年7月）が初出であり、「綱山遺跡」ではそれを準拠しつつ「当遺跡群は、矢倉遺跡、大塚遺跡、大戸下郷遺跡を含めた涸沼前川流域に分布する大戸遺跡群の北西端に位置する「支群」である」と述べている。
- 6) 川又清明・浅野和久「宮後遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 2005年3月
- 7) 「桜の郷遺跡群」に関わる報告書では、十王台式土器と土師器が共存する住居跡には「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の呼称を用い、十王台式土器のみが出土している住居跡については「弥生時代後期後半」として区別している。
- 8) 長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 2005年3月

- 9) 井上琢哉・小林健太郎「大塚遺跡2・木戸遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第258集 2006年3月刊行予定
- 10) 前掲5)に同じ
- 11) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書1 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 2000年3月
- 12) 前掲9)に同じ
- 13) 鶴見貞雄「如石住居跡書-茨城県の弥生・古墳時代の住居例から-」『研究ノート』5号 財団法人茨城県教育財団 1996年6月
- 14) 江幡良夫・黒澤秀雄「十万原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十万原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 二の沢A遺跡・二の沢B遺跡(古墳群)・ニガサワ古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第208集 2003年3月
- 15) 柿沼幹夫「関東の方形周溝墓 北関東①埼玉県」同成社 1996年12月
- 16) 鈴木素行「武田石高遺跡における十王台式土器の編年について-「十王台式」分析のための基礎的な作業-」『武田石高遺跡旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集 1998年3月
- 17) ア. 鈴木素行「武田西墳遺跡における十王台式土器の分析-「小祝式土器」と「武田式土器」の誕生-」『武田西墳遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第21集 2001年3月
 イ. 鈴木素行「ばんばり山遺跡における十王台式土器の分析-「小祝式柵形段階」と「武田式西墳段階」の土器群-」『ばんばり山遺跡・落谷津遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第27集 2003年3月
 鈴木氏は、第21集で久慈川流域の土器群を「小祝式土器」と設定した上で、第27集で「「小祝式」に典型の文様が施文されながらも、胎土・焼成・色調、他の文様などから、那珂川流域の製作と想定される土器も見うけられる。土器群の搬入、製作技法の導入として捉えられる現象は、久慈川流域からの移住がもたらしたものでないかと考えている。」と述べている。第207図2も同様の観点から「久慈川流域の影響を受けている可能性が高い」という表現にとどめた。
- 18) 井上義安「薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市薬王院東遺跡発掘調査会 1990年3月
- 19) 関口満ほか「根拠北遺跡・栗山宮跡 土浦市今泉霊園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書」土浦市遺跡調査会 1997年3月
- 20) 井上義安ほか「茨城県大洗町長峯遺跡」大洗町教育委員会 1973年12月
- 21) 前掲3)に同じ
- 22) 鈴木素行「遺跡群として表現される集落の移動-那珂川流域の十王台式土器と集落」『図説水戸・空問の歴史』郷土出版社 2004年4月
- 23) 前掲1)に同じ
 第21号住居跡は十王台式土器を伴う住居跡であるが、土師器と共存していることから『大戸下遺跡1』では古墳時代前期に位置づけられている。
- 24) 前掲16)に同じ
- 25) 前掲5)に同じ
- 26) 前掲6)に同じ
- 27) 飯島一生氏は、第1号墓塚からガラス玉が出土していることに着目し『十王台式最後の墓塚』であると示している。
- 28) 前掲22)に同じ
- 29) 前掲5)に同じ
- 30) 前掲5)に同じ
- 31) 「大戸遺跡群」の各遺跡において、調査面積における各時期の住居跡の検出数を比較した。遺跡全体の何%を調査したのかによっても検出数は違ってくるであろうし、大戸下遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡は道路幅の調査、「桜の郷遺跡群」の各遺跡は面での調査であり、単純には比較できないが、あえて検討材料とした。以下に表を掲載する。

表12 「大戸遺跡群」各遺跡の調査面積における住居跡検出数

遺跡名	面積(m ²)	弥生時代後期後半(軒)	弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭(軒)
大戸下遺跡	12,626	29	1
矢倉遺跡	9,430	31	0
大畑遺跡	10,879	10	0
宮後遺跡	39,064	1	4
大塚遺跡	26,799	16	12
綱山遺跡	1,046	1	11
石原遺跡	10,414	17	6
木戸遺跡	3,226	1	0

- 32) 古墳時代後期の時期判別は下記によった。
 櫻村宣行・浅井哲也「富良野地域の鬼高式土器—久慈川・那珂川流域を中心として」『考古学ジャーナル』342 1992年1月
 基本的には『大戸下郡遺跡1』の時期判別に従っている。しかし、『大戸下郡遺跡1』で報告されている「6世紀前半」や「6世紀後半から7世紀前半」の一部には、平成16年度の調査（『大戸下郡遺跡2』報告分）による類別の増加により帰属時期を再検討し、修正を加えることとなったが、その時期修正に懸かる責は本稿の筆者にある。
- 33) 井上義安ほか「落神遺跡」『大貫台地理蔵文化財発掘調査報告書』第4冊 大洗町大貫台地理蔵文化財発掘調査会 2001年6月
- 34) 第30号住居跡が掘り込んでいる第31号住居跡については、住居跡総数には加えたが、『大戸下郡遺跡1』で「第31号住居跡を拡張して第30号住居跡を構築したと推定され」とあることから、ここでは第30号住居跡として扱うこととする。
- 9) 井上琢哉・小林健太郎「大塚遺跡2・木戸遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第258集 2006年3月刊行予定
- 35) 前掲6)に同じ
- 36) 前掲8)・9)に同じ
- 37) 前掲5)に同じ
- 38) 前掲9)に同じ
- 39) 桐生直彦「棚状施設をもつ壑穴建物の性格(2) — 一都市と農村の比較 —」『國學院大學考古学資料館紀要』第18 2002年3月

参考文献

- ・今村啓爾『縄文文化の研究(2) 生業』「陥穴(おとしあな) 雄山閣 1983年2月
- ・中村博信「溝型陥穴研究序説」『栃木県考古学会誌』第19集 栃木県考古学会 1993年3月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討(Ⅰ) 十王台式土器について」『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財団 1992年7月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討(Ⅱ) 十王台式土器について」『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団 1993年7月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討(Ⅲ) 十王台式土器について」『研究ノート』3号 財団法人茨城県教育財団 1994年6月
- ・飯島一生「十王台式土器の相違を考える—一矢倉遺跡と大畑遺跡の観察から」『研究ノート』8号 財団法人茨城県教育財団 1999年6月
- ・飯島一生「茨城町矢倉遺跡・大畑遺跡—潤沼前川を挟んで対峙する集落— 十王台式土器制定60周年記念シンポジウム『茨城県における弥生時代研究の到達点—弥生時代後期の集落構成から—』茨城県考古学協会・十王町教育委員会 1999年11月
- ・飯島一生「十王台式期における異系土器文化圏との交流—潤沼前川流域における十王台式土器と構式土器の出土例から—」『領域の研究』阿久津久先生選賀記念事業実行委員会 2003年3月
- ・鈴木素行「半山遺跡における十王台式土器の分析—「小祝式掘布段階」と「武田西塚・石高段階」の土器群—」『半山遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第30集 2004年3月
- ・浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究』阿久津久先生選賀記念事業実行委員会 2003年3月
- ・高橋一夫「古墳時代の研究2 集落と豪族居館」雄山閣 1994年6月
- ・鶴間正昭「武蔵国における鉄鏡の形式分類とその編年の予察」『法政考古学』第11集—記念論文集— 1985年3月
- ・大木紳一郎「群馬北辺の弥生社会—後期弥生集落の分析から—」『研究紀要22—創立25周年記念論文集—』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004年3月

付 章

大戸下郷遺跡から出土した炭化材の樹種について

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茨城県茨城町に所在する大戸下郷遺跡では、縄文時代の陥し穴、弥生時代の土坑、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の竪穴住居跡、近世の墓坑、時期不明の掘立柱建物跡、溝跡、土坑、井戸跡等の遺構が検出されている。このうち、弥生時代の第141号、第143号、第156号住居跡では、炭化材が良好な状態で出土している。本報告では、各住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施し、弥生時代の木材利用に関する資料を得る。また、部材の形状による樹種の違いが見られるか等についても検討する。

1 試料

試料は、弥生時代の竪穴住居跡から出土した炭化材9点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2 分析方法

木口（横断面）・年目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、針葉樹1種類、広葉樹2種類に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・ カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属
軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型〜ヒノキ型で、1分野に1〜4個。放射組織は単列、1〜10細胞高。
- ・ ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属
環孔材で、孔部は1〜2列、孔部外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1〜6細胞幅、1〜50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。
- ・ キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属
環孔材で、孔部は3〜4列、孔部外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1〜4細胞幅、1〜40細胞高。

4 考察

炭化材はいずれも竪穴住居跡の床面直上から出土しており、住居構築材に由来する可能性が考えられている。第141号住居跡と第143号住居跡の炭化材は、いずれも丸材の可能性があるが、第143号住居跡で床面が赤変し、焼土が検出されているのに対し、第141号住居跡では赤変および焼土は認められない。一方、第156号住居跡の炭化材は板材の可能性が考えられている。これらの炭化材の樹種は、第143号住居跡が全点カヤ、第156号住居跡が全点ケヤキであった。一方、住居跡はカヤ、ケヤキ、キハダの3種類が認められ、住居によって種類構成が異なる。このことは、住居、部材などにより樹種利用が異なっていたことに由来する可能性もある。

本遺跡周辺では、隣接する矢倉遺跡でも弥生時代終末の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定が実施されており、クスギ節、ケンボナンシ属、モミ属、ヤマグワ、クリの5種類が確認されている（バリノ・サーヴェイ株式会社、1998）。矢倉遺跡では、本遺跡で確認された種類が1種類も認められず、種類構成に違いが認められる。木材利用が異なる背景には、住居の大きさ、構造、部位の違いや、木材を伐採した場所の地形などに起因する局地的な植生の違いなどが推定される。ただし、同時期の木材利用に関する資料は少なく、今後継続した資料蓄積を行うことが望まれる。

表1. 樹種同定結果

遺構	出土位置	形状	試料番号	樹種	備考
第141号住居跡	床面直上	丸材か	①	ケヤキ	遺物取り上げNo.8
			②	カヤ	遺物取り上げNo.9
			③	キハダ	取り上げNo.10
第143号住居跡	床面直上	丸材か	①	カヤ	取り上げNo.1
			②	カヤ	取り上げNo.2
			③	カヤ	
第156号住居跡	床面直上	板材か	①	ケヤキ	
			②	ケヤキ	
			③	ケヤキ	

引用文献

- ・ バリノ・サーヴェイ株式会社、1998、矢倉遺跡から出土した炭化材の樹種、「茨城県教育財団文化財調査報告書第135集 北関東自動車道（女部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」、日本道路公団東京第一建設局・財団法人茨城県教育財団、149-150。

写 真 图 版



調査区全景



調査区全景（西側上空から）

PL 2



遺構確認状況



遺構完掘状況



陥し穴完掘状況

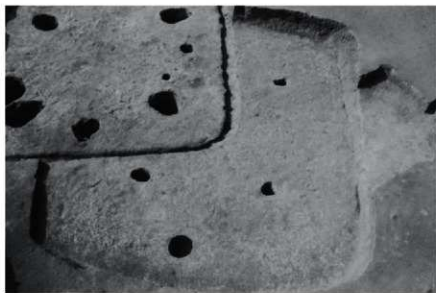


第92号住居跡
完掘状況



第96号住居跡
完掘状況

PL 4



第100号住居跡
完掘状況



第100号住居跡
遺物出土状況



第105号住居跡
完掘状況

第105号住居跡
遺物出土状況



第156号住居跡
完掘状況



第156号住居跡
遺物出土状況





第114号住居跡
完掘状況



第114号住居跡
遺物出土状況



第114号住居跡
遺物出土状況

第 158 号 住居 跡
完 掘 状 況



第 159 号 住居 跡
完 掘 状 況



第 159 号 住居 跡
遺 物 出 土 状 況





第77号住居跡
完掘状況



第79号住居跡
完掘状況



第79号住居跡
遺物出土状況



第79号住居跡
電遺物出土状況



第80号住居跡
完掘状況



第81号住居跡
完掘状況

PL10



第81号住居跡
竈遺物出土状況



第86号住居跡
完掘状況



第86号住居跡
遺物出土状況

第97号住居跡
完掘状況



第98号住居跡
完掘状況



第99号住居跡
完掘状況



PL12



第122号住居跡
完掘状況



第130号住居跡
完掘状況



第130号住居跡
完掘状況

第144号住居跡
完掘状況



第144号住居跡
電遺物出土状況



第145号住居跡
完掘状況



PL14



第145号住居跡
遺物出土状況



第146号住居跡
完掘状況



第147号住居跡
完掘状況

第147号住居跡
甕遺物出土状況



第104号住居跡
完掘状況



第110号住居跡
完掘状況



PL16



第111号住居跡
完掘状況



第118号住居跡
遺物出土状況



第121号住居跡
完掘状況



SI 88-354



SI 90-369



SI 96-380



SI 105-391





SI 158-449



SI 156-441



SI 156-439



SI 156-440





SI 134-416



SI 158-454



SI 158-450



SI 96-379



SI 90-361



SI 90-362



SI 105-392



SI 90-367



SI 112-395



SI 88-357



SI 105-393



SI 100-385



SI 159-465



SI 137-422



SI 92-375



SI 134-415



SI 96-383



SI 90-370





SI 98-559



SI 84-515



SI 80-487



SI 86-521



SI 97-552



SI 93-542



SI 86-520



SI 86-519



SI 81-506



SI 86-522





SI 147-647



SI 147-644



SI 132-616



SI 130-611



SI 86-533



SI 86-538



SI 80-495



SI 80-496





SI 81-511



SI 98-562



SI 145-639



SI 81-510



SI 145-638



SI 132-619



SI 86-524



SI 106-578



SI 86-525



SI 86-527



SI 86-526



SI 86-528



SI 130-612



SI 79-476



SI 81-512



SI 79-480



SI 79-477



SI 86-534



SI 80-499



SI 101-570









SI 111-697



SI 118-730



SI 118-726



SI 118-722



SI 118-725



SI 118-723



SI 121-752



SI 118-724



SI 111-695



SI 121-754





SI 111-694



SI 109-681



SI 121-750



SI 118-698



SI 118-719



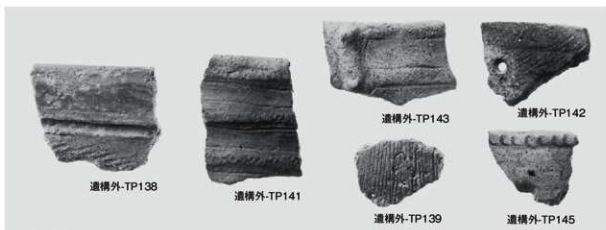
SI 118-720



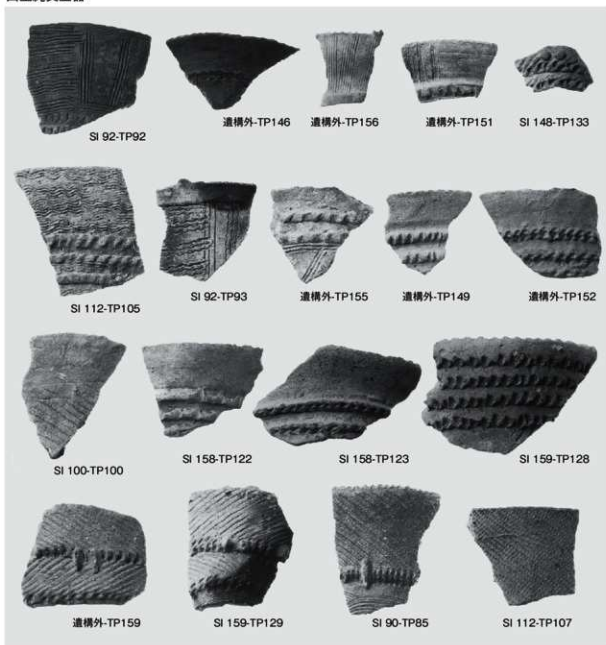
SI 118-706



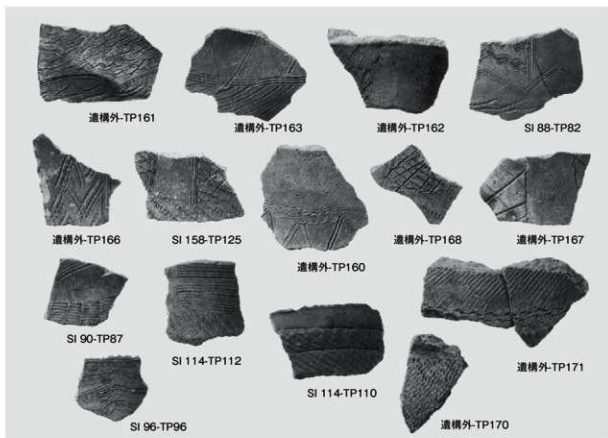
SI 118-727



出土縄文土器



出土弥生土器



出土弥生土器



弥生時代住居跡，遺構外出土紡錘車





弥生～古墳時代住居跡出土球状土錘



SI 90-DP54



SI 144-DP134



SI 110-DP141

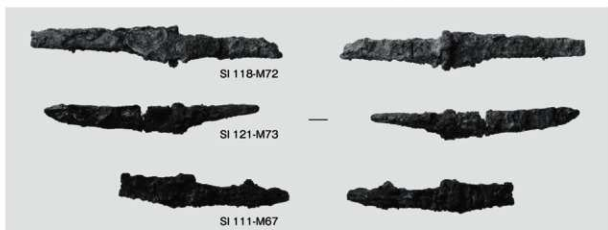
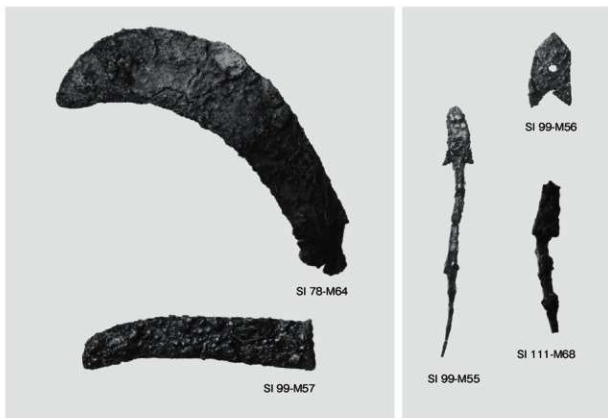


SI 93-DP94

出土土製品（球状土錘・不明土製品・支脚）

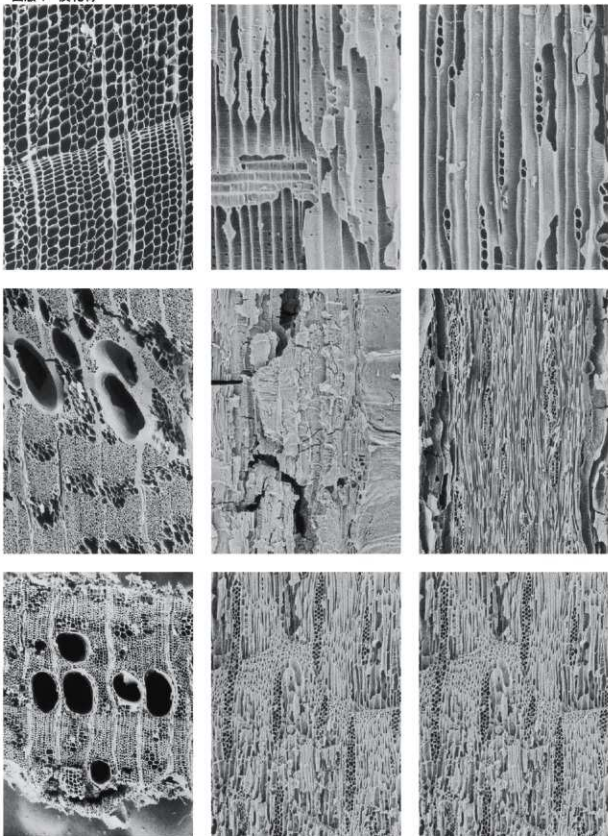


住居跡・遺構外出土石器・石製品 (石鏃・勾玉・磨製石斧・敲石・砥石)





住居跡・墓坑出土鉄製品・銅製品 (鎌・鋸・刀子・鉄斧・丸柄・分銅)

図版1 炭化材



1. カヤ(第143号住居跡③)
 2. ケヤキ(第156号住居跡①)
 3. キハダ(第141号住居跡③)
- a: 木口, b: 柾目, c: 板目

 200 μm: 2-3a
 200 μm: 1a, 2-3b, c
 100 μm: 1b, c

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡 2

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成 18(2006) 年 3月 20日印刷

平成 18(2006) 年 3月 24日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡2 遺構全体図

